2017年度　博士論文

指導教員：　中道基夫　教授

米国の南・北メソヂスト監督教会における東アジア宣教に関する研究

― M・C・ハリスとW・R・ランバスの日韓活動を中心として ―

関西学院大学大学院神学研究科
博士課程後期課程

洪　珉　基

提出日　：　2017 年 11 月 30 日

米国の南・北メソヂスト監督教会における東アジア宣教に関する研究

- M・C・ハリスとW・R・ランバスの日韓活動を中心として -

目　　次

凡例及び略語 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
略称 ・・ 7

＜　序論　＞ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9

【問題設定】 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
【先行研究(研究史)】 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
【研究方法】 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 22
【論文の構成】 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 23

＜　本論　＞

第1章：M・C・ハリス(Merriman Colbert Harris)の生涯と宣教活動 ・・・・・・ 26
第1節：家庭及び教育 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 26
(1)出生と家庭 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 26
(2)初等教育と信仰教育 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 29
(3)南北戦争と参戦 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 31
(4)宣教師としての召命と結婚 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 34
第2節：宣教活動 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 37
(1)日本の開拓宣教 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 37
(2)在米日本人の宣教 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 43
(3)日韓の宣教監督としての宣教活動 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 47
(4)引退以降の宣教 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 56
まとめ ・・ 58

第2章：M・C・ハリスの日韓両国についての理解とその特色 ・・・・・・・・・・・ 60
第1節：日本の理解 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 60

(1)一般的理解(政治・経済・文化などの社会的な要素) ・・・・・・・・・・・・・・ 62
①山岳地帯と火山、そして地震と台風 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 62
②豊富な自然と動植物を保有する国 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 64
③受容と模倣、そして一つ(one)になることを追求する日本人 ・・・・・・・・ 65
④天皇制の尊重と近代化及び民主化の発展 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 68
⑤米国の友邦 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 70
(2)宣教理解 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 72
①他宗教に関する理解 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 72
②西欧式近代化を伴った宣教 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 74
③社会的な救いの宣教 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 76
④教育宣教の強調 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 77
⑤エキュメニカルな宣教協力 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 80
第2節：朝鮮の理解 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 84
(1)一般的理解(政治・経済・文化などの社会的な要素) ・・・・・・・・・・・・・・ 86
①日本による啓蒙(近代化)の必要性 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 86
②朝鮮に対する実質的支配の認定 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 89
③日本による合同、そして併合の必要性 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 91
(2)宣教理解 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 94
①エキュメニカルな宣教協力 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 94
②親日的宣教 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 97
③在朝日本人の宣教 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 101
④政教分離に伴う宣教 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 103
⑤近代化を伴う宣教 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 106
まとめ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 108

第3章：W・R・ランバス(Walter Russell Lambuth)の生涯と宣教活動 ・・・・・ 112
第1節：家庭及び教育 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 112
(1)出生と家庭 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 112
(2)中国での生活 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 115
(3)信仰教育と南北戦争 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 118
(4)宣教への召命と準備、そして結婚 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 120
第2節：宣教活動 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 124

(1)中国の宣教 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 124
(2)日本の開拓宣教 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 129
(3)南メソヂスト監督教会宣教局での活動 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 138
(4)監督としての宣教活動 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 144
まとめ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 153

第4章：W・R・ランバスの日韓両国についての理解とその特色 ・・・・・・・・ 156
第1節：日本の理解 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 157
(1)一般的理解(政治・経済・文化などの社会的な要素) ・・・・・・・・・・・・ 160
①東洋の関門-日出ずる国 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 160
②ランバスが見た日本の特徴 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 162
③稲わらと竹の国 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 165
④日本文化と近代化の土台の上で行われた発展と成果 ・・・・・・・・・・・ 166
⑤強い宗教性と神道と仏教に代表される伝統宗教 ・・・・・・・・・・・・・ 170
⑥オリエンタリズムの観点から見た帝国主義 ・・・・・・・・・・・・・・・ 173
(2)宣教理解 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 175
①開拓宣教師としての責任感 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 175
②教育宣教 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 177
③聖書中心的な宣教 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 182
④使徒時代の教会 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 185
⑤近代化の完結に繋がる宣教 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 187
⑥エキュメニカルな宣教協力 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 190
第2節：朝鮮の理解 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 194
(1)一般的理解(政治・経済・文化などの社会的な要素) ・・・・・・・・・・・・ 199
①静かな朝の国と隠者の王国 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 199
②独自的な気質と伝統文化 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 201
③東方のポーランド ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 203
④日本の朝鮮支配 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 205
⑤強い愛国心(民族主義) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 206
(2)宣教理解 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 209
①慎重な接近と行政的支援 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 209
②慰労と期待 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 213

③教育宣教 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 218
④ゴム教会(the Rubber Church) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 219
⑤情熱的な信仰や高い自立心 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 224
まとめ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 226

第5章：南・北メソヂスト監督教会における東アジア宣教の展開とその特色
– ハリス及びランバスと各宣教部間の関わりを中心として ・・・・・・・・・・・・ 231
第1節 : 1844年以前における米国メソヂスト教会の東アジア宣教 ・・・・・・・・・・ 231
(1)19世紀以前の米国キリスト教界における宣教神学的背景と動向 ・・・・・・・・ 231
(2)分裂(1844年)以前の米国メソヂスト監督教会の神学と宣教的動向 ・・・・・・ 234
第2節 : 米国の南・北メソヂスト監督教会における東アジア宣教開始と特色 ・・・・ 236
(1)メソヂスト監督教会の東アジア宣教と開始 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 236
(2)南メソヂスト監督教会の東アジア宣教と開始 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 241
(3)米国の南・北メソヂスト監督教会における東アジア宣教の比較とその特色 ・・・ 246
まとめ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 247

＜ 結論 ＞ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 250

【要約】 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 250
【意義】 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 252
【課題】 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 255

＜ 参考文献 ＞ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 258
＜ 論文要旨 ＞ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 277

凡例及び略語

1.本研究で言及する「キリスト教」は「プロテスタント教会」にその意味と範囲を限定する。
2.本研究では、戦前に限る時、「Korea」を「朝鮮」に、戦後に関する内容を叙述するときには、「韓国」という用語を使用する。但し、他の文脈的な状況と条件によって、戦前と戦後に限らず、両方を使用することもある。また、日本と韓国を同時に示す時、「日韓」あるいは「韓日」と表記する。
3.本研究では、英文「Methodist Church」が日本の教会を示す時には、「メソヂスト教会」、朝鮮(韓国)の教会を示す時には、「監理教会」あるいは「メソヂスト教会」と表記する。
4.本研究では、「Methodist Episcopal Church」と「Methodist Episcopal Church, South」が特別な理由がない限り、「メソヂスト監督教会」と「南メソヂスト監督教会」と表記する。
5.戦前の資料の中で引用する時には、原文の意味を生かすため、現代語に訳せず、そのまま引用文として使用する。

略称

AJCCMEC: Annual Journal of the California Conference of the Methodist Episcopal Church
ARMEC: Annual Report of the Board of Foreign Missions of the Methodist Episcopal Church
ARMECS: Annual Report of the Board of Foreign Missions of the Methodist Episcopal Church, South
AMFCPEMK: Annual Meeting of the Federal Council of Protestant Evangelical Missions in Korea
CA: the Christian Advocate
CR: the Chinese Recorder
GAL: Gospel In All Lands
JGCMEC: Journal of the General Conference of the Methodist Episcopal Church
KM: the Korea Methodist
KMF: the Korea Mission Field
KRV: the Korea Review
KWC: Minutes of the Korea Woman's Conference of the Methodist Episcopal Church
MAMJMMECS: Minutes of the Annual Meeting of the Japan Mission of the Methodist Episcopal Church, South
MAMKMMECS 1899-1901: Minutes of the Annual Meetings of the Korea Mission, Methodist Episcopal Church, South, 1899, 1900 and 1901
MAMKMMECS: Minutes of the Annual Meetings of the Korea Mission, Methodist Episcopal Church, South
MR: the Methodist Review
MRM: the Methodist Review of Missions
MRW: Missionary Review of the World
MS: the Missionary Survey
MJCMEC: Minutes of the Japan Conference of the Methodist Episcopal Church
MJMACMECS: Minutes of the Japan Mission Annual Conference of the Methodist Episcopal Church, South
MSMMECS: Minutes of the Annual Meeting of the Siberia-Manchuria Mission of the Methodist Episcopal Church
MV: the Missionary Voice

QRHarris 1908: Four Years in Japan and Korea – The Quadrennial Report of the Missionary Bishop for Japan and Korea to the General Conference of 1908

QRHarris1916 : Quadrennial Report of Bishop M. C. Harris of the Methodist Episcopal Church for Korea and Japan 1912-1916

YBJMMECS: Year Book of the Japan Mission and Minutes of the Annual Meeting of Missionaries of the Methodist Episcopal Church, South

BMCHarris: Life of Bishop Merriman Colbert Harris: Japan's Most Beloved Caucasian American

WRL: Walter Russell Lambuth – Prophet and Pioneer

『キリストに従う道』: ウォルター・R・ランバス、山内一郎 訳、『ヴァンダビルト大学コール・レクチャーキリストに従う道-ミッションの動態』

『ウォルター・ラッセル・ランバス』: ウィリアム・W・ピンソン, 半田一吉 訳, 『ウォルター・ラッセル・ランバス – Prophet and Pioneer』

『ランバス資料』: ウォルター・R・ランバス、関西学院キリスト教主義教育研究室 編、「ウォルター・ラッセル・ランバス資料」、『関西学院キリスト教主義教育史資料Ⅲ』

『ランバス資料(2)』:ウォルター・R・ランバス, 関西学院キリスト教主義教育研究室 編、「ウォルター・ラッセル・ランバス資料(2)」、『関西学院キリスト教主義教育史資料Ⅴ』

『ハリス』: 洪珉基、『해리스監督의 生涯와 宣教에 関한 研究』(ハリス監督の生涯と宣教に関する研究)』

＜　序論　＞

【問題設定】

本研究は、大きく以下のような三つの問題設定から始まる。まず、米国の教会における東アジア宣教の特色である。今日、私たちはいわゆる多様性の時代に生きている。キリスト教も例外ではく、キリスト教の内部では、様々な教派による多様な特色を帯びている。特に東アジア、その中でも日本と韓国のキリスト教は、他の国よりも強い教派的特色を帯びているので、その多様性が顕著である。それは戦前、多数の宣教師たちを派遣した米国の教会の影響によるものである。19世紀以降に、キリスト教の福音を受容した日本と朝鮮は、米国の教会と宣教師たちの強い影響力のもとで教派的特色を形成していった。「第2次大リバイバル」(the Second Great Awakening)の影響で、海外宣教の情熱が強かった当時、米国の教会は外国に対して門戸を開放したばかりの日中韓三ヵ国にその力を集中した。そのように行われた米国教会の東アジア宣教は、いわゆる教派的特色をそのまま宣教現場に移植させていった。したがって本研究は、上述した米国の教会における東アジア宣教が具体的にいかなる特色を帯びて展開されてきたのかを検討しようとする問題設定から始まる。

第二に、日韓両国におけるメソジスト教会(Methodist Church)の相互関係に関することである。19世紀の半ば、宣教が開始された頃、日本においては、横浜バンド、熊本バンド、そして札幌バンドのように独特な土着的キリスト教の共同体を通して発展する傾向が強かった。しかし、19世紀末に至っては米国の教会の豊富な財政と人的資源が支援された宣教部と宣教師たちの影響力が強くなり、ますます教派的教会が日本に定着するようになった[1]。その結果、日本のキリスト教は1941年6月24日、各教派が合同する日本基督教団が成立するまで、日本基督教会、日本組合教会、日本メソヂスト教会など、三派を中心に教派的教会の色彩を帯び、発展していった[2]。これらの教会は各々米国の改革派教会(Reformed Church)及び長老派教会(Presbyterian Church)、会衆派教会(Congregation Church)、そしてメソジスト教会の影響を受けた教派的教会であった。朝鮮の場合も、日本のように教派的特色を帯び、発展していった。ただし、日本と異なったことは、初めから米国の教会の影響

---

[1] 土肥昭夫、『日本プロテスタントキリスト教史』、新教出版社、1980、25-30頁参照。

[2] 日本キリスト教団が成立していく過程の中で、初期には内部的に「部制」という組織を置き、各教派の固有な特性と伝統を一時的に維持して表記していた。その際、各教派別に代委員を置いたが、成立した当時、日本基督教会と日本組合教会、そして日本メソヂスト教会の三教派が全体代委員の約60パーセントを占めた。『日本基督教団史資料集－第1篇日本基督教団の成立過程(1930-1941)』、日本基督教団宣教研究所、1997、314-315頁参照。

力がより強力に作用したということである[3]。もちろん、中国の国境地域と日本で教派と無関係に行われたハングル聖書翻訳、そして黄海道の松川教会のような一部地域で形成された信仰共同体など、例外もあった[4]。しかし、豊富な財政と人力、そして西洋人という治外法権的特殊性を持っていた宣教師たちの積極的な活動によって、朝鮮での教派的教会はますます大きな影響力を及ぼしていった。その中で成長した代表的な教会が、長老派教会とメソヂスト教会(監理教会)であった。以上のようにメソヂスト教会は日韓両国の間に主な教派として成長した。

ところで、当時日本と朝鮮に宣教師を派遣していた米国のメソヂスト教会は、メソヂスト監督教会(Methodist Episcopal Church)と南メソヂスト監督教会(Methodist Episcopal Church, South)であった。同じウェスレー神学の伝統に従っているこの両教会は、東アジアの中で相互交流し、発展していった。代表的な例としては、一人の監督が日中韓あるいは日本と朝鮮を共に統括し、東アジア宣教を推進していったことがあげられる。以上のように、日本と朝鮮両国のメソヂスト教会は相互緊密な関わりの中で、発展していったという事実を推測できる。それ故、本研究は戦前において活発に発展した両国のメソヂスト教会の関わりが、いかに相互影響を取り交わしたかを詳細に検証することに問題設定をおく。

第三には、派遣教会、宣教師、そして宣教現場の関係性である。上述したように、米国の教会の強い影響力のもとで教派的教会へ定着していったのは、まさに多様な特色を帯びたということである。これは多様な宣教的力動性が、日本と朝鮮両国の教会で活発に行われて来たということを意味する。そのことは、派遣教会(米国の教会)と宣教師(米国人)、そして宣教現場(東アジアの日本と朝鮮)が互いに影響をしあった結果であると言える。換言すれば、この三つの要素を具体的に検討する時、両国キリスト教のアイデンティティを把握することができると言えるであろう。さらに、これから私たちが直面する宣教的な課題と関連し、より正しい宣教とは何なのか把握し、将来の宣教に備える作業になるだろう。したがって上述した三つの重要な要素を詳細に検討し、具体的に把握することは、今日の多様性の時代において、宣教的多様性を理解する上で大いに役立つ可能性も期待できるのである。

以上のような問題設定を持ち、本研究は今日、日韓両国のキリスト教を形成することにあたって、その歴史的背景を成している米国式教派的教会の一面を探ろうとする。ここで時期の設定は、教派的教会が初期の両国の教会を形成させて発展した19世紀末から20世紀の初頭に、その時期的背景を限定して、日韓両国でいわゆる主流教派を形成した米国のメソヂス

---

[3] 閔庚培、『韓国基督教史-韓国民族教会形成過程史』、ソウル：延世大学校出版部、2007、150-170頁参照。
[4] 韓国基督教史研究会、『韓国基督教의歴史Ⅰ』(韓国基督教の歴史Ⅰ)、ソウル：基督教文社、1989、154-156頁参照。

ト教会と宣教師に焦点を絞って検討する。当時、両国メソヂスト教会に大きな影響力を及ぼした米国系のメソヂスト教会は、メソヂスト監督教会と南メソヂスト監督教会の二つの教派であった。それ故、メソヂスト監督教会及び南メソヂスト監督教会其々に属し、特に日韓両国教会の宣教事業に関わっている代表的な人物を選択し、彼らを比較して検討していく。

その代表的な人物として、M・C・ハリス(Merriman Colbert Harris, 1846-1921)とW・R・ランバス(Walter Russell Lambuth, 1854-1921)があげられる。この二人は、一定の共通点を持っている。まず、先に述べたようにウェスレー神学と系統を標榜するメソヂスト教会(メソヂスト監督教会と南メソヂスト監督教会)に各々属した牧師であり、日本と朝鮮両国の宣教事業に直接・間接に関与した宣教師であった。また、両者は20世紀に入り、メソヂスト教会の最高位聖職と言える監督(Bishop)に選出され、宣教地の人事と政策、そして事業に関する重要な決定を下す重い責任も持っていた。さらに、両者とも、逝去した年(1921年)が同じであり、また埋葬された場所も本国(米国)ではなく宣教地であったという共通点は、二人が本研究において、適切な比較対象となれることを示唆すると言える。したがって、本研究は、19世紀中盤以降から20世紀初頭(1921年[5])にかけて活動したハリスとランバスを中心に当代、米国の主流教派である南・北メソヂスト監督教会(メソヂスト監督教会と南メソヂスト監督教会)の東アジア(日韓を中心に)の宣教活動とその思想を比較検討する。

【先行研究(研究史)】

本研究の先行研究では、大きく次の二つに分けて検討することができるであろう。まず、ハリスとランバス二人の人物に関する先行研究である。そしてもう一つは、メソヂスト監督教会と南メソヂスト監督教会の日韓宣教とその関係および比較に関する先行研究である。先に、二人の人物に関連した代表的な先行研究を検討し、日米韓三ヵ国で両者の研究状況を検証してみたい。

M・C・ハリス(Merriman C. Harris)について

[5] 日本の場合、1907年に日本のメソヂスト監督教会、日本の南メソヂスト監督教会、日本のカナダメソヂスト教会(Methodist Church of Canada)の合同で、日本メソヂスト教会が組織され、朝鮮の場合、朝鮮のメソヂスト監督教会は1908年に朝鮮年会(Korea Annual Conference)が、朝鮮の南メソヂスト監督教会は1918年に朝鮮年会(Korea Annual Conference)が組織された。メソジスト教会(監理教会)の行政において、「年会」は教会が自立していくための基本的な組織単位である。それ故、両国のメソジスト教会(監理教会)は20世紀初頭に至り、教会行政の基本的な枠が整えられたと言える。『日本メソヂスト教會第壹總會議事録』、1907、24頁参照；*Annual Report of the Board of Foreign Missions of the Methodist Episcopal Church*(以下*ARMEC*), 1908, p.23; *Annual Report of the Board of Foreign Missions of the Methodist Episcopal Church, South*(以下*ARMECS*), 1918, p.116.

まず、メソヂスト監督教会のM・C・ハリス[6]は、宣教師、さらには監督という立場で日本と米国、そして朝鮮という三ヵ国にわたり、幅広い活動を展開したにもかかわらず、彼に関する研究はあまり多くない。ハリスの生涯を初めてまとめた先行研究では、スズキ(Lester E. Suzuki)が著述した*Life of Bishop Merriman Colbert Harris: Japan's Most Beloved Caucasian American*[7]をあげることができる。評伝によるこの著書の著者であるスズキは、160余頁に達する分量でハリスの一生を時間的な順序に合わせて体系的に整理してまとめた。特にこの評伝は、以下のいくつかの点においてハリス研究に成果と貢献を残した。

第一に、ハリスの幼年時代に関する地域を直接調査して、初期の生涯をより具体的に再構成したという点である[8]。第二に南北戦争当時、ハリスが参戦し所属していた部隊の全般的な活動内容を詳細に記述している[9]。第三に、日本と韓国で得難い米国側の資料を十分に参考したという点である。特に、1886年から1904年までの米国太平洋沿岸を中心に日本人宣教に集中した活動に多くの分量を割いたこと[10]は、この先行研究が残した大きな成果の一つだと評価することができる。第四にこの評伝は、1907年に日本メソヂスト教会の成立当時これに関連したハリスの役割と責任について具体的に叙述している[11]。

しかし、スズキの研究は、*Life of Bishop Merriman Colbert Harris: Japan's Most Beloved Caucasian American*という書名からも感じられるように、日本側の視点が濃厚に現れている。ちなみに、著者は米国ハワイ出身で米国の市民権を持っている合同メソジスト教会(United Methodist Church)の牧会者であり、日系在米人2世であった[12]。それ故に、彼は自然と日本側の視点を持ってハリスの生涯を叙述していったのだと思われる。実際ハリスは、

---

[6] ハリスに関する先行研究史は、筆者が2008学年度、修士学位論文として提出した「ハリス監督の生涯と宣教に関する研究」を主に参考にし、著述しようとする。洪珉基、『해리스監督의 生涯와 宣教에 関한 研究』(ハリス監督の生涯と宣教に関する研究)(以下『ハリス』)、ソウル : 神学修士論文、監理教神学大学校、2008、7-13頁参照。

[7] ハリスに関するこの先行研究は、現在米国ニュージャージー州(New Jersey)にあるドリュー大学図書館(Library at Drew University)及びカリフォルニアバークレー(Berkeley California)の連合神学大学院図書館(Library at Graduate Theological Union)のスズキ文庫(Inventory of the Lester E. Suzuki Collection)などで確認できる。L. E. Suzuki, *Life of Bishop Merriman Colbert Harris: Japan's Most Beloved Caucasian American*(以下*BMCHarris*), (n.p., n.d.) ; インターネットウェブサイトhttp://www.oac.cdlib.org/findaid/ark:/13030/c8tm78gd/entire_text/参照。

[8] *Ibid*, p.5.

[9] *Ibid*, pp.15-29.

[10] *Ibid*, pp.54-107.

[11] *Ibid*, pp.112-119.ちなみに、日本メソヂスト教会の合同に関連する代表的な研究として澤田泰紳の著書『日本メソヂスト教会史研究』を挙げることができる。ここで第1章(明治期における在日本メソヂスト諸派合同運動の研究)と第2章(日本メソヂスト教会史-三派合同を中心として)が1907年に日本メソヂスト教会の成立過程に関する主題である。しかし、澤田泰紳の著書には、これに関するハリスの役割が十分に扱われていない。澤田泰紳、『日本メソヂスト教会史研究』、日本キリスト教団出版局、2006、1-115頁参照。

[12] ウェブサイトhttp://www.oac.cdlib.org/findaid/ark:/13030/c8tm78gd/entire_text/参照。

日韓両国の宣教監督を務めたが、スズキのこの評伝においては相対的に日本での活動が中心的に叙述[13]されている。加えて、朝鮮(韓国)側の資料を十分に検討しなかった点にその限界がある[14]。

その次に言及できる先行研究は、遺愛女子高等学校の宗教主事を歴任した島典英の「M・C・ハリス監督をめぐって」[15]という研究である。これは日本のキリスト教史学会で、「函館とキリスト教」を主題として主催された第50回大会の特別公開講演で発表された内容に基づいたものである。この論文は次の点において、重要な意味がある。第一に今日、日本のキリスト教学界がハリスをいかに理解しているかを知ることができる。事実、1921年ハリスがこの世を去った後、日本で彼の存在はほぼ忘れさられてしまった。特に、戦後にはハリスをめぐるエッセイさえも日本内でなかなか見つけることは困難である。そのような意味で、21世紀に入り、日本人、しかも牧会者が記したこの論文は、現代においてハリスを日本でどのように理解し、かつ評価されるかを探ることができる先行的資料となる。第二に、ハリスの日本宣教の初期過程を明らかにまとめ、特に函館(ドイツ領事被殺事件)と札幌(札幌バンドとの関わり)など、北海道での主な宣教活動を中心に扱っているので、彼の初期宣教の軌跡を理解することができる[16]。

しかし、日本の中でも北海道を中心に叙述されたことは、言い換えれば、ハリスの全般的な宣教活動を把握することについて、限界があるということになる。また、残念なことは脚注をはじめ各参考資料が全く添付されていないことである。島典英は、この論文の中でハリスの言及を何度も引用しているが、本当にハリスが語ったものなのか、その歴史的な事実の有無が不明確なので、後代の研究者たちに確実な資料の根拠を提供し難いという問題点がある。それ故、島典英のハリス研究を通して、日韓両国のメソヂスト教会の宣教とその関係を把握することは不可能であると考える。

近年の先行研究として、李主先の論文「日本宣教と翻訳-1880年代におけるM・C・ハリス監督の翻訳活動を中心に」[17]をあげることができる。李主先のハリスの研究は、表題からも分かるように、文書翻訳を中心にハリスの宣教活動を分析する研究である。これは既存の先

---

[13] ハリスが日本と朝鮮の宣教監督として選出され、活動した1905年以降の記述は相対的に朝鮮側の内容が貧弱に記されている。*BMCHarris*, pp.109-129.

[14] ハリスは彼が1907年に出版した*Christianity in Japan*に来朝メソヂスト監督教会である。H・G・アッペンツェラー(H. G. Appenzeller)の名前をN・P・アッペンツェラー(N. P. Appenzeller)と間違って記述したが、スズキはその内容を確認せずにそのまま引用した。M. C. Harris, *Christianity in Japan*, Cincinnati: Jennings and Graham, 1907, p.54; Lester E. Suzuki, *Ibid*, p.54.

[15] 島典英、「M. C. ハリス監督をめぐって」、『キリスト教史学』、第54集、キリスト教史学会、2000、22-37頁。

[16] 同書、27-37頁参照。

[17] 李主先、「日本宣教と翻訳-1880年代におけるM・C・ハリス監督の翻訳活動を中心に」、『金城学院大学キリスト教文化研究所紀要』、20号、金城学院大学キリスト教文化研究所、2017、1-21頁参照。

行研究が、ハリスの生涯とメソヂスト監督教会日本宣教部との関わりで叙述されている枠を離れ、新しい観点から注目しようとする試みであると言える。特に、日本語に翻訳され、出版されたハリスの活動と結果を通して、1880年代の日本社会の状況とこれに対する宣教師たちの対応を探ろうとした試みは高く評価できる[18]。そのような意味で、李主先の研究はハリスの宣教活動を総合的に理解することにおいて、立体的な観点を提供する点で非常に肯定的に評価できる。

ただし、ハリスの生涯において、時期的に日本宣教の初期と言える1880年代に限られていることはこの研究が持っている限界である。すなわち、ハリスの生涯全般を通じる宣教活動を理解することにおいて、限界がある。また、李主先が神学を専攻していなかったので、一部ではあるが、神学的な理解と解釈が十分ではない[19]。

では、米国と日本、そして朝鮮(韓国)では、ハリスをどのような人物として理解していたのか。まず、米国[20]側の資料を通して探ることのできるハリスの理解は、「日本宣教師」(Missionary Japan)、「サンフランシスコでの日本宣教の総理」(supt. Japanese Miss., San Francisco)、「ハワイを含む太平洋沿岸での日本人宣教の総理」(supt. Pacific Coast Japan Miss., including Hawaiian Islands)など、日本での彼の業績を中心に記されていることが分かる。すなわち、朝鮮をめぐる内容は簡素に言及されるだけで[21]、日本と日本人を中心として活動した宣教師として理解される傾向が強く表れている[22]。

日本[23]側の資料も、日本及び日本人を対象として活動したハリスの宣教事業を中心に叙述

---

[18] 同書、17頁参照。

[19] 例えば、李主先は1887年、ハリスが日本語に翻訳して出版した『馬太伝福音書義解』の冒頭に関連する言及で、ハリスの聖書理解を「聖書無誤説」に基づいていると見なした。そして、このようなハリスの聖書理解がメソジストに基づく神学であると分析する。しかし、19世紀半ば以降に至り、メソヂスト監督教会は「第2次大リバイバル」の流れの中で人間の理性を活用し、これをめぐる神学的な余地をますます拡張していった状況である。それ故、後日の根本主義神学の大きなテーマの一つである。「聖書無誤説」をメソジスト神学だと見なすことは、誤った神学的な理解であると見られる。同書、16頁参照。

[20] 米国側の資料については、Carl. F. Price ed., *Who's Who in American Methodism*, NewYork, E. B. Treat & Co., 1916, p.89; Ernest Ashton Smith, *Allegheny-A Century of Education*, Meadville, The Allegheny College History Company, 1916, pp.470-471; Frederick DeLand Leete, *Methodist Bishops*, Nashville, The Methodist Publishing House, 1948, p.84; John M. Versteeg, *Methodism: Ohio Area (1812-1962)*, Ohio: Ohio Area Sesquicentennial Committee, 1962, p.201; 'Harris, Merriman Colbert', *Encyclopedia of World Methodism Vol.1*, Nashville: The United Methodist Publishing House,1974, p.1081; Frederick A. Norwood, *The Story of American Methodism*, Nashville, Abingdon Press, 1974, p.333; 'Harris, Merriman Colbert (1846-1921)', *Dictionary of Christianity in America*, Illinois: InterVarsity Press, 1990, p.510 ;『ハリス』、9頁参照。

[21] Ernest Ashton Smith, *Allegheny-A Century of Education*, pp.307, 470-471.

[22] John M. Versteeg, *Methodism: Ohio Area (1812-1962)*, p.201; Frederick DeLand Leete, *Methodist Bishops*, p.84.

[23] 日本側の資料は青山学院 編、『青山学院九十年史』、青山学院、1966、30頁参照；日本キリスト教歴史大事典編集委員会 編、「ハリス、Harris, Merriman Colbert」、『日本キリスト教歴史大事典』、教文館、1988、1141頁参照；前掲書、土肥昭夫、66頁参照；「Harris [ハリス]、Merriam Colbert」、『来日メソジスト宣教師事典』、1996、107-108頁参照；前掲書、澤田泰紳、10頁参照；李省展、『アメリカ人宣教師と朝鮮の近代』、株式会社社会評論、2006、91-92頁参照。

されているので、大きな枠組でみると、米国側の資料内容と大差はない。もちろん、辞書類には極めて平易な文体で「日韓両国の監督」を歴任したという内容が記されている程度である[24]。しかし、他の資料を検討してみても、日本の開拓宣教師としての活動など、ほとんどが日本側の観点に偏っている[25]。ただし、日米両国のハリス理解において、日本側の資料に一つ加えて表れる特徴があれば、ハリスと札幌バンドとの関わりである[26]。このように、日本側の資料を中心に探ったハリスに関する理解は、札幌バンドとの関わりが付加されていることを除き、日本の開拓宣教師、日韓監督などとして理解されている米国と大きく異なるところがないと言えるだろう。

最後に、韓国[27]側の資料を通して明らかになるハリスに関する理解は、米国及び日本とはかなり異なって理解されている状況である。すなわち、朝鮮(韓国)側の資料を見ると、ほとんどがハリスをメソヂスト監督教会の「監督」(Bishop)として理解し、かつ「親日派」(pro-Japanese)宣教師として理解しているということである。

このように、朝鮮(韓国)側の資料から探れるハリスに関する理解と評価は、日本宣教師、

---

24 「ハリス、Harris, Merriman Colbert」、『日本キリスト教歴史大事典』、1141頁参照。

25 前掲書、青山学院 編、30頁；前掲書、澤田泰紳、10頁参照。

26 前掲書、土肥昭夫、66頁参照；福島恒雄、『北海道キリスト教史』、日本基督教団出版局、1982、150-151頁参照。

27 ハリスに関連する言及あるいは評価している資料には、韓国教会史の関連：白樂濬、『韓国改新教史』、ソウル：延世大学校出版部、1973、434頁参照；李永献、『韓国基督教史』、ソウル：コンコルディア社、1978、126-127頁参照；前掲書、韓国基督教史研究会、326頁参照；韓国基督教長老会歴史編纂委員会、『韓国基督教100年史』、ソウル：韓国基督教長老会出版社、1992、149頁参照；朴容奎、『韓国基督教会史2』、ソウル：いのちのことば社、2004、133、138、151頁参照；前掲書、閔庚培、255頁参照；韓国監理教会史の関連：基督教大韓監理会教育局 編、『韓国監理教会史』、ソウル：基督教大韓監理会教育局、1975、354、257頁参照；柳東植、『韓国監理教会의 歴史Ⅰ』(韓国監理教会の歴史Ⅰ)、ソウル：基督教大韓監理会、1994、207頁参照；尹春炳、『韓国監理教教会成長史』、果川：監理教出版社、1997、500頁参照；その他、関連研究：金良善、『韓国基督教史研究』、ソウル：基督教文社、1971、121頁参照、；李萬烈、『韓国基督教의 歴史意識』(韓国基督教の歴史認識)、ソウル：知識産業社、1981、300頁参照；李成森、「해리스 Harris, Merriman Colbert」、『基督教大百科事典』、第16巻、1985、231頁参照；宋吉燮、『韓国神学思想史』、ソウル：大韓基督教出版社、1987、220頁参照；李萬烈、『韓国基督教文化運動史』、ソウル：大韓基督教出版社、1987、264頁参照；尹慶老、『韓国近代史의 基督教史的理解』(韓国近代史の基督教的な理解)、ソウル：力民社、1992、147頁参照；金承泰・朴惠珍 編、『來韓宣教師総覧』修訂増補版、ソウル：韓国基督教歴史研究所、1996、287頁参照；朴容奎、『平壌大復興運動』、ソウル：いのちのことば社、2000、501頁参照；朴明洙、『初期韓国聖潔教会史』、ソウル：大韓基督教書会、2001、143頁参照；李德周、『韓國土着敎會形成史研究』、ソウル：韓国基督教歴史研究所、2001、152頁参照；尹春炳、『韓国監理教会外国人宣教師』、ソウル：韓国監理教会史学会、2001、197頁参照；徐正敏、『韓日基督教関係史研究』、ソウル：大韓基督教書会、2002、242頁参照；歴史委員会 編、『韓国監理教人物事典』、ソウル：基督教大韓監理会、2002、522頁参照；柳大永、『開化期 朝鮮과 美国 宣教師：帝国主義 侵略、開化自强、그리고 美国 宣教師』(開化期の朝鮮と米国宣教師：帝国主義の侵略、開花自強、そして米国宣教師)、ソウル：韓国基督教歴史研究所、2004、427、429、431頁参照；金承泰、『韓末日帝強占期宣教師研究』、ソウル：韓国基督教歴史研究所、2006、67頁参照；李省展、『アメリカ人宣教師と朝鮮の近代』、株式会社社会評論、2006、91-92頁参照；李德周、『서울年会史Ⅰ(1884-1945)』(ソウル年会史Ⅰ(1884-1945))、ソウル：基督教大韓監理会ソウル年会、2007、297-381頁参照；基督教大韓監理会監督協議会 編、『監督들의 이야기』(監督たちの物語)、ソウル：基督教大韓監理会監督協議会、2007、68頁参照；シンスイル、『韓国教会에큐메니칼運動史(1884-1945)』(韓国教会エキュメニカル運動史1884-1945)、ソウル：クムラン出版社、2008、260頁参照；『ハリス』、10頁参照。

太平洋沿岸並びにハワイ地域での日本人宣教の総理、(日韓)宣教監督などと言及されている、米国及び日本とは全く異なって理解されている。すなわち、幾分批判的に理解・評価されているのである。

以上のような先行研究をまとめてみると、以下のような共通の限界が表れる。片側に偏る、あるいは地域によって相違する理解があるということである。すなわち、米国と日本側の研究によると、「日本宣教師」という性格が強く表れているが、韓国側の研究によると、ハリスの宣教活動を総合的に理解することより、単に「親日派宣教師」あるいは「親日派監督」として理解される傾向が強いことが分かる。したがって、既存の先行研究を通して、メソヂスト監督教会の東アジア宣教の特色を把握することは、地域に限られる研究となっている。そして日韓両国のメソヂスト教会の関わりは、単に日本の植民地支配による宣教師の状況認識に限られているだけである。それ故、総合的な宣教理解を把握することにおいて、大きな限界が表れているのである。

W・R・ランバス(Walter R. Lambuth)について

次に、ハリスと比較できる人物としてランバスをあげることができる。ランバスはハリスと同時代を生きた宣教師、そして監督として日韓宣教に関与した南メソヂスト監督教会の宣教師である。

まず、米国側の資料を時代順に検討してみると、ランバスに関する先行研究としてピンソン(William W. Pinson[28])著述の *Walter Russell Lambuth – Prophet and Pioneer*[29]があげられる。この著書は、ランバスと関連してこれまで著述されたいかなる先行研究よりも詳細に記されている評伝である。著者ピンソンは、ランバスの同僚であり、宣教局総主事の後任であるランバスの生涯を通じて親密な関係を維持した[30]。したがって、ランバスの伝記を著述

---

[28] ピンソン(W. W. Pinson, 1854-1930)は、南メソヂスト監督教会の牧師及び宣教行政の責任者として1854年4月4日、テネシー州(Tennessee)に生まれた。1877年、南メソヂスト監督教会テネシー年会(Tennessee Annual Conference)に加入し、しばらく間に米国内の様々な教会で牧会した。1906年から1910年まで南メソヂスト監督教会宣教局副主事(Assistant Secretary)として務め、1910年からはランバスの後任として1926年まで主事(General Secretary)として就任し、南メソヂスト監督教会の宣教政策の実務を担当した。'Pinson, William Washington', *Encyclopedia of World Methodism Vol.2*, p.1917.

[29] W. W. Pinson, *Walter Russell Lambuth – Prophet and Pioneer*(以下*WRL*), Nashville: Cokesbury Press, 1925.この著書は日本語に翻訳され、出版された。ウィリアム・W・ピンソン、半田一吉 訳、『ウォルター・ラッセル・ランバス – Prophet and Pioneer』(以下『ウォルター・ラッセル・ランバス』)、学校法人関西学院、2004。ちなみにこの翻訳書には関西学院で学校の設立者である。ランバス誕生150周年を記念し、翻訳・出版された書物なので、ピンソンが記した内容以外に関西学院とランバスの関わりなどをめぐっても記述されている。同書、313-321頁参照。

[30] 実際にランバスは横浜総合病院(Yokohama General Hospital)で亡くなる直前、最後までも宣教局主事である。ピンソンに手紙を送り、戦況報告するほどランバスとピンソン両者の関わりは非常に親密であった。*W. R. Lambuth's letter to W. W. Pinson*, September, 11th, 1921, E. H. Rawlings, *Walter Russell*

するのに、最も適した人物であると言える[31]。この著書は、18章から構成されており[32]、1章から17章まではランバスの生涯を時系列に叙述し、最後の章はランバスがこの世を去った後、彼を覚える同僚や知人たちの追悼文などをまとめたものである。ただし、この伝記は、ランバスに対する肯定的な解釈一辺倒で記述されているので、ランバスを批判的な観点から検討することにあたって、限界を持っている。また、ランバスの東アジア宣教を中心に叙述された研究ではないので、日本と朝鮮で彼が残した宣教業績を詳細に把握する限界がある。それ故、米国の教会における東アジア宣教の性格、そして日韓のメソヂスト教会の相互関係を理解することが必要である。

その他、戦前のランバスに関する資料の中に、1921年に出版されたローリングス(E. H. Rawlings) が編集・著述した*Walter Russell Lambuth*[33]と1922年に南メソヂスト監督教会出版部(Publishing House M. E. Church, South)から出版した*Lambuth – Bennett Book of Remembrance*[34]をあげることできる。しかし、上記の資料は追悼文あるいは黙想集などの目的で出版されたものなので、実質的に先行研究として評価するのに無理がある。

次に日本で刊行されたランバスに関する先行研究として、神田健次の『W・R・ランバスの使命と関西学院の鉱脈』[35]をあげることができる。著者は宣教師としてのランバスの活動と使命を明確にするため、まずランバスが中国から来日し、中心的な宣教活動を展開した瀬戸内海に沿ってその足跡を追跡していく[36]。そして、その宣教の結実について、教会と学校を中心に考察している[37]。また、直接中国を現地調査して、上海、蘇州、北京などランバスが活動したその足跡に沿って探求し考察している[38]。何よりこの研究は、ランバスの宣教神学を草創期のエキュメニカル精神と相互関連させ、歴史的に踏まえながら、その意義を明らかにしたことに大きな意味がある[39]。それ故、この先行研究は、ランバスが持っていた既存

Lambuth, Nashville: Board of Missions of the Methodist Episcopal Church, South, 1921, pp.15-18.

[31] 当時、メソヂスト監督教会宣教局の主事として務めていたノース(Frank M. North)はこの本の冒頭(Introduction)に「このランバス監督の伝記では、彼を知り、愛し、その思い出を大切にし、彼と相似た精神を持つ人物が、「王が来たり給うのに備え、道を開かんがために命を捧げた先駆者にして殉教者」の物語を語っている」と表現している。Frank Mason North, 'Introduction', *WRL*, p.14 ;『ウォルター・ラッセル・ランバス』、19頁。

[32] *Ibid*, p.7.

[33] E. H. Rawlings, *Walter Russell Lambuth*, Nashville: Board of Missions of the Methodist Episcopal Church, South, 1921.

[34] Mary De Bardeleben ed., *Lambuth – Bennett Book of Remembrance*, Nashville: Publishing House M. E. Church, South, 1922.

[35] 神田健次、『W・R・ランバスの使命と関西学院の鉱脈』、学校法人関西学院、2015。これは著者である神田健次がランバスをめぐって数年間研究し、発表・寄稿した研究論文などを中心としてまとめ、2015年に出版したものである。

[36] 同書、3-20頁参照。

[37] 同書、25-60頁参照。

[38] 同書、3-20頁参照。

[39] 同書、89-115頁参照。

の思想と理解の枠組をより幅広く調べることができるという点で大きな貢献があると評価できる。しかし、草創期のランバスとエキュメニカルな宣教神学について、韓国との相互関連は扱っていないので、この点に限り日韓のメソヂスト教会との関連においてランバスを研究することにおいて十分とは言えない。

また、山内一郎の研究も注目すべきである。戦後に日本でランバス研究において、先駆的な研究者として活発な研究業績を残した彼は、特に「関西学院史紀要」[40]を通して研究を進めた。そのような山内一郎は、ランバスを関西学院の間の関わりに限らず、全般的な生涯や思想を扱い、関連資料を翻訳し、今日の研究者に幅広い理解を提供してくれている。しかし、山内一郎の研究も、日韓両国の間におけるランバスの宣教活動について十分に叙述したものではない。その他、関西学院キリスト教主義教育研究室で「関西学院キリスト教教育史資料」の一環として発行した『ウォルター・ラッセル・ランバス資料(1)・(5)』[41]があるが、

---

[40] ちなみに関西学院学院史編纂室が編集・発行している「関西学院史紀要」に寄稿されたランバス関連論文は以下のようである。山内一郎、「Walter Russell Lambuth 関係資料探索ノート(1)」、『関西学院史紀要』、(関西学院学院史編纂室)、第 1 号、1991、102-134 頁参照；小林信雄、「解説-ランバス父子の中国伝道辞任の理由について」、同書、第 1 号、1991、279(11)-274(16)頁参照；藤田太寅、「ランバスの頃のキリスト教伝道」、同書、第 6 号、2000、116-143 頁参照；神田健次、「ウォルター・R・ランバスの瀬戸内伝道圏構想」、同書、第 11 号、2005、181-204 頁参照；山内一郎、「ウォルター・R・ランバスの人と思想」、同書、第 11 号、2005、144-153 頁参照；半田一吉訳, ピンソン著、「ランバス伝」から見たウォルター・R・ランバス像」、同書、第 11 号、2005、155-179 頁参照；池田裕子、「南メソヂスト監督教会日本伝道の初穂、鈴木愿太の生涯-宣教師ランバス-家との関わりを中心に」、同書、第 12 号、2006、29-85 頁参照；多田義治、「ランバス博士のブラジルでの足跡」、同書、第 12 号、2006、209-219 頁参照；神田健次、「中国における W・R・ランバス宣教師の足跡を求めて」、同書、第 13 号、2007、45-58 頁参照；今田寛、「広島、広島女学院とランバス宣教師父子」、同書、第 14 号、2008、7-33 頁参照；木下隆男、「ウォルター・R・ランバスと韓国-1907 年を中心に」、同書、第 14 号、2008、37-56 頁参照；洪伊杓、「W・R・ランバス宣教師と朝鮮半島-永遠なる東アジアの友」、同書、第 17 号、2011、91-132 頁参照；神田健次、「草創期のエキュメニカル運動と W・R・ランバス」、同書、第 18 号、2012、43-74 頁参照；西垣二一、「日本におけるランバス・ファミリーの使命-その歴史と今日的意味を考える」、同書、第 18 号、2012、77-88 頁参照；山内一郎、「日本におけるランバス・ファミリーの使命-その歴史と今日的意味を考える」、同書、第 18 号、2012、89-100 頁参照；洪珉基、「W・R・ランバスにおける宣教思想の一考察-特に、朝鮮認識を中心に」、同書、第 20 号、2014、61-94 頁参照；ルース・M・グルーベル・多田義治・池田裕子・神田健次、「W・R・ランバス宣教師の足跡を訪ねて ：ブラジル・アメリカ・中国への旅から」、同書、第 21 号、2015、113-131 頁参照；堀忠・神田健次、「W・R・ランバス著『医療宣教 (Medical Missions)』の意義をめぐって」、同書、第 21 号、2016、121-149 頁参照。

[41] ウォルター・R・ランバス、関西学院キリスト教主義教育研究室 編、「ウォルター・ラッセル・ランバス資料」、『関西学院キリスト教主義教育史資料Ⅲ』(以下『ランバス資料』)、関西学院キリスト教主義教育研究室、1980；ウォルター・R・ランバス, 関西学院キリスト教主義教育研究室 編、「ウォルター・ラッセル・ランバス資料(2)」、『関西学院キリスト教主義教育史資料Ⅴ』(以下『ランバス資料(2)』)、関西学院キリスト教主義教育研究室、1984；ウォルター・R・ランバス, 関西学院キリスト教主義教育研究室 編、「ウォルター・ラッセル・ランバス資料(3)」、『関西学院キリスト教主義教育史資料Ⅵ』、編、「ウォルター・ラッセル・ランバス資料(4)」、『関西学院キリスト教主義教育史資料Ⅷ』、関西学院キリスト教主義教育研究室、1989；ウォルター・R・ランバス、中西良夫 訳、「アフリカ伝道への祈りと足跡」(ウォルター・ラッセル・ランバス資料(5))、『関西学院キリスト教主義教育史資料Ⅸ』、関西学院キリスト教主義教育研究室、1990。この中、「ウォルター・ラッセル・ランバス資料(4)」は*Winning the World for Christ*(世界をキリストへ ミッションの動態)の日本語訳である。以降、2004年には『ヴァンダビルト大学コール・レクチャーキリストに従う道-ミッションの動態』という表題の単行本として出版された。ウォルター・R・ランバス、山内一郎 訳、『ヴァンダビルト大学コール・レクチャーキリストに従う道-ミッションの動態』(以下『キリストに従う道』)、学校法人関西学院、2004。

これはランバスの資料を日本語に訳した資料集なので、先行研究として評価するのには無理がある。

最後に、朝鮮(韓国)側の先行研究については、先述した米国と日本に比べて数が少ない。まず言及したいのは、『基督教世界』という基督教大韓監理会(韓国のメソヂスト教会)の機関誌に掲載された洪伊杓の研究である[42]。事実、韓国では長い間、米国と日本に比べ、ランバスの生涯と業績に関する関心が低かったと言える[43]。洪伊杓は、このような事実を認識してランバスの朝鮮に関連した資料を収集した後、その間忘れられていたランバスを韓国キリスト教界に紹介した。それ故、洪伊杓の研究はランバスを韓国キリスト教界に再認識させる努力した点で非常に高く評価するに値する。ただし、朝鮮に焦点を絞って、ランバスを記述する中でいくつかの不正確な事実と論理の飛躍がある[44]。また、ランバスと朝鮮の関わりに焦点を絞っているので、日韓両国と関連する具体的な宣教理解とその解釈が欠けている。

その他、梁柱三が『基督申報』に寄稿した「램버드監督の一生」がある[45]。しかし、この

---

[42] 洪伊杓、「동아시아의 영원한 벗, 램버스(1)」(永遠なる東アジアの友-ランバス(1))、『基督教世界』、第951号、2010年2月号、48-52頁参照；洪伊杓、「한국 남감리교 선교의 숨은 개척자, 램버스(2)」(韓国の南メソヂスト監督教会に於ける隠れ開拓者、ランバス(2))、同書、第952号、2010年3月号、46-49頁参照；洪伊杓、「저는 계속 지켜볼 것입니다!, 램버스(3)」(私はずっと見つめる！、ランバス(3))、同書、第953号、2010年4月号、60-62頁参照；洪伊杓、「저는 계속 지켜볼 것입니다!, 램버스(4)」(私はずっと見つめる！、ランバス(4))、同書、第954号、2010年5月号、46-49頁参照；この文は内容構成において、大きな訂正なしに、日本語に訳され、2010年12月に関西学院学院し編纂室の主催で開かれた学院し研究月例会で発表され、翌年『関西学院史紀要』第17号に「W・R・ランバス宣教師と朝鮮半島-永遠なる東アジアの友」と題して掲載された。神田健次、「学院史編纂室共同研究報告」、『関西学院史紀要』、第17号、2011、277頁参照；洪伊杓、「W・R・ランバス宣教師と朝鮮半島-永遠なる東アジアの友」、同書、第17号、2011、91-132頁参照。

[43] 洪伊杓、「동아시아의 영원한 벗, 램버스(1)」(永遠なる東アジアの友-ランバス(1))、同書、48頁参照。

[44] 例えば、洪伊杓はランバスが1891年10月、米国テネシー州ナッシュビル(Nashville, Tennessee)で開催された「米国神学校連盟年次大会」でアンダーウッド(H. G. Underwood)と共に朝鮮宣教に対して講演したと記している。(前掲書、洪伊杓、「한국 남감리교 선교의 숨은 개척자, 램버스(2)」(韓国の南メソヂスト監督教会に於ける隠れ開拓者、ランバス(2))、48頁参照；前掲書、洪伊杓、「W・R・ランバス宣教師と朝鮮半島-永遠なる東アジアの友」、103頁参照。)しかし、これは事実ではない。その日、この大会に参加した尹致昊は彼の日記に以下のように記した。'Rev. Hugh Price Hughes addressed the students in the chapel at 9 a.m. In the afternoon session Dr. Lambuth spoke on Japan and its missionary works with his usual earnestness and clearness. Rev. Underwood, Corea, followed Dr. Lambuth. Then a short talk by Rev. H. P. Beach, Doctor of Divinity, a returned missionary from China.'(『尹致昊日記』、1891年10月23日。)また、洪伊杓は米国神学校連盟年次大会でアンダーウッドと共に講演したという事実を根拠としてあげ、ランバスがアンダーウッドと格別な信頼を交わしたと主張している。引き続き、その縁によって、アンダーウッドが延喜専門学校を設立した当時、積極的な協力に繋がり、「1941年に尹致昊が延喜専門学校長となり、梁柱三総理師が理事長となる結果まで至った」と主張する。(洪伊杓、「한국 남감리교 선교의 숨은 개척자, 램버스(2)」(韓国の南メソヂスト監督教会に於ける隠れ開拓者、ランバス(2))、同書、48-49頁；前掲書、洪伊杓、「W・R・ランバス宣教師と朝鮮半島-永遠なる東アジアの友」、103-104頁。)もちろん、ランバスがニュートン(J. C. C. Newton)牧師に1905年11月3日に送った手紙にアンダーウッドを言及する内容が現れること、そして朝鮮での待ち合わせのため、対話を交わした事実がランバスが書いた文に記録されたことなどを考慮すると、ランバスとアンダーウッド両者の間に全然交流がなかったことではないと推測できる。(*Walter R. Lambuth's letters to J. C. C. Newton*, November, 3th, 1905, ウォルター・ラッセル・ランバス、「Letters from Walter R. Lambuth」(ウォルター・R・ランバス書簡集)、『ウォルターラッセル・ランバス資料』、125頁。『ランバス資料(2)』、37頁参照。)しかし、ランバスとアンダーウッド両者の間に交流によって、この因果関係が直接に伴った主張することは根拠が不明確である。

[45] 梁柱三、「램버드監督의一生」(ランバス監督の一生)、『基督申報』、1921年10月12日、1999頁参照；梁

研究文献は朝鮮の南メソヂスト監督教会の代表的指導者である梁柱三が、1921年にランバスの死後、3度に渡り新聞紙面に寄稿した追悼文に過ぎないので、日韓のキリスト教関係の中で、ランバスの宣教を客観的に把握することは無理がある。また、李徳周が南メソヂスト監督教会の朝鮮宣教の歴史を整理しながらランバスの資料を簡単に引用して言及したりもした[46]。

このように、今までの先行研究を調べたところ、ランバスに関連する先行研究は、大きく戦前には米国を中心に、そして戦後は日本を中心として推進されてきたと言える。そして近年になって、韓国でもランバスの研究が行われ、成果が現れはじめている。米国ではランバスを「宣教師」、「宣教局の主事」、「監督」などと理解し、また日本では「関西学院の設立者」というイメージを中心に「日本の開拓宣教師」、「監督」などで理解する傾向がある。それから朝鮮(韓国)では「東洋担当の監督」、「梁柱三・尹致昊との関係」、「南メソヂスト監督教会朝鮮宣教の開拓過程における宣教局主事」などと関連してランバスを理解する傾向が濃厚であった。上述したように、これまでのランバス理解と研究は、日米韓の各国別に若干相違する観点からアプローチされていたと言える。

以上のように、日中韓各国によって個別的に行われたランバス研究の故に、ランバスが南メソヂスト監督教会の東アジア宣教、その中でも日韓両国の関係における重要性と役割が詳細に研究されていない。これはまさに日韓両国のメソヂスト教会の関わりとその交流を把握するのに、十分ではなかったということである。また、ランバスが果たした宣教の土台が何なのか、その思想的な側面が詳細に検討されていなかった。したがって、南メソヂスト監督教会とランバス、そして日本並びに朝鮮という宣教地の三角関係が、相互にいかなる関わりの中で結びついたかが検証される必要があるのである。

日韓両国のキリスト教史におけるメソジスト教会

戦後から最近に至るまで日韓キリスト教の関係と交流、そしてその比較を主題とした研究は多くはないが、一定水準の成果が成し遂げられた。これに関連して最も先駆的な研究者

柱三、「램버드監督의一生」(ランバス監督の一生)、『基督申報』、1921年10月19日、2007頁参照；梁柱三、「램버드監督의一生」(ランバス監督の一生)、『基督申報』，1921年10月26日、2015頁参照。この文は後日に若干の訂正した後、梁柱三本人が編集し、1930年に刊行した『朝鮮南監理教会三十年紀念報』に「램벗트監督의畧歴」(ランバス監督の略歴)という題目に変更し、再び掲載された。梁柱三、「램벗트監督의畧歴」(ランバス監督の略歴)、『朝鮮南監理教会三十年紀念報』、京城：朝鮮南監理教会伝道局、1930、296-299頁参照。

[46] 李德周、『宗橋敎會史1900-2004年』、ソウル：図書出版宗橋教会、2005、56、63、67、69、74、88頁参照；李德周、『서울年会史 I (1884-1945)』(ソウル年会史)、196、207、217-218、238-239頁参照；李德周、『春川中央敎会史』、春川：基督教大韓監理会春川中央教会、2007、73、75、77、78頁参照。

は在日大韓基督教会の牧師、呉允台である。彼は日本語で『日韓キリスト教交流史』を著している[47]。その後、この『日韓キリスト教交流史』は、韓国語でも翻訳され、1980年『韓日基督教交流史』として公刊された[48]。呉允台の後に続いて飯沼二郎[49]、土肥昭夫[50]、韓晳曦[51]、蔵田雅彦[52]、信長正義[53]、徐正敏[54]、梁賢惠[55]、洪伊杓[56]、李元重[57]などが日韓のキリスト教史に関心を持って研究を推進してきた[58]。

ところが上記の先行研究を見ると、大きく二つに分類することができる。一つは19世紀末に日本で行われた李樹廷のハングル聖書翻訳[59]であり、もう一つは日本植民地時代という時期的な背景の中で、朝鮮伝道論、神社参拝などに関連し、日韓両国のキリスト教の関係を考察するものである。そして、キリスト同信会と日本基督教会を背景とする信長正義や李元重などを除いては、ほとんどが日本組合教会及び日本基督教団、あるいは在日大韓基督教会[60]に関連する研究であった[61]。したがって、日本組合教会(会衆派教会)、日本基督教会(改革派及び長老派教会)に加え日韓両国の主流派の一つであったメソジスト教会に関する研究は、

---

47 呉允台、『日韓キリスト教交流史』、新教出版社、1968。
48 呉允台、『韓日基督教交流史』、ソウル：恵宣文化社、1980。
49 これに関連して代表的に飯沼二郎・韓晳曦 共著、『日本帝国主義下の朝鮮伝道：乗松雅休・渡瀬常吉・織田楢次・西田昌一』、日本基督教団出版局、1985；飯沼二郎・韓晳曦 共著、『伝道に生きて：在日大韓基督教会と織田楢次』、麦秋社、1986。
50 これに関連して代表的に土肥昭夫、前掲書；土肥昭夫、『日本プロテスタント・キリスト教史論』、教文館、1987；土肥昭夫、『キリスト教会と天皇制: 歴史家の視点から考える』、新教出版社、2012。
51 これに関連して代表的に韓晳曦、『日本の朝鮮支配と宗教政策』、未来社、1988；韓晳曦、『日本キリスト教海外伝道史の研究』、同志社大学博士論文、1997。
52 これに関連して代表的に蔵田雅彦、『天皇制と韓国キリスト教』、新教出版社、1991。
53 これに関連して代表的に信長正義、『キリスト同信会の朝鮮伝道』、むくげの会、1996。
54 これに関連して代表的に徐正敏、『日本基督教의 韓国認識』(日本基督教会の韓国認識)、ソウル：ハンウルアカデミー、2000；徐正敏、『韓日基督教関係史研究』、ソウル：大韓基督教書会、2002；徐正敏、『日韓キリスト教関係史研究』、日本キリスト教団出版局、2009；徐正敏、『日韓キリスト教関係史論選』、合同会社かんよう出版、2013。
55 これに関連して代表的に梁賢惠、『近代韓・日関係史속의 基督教』(近代に於ける韓・日関係史の中の基督教)、ソウル：梨花女子大学校出版部、2009。
56 これに関連して代表的に洪伊杓、『日帝下 韓國基督教의 日本認識研究 - 「内地」概念을 中心으로』(日帝下に於ける韓国基督教の日本認識研究-「内地」概念を中心に)、ソウル：博士論文、延世大学校、2014。
57 これに関連して代表的に李元重、『植民地朝鮮における日本基督教会に関する研究』、博士論文、同志社大学、2015。
58 その他、研究書ではないが、『日韓キリスト教関係史資料 1876-1922』と『日韓キリスト教関係史資料Ⅱ 1923-1945』は日韓両国のキリスト教史を研究することにおいて、貴重な参考資料となる。小川圭治・池明観 編、『日韓キリスト教関係史資料 1876-1922』、新教出版社、1984；富阪キリスト教センター、『日韓キリスト教関係史資料Ⅱ 1923-1945』、新教出版社、1995。
59 この先行研究とは別に2015年6月30日、李樹廷の「マルコによる福音書」出版130周年を迎え、東京在日韓国YMCAにて「李樹廷の聖書翻訳と宣教活動」をテーマとして国際学術シンポジウムが開催された。当時の発表論文は韓国基督教歴史学会編、『韓国基督教と歴史』第43号、ソウル：韓国基督教歴史研究所、2015参照。
60 1908年、東京で始まった在日大韓基督教会は李樹廷のハングル聖書翻訳をはじめ日本での彼の信仰生活を教派の前史として見なす。呉允台、『日韓キリスト教交流史』、78-90頁参照；李清一、『在日大韓基督教会100年史 1908-2008』、かんよう出版、2016、29-37頁参照。
61 もちろん、内村鑑三を中心とする無教会主義に基づき、日韓両国のキリスト教史を扱う研究も相当である。しかし、本論文で無教会主義は教派的背景から除く。

先の2教派に比べて十分に研究されていないと言える[62]。

もちろん、日韓両国で各国の個別的なメソヂスト教会の歴史についてすでに研究成果がある[63]。しかし、メソヂスト教会を主題として日韓両国の教会の歴史を論じた先行研究は不十分である。したがって、続いて記述する「研究方法」の項目でこれに関してより具体的に言及するが、日韓両国のキリスト教史をより忠実に理解するために、両国のメソジスト教会史が補完される必要があると言える。

【研究方法】

日韓両国教会の交流と比較に関する歴史研究をよりバランスをもって発展させるために、これまで十分ではなかった両国のメソヂスト教会の研究を進める必要がある。そのため、本研究は、日本と朝鮮に対して自国の教派的教会を移植させていった米国のメソヂスト教会、つまり、メソヂスト監督教会と南メソヂスト監督教会の二つの教会が日韓両国においての宣教事業を開始した19世紀後半から、教派的教会の形がある程度定着された1920年代の初頭までの時期を重点的に検討する。

上記のような背景を基に、本研究では、まずハリスとランバス二人の人物を中心に比較して探る研究方法をとる。同時期に両者とも宣教監督であり、東アジア宣教、特に日韓両国を宣教管轄地として直接担当した点に大きな共通点を見ることができる。したがって、教派的教会が定着していた当時の日韓両国教会において、米国教会と宣教師たちの宣教が各々い

---

[62] 厳密な意味でメソジスト教会(監理教会)の教派的背景を持ち、日韓両国キリスト教の歴史を扱った先行研究は現在、李貞善の「日本メソヂスト教会における在朝鮮日本人伝道：1904年伝道開始から1910年日韓併合まで」が唯一である。(李貞善、「日本メソヂスト教会における在朝鮮日本人伝道：1904年伝道開始から1910年日韓併合まで」、『神学研究』、第50号、関西学院大学神学研究科、2011、111-124頁参照。)その他、2013年に「監理教神学大学校の開校126周年記念、日韓神学交流シンポジウム」の一環で、「初期における韓国のメソヂスト教会の神学形成に与えた日本神学の影響-関西学院大学と同志社大学の神学部留学生を中心として」をテーマとして三つの論文(発表者：神田健次・原誠・李德周)が発表された。しかし、この論文はメソジスト教会(監理教会)という教派的な背景に限らず、関西学院大学と同志社大学を中心に戦前に於ける日本神学の傾向とそこで留学していた朝鮮人留学生の特色を分析することに焦点が当てている。神田健次、「戦前における関西学院神学部の神学教育と神学思想の傾向」；原誠、「同志社大学文学部神学科と韓国人留学生」、李德周、「初期 日本神学校 韓国人 留学生에 관한 研究 – 日本 関西学院大学 神学部와 同志社大学 神学部를 中心으로」(初期日本の神学校の韓国人留学生に関する研究-関西学院大学神学部と同志社大学神学部を中心として)、『初期 韓国 監理教会 神学形成에 끼친 日本神学의 影響 – 関西学院大学과 同志社大学 神学部 留学生을 中心으로』(初期における韓国のメソヂスト教会の神学形成に与えた日本神学の影響-関西学院大学と同志社大学の神学部留学生を中心として)、「監理教神学大学校 開校126周年 記念 韓日 神学交流 심포지엄」(監理教神学大学校の開校126周年記念、日韓神学交流シンポジウム)資料集、2013年9月5日。

[63] 戦前、日本メソヂスト教会と関連する代表的な歴史研究は澤田泰紳、前掲書。戦前、韓国の監理(メソジスト)教会と関連する代表的な歴史研究は韓国監理(メソジスト)教会の通史類：基督教大韓監理会教育局 編、前掲書；前掲書、柳東植；前掲書、尹春炳； 李德周・徐暎錫・金興洙、『韓国監理教会歴史』、ソウル：図書出版kmc、2017。

かに成り立ってきたのか検討するために、ハリスとランバス二人の生涯と宣教活動を中心に比較することを通して、メソヂスト監督教会と南メソヂスト監督教会両方の宣教の動向と政策などにも考察を向けつつ、両国教会の特色を比較検討していく。

また、本研究では基本的に1次資料を中心とする実証的歴史研究を踏まえながら、今日置かれている宣教的課題を解決しようとする方法論を展開していく。換言すれば、本研究が単純に過去の事実を究明するレベルにとどまらず、究極的に現在置かれている宣教の課題を解決するための学問的な検討と実践的な方向を模索していくという意味である。したがって上記のような方法論を総合的に検討・展開していく時、本研究は、今日の宣教的問題点を確認し、さらにこれから教会と宣教師などにおける建設的な宣教が何なのか再び確認することができる機会になるであろう。

【論文の構成】

序論
第1章：M・C・ハリス(Merriman Colbert Harris)の生涯と宣教活動
第2章：M・C・ハリスの日韓両国についての理解とその特色
第3章：W・R・ランバス(Walter Russell Lambuth)の生涯と宣教活動
第4章：W・R・ランバスの日韓両国についての理解とその特色
第5章：南・北メソヂスト監督教会における東アジア宣教の展開とその特色
　　－ ハリス及びランバスと各宣教部間の関わりを中心として
結論

まず、序論では問題設定を通じて、なぜ本研究が行われるのか、その理由と目的を扱う。その目的を明確に設定して明らかにした後、ハリスとランバス、そして米国南・北メソヂスト監督教会における東アジア宣教に関する先行研究を検証する。まさにこの過程で、これまでの研究の動向と性格、そして問題点などを把握するものである。そして最後に先のプロセスを把握してから本研究をいかに進めていくのか、研究方法について論じることにする。

第1章は、メソヂスト監督教会の所属宣教師及び宣教監督で活動していたハリスの生涯と宣教について考察する。彼の生涯を大きく次の二つの時期に分けて整理する。①出生から宣教師になるまで、②宣教師としての本格的な活動から晩年までである。したがって、ここでは「出生と家庭」、「初等教育と信仰教育」、「南北戦争と参戦」、「宣教師としての召命と結婚」など、彼がメソヂスト監督教会の日本開拓宣教師として遣わされるまでの過程を検討する。

そして宣教師としてのハリスがいかなる信仰と神学的背景の中で訓練を受け、成長したのか、その部分に焦点を絞って叙述しようとする。続いて、宣教師として派遣され、宣教地へ到着した後、現地の宣教活動が本格的にどのような過程の中で成り立っていったのか探ろうとする。すなわち、「日本の開拓宣教」、「在米日本人の宣教」、「日韓の宣教監督としての宣教活動」、「引退以降の宣教」など、生涯の後半を検討する。このように第1章では、ハリスの出生から生涯最後の時まで、人生の大半を占めていた宣教師としての役割と活動に重点をおいて検討する。

第2章は、前章のハリスの生涯に続き、彼が日韓両国をいかに理解して受容したのか、そしてその特徴は何なのか考察する。ここで日本と朝鮮を区分して、それぞれの政治、経済、社会、そして文化的な部分など、宗教(キリスト教)の外的な部分を先に検討する。これはハリスが当時の東アジアの現実をどのように理解したのか、時代的状況と結びつけて総合的に検討する。続いて、当時の時代的な状況の中で、どのような宣教理解を持っていたのか、宣教神学的側面を考察する。このような過程を基に、最後に日本と朝鮮に対して、どのような共通の理解、そして異なる理解を持っていたのかを比較検討していく。

第3章では、宣教師としてハリスの生涯をまとめた第1章と同様の方法で、南メソヂスト監督教会所属の宣教師及び監督として活動したランバスの生涯とその宣教をについて考察する。①まず、「出生と家庭」、「中国での生活」、「教育」、「信仰教育と南北戦争」、「宣教への召命と準備、そして結婚」など、宣教師になるまでの拾遺の環境と背景を共に検討し、生涯を概観する。続いて、②「中国の宣教」、「日本の開拓宣教」、「南メソヂスト監督教会宣教局での活動」、「監督としての宣教」など、宣教師と宣教行政家、そして監督に至るまで彼が展開した本格的な宣教活動について詳論する。このように、第3章は第1章と同等に、ハリスとランバス二人の人物の生涯を宣教師になる前と後に分けて両者を比較、検討する場となる。

第4章では、ランバスの日韓両国に対する理解とその特徴について考察していく。先の第3章でのハリスと同様に、まず日本と朝鮮両国に分けて考察する。そして、日韓両国の政治、経済、社会、文化をどのように理解したのかを検討する。続いて、時代的状況の中で、日韓各国における宣教について考察した上で、その共通点と相違点について比較して考察する。

第5章では、メソヂスト監督教会と南メソヂスト監督教会が東アジアにおいてどのように宣教を展開していったのかその動向を考慮しつつ、これに伴う特徴を検討する。まず、米国のメソヂスト教会が、奴隷問題によって、南北に分裂される前と分裂以降、メソヂスト監督教会と南メソヂスト監督教会が各々東アジア宣教をどのように行なっていったのかを検討する。その結果、メソヂスト監督教会と南メソヂスト監督教会が、どのような宣教的な特徴

を持って東アジア宣教を行っていたのかを考察する。何よりもこの章では、これまで検討してきたハリスとランバス、二人の人物とメソヂスト監督教会と南メソヂスト監督教会両教派の相互の関係性、すなわち、東アジア宣教においてハリスとランバスが各々所属する教会(メソヂスト監督教会と南メソヂスト監督教会)内で、相互にどのような影響を受けてきたのかについて解明していく。

結論では、まず、本研究が一貫して考察してきたハリスとランバス、二人の人物の宣教活動を中心に焦点を絞り、米国の南・北メソヂスト監督教会の東アジア宣教、特に日韓宣教活動を中心に内容を要約する。そして、内容の展開に伴う研究の意義が何なのかを明確にし、これに基づいて私たちの今日的課題について考察する。

第1章:M・C・ハリス(Merriman Colbert Harris)の生涯と宣教活動

1873年、メソヂスト監督教会の日本開拓宣教師として赴任したハリスは、生涯の約3分の2を宣教師及び宣教監督として生きた。そして1916年に公式に引退した後にも、彼は日本に再び戻り、日本人たちと共に暮らす道を選んだ。したがって、1873年から1916年の間は、ハリスの生涯を特に宣教と関連付けて調べる際に最も重要な時期だと見ることができる。このように、宣教という言葉は、彼の一生において全てといっても過言ではないほど、非常に重要な部分を占めている。そのような前提の下で、本章ではハリスの生涯を宣教との関連において検討することを主な目的とする。

ハリスの生涯は、1873年を境としてまず、第1節：家庭環境及び教育、つまり、出生及び家庭環境から、宣教師として派遣される前までの時期(1846-1873)を区分できる。そして、第2節：宣教活動、つまり、宣教師として派遣された後より晩年のころまで、本格的な宣教活動を担っていく時期(1873-1921)である。

第1節：家庭及び教育

(1)出生と家庭

ハリスは、1846年7月9日、オハイオ州・モンローカントリー・サンズベリータウンシップ(Sunsbury Township, Monroe County, Ohio)の小さな町であるビールスヴィル(Beallsville)[64]で父親であるコルベール・ハリス(Colbert Harris)と母親であるキャサリン・ハリス(Catherine Harris)の7男3女の中、9番目の子どもとして生まれた[65]。上には6人の兄がおり、2人の姉がいた。下にはただ1人の妹のみいたわけである。それ故、ハリスも家庭の

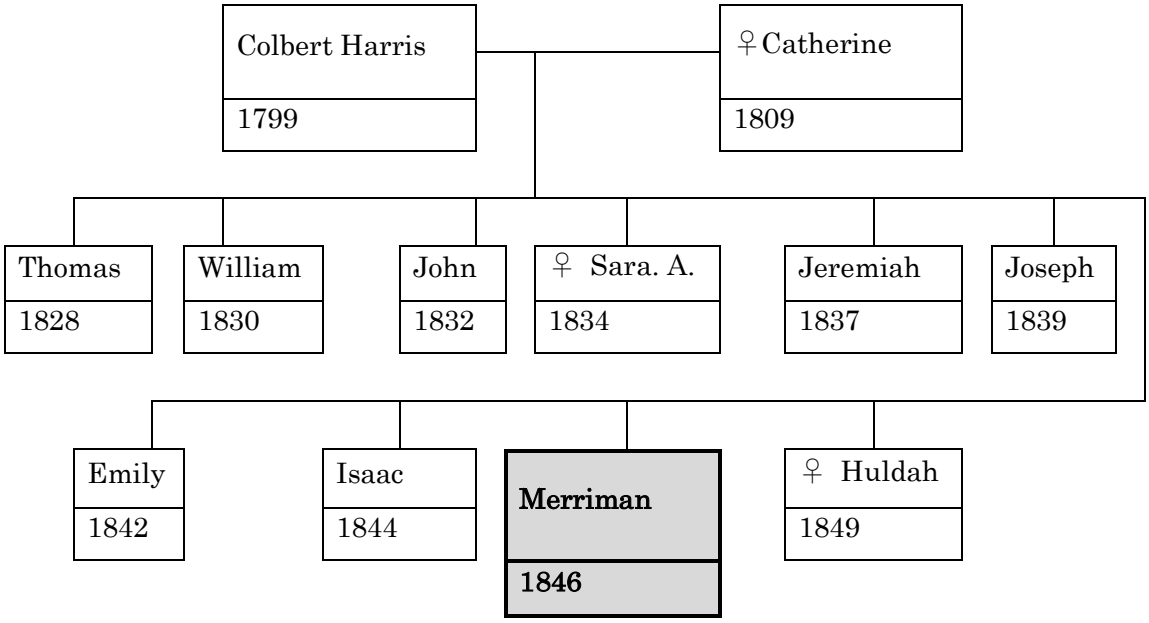
---

[64] ハリスの出身地を巡って、アルゲニー大学の歴史を整理したE・A・スミス(Ernest Ashton Smith)は彼の著書である*Allegheny – A Century of Education*では、オハイオ州ベルモントカウンティ(Belmont County)に位置するセイント・クレーアビル(St. Clairsville)だと言及している(Ernest Ashton Smith, *Allegheny – A Century of Education*, p.470。)しかし、ハリスの出身地が言及されている他のほとんどの資料には、オハイオ州・モンローカントリー・サンズベリータウンシップだと記録されている。したがって、本研究では資料批評の立場から、凡その資料が扱っている後者の立場に従う。'Merriman Colbert Harris', *Gospel In All Lands*(以下*GAL*), May, 1886, p.224; Carl F. Price ed., *Who's Who in American Methodism*, p.89; B. W. Billings, 'Bishop Merriman Colbert Harris – An Appreciation', *The Korea Mission Field*(以下*KMF*), June, 1921, p.115; Mattie Wilcox Noble, 'Bishop Merriman C. Harris', *Annual Meeting of the Federal Council of Protestant Evangelical Missions in Korea*(以下 *AMFCPEMK*), 1921, p.48; Frederick DeLand Leete, *Methodist Bishop*, p.84; John M. Versteeg, *Methodism: Ohio Area(1812-1962)*, p.201; 'Harris, Merriman Colbert', *Encyclopedia of World Methodism Vol.1*, p.1081; *BMCHarris*, p.9 ;『ハリス』、17頁参照。

[65] エム、シー、ハリス、「聖職四十年(紀念説教)」、『護教』、1908年4月25日、2頁参照; *BMCHarris*, pp.12-13.

末っ子と変わりはなかった。1850年、当時の人口調査(census)に記録されたハリスの家系をまとめると、次のようである[66]。

<表 - ハリスの家系図>[67]



♀印は女性

数字は出生年度

ところが、ハリスが生まれたビールスヴィルというところは、19世紀に入って、開拓がはじまった地域であった。残された記録によると、1812年にA・バレット(Abner Barrett)、J・リン(John Linn)など、約15名の人々の開拓民がこの地に初めて定住し、村を形成したという[68]。そして、1815年にはビールスヴィルから南に約1マイルほど離れている辺りで、子どもの教育のための学校が建てられ、これより少し先の1813年にはビールスヴィルから南側に約0.5マイル離れたところで最初の説教が行われた[69]。これが現在、残された資料から把握できる最初の信仰共同体である。ちなみに、彼らは皆バプテスト教会の信徒たち(Baptists)であった。続いて二番目にメソヂスト監督教会によって、6人の信徒と共に組織さ

---

66 Lester E. Suzuki, *Ibid*, pp.11-12.
67 『ハリス』、19 頁。
68 *History of Monroe County, Ohio*, Chicago and Toledo: H. H. Hardesty & Co., 1882, p.217.
69 *Ibid*, p.217.

れた教会が20 x 30フィートの規模で町区(タウンシップ)に建設された[70]。バプテスト教会より出発は遅れたが、独自の礼拝堂を先に建築することができるほどの活発な活動を展開した。ハリスは、まさにこのメソヂスト監督教会において、子どもの頃から信仰教育を受けてきた[71]。後日、「聖職40年」を迎えた1908年、彼は子どもの頃を振り返って、出生と当時の家庭背景をめぐって、次のように回顧している。

僕は生れながら基督信者でございます。私の父母、兄弟、近隣の者は皆信者であります。私の郷里では不信者は夢に見たくもございません。實に感謝に堪ませぬ、私は信者の家庭に生れ、親切に父母に育てられ、懇ろに牧師の世話を受けたのでございます[72]。

ハリスの家庭は、家族全員が教会に出席するという、19世紀の米国における典型的なキリスト教的家庭であったと言える。但し、彼の家族が出席していた教会は、教派は異なっていたようである。メソヂスト監督教会に通っていたハリスとは異なり、両親はバプテスト教会の信徒であった[73]。いかなる理由で互いに異なる教派の教会で信仰生活をするようになったのか明らかではないが、家族は皆忠実に信仰を持つキリスト者であったことは事実であった。したがって、ハリスは生れながら、両親と教会の牧師に着実かつ体系的な信仰教育を受け育てられた。また、村人皆がキリスト者だったので、毎週日曜日になると、教会に行くのは当然のことであった。そのようなわけで、最初からキリスト教的な環境から離れ、生活することは当時の状況から照らしてみると、想像すらできないことであった。

一方、彼の父親であるコルベールは大家族を扶養すべき家長であった。しかし、経済的に豊かな生活を過ごしていたので、多くの子どもたちを扶養することにおいて、物質的に困難な点はなかった。彼の母親であるキャサリンも経済的に余裕のある家系の出身であった。結婚前、彼女の名前はキャサリン・エリザベス・クルーパ (Catherine Elizabeth Crupper)で、バージニア州で奴隷を所有するほど豊かなクルーパ家の娘であった[74]。それ故、ハリスの幼年期は経済的に豊かな生活を維持していたと見られる。しかし、それもつかの間、ハリスが

---

[70] *Ibid*, p.217.
[71] *BMCHarris*, p.11.
[72] エム、シー、ハリス、「聖職四十年(紀念說教)」、『護教』、1908年4月25日、2頁。
[73] 倉部義郎、『日本基督教団函館教会100年史』、日本基督教団ハリス監督記念函館教会、1976、2頁参照。ところが、*Fifty years of Methodism – A History of the Methodist Episcopal Church within the bounds of the California Annual Conference from 1847 to 1897*を著述したアンソニーは本来彼の父親がバプテスト教会の信徒であったが、近くにバプテスト教会がなかったために必然的にメソヂスト監督教会の信徒になったと言及していた。しかし、元々この地域において、最初にバプテスト教会が立てられた事実を考慮すれば、アンソニーの主張は間違いであると言える。Charles Volney Anthony, *Fifty years of Methodism – A History of the Methodist Episcopal Church within the bounds of the California Annual Conference from 1847 to 1897*, San Francisco: Methodist Book Concern, 1901, p.407.
[74] *BMCHarris*, p.12.

6歳の頃の1852年3月25日に彼の父親であるコルベールがこの世を去った[75]。幼くして父親を失ったことはハリスにとって、大きな衝撃と悲しみとなるに十分であった。それにもかからず、ハリスは家族の中で末子のようなものだったので、父親の死による衝撃は相対的に克服しやすかったと推測できる。

(2)初等教育と信仰教育

ハリスは、オハイオ州にあるワシントンアカデミー(Washington Academy)で中等教育を受けている[76]。もちろん、この学校が正確にどこに位置していたのか、もしくは今も存続しているのか、また当時は具体的にどのレベルの教育を行っていたのかなど、現在残っている資料からは確認する方法がない。そして、ハリスがこの学校に在学していた期間が正確にいつからいつまでだったのかさえ確認し難い。ただ、この学校に在学していたという断片的な記録にのみ触れることができるだけである。今日も同じだが、彼が生まれ育った故郷は静かな田舎であり、その辺りも大都市から離れていた。したがって、このような状況を考慮すると、ハリスが在学したワシントンアカデミーは、田舎の小さな教育機関だったと推測できるだろう。

しかし、何よりもハリスにとって影響力を及ぼしたのは、ワシントンアカデミーのような教育機関ではなく日曜学校の教育であった。ちなみに、当時の米国の日曜学校は一般学校に代わって正規学校の役割を担う場合もあった[77]。米国の東部から西部に至る開拓地では、ほぼ唯一の教育機関である場合が多かったので、子どもたちには日曜学校による教育の影響力は大きかった。一般的に日曜学校は牧師がいなくても設立し、運営することができたので、時には教会より先に立てられ、教会から独立して運営される場合もあった[78]。したがって、日曜学校とこれに関連する活動は、牧師よりも信徒が積極的に参加する姿勢を取る場合が多かった。そのような時代的な状況の中で、ハリスは教会に通いながら、熱心に信仰生活も守った。先述したように、ハリスはバプテスト教会の信徒であった両親とは異なり、子どもの頃からメソヂスト監督教会に通いながら、信仰生活を守った。とりわけ日曜学校は、ハリスが熱心に信仰生活を守る上で大きな助けを与えた。その中でも、当時の日曜学校の校長を務めていたモリス(R. L. Morris)は、ハリスの信仰生活のみならず、幼年時代前半におい

[75] *Ibid*, p.14.
[76] Carl F. Price ed., *Who's Who in American Methodism*, p.89
[77] 柳大永、『美國宗教史』(米国宗教史)、ソウル：青年社、2007、215頁参照。
[78] 同書、215頁参照。

て非常に大きな影響を与えた[79]。日曜学校の時代にモリスから受けた影響は相当なものであった。このことは、彼が帰郷する度に、師モリスの墓地を訪れていたことから分かる。次はこれに関するハリスの回顧である。

私の日曜學校の校長ロバート、エル、モリス氏の面影は今に忘れられませぬ私は郷里へ歸る毎にモリス氏の墓へ參ります、此人は私の十六歳の頃まで親切に神の話を教へて呉れた先生であります、四年前にも其墓地へ参りましたが綺麗な處です[80]

ハリスの師であったモリスは、誰よりも情熱的な信仰を持つキリスト者であった。とりわけ、モリスは宣教に多くの関心を寄せていた。そのようなわけで、モリスは毎週日曜日に日曜学校に参加する子どもたちに宣教とは何なのか、なぜ宣教すべきなのかなどを強調した。続いてハリスの回顧である。

今憶出すと私が未だ少年の時、組會でロバート、エル、モリスは私の頭に手を按きまして涙を流して『若き兄弟よ、ドウゾ若い時よりして神に献げドウゾ本國に又は遠國迄も神の爲めに働く様にドウゾ……』と親切に云聞かせられた其言葉は智慧と信仰と熱心と愛に滿ちて居ました、私は其言葉に感激しました、其後私は大學へ這入て博士達に就いて學問しましたが父母に亞いで私の恩師は故人ロバート、エル、モリス氏であります、私は十二才で洗禮をうけて教會へ這入ることが出来ました[81]

以上のように、ハリスは幼い頃から、キリスト教以外のことは考えられない環境の中で、育ってきた。基本的には町と家庭の雰囲気はキリスト教的な環境に基づき構成されていった。その中でも日曜学校の校長として奉仕していたモリスの影響力は誰よりも、何よりも大きかった。

ハリスが50余年過ぎた後にもモリスを思い出し、彼から受けた影響を覚えているという事実自体を考慮してみてもこれを知ることができる。その中でも宣教に関連する使命はハリスがモリスから受けた最も大きな影響の一つであった。その他にもモリスは人生と信仰の全般的なところにおいて、模範的な者であった[82] 。そのような環境の中で、ハリスは12歳になる1858年に洗礼を受け、メソヂスト監督教会に入信(入会)までするようになった。以上のような環境の中で、ハリスは12歳になる1858年に洗礼を受け、メソヂスト監督教会に入会することになった[83]。そして、宣教のための聖職者の召命を徐々に悟るようになった。

---

79 エム、シー、ハリス、「聖職四十年(紀念說教)」、『護教』、1908年4月25日、2頁参照。
80 同書、2頁。
81 同書、2頁。
82 *BMCHarris*, p.6.
83 ちなみに、メソヂスト監督教会の宣教機関誌である*Gospel in All Lands*の1886年5月号によると、ハリ

続くハリスの回顧である。

私は幼少ながら基督信者の自覺がございました、又傳道者となる爲に神の召命を蒙むりましたと深く信じます、生長して後それが問題となりましたが當時私は神の召を確信しました[84]

周辺のあらゆる環境がキリスト教と関連しているのを見て、彼は自然にキリスト者という自覚を持ち、育つことができた。ところが、その自覚がもっと特別だと言えることは何よりも「伝道者となるための神の召命」だったのである。ハリスはそれを拒否することのできない召命(Calling)として受け入れた。この言葉は言い換えると、一般信徒ではなく、聖職者として一生宣教のために献身するという信仰的な告白だと言える。成長過程の中で何度もその召命に関する疑問を持たなかったわけではなかったが、基本的には子どもの頃からその召命を確信し、宣教師になる夢を育んできた。

つまりハリスが宣教師になるまで、基本的に彼の幼年期のキリスト教的周辺環境は大きな影響を及ぼしたと見られる。キリスト教以外の要素を考えられない町の雰囲気の中、生まれながら両親によって自然に受けた信仰生活、ここに日曜学校と校長であるモリスの影響が宣教師としての召命を成長させる上でその根底となったのである。

(3)南北戦争と参戦

1783年、パリ条約を通じて国際社会から独立を承認された米国はそれ以降急激に発展していった。フロンティア精神に基づき、西部進出を推進し、領土を拡張していった。そのようなわけで、当時の米国は自信と可能性で満ちた社会雰囲気を持っていた。そのような楽観的な雰囲気にもかかわらず、米国は一つ解決し難い根本的な問題を持っていた[85]。それはまさに奴隷制度であった。結局、奴隷制度による社会的な葛藤と分裂は、1860年代に入り南北戦争(American Civil War, 1861-1865)という形で勃発したのである[86]。

スの入会は13歳の時であると記録されている。原文の内容は次のようである。「united with the Methodist Episcopal Church when 13years of age.」しかし、12歳として記録したハリスの回顧がたとえ*Gospel in All Lands*より20年経過後の記録といっても、『護教』に掲載されたハリス自身の説教では直接12歳だと言及しており、以降にこれをめぐって記述されている他の短編的な資料などを参考しても12歳であると記録されている。以上のような事由に基づき、本研究ではハリスの入会年度を13歳の時ではなく、12歳の時であったとする方がより正しい見解であるとみなす。'Merriman Colbert Harris', *GAL*, May, 1886, p.224; メリマン・コルバート・ハリス、「聖職四十年(紀念說教)」、『護教』、1908年4月25日、2頁参照; B. W. Billings, 'Bishop Merriman Colbert Harris - An Appreciation', *KMF*, June, 1921, p.115 ;『ハリス』、21頁参照。

[84] エム、シー、ハリス、同書、2頁。

[85] 柳大永、前掲書、302頁参照。

[86] もちろん、その他に南と北の間の経済的・異質的な文化などを戦争の原因で見なす観点もある。Alan Brinkley、黄惠聖訳、『있는 그대로의 미국사2』(*The Unfinished Nation*)、ソウル：ヒューマニスト、2005、

ハリスは1863年頃、軍隊に自ら入隊することを決心した[87]。当時は戦争が極まった時期で、あらゆる戦闘と作戦が非常に熾烈に展開された状況であったと言える。それ故、あえて志願して軍人になり戦場に進み出ることは、命をかけることと同じであった。さらに当時、ハリスの体は体重100ポンド(約45キログラム)[88]に過ぎなかったので、常識的に考えると、参戦できるのに適切な身体条件ではなかった。それ故、志願入隊しようとしたハリスを家族は非常に心配していただろうと推定できる。結局、ハリスは1863年10月3日、3人の兄たちと共に同伴入隊した[89]。配置された部隊はオハイオ第12義勇騎兵隊のH中隊であり[90]、当時、彼は若干17歳であった。

この部隊はオハイオ州の居住者たちを中心に1863年9月と10月、2ヶ月に渡って、兵士を募集した[91]。10月3日、志願入隊したハリスは1ヶ月後、11月24日に他の志願者たちと共にクリーブランド(Cleveland)の近くに位置するテイラーキャンプ(Camp Taylor)に集結した。約半年間は警戒勤務などの簡単な任務だけ遂行した。しかし、1864年5月24日から南部連合軍のモーガン(John Morgan)部隊を退けるための任務を担ってから、本格的な戦場に出るようになった[92]。ハリスもやはり生死をかけた戦闘の現場に飛び込むこととなった。時にはおよそ470マイルに至る長距離を移動し、体力的に厳しい過程を踏むこともした。もちろん、ハリスが属していた部隊は騎兵隊だったので、部隊の移動過程において、歩兵より体力消費の程度が少ないが、それでも容易なことではなかった。時間が過ぎれば過ぎるほど、オハイオ第12義勇騎兵隊の役割は次第に重要になった。戦闘において重要な任務を引き受け、ハリスをはじめとする部隊員はその困難な任務を忠実に果たし消化した。そのような理由で、

124-125頁 ;『ハリス』、22頁参照。

87 メソヂスト監督教会に派遣され、朝鮮宣教師として活動し、ハリスの死後に彼に関する追悼文を記したデミング(C. S. Deming、都伊明、1876-1938)はハリスの南北戦争の参戦をめぐって、「17歳になった時は南北戦争の頃で、４年間馬兵として服役した」と記述すると共ににハリスが入隊しなければならなかった不可抗力的な状況(徴兵)として記している。もちろん、1863年3月、米国の国会で国民強制徴兵法(national draft law)が通過され、徴兵されたと思える余地はある。しかし、1863年7月にニューヨーク徴兵暴動が発生したほどに相当な国民的反感を買ったため、徴兵制度が完全にその効力を発揮できなかった可能性が高い。また、米国防省の戦争資料などを参考し、記述したスズキの著書でハリスが入隊した部隊の英文名称が「12th Regiment Ohio Volunteer Cavalry」だったことをみると、徴兵ではなく志願兵として入隊した可能性がより正しいと思われる。但し、彼がなぜ志願入隊を決心したのか、これに関するハリス自分の言及とこれをめぐる内容が明らかになった資料はまだ発見されていない。 都伊明、「ハリス監督に対して」、『神學世界』、6巻、5号(1921)、91頁参照 ; Alan Brinkley、黄惠聖訳、前掲書、128-129頁参照 ; *BMCHarris*, p.15 ;『ハリス』、22頁参照。

88 エム、シー、ハリス、「聖職四十年(紀念說教)」、前掲書、2頁参照。

89 『日本基督教団函館教会100年史』によると、3人の兄弟と共に入隊したと言及する。年齢順でみると、共に入隊した兄弟はエレミヤ(Jeremiah)・ジョセップ(Joseph)・アイザック(Isaac)である推測できる。倉部義郎、前掲書、2頁 ;『ハリス』、23頁参照。

90 'Merriman Colbert Harris', *GAL*, May, 1886, p.224; B. W. Billings, 'Bishop Merriman Colbert Harris - An Appreciation', *KMF*, June, 1921, p.115.『ハリス』、23頁。

91 *BMCHarris*, p.16.

92 *Ibid*, p.16.

南北戦争が北部連邦軍の勝利でほぼ確定していた1865年8月27日に一部部隊の招集解除命令があった時にも、オハイオ第12義勇騎兵隊はここから除外された[93]。

それから2ヶ月後の1865年10月24日、ワシントンD.C.の陸軍省(War Dept.)から義勇軍(volunteer troop)とすべての騎兵隊を解散する戦令46号(Circular No. 46)が通達されて、オハイオ州第12義勇騎兵隊も部隊を招集解除しなければならなかった。それによって、ハリスも1865年11月14日、伍長(corporal)という階級で軍隊生活を終えた[94]。約2年1ヶ月間の軍隊時代はハリス自身にとって、何より大事な経験となった。次はこれをめぐるハリスの回顧である。

其から四十年間私はモー休みがございません、病氣で息むこともございません、四十年ズット繼續して今日まで健康で神の爲に盡す體力がございましたことは神に感謝する次第でございます、今日頑健にして働ける第一の原因は米國で三年間軍人となつて國家の爲めに盡したことでございます、素と私は體の細い百ポンドに足らない蒲柳の質でありましたが三年の訓練を受けました結果今日の□壯體となつて大なる利益でございます[95]

ハリスは南北戦争の参戦による軍人生活のため、強い体力を得ることができたと思った。これは後日に行われるハリス自身の宣教活動において、体力的な下地となった。続くハリスの回顧である。

理屈を云はずに只實行せよと云ふ軍隊教育の賜は今に殘つて居ます、私が部長又監督の職務を行ひまう時に或は軍人的と云はれたがも知りませんが基督教會の團體は軍隊的である、軍隊的訓練はメソヂスト傳道者の準備である、救世軍の發起者はウエスレーやアズベリーでブースはマア第二に救世軍を設立したものでございます[96]

ハリスは２年間の軍生活の経験を自然に宣教現場に適用することができた。特に、監督制(episcopacy)という指導力を中心として組織されているメソヂスト教会の特性の中で、軍隊式制度は最も適していたのである。それ故、ハリスは自分がより典型的なメソヂスト教会の牧師であり、宣教師として成長することができたと告白することができた。以上のように、ほぼ2年間の南北戦争の経験で、彼は丈夫な体力を得ることができたが、これは後日の海外宣教を担っていく過程において、基本的な下地になった。軍隊生活が終わった彼は、北軍陸

---

93 *Ibid*, p.28.
94 *Ibid*, p.29.
95 エム、シー、ハリス, '聖職四十年(紀念說教)', 前掲書、2頁。
96 同書、2頁。

海軍軍人会（the Grand Army of the Republic)[97]の会員となり、この団体が授与する参戦バッジを受け取った[98]。

(4)宣教師としての召命と結婚

17歳に入隊し、約2年間の軍隊生活を経たハリスは故郷に戻ってきた。そして、1866年[99]に中等教育機関であるルーラル学校(Rural Seminary)[100]に入学した。ここは彼の故郷であるビルスビルから北側に約110キロメートル余り離れたハーレムスプリングス(Harlem Springs)に位置していた[101]。ハリスはここで１年間学業過程を経た[102]。ところが、この学校を設立したリー(Alfred E. Lee)は誰よりも情熱的なメソジスト(ardent Methodist)の家庭で育った[103]。そして、1866年頃にはこの学校の理事(trustees)の過半数がメソヂスト監督教会の牧師が占めるほど、メソジスト精神とその雰囲気が濃厚な学校であったと言える[104]。したがって、ルーラル学校では、メソジスト精神に非常に密接な信仰教育がカリキュラムの中

---

97 [北部連邦軍]南北戦争の北軍陸海軍軍人会(the Grand Army of the Republic、略称G. A. R.)とは南北戦争に参戦した北部連邦軍の従軍者たちを中心として1866年4月6日にイリノイ州(Illinois)で、スティーブンソン(Benjamin F. Stephenson)によって創立された団体である。これに関して、次のインターネットウェブサイトhttps://en.wikipedia.org/wiki/Grand_Army_of_the_Republicを参照。

98 後日、在朝宣教師であったノーブル(Mattie Wilcox Noble)はハリスの追悼文(Memorial Minute)で、彼がこの団体の会員だったと明らかにした。Mattie Wilcox Noble, 'Bishop Merriman C. Harris', *AMFCPEMK*, 1921, p.48 ;『ハリス』、24頁参照。

99 スズキはこれをめぐって、ハリスの入学年度を1869年だと見なす。*BMCHarris*, p.32.しかし、これは事実ではない。1869年にハリスはアルゲニー大学(Allegheny College)に入学したからである。アルゲニー大学の入学に関しては後で再び言及する。

100 ここで言及された「Rural Seminary」とは、神学校ではなく、高等学校以上の中等教育機関を意味する。一般的に、米国教育過程上に神学校(seminary)は大学教育を終了した後に進学するからである。それ故、軍隊生活を終わったばかりで、大学の学部過程も終了しなかったハリスがすぐに神学校に入学したことはない。

101 ルーラル学校とは1857年にオハイオ州のハーレムスプリングスで設立された。以降、1867年にこの教育機関はオハイオ州・ニューマーケット(New Market)に移転し、ニューマーケット大学(New Market College)として知られた。そして、持続的な発展して1877年頃、サイオ大学(Scio College)になったが、ワンスタディー大学(One Study University)と呼ばれたこともあった。以降、1911年にはマウントユニオン大学(Mount Union College)と合併した。ちなみに、この教育機関はサイオ大学という校名を使用した当時、メソヂスト監督教会(Methodist Episcopal Church)の牧師を養成する役割を担当したが、ハリスは時期的に関係ない。インターネットウェブサイト http://www.ohiohistorycentral.org/entry.php?rec=2559; http://www.ohiohistorycentral.org/w/The_One_Study_University参照。

102 ハリスの入学時期がいつなのか詳しく記録している資料はない。入学したこともプライスの著書である*Who's Who in American Methodism*とスズキの*Life of Bishop Merriman Colbert Harris: Japan's Most Beloved Caucasian American*のみに残っている。(Carl. F. Price ed., *Who's Who in American Methodism*, p.89; *BMCHarris*, pp.31-33.)但し、この学校が1867年にニューマーケット(New Market College)という地域に移転し、その年に大学として名称が変更されたことを考慮してみると、ハリスの入学は1866年頃だと推定される。そして、その後2年間、初等教育機関の教師として勤めたことを考慮すると、彼の在学期間は1年だったと考えられる。Ernest Ashton Smith, *Allegheny-A Century of Education*, p.470 ; 倉部義郎 編、前掲書、2頁参照 ;『ハリス』、24頁参照。

103 *BMCHarris*, p.32.

104 *Ibid*, p.32.

に含まれていたことを容易に推測できる。しかも、当時、メソヂスト監督教会では開拓活動が非常に活発に行われていた時期であったので、伝道が強調されていた。以上のような背景の下で、ハリスは信仰的・知的教育を受けながら成長した。

同じ時期に、彼は教育者と牧師としての活動を並行していった。1867年から約2年間、フェアビュー(Fairview)の近隣に位置する学校で教鞭をとり[105]、1868年6月には教会で説教することができる資格を取得した[106]。当時、ハリスはアダムスビル(Adamsville)などで、教会奉仕をしていた[107]。このようにメソヂスト監督教会の牧師が理事の過半数を占める、メソジスト精神が濃厚なルーラル学校でハリスは牧師の召命を少しずつ受け入れていったのである。次はこれに関するハリスの回顧である。

[私は]又傳道者となる爲に神の召命を蒙むりましたと深く信じます、生長して後それが問題となりましたが當時私は神の召を確信しました、無論私も普通の人間でありますから牧師たらんと考へました時、ドウも米國は大きな國である、新興國である、牧師とならずして社會的に働くならば大なる立出身世が出來ると思ひました、然し聖靈の微な聲を聞き、又教會を通して靈的信者を通して傳道者になれと勸められました、私は遂に聖旨に服從しました、聖旨ならば聖職に這入と立派に決心しました[108]

子どもの時代のキリスト教的な家庭環境と日曜学校の校長であったモリスから受けた影響は、軍隊時代を経て、ルーラル学校に入ってから牧師としての召命へと結実していった。もちろん、まだ宣教師になろうという具体的な決心まで発展した召命ではなく、国内で牧師の道を歩もうという考えであった。

その伝道者としての道を成し遂げるための次の選択はアラゲイニー大学(Allegheny College)であり、1869年、ペンシルバニア州クロウフォード郡ミードビルに位置したアラゲイニー大学に入学した[109]。1815年に設立したこの大学は、ハリスがこれまで経て来た他の教育機関のようにメソジスト精神で設立され、その雰囲気が濃厚な学校であった。ちなみに、彼が在学していた当時の学長はルーミス牧師(Rev. G. Loomis, D.D)で、メソヂスト監督

---

105 スミスはハリスが教師として勤めた期間を2年だと言及している。そうならば、ルーラル学校での１年間の学業を終え、翌年の1867年からアルゲニー大学に入学する1869年前まで教師として教えたと推定することができる。Ernest Ashton Smith, *Allegheny-A Century of Education*, p.470 ;『ハリス』、25頁参照。

106 スミスはハリスが説教できる資格を取得した時期を1867年と見なしている。しかし、*Gospel in All Lands*の1866年5月にハリスの生涯と関連して載った内容によると、資格取得の時期が1868年6月として記述されているので、相違がある。両方のみ比較すると、後者が時期的に先に行われており、メソヂスト監督教会の公式宣教機関誌であったことを考慮すると、より正しいと言えるだろう。'Merriman Colbert Harris', *GAL*, May, 1886, p.224; Ernest Ashton Smith, *Ibid*, p.470 ;『ハリス』、25頁参照。

107 *BMCHarris*, p.33.

108 エム、シー、ハリス、「聖職四十年(紀念說教)」、前掲書、2頁。

109 Ernest Ashton Smith, *Allegheny-A Century of Education*, p.470.

教会の中で、幅広い人脈をもっていた人物であった[110]。さらに、同年にメソヂスト監督教会のピッツバーグ年会(the Pittsburgh Conference of the Methodist Episcopal Church)に加入し、加入と同時に牧師按手を受けた[111]。この按手により、彼にとってメソジスト精神とメソヂスト監督教会は決定的に重要なアイデンティティになったのである。

ところが、ここで注目すべきはまさに当時のアラゲイニー大学が持っていた学風である。この大学は、他の大学よりも宣教に携わる先輩を多数輩出していた。1838年の卒業生であるバートン(J. A. Burton)が、翌年にアフリカ西部のリベリア(Liberia)の首都であるモンロビア(Monrovia)に派遣されて、アラゲイニー大学出身たちの海外宣教が開始された[112]。それ以降、キングスリー(C. Kingsley)監督、ソバーン(J. M. Thoburn)監督のような指導者レベルの宣教師たちが輩出され、他にもロング(A. L. Long)、ウォー(J. W. Waugh)、メスモア(J. H. Messmore)、マンセル(H. Mansell)、エッジェル(B. E. Edgell)、ハモンド(J. D. Hammond)など、この大学の卒業生たちが海外宣教地で活動していった[113]。このような大学の背景は、ハリスに強い宣教的な召命を及び起こす要因となるのに十分であった。その中でもソバーンは、ハリスが具体的に宣教師としての使命を抱くことにおいて、誰よりも大きな影響を及ぼした[114]。ソバーンは、インドを中心としてマレーシアやシンガポールやフィリピンなどの東南アジアにて活動したメソヂスト監督教会の代表的な宣教師であった。晩年にはインドの現地人に接して福音を宣べ伝えることに集中したので、別名「インドのアズベリー」(F. Asbury of India)と呼ばれるほど、宣教において強烈な活躍を残した人物であった。このような先輩たちが、しばらく本国に戻る度に、様々な場所で講演などを通して、海外宣教の重要性を強く訴えた。したがって、大学時代にハリスが以上のような先輩たちの噂を聞かなかったはずがなく、様々に影響も受けたと思われる。

同時に、ハリスが在学していた当時の学長であるルミスも、1840年代の末頃に中国広東に従軍牧師として派遣され、活動していた海外経験を持った人物であった[115]。それ故、ハリスが宣教師になろうと具体的な計画を抱いたのは、まさに先輩宣教師たちと学校の雰囲気から受けた影響が大きな部分を占めたと見ることができる。

さらに、ハリスが宣教師としての召命を確固たるものに固めることができたのは、彼を支持してくれたベスト(F. L. Best)との出会いと結婚であった。ベストは15歳になった頃のある日、深い信仰的体験をすることになった。彼女は「ふと自分の心のいたく汚れて居ること

---

110 *Ibid*, p.156.
111 『ハリス』、27頁参照。
112 Ernest Ashton Smith, *Allegheny-A Century of Education*, p.472.
113 *Ibid*, pp.466-476.
114 *BMCHarris*, pp.5-6.
115 Ernest Ashton Smith, *Allegheny-A Century of Education*, p.155.

を感じ」[116]と告白し、自分の足りない姿を振り返るようになった。そして、熱心に祈りながら、「身も靈も何もかも神様に献げやうと心の底から決心」[117]するようになったのである。これらの彼女の信仰告白は後日にアラゲイニー大学の在学中、ハリスの宣教師とにの決断を支え、共感することができる要素になったのである。すなわち、宣教という同じ目標を目指していたので、互いに支え、励ますことができる関係になったのである[118]。そのような二人は、ハリスがアラゲイニー大学を卒業した1873年、その年の10月23日に結婚することになった[119]。

このようにアラゲイニー大学卒業と結婚は宣教への志という共通点の下で行われ、ハリスが宣教師としての召命を自覚し、宣教師としての資格を具体的に取得することにおいて、大きな影響を及ぼしたと言える。

第2節：宣教活動

(1)日本の開拓宣教

ハリスと日本の開拓宣教に関しては、次のように大きく二つに分類して検討することができる。すなわち、函館を中心とした北海道の地域宣教と東京を中心とした首都圏宣教である。まず、二つの地域を区分して検討する前に、ハリスがいかに日本に派遣されるようになったのか簡単に言及してみたい。

ハリスは大学時代、宣教師になるとの決意を確固たるものにしたが、実際に彼がどこに派遣されて宣教活動をするかについては特に決められてはいなかった。もちろん、ハリスの妻であるベストは一時、中国宣教を念頭に置いたこともあった[120]。しかし、ハリスはどこに派遣されても宣教師としての任に耐える心構えができていた。そのような状況で、1873年の年会において、ペック(Jesse Truesdell Peck)監督から日本に宣教師として任命を受けることになった[121]。しかし、周囲の人々からの反対が非常に激しかった。当時、日本が西洋世界

---

116 「ハリス監督夫人」、『護教』、1905年10月7日、7頁。
117 同書, 7頁。
118 フローラ ベスト ハリス、新谷武四郎 訳、『ハリス夫人詩集』(*POEMS by Flora Best Harris*)、三塚印刷、1971、「ハリス夫人略伝」、「ハリス監督夫人」参照。
119 'Merriman Colbert Harris', *GAL*, May, 1886, p.224; 「ハリス監督夫人」、前掲書、1905年10月7日、8頁参照；F. Herron Smith, 'Bishop Harris', *KMF*, June, 1921, p.153; B. W. Billings, 'Bishop Merriman Colbert Harris – An Appreciation', *KMF*, June, 1921, p.115; Mattie Wilcox Noble, 'Bishop Merriman C. Harris', *AMFCPEMK*, 1921, p.48； ;『ハリス』、30頁参照。
120 山鹿旗之進 編、『はりす夫人』、教文館、1911、25頁参照。
121 'Merriman Colbert Harris', *GAL*, May, 1886, p.224; F. Herron Smith, 'Bishop Harris', *KMF*, June, 1921, p.153.

によく知られていなかった理由があったからである。とりわけ、日本はその時まで西洋に対して厳しい鎖国政策を維持し、1873年にキリスト教の禁教令が解除されたとしても、キリスト教に対する大きな迫害が起きた国家だったからである。したがって、宣教師として日本に派遣されるようになったハリスを周りの人々は心配した。さらに、ハリス夫婦、彼らは結婚したばかりであったが、ハリス夫婦は自分たちの宣教地が日本に決まったことが、神の御旨だと確信したので、周りの人々が引き止めるにもかかわらず、日本に渡り、宣教しようとする確固な心構えを持つことができたのである[122]。このようにして、ハリスは妻と共に1873年11月17日、日本行きの船便に乗ってロサンゼルスから日本に出発した[123]。

1ヶ月後の12月14日の午前11時、ハリス夫婦は横浜に着いた[124]。一方、日本にはハリスより先にマクレイ(R. S. Maclay)やデヴィジョン(J. C. Davision)やソパー(J. Soper)やコーレル(I. H. Corell)などのメソヂスト監督教会の同僚宣教師たちが入国し、日本の開拓宣教のため準備していた。彼らはハリスが来日する前の1873年8月8日、メソヂスト監督教会のハリス監督(Bishop W. L. Harris)がアジア地域の宣教視察でしばらく来日したきっかけを通じて、メソヂスト監督教会日本宣教連回会(the District Conference of the Japan Mission)を組織した[125]。この会議で、ハリスは北海道函館の開拓宣教師として任命された。ハリスは横浜でほぼ1ヶ月余り滞在しつつ、日本の文化と環境を学んだ後、ついに1874年1月24日に函館に到着した[126]。

函館に着いたハリスは、官庁から土地を借り、西洋式の宣教館を建て、本格的に宣教活動を開始した[127]。しかし、ハリスが妻と共に宣教に着手しようとした初期の雰囲気は、それほど楽観的ではなかった。さらに、ハリス夫婦が函館に着いたその年の夏には、ドイツ領事が23歳の日本人青年によって殺害されるという事件が発生した[128]。犯人は秋田地域の侍の末裔で、自分が天命を受け、この犯行を実行したという神道を熱烈に信じる人物であった。この事件の余波によって、北海道地方で西洋人の活動が極端に萎縮する可能性が高かった。同時に、西洋人たちは自分たちの安全のため、出かける度に必ず拳銃をはじめとする護身用の武器を所持しなければならない索漠たる雰囲気が続いた。それにもかかわらず、ハリスは

---

122 *BMCHarris*, p.36.
123 倉部義郎 編、前掲書、2頁参照。
124 *GAL*, March, 1896, p.152; 「ハリス監督夫人」、前掲書、1905年10月7日、8頁参照。
125 M. C. Harris, *Christianity in Japan*, p.45.
126 *BMCHarris*, p.38.
127 *Ibid*, p.39.
128 『はりす夫人』には7月に起きた事件で殺害されたドイツ領事の名前を日本語でハーバートと言及しているが、『日本基督教団函館教会100年史』では8月11日に起き、ドイツ領事の名前をハーバと記載している。名前の正確なアルファベット表記は記載されていない。山鹿旗之進 編、前掲書、40頁参照；倉部義郎編、前掲書、7頁；『ハリス』、33頁参照。

「日本に来ている目的が人々を救うためだ」[129]と自覚し、非武装の状態のまま人々に近づいて宣教活動に取り組みたいと表明している。

それ故、周りの状況がそれほど順境ではなかったが、ハリスはそれにもかかわらず積極的に福音を伝える宣教活動を行なっていった。初期の段階には、何よりも語学の習得に相当な時間を費やし、朝から昼までは日本語の勉強に集中し、言語による壁を克服しようと努めた。同時に、まだ日本語に十分に慣れていなかったにもかかわらず、街に出て積極的に日本人との接触を試みた[130]。そして可能な限り日本人たちを自宅に招いて共に食事をし、交流の時間を持とうとした。もちろん、初めの頃、日本人たちは単なる好奇心で訪問するだけであったが、このような好奇心は徐々にハリス夫婦が示した穏やかな態度により変化していった。そしてその過程の中で、日本人たちは西洋とキリスト教に対して持っていた排他的な先入観から徐々に解き放たれていったのである。このようなハリス夫婦の努力を通して、宣教の可視的な結果が現れ始め、何人かの人々が集い聖書勉強会が始まった。とりわけ、ハリスの妻であるベストが主導的に聖書研究組を指導し、信仰教育のために尽力した[131]。次第に人々は福音を受け入れるようになり、1874年8月ハリスによって中里方親と相沢良恂が洗礼を受けた[132]。ハリスが成し遂げた宣教活動の最初の実りだと言える。引き続き、1年後の1875年には2名の女性が、翌年にはある夫婦が洗礼を受けた[133]。特に、1876年にハリスが洗礼を授けた菊地卓平は、後日日本メソヂスト教会の牧師として成長していくことになり、ハリスの宣教活動は現地人牧師の養成にも貢献を果たしたのである。このような努力の甲斐あって、函館にメソヂスト監督教会による教会を設立することができ、1877年には礼拝堂建築のための定礎式が開かれた。ハリスの妻ベストは、日記に当時の定礎式の光景を次のように記している。

居留外人の最大數と日本人の數百名とが會合した。宛もよし港□碇泊中の合衆國の亞細亞分艦隊よりは海軍大將心得及其令夫人他に三人の兵士と多くの役員とが出席した。旗艦の巧妙なる樂隊は、聖曲を吹奏して會衆を歡ばした[134]。

この礼拝堂は、その年の11月に完工され、独特の礼拝堂が建築されたことによってハリスはより安定的な宣教活動を展開することができるようになったのである。

---

129 都伊明、「해리스감독에대하야」(ハリス監督に対して)、『神學世界』6卷5號、1921、91頁。
130 *BMCHarris*, p.40.
131 山鹿旗之進 編、前掲書、47頁参照。
132 倉部義郎 編、前掲書、7頁参照。
133 この人々の名前は蛯子リツと北原やす、そして菊地卓平であった。倉部義郎 編、前掲書、7-8頁参照。
134 山鹿旗之進 編、前掲書、51頁参照。

一方、北海道でのハリスの活動は宣教師としての活動のみに限られてはいなかった。彼は宣教師としての職務と共に、領事という公職も兼ねた。これは19世紀半ば以降、門戸を開放した日本と西洋諸国との外交関係を締結による必然的な結果であった。すなわち、外交交渉によって多くの西洋人たちが来日して来たが、押し寄せる西洋人たちに比べて外交業務に対処できる場所と外交官の数には限りがあった。また、当時は円滑でない交通と人手不足などがその要因ともなった。そのようなわけで、首都である東京あるいは開港地から遠く離れた北海道まで外交官を派遣することができなかった。この問題に対し、ハリスが適任者であった。宣教師として訪日していたにも関わらず、彼は当時に米国で大学教育まで修了したので、様々な行政業務に十分対処できる能力を持っていたからである。それ故、1875年10月29日、彼は函館地域の副領事(vice-consul)に任命されて公職も兼ねた[135]。そして、2年後の1877年1月3日に彼は副領事から領事に昇進した[136]。以上のような公職はハリス本人にとって、福音宣教の積極的な結果をもたらすようになるが、それは札幌バンドと関連しているのである。

領事の職務を兼ねていたハリスは、北海道をあまねく廻ることとなった。とりわけ、北海道の開拓使がいた札幌に往来する機会が多かった。ところが、当時の札幌は西洋の近代的な教育方針を導入するために1876年に札幌農学校が設立された。ここで、米国のアマースト大学(Amherst College)出身のクラーク(W. S. Clark)が校長として招聘され、学生たちを指導した[137]。科学者である彼は西洋の技術を伝達すると共に信仰教育にも力を注いだ。しかし、クラークは約8ヶ月後に帰国したので[138]、クラークの後任として学生たちの指導ができる誰かが必要であった。折よく、宣教師の身分として公職も兼ねていたハリスが度々札幌に往来し、彼らの信仰を指導していた。しかしハリスの居住地が函館だったので、クラークのように度々札幌農学校の学生たちと会い、信仰を指導するというのが困難なものではあったが、可能な限り彼らを訪ね信仰を励ました。このようなハリスの信仰指導によって、1877年9月には洗礼を希望する学生たちが現れた[139]。彼らは札幌農学校の1期生、15名であった[140]。

そして、1期生に続き、翌年(1878年)6月には2期生もハリスから洗礼を受けることになった[141]。とりわけ、2期生は内村鑑三、新渡戸稲造、宮部金吾など将来の日本キリスト教界に

---

135 坂田諸遠 編、『航韓必携』、6巻、外務省、1876参照。
136 *BMCHarris*, p.42.
137 Stephen Neill, *A History of Christian Missions*, London: Penguin Books, 1990, p.278.
138 *BMCHarris*, p.47.
139 *Ibid*, p.47.
140 彼らの名前は左藤昌介・大島正健・田内捨六・黒岩四方之進・渡瀬寅次郎・新川重秀・小野兼基・佐藤勇・安田某。山鹿旗之進 編、前掲書、49頁参照。
141 2期生として洗礼を受けた学生たちは太田稲造(以降、新渡戸稲造に改名)・宮部金吾・内村鑑三・藤田久

おいて、重要な礎にもなる、いわゆる札幌バンドの母体になった人物である。2期生の洗礼はハリスにとっても先の1期生よりもっと意味深いものであった。事実、厳密に言うと1期生は初期学校長であったクラークの影響が絶対的であり、ハリスは単に洗礼を授けたに過ぎなかった。しかし、2期生が洗礼を受け、メソヂスト監督教会の信徒にまで至ったことは、ハリスが示した献身と穏やかな人柄によるものであったと言える。この点に言及に、内村鑑三は次のように記している。

[1878年]12月1日
H氏ヲ通ジ「メソヂスト」監督教会ニ入会セリ。
我々の愛する宣教師、牧師H氏が再び町にあった、そして我々は彼の教派や他のいかなる教派についての賛否を吟味することなしに彼の教会に入会した。我々はただ彼が善い人であることを知っていたにすぎず、彼の教会もまた善くあるに相違ないと考えたのである[142]。

以上の言及通り、内村鑑三をはじめとする札幌農学校2期生はハリスという宣教師の人柄を見て無条件で洗礼を受け、メソヂスト監督教会の信徒になったのである。メソヂスト監督教会の信徒だった札幌バンドのメンバーたちが、後日、伝統的な体制の教会の弊害を直視し、メソヂスト監督教会を離れた後も、彼らはハリスと継続的に親密な関係を維持し、彼を尊敬し続けたのである[143]。反対にハリスもメソヂスト監督教会を離れた札幌バンドを批判したり、戒めたりせず、むしろ彼らを信仰的に励まし慰めた。このようにハリスの日本宣教は、時折メソヂスト監督教会という教派的な枠を乗り越えて実施されることもあった。

一方、ハリスは函館を中心とする北海道宣教を続けることができなかった。理由は妻の健康と出産のためであった。ベストは、元々子どもの時から健康が良好ではなかったが、それとともに妊娠していたため、先に帰国し、娘であるフロレンス(Florence Harris)を産んだ[144]。そして、ハリスも後任であるデビッドソン(W. C. Davidson)に函館の宣教を任せ、妻と娘を看るため、しばらく米国に戻った。1878年、妻の体調が回復したので、ハリスは妻と娘を連れて再び日本に向かった。しかし、長旅は免疫力の低い幼児にとって非常に致命的なものであり、結局、ハリスの娘は日本に到着の前の1878年10月17日、船上で亡くなった。横浜に着いて直ぐにハリスは娘の葬儀をし、横浜近くにある共同霊園に葬った[145]。娘の葬儀が終わり、ハリスは新しい宣教の準備をしたが、再び函館に戻ることは困難であった。その

三郎・高木玉太郎・足立元太郎・広井勇など7名であった。同書、49頁参照。
142 内村鑑三、『余は如何にして基督信徒となりし乎』(How I Became a Christian)、岩波書店、1993、40頁。
143 土肥昭夫、前掲書、66頁参照。
144 「ハリス監督夫人」、前掲書、1905年10月7日、8頁参照。
145 後日、フロレンスの遺骨は東京の青山墓園に移葬された。*BMCHarris*, p.147 ;『ハリス』、46頁参照。

理由として、すでに後任としてデビッドソンが活動しており、何よりも函館の冷たい気候が元から体の調子があまり優れない妻にとって良くなかったからである[146]。そのようなわけで、故郷であるペンシルバニアと似た気候の土地へと行く必要があったので、1879年に新たな宣教先である東京に赴任することになった。東京はメソヂスト監督教会が日本宣教を開始した当時に、横浜の次に重要な宣教地として見なされていた要衝の地であった[147]。ハリス自身の表現によれば、「他の中心地よりキリスト教を受け入れる準備が整っている」(better prepared to receive Christianity than any other center)[148]と見なされていた。しかし、再度、妻ベストの体調が悪化したため、3年後の1882年にハリスは妻を連れて帰国した後、単身再来日した。東京へと戻った彼は、日曜学校と青年教育を始めとするキリスト教教育に関心を持ちつつ宣教活動を行っていった。この宣教活動に関連して各地の教会を訪問し励ました。とりわけ、本国教会には手紙を書き、日曜学校の為の奉仕を積極的に要請した[149]。

一方、メソヂスト監督教会の日本宣教は1884年8月28日、東京、築地教会のウィリー(L. W. Wiley)監督の下で第1回日本年会が開かれ、組織改編を行うこととなった。すなわち、牧師按手と教会の安定をめぐる行政的な業務、その他宣教事業をめぐる独自政策の組立と実行ができるようになったのである。この時、ハリスは東京東部連回会(East Tokio District)の長老司として任命された。彼に与えられた東京東部連回会には、築地・常総・山形・浅草・仙台などが管轄区域として属していた[150]。東京東部連回会だが、これは山形・仙台など東北地方まで包括する広い区域であった。さらに、築地教会は、メソヂスト監督教会の日本宣教における拠点として重要な教会であった。東京東部連回会の長老司としての職務を任されることは、彼がメソヂスト監督教会の日本開拓宣教師として、同僚宣教師及び年会員たちからハリスの活躍が期待されていたことを意味する。このように東京東部連回会長老司として赴任した彼は、自身の所属をこれまで属していたピッツバーグ年会(Pittsburgh Annual Conference)から日本年会に変更した。そして、長老司としての活動をしながら、日本宣教において積極的な指導力を発揮した。

とりわけ、この時期の彼は個教会に奉仕していたわけではなく、長老司として務めていたので、日本人牧師の養成に力を注いだ。また、彼は年会で牧師の進級過程を管理・監督する

---

146 B. W. Billings, 'Bishop Merriman Colbert Harris – An Appreciation', *KMF*, June, 1921, p.115.
147 M. C. Harris, *Christianity in Japan*, pp.45-46.
148 *Ibid*, p.46.
149 'M. C. Harris' s letter to Sunday School Friends in America', July, 11th, 1882, *GAL*, November, 2nd, 1882, p.215.
150 「教師傳道師派遣所」、『日本美以美教會第一年會議記録』、1884、42-43頁；'Reports of the Presiding Elders - East Tokio District', *MJCMEC*, 1884, p.17; 'Appintments', *MJCMEC*, 1884, p.38；『ハリス』、52-53頁参照。

伝道者学科試験委員として活動したこともある。そして、日本人牧師と信徒たちの神学と信仰を増進するため、西洋キリスト教の書物である『耶蘇教奇跡論』などを日本語に翻訳したこともあった[151]。以上のような活動に基づき、彼は日本人牧師たちと信徒たちを同僚として見なし、活動する協力宣教の働きを展開した。そのような訳で、ハリスは連回会の中に優秀な日本人牧師や信徒たちがいたので、長老司としての任に堪えることができたと述べている[152]。また、自分の管轄地域に限らず、時折東京北部連回会などの他の連回会の為に、必要とあらばできる限り協力し、宣教的な領域を幅広く拡張していった[153]。その他にもメソヂスト監督教会の宣教において、伝道景況委員会(Missionary Cause)・朝鮮国伝道委員会(On Corea)・美会各派連合協議会(Central Conference)など、日本年会の中で様々な事業を兼務しつつメソヂスト監督教会日本宣教において中核的役割を担っていった。もちろん、彼が活動していた函館にも時間が許す限り訪問し、説教や講義などを行った[154]。

以上のように、ハリスの日本開拓宣教において、当時の活動は函館を中心とした北海道と東京を中心とする山形及び仙台などに至る広大な地域に展開して、行われたことが分かる。とりわけ、長老司という指導者としての任に委ねられると共に、年会内でも多様な委員会の活動を兼ね、彼は先輩宣教師として同僚と日本の教会から高く評価されたのである。

(2)在米日本人の宣教

ハリスが日本の宣教師として活動を持続することには難しかった。1886年、彼は「今年は非常に成功した年を過ごしている。これまで洗礼を受けた人のみ数えても、250名を超え、今回9月の年会までその数は350名を超えそうである。現地の兄弟たちは使徒的な情熱を持ち、一生懸命尽くしたが、この大きな成長は彼らの強い信仰のおかげである」[155]と本国教会に宣教の成功的な結果を報告しており、宣教活動の問題ではなかった。彼が何よりも本国に戻ろうと悩んでいた理由は、妻の健康が良くなかったからであった[156]。それ故、マクレイは1886年に第3回のメソヂスト監督教会日本年会で、次のように報告しなければならなかった。

---

151 クリストリープ(Theodor Christlieb)、ハリス(Merriman C. Harris) 訳、『耶蘇教奇跡論』、十字屋、1882参照。.
152 *MJCMEC*, 1884, p.18; *Ibid*, 1885, p.17.
153 *Ibid*, 1885, p.20.
154 *Ibid*, 1884, p.23.
155 'Notes and Comments', *GAL*, July, 1886, p.327.
156 Charles Volney Anthony, *Fifty years of Methodism – A History of the Methodist Episcopal Church within the bounds of the California Annual Conference from 1847 to 1897*, San Francisco: Methodist Book Concern, 1901, p.407.

ハリス牧師は昨年の9ヶ月の間、東京東部連回会の長老司として任に堪えた。彼がこの連回会で見せてくれた不屈の献身は非常に高く評価すべきで、これは話で説明しにくいほどである。この連回会の中で、行われた宣教事業の結果はほぼ全的にハリス兄弟の努力で見なしても構わない。彼は籍をサンフランシスコに移したが、その都市に居住する日本人たちを対象とするメソヂスト監督教会の宣教事業を担うためであった。[東京東部連回会は]一番素晴らしい長老司を失ってしまい、日本年会は一番有能かつ名誉ある(most efficient and honored)メンバーを一人失うようになったのである[157]。

マクレイの報告の通りに、1886年、約13年間の日本宣教を終え、帰国したハリスは7月から太平洋湾岸、すなわちカリフォルニア地域に移住した日本人たちに向けた宣教任務を付与された[158]。カリフォルニア地域における日本人宣教会の総理(Superintendent of the Japanese Mission in California)であった[159]。1880年に明治政府と米国の間に移民契約が結ばれ、多数の日本人たちが米大陸へ渡るようになったが、増加していく日本の移住民たちを信仰的に指導する必要があった[160]。ハリスがここに赴任した当時、サンフランシスコを中心とする周辺には800名ほどの日本人が居住しており、その中の112名(洗礼を受けた者70名)がメソヂスト監督教会の信徒となり、信仰生活を守っていた[161]。以上のような背景の中、ハリスは帰国して米西部地域における日本人宣教の総理として任命されたのである。米国教会と信徒たちはこのようなハリスの任地変更に関して期待と関心を持っていた[162]。このように、これまで在米日本人に対するメソヂスト監督教会の独自的な宣教活動は行われていなかった。ただ、在米中国人の宣教を担当していたギブソン(O. Gibson)博士がメソヂスト監督教会中国宣教会(the Chinese Methodist Mission)を導きながら臨時的に日本人宣教も共に担っていたのみである[163]。したがって、日本人を導く牧師が必要でああり、妻の健康問題のことで、帰国していたハリスが適任であると判断された。ハリスは順調に進んでいた13年間の日本宣教を中断して帰国しなければならなかったことを非常に悔やんでいたが、本国に戻っても日本人たちに向けた宣教を続けることができたことを彼は大いに喜び、こ

---

157 *MJCMEC*, 1886, p.24.
158 'Notes and Comments', *GAL*, March, 1886, p.139; 'Mission to the Japanese in San Francisco', *GAL*, July, 1886, p.328; 'Notes and Comments', *GAL*, August, 1886, p.376.
159 F. Herron Smith, 'Bishop Harris', *KMF*, June, 1921, p.153; B. W. Billings, 'Bishop Merriman Colbert Harris – An Appreciation', *KMF*, June, 1921, p.115.
160 白石清、『北米宣教八十五周年記念誌 - The Eighty-Fifth Anniversary of Protestant Work Among Japanese in North America』、Los Angeles：南加基督教会連盟出版部、1964、7、17頁参照。
161 M. C. Harris, 'The Japanese in California', *GAL*, August, 1886, p.379.
162 彼(ハリス)は最近にカリフォルニアの日本人宣教にて、総理として任命され、その年の夏に米国に戻る予定である。日本で彼の献身によって行われた成功的な事業は米国でも日本人のために彼の宣教事業として続くのは間違いないことだと見られる。'Merriman Colbert Harris', *GAL*, May, 1886, p.224.
163 *BMCHarris*, p.58.

れを信仰に従順であった結果であると信じた[164]。

ハリスの在米日本人への宣教は順調に行われて、その結果はサンフランシスコにて先に得られた。彼がここで入ってきたその年(1886年)9月、公式に最初の日本人教会が組織された[165]。引き続き、1893年には米国内で初めて日本人教会のために独自の教会建築を仕上げることができた。その他にも日本人たちの積極的な協力は、ハリスが太平洋湾岸の日本人宣教を効果的に行うことにおいて、大きな力となった。とりわけ、美山貫一という人物の助力と役割は絶対的であった。美山貫一はかつてここに移住し、ギブソンより洗礼を受け、キリスト者になり、その後牧師となった。ハリスがここに赴任した約2年前の1884年に、美山貫一はメソヂスト監督教会カリフォルニア年会(the California Annual Conference of the Methodist Episcopal Church)の準会員(on trial)として加入していた[166]。ハリスはここに赴任した最初の約2年間は、本人が積極的に前面にでることより、美山貫一が活発に同胞に向けた宣教をするように支える役割を担った。このように、支援する役割を担ってからこの地域の状態を調査した後、最初に独立的な空間の確保の必要性に気づくことになった。いつまでも日本人に向けた宣教活動が、中国人を対象とした宣教活動の下部組織のようであることは良くなかったからである。さらに、当時の在米日本人たちは相対的に彼らより先に米大陸に渡ってきた在米中国人たちと見えない摩擦と葛藤を経験していた。この地域を管轄していたメソヂスト監督教会カリフォルニア年会もすでにこの状況を把握した後、在米日本人の宣教が在米中国人の宣教組織から独立できるように行政的な措置を取っていた[167]。以上のようなプロセスがハリスの赴任に合わせて行われたのである。

ハリスが赴任した1886年から1892年頃まで、西部湾岸の日本人宣教はたゆまず発展を遂げた[168]。メソヂスト監督教会カリフォルニア年会員たちも、ハリスの指導の下で、発展する在米日本人の宣教に注目しはじめた。これは、日本人宣教会が既存の宣教会(Mission Society)から連回会(District)という、より大きな組織に拡大できるきっかけにもなった。すなわち、連回会で昇格される場合には、総理(superintendent)を中心として配下に各地域別の担当者を構成し、詳細でかつ効果的な宣教活動とその管理が可能だからである。そのよう

---

164 これに関するハリスの言及は次のようである。I left Japan with many regrets. The work there is charming; it is thrillingly interesting; and moves along with ever accumulating power and promise of speedy triumph. Called here by the voice of duty, I could only obey; but thankful that though here in my native land, I may continue to labor among the Japanese, to whom I solemnly dedicated my life thirteen years ago. M. C. Harris, 'The Japanese in California', *GAL*, August, 1886, p.379.

165 M. C. Harris, 'Japanese Methodist Missions on the Pacific Coast', *GAL*, June, 1897, p.258.

166 *BMCHarris*, pp.58-59.

167 *Annual Journal of the California Conference of the Methodist Episcopal Church*(以下*AJCCMEC*), 1886; *Ibid*, p.64 ;『ハリス』、63頁。

168 1887年90名に過ぎなかった信徒数が1891年には200名が超える成長を果たした。*Ibid*, pp.60-70; 白石清、前掲書、8、17頁参照。

なわけで、1893年にメソヂスト監督教会カルフォルニア年会において、日本人宣教会はハリスを総理として日本人連回会(Japanese District)へと拡大及び改編された[169]。それから数年後、日本人連回会は独自的な行政と牧師按手などができる年会(Annual Conference)に向けて準備を進めていこうとした。このため、日本人連回会の総理であったハリスは、1899年頃から日本人連回会の同僚牧師たちと共に年会員たちに訴えながら、その必要性を主張した[170]。また、ハリスは日本の教会にこれに関することを知らせ、信徒たちの積極的な祈りと支援を訴えた[171]。ついに1900年、日本人連回会はメソヂスト監督教会カルフォルニア年会で宣教年会(Annual Mission Conference)の組織が承認され、1900年9月12日に第1回太平洋日本人宣教年会(the Pacific Japanese Mission Conference of the Methodist Episcopal Church)を催すことができたのである[172]。

以上のように、米西部湾岸の日本人宣教が発展できたのは指導者として活動したハリスがいたからである。もちろん、当時米大陸に移住する日本人の数が急激に増加した故の自然な結果であったことは事実である。しかし、長期に渡る日本での暮らしを基盤に、日本語を巧みに操り彼らの文化と思考を誰よりも理解していた米国人としてのハリスの役割を高く評価することができるだろう。当時、メドシスト監督教会のマラライュー(Willard Francis Mallalieu)監督は、米西部湾岸で活動していたハリスに対して次のように高く評価した。

> メソヂスト監督教会において、サンフランシスコの日本人宣教が数年間日本で活動した経験があり、日本語を上手に操ることができるハリス牧師の下であることは特別な幸いだと言えるだろう。我が教会にはハリスとサンフランシスコにて勤めているマスターズ(F. J. Masters)牧師、二人の完全であり、素晴らしい宣教師たちがいる。彼らは賢くて経験が豊富であり、真面目かつ成功的な宣教活動を行なっている[173]。

これに加え、すでに活躍していた美山貫一をはじめとする在米日本人たちの協力は、ハリスの在米日本人への宣教を順調に行っていく上で大いに役立った。このような要素が相互に調和したので、ハリスの日本人宣教は、当初サンフランシスコを中心として行われていたが、徐々にその範囲を拡大していき、ロサンゼルス、オークランド、ポートランドなど西部湾岸のほとんどが彼の管轄区域に入った。しかも、ハワイ地域まで含まれ、地域的にも広範囲に宣教活動を行なっていった。また、日本を離れ、米大陸に渡ってきたにもかかわらず、彼は日本の教会との持続的な関係を続けようとした。ハリスは『護教』などの機関誌を通し

---

169 *Ibid*, pp.81-86.
170 *Ibid*, p.88.
171 エム、シー、ハリス、「ハリス博士の書簡」、『護教』、1900年2月3日参照。
172 *BMCHarris*, p.90.
173 'Note', *GAL*, October, 1892, p.494.

て、日本の教会に自分の宣教活動と在米日本人たちの消息を知らせ、日本の教会の信徒たちの積極的な支援と祈りを要請した[174]。時折、直接日本に渡り、日本の教会の状況を視察し、各地での説教と講演をし、日本の教会を励ましたこともあった[175]。以上のように、日本を離れた後にも日本との紐を離さず、米西部湾岸で日本人たちのために活動したハリスの宣教は日本でも高く評価された。それ故、1898年に日本政府は彼の功績を認め、5等瑞玉章(Order of Rising Sun, fifth class)という勲章を授与したのである[176]。同時に、彼が卒業したアルゲニー大学もハリスの宣教活動とその結果を高く評価し、彼が米国に戻った翌年の1887年、名誉神学博士(Doctor of Divinity)の学位を授与した。

(3)日韓の宣教監督としての宣教活動

妻の健康問題のため、1886年に帰国しなければならなかったハリスは、西部湾岸とハワイを含む広い地域を管轄し、在米日本人の宣教を中心に活動していた。そのような中、1904年5月4日から29日までカルフォルニアロスアンゼルスのハザード特設公演場(Hazard's Pavilion)にて第24回メソヂスト監督教会総会(General Conference of the Methodist Episcopal Church)が催された[177]。当時、総会では米国内の南メソヂスト監督教会及び他のメソヂスト教会との連合賛美歌集を出版するために、共同委員会の構成、南メソヂスト監督教会との様々な交流など、エキュメニカル的な要素をめぐる事業議題が論じられた。そして、監督選挙もあったが、その中でも特異点は日本と朝鮮を一括に管轄する宣教監督(Missionary Bishop)[178]をおくかどうかの問題をめぐって論じられたことである[179]。しかし

---

174 代表的にエム、シー、ハリス、「年會所感」、『護教』、1898年8月27日；エム、シー、ハリス、「布哇だより」、同書、1899年5月27日；エム、シー、ハリス、「ハリス博士の書簡」、同書、1900年2月3日；エム、シー、ハリス、「總會所感の記」、同書、1900年7月28日；エム、シー、ハリス、「ハリス博士の献策」同書、1900年8月11日；「博士ハリス師慰勞祝賀會の注意及義捐金募集案」、同書、1901年3月20日；「仙臺通信」、同書、1901年6月8日；「米澤に於けるハリス博士」、同書、1901年6月8日；「告別の辭」、同書、1901年6月15日；エム、シー、ハリス、「ハリス博士の書簡」、同書、1902年1月4日；エム、シー、ハリス、「開書」、同書、1902年11月15日；『ハリス』、66頁参照。

175 例えば、1901年5月頃、彼は日本を訪ね、約1ヶ月間滞在しながら、多くの日本人たちに会った。当時、彼らに説教と講演もした。「仙臺通信」、同書、1901年6月8日；「米澤に於けるハリス博士」、同書、1901年6月8日；「告別の辭」、同書、1901年6月15日；『ハリス』、67頁参照。

176 Mattie Wilcox Noble, 'Bishop Merriman C. Harris', *AMFCPEM*, 1921, p.48; *BMCHarris*, p.2.

177 *Journal of the Twenty-Fourth Delegated General Conference of the Methodist Episcopal Church*(以下*JGCMEC*), 1904, p.1, 161.

178 宣教監督(Missionary Bishop)とは、メソヂスト監督教会で特別な海外地域のため、選出される(elected)監督である。選出された監督は海外の宣教現場で監督として活動できたが、宣教監督の職務はその地域に限られた。以上のような独特なタイプ(distinct type)の監督はメソヂスト監督教会の時代まで続いていたが、南メソヂスト監督教会と合同する1939年以降、新しい教会法を制定し、宣教監督をめぐる条項(provision)が無くなった。"Missionary Bishops", *Encyclopedia of World Methodism Vol.2*, 1974, pp.1632-1633；『ハリス』、6頁参照。

179 *JGCMEC*, 1904, p.183.

ながら、この論議がメソヂスト監督教会総会で行われた根本的な背景は、まさに日本の教会の要請から始まった。2ヶ月前である3月25日から29日までの5日間にかけ、東京の九段美以教会にて催された第1回日本メソヂスト教会中央議会[180]に遡る。会議2日目の26日、第3会期でシュワルツ(H. B. Schwartz)に代わって、小方仙之助がメソヂスト監督教会の監督問題に関する内容が含まれた文章を発表した[181]。会議の参加者たちは慎重に論議な議論の末、2ヶ月後に開催されるメソヂスト監督教会総会に日本と朝鮮両国を管轄する宣教監督が派遣されるように請願書を提出しかつ決議した[182]。

以上のような背景の下で、メソヂスト監督教会総会では日本に関連する議題として宣教監督の選出を論議するようになったのである。結局、このような日本の教会からの要請はメソヂスト監督教会監督委員会(the Committee on Episcopacy)に回付され[183]、無記名投票(ballot)によって、日韓両国を統括する宣教監督を選出することにした[184]。選挙の結果、ハリスは全体の投票者647名の内、515名からの支持を獲得し、全体の得票数の内、3分の2以上の票を得なければならない当時の規定に従って、日韓両国の宣教監督として選出されたのである[185]。長い期間、日本を離れていた彼が日韓両国の宣教監督として多数の支持を得ることができたのは、日本の開拓宣教師として豊富な経験と米国内の日本人を中心に行なってきた宣教活動をめぐって、肯定的な結果をもたらした成果であった。

この任命によって、彼は1904年12月21日、先ず日本に到着した[186]。再び東アジアに戻ったハリスに対して、日韓両国の信徒は多くの期待を抱くほど、彼に与えられた期待と課題もかなり大きなものであった。以下はそれをめぐるハリスの言及である。

私が[日韓宣教監督としての]任務を担って入ってきた時、ここは日露戦争で非常に激しい状況であった。人々は自らの人生と所有する全てを国家という神聖な組織に捧げていた。1年半の間、彼らは完全にこの戦いに没頭していた。戦争初期にも各宗教の代表者たちは東京で会合し、論点をめぐって皆が満場一致の結論に至った。メソヂスト監督教会の代表として参加した者は、当時日本を統括していたムーア(Bishop Moore)であった。これらの合意は世界で宣言され、非常に肯定的な影響(happy effect)をもたらした。キリスト教に関するすべての誤解は完全に除去された[187]。

---

180 日本のメソヂスト監督教会中央議会とは両年会(日本年会・南部年会)から委託された教育出版及び他の事業を管理するための目的で設置された。『日本美以教會中央議會第一回記録』、1904、メソヂスト監督教會日本中央宣教會第一回順序参照。
181 同書、6頁参照。
182 同書、6-7頁参照。
183 *JGCMEC*, 1904, p.200.
184 *Ibid*, p.353.
185 *Ibid*, p.624.
186 山田寅之助、「監督ハリス」、『護教』、1905年1月28日参照。
187 M. C. Harris, *Four Years in Japan and Korea – The Quadrennial Report of the Missionary Bishop for Japan and Korea to the General Conference of 1908*(以下*QRHarris 1908*), New York: Board of

彼が日韓の宣教監督として東アジアに赴任した時は、日露戦争によって、非常に混乱した時期であり、戦争による心の傷を癒し、教会組織を改めて再整備しなければならない課題を担っていたのである。それほどハリスに与えられた負担が大きかったと推測することができる。

先述のように、ハリスは日本と朝鮮両国を同時に管轄する宣教監督だったので、両国での活動を区分して調べる必要がある。まず、監督として、日本で行われてきた彼の役割と活動について考察しよう。当時、米国から船舶を介して東アジアに入るためにはサンフランシスコ、ハワイ、日本、朝鮮、中国という通常の航路が造成されていたので、自然と彼は先に日本へ入るしかなかった。したがって彼は、米西海岸の日本人宣教活動をまとめてから1904年末に米国を離れて日本に入ってきた。日本の場合、1884年にはすでに日本年会が組織されていたが、20年を超える期間中、一人の駐在監督も置かない状況であった。そのようなわけで、ハリスにかける期待は相当なものであった。ある日本人はハリスが赴任することを聴き、「ハリス総理日本朝鮮の監督に任ぜられ近々御来朝の由、小生は独り日本の為のみならず大に観光の為に悦び居り侯」[188]と言及する程にハリスに対する期待が相当なものであった。

ハリスは来日するとともに各地域で備えられた歓迎会に参加したので、非常に忙しい時間を過ごした[189]。日本の天皇と明治政府も彼の入国を歓迎し、彼に3等瑞玉章という勲章を授与した[190]。明治政府の立場ではこれまで日本人のために尽力した彼の功績を称え、これからの活動を期待する勲章授与だったと言えるだろう。しかし、彼が目指したのは、何よりも監督としての活動に力を注ぐことであった。そして、根本的に目指していたのはまさに福音伝道と神の国を築き上げることであった。彼は日本に着き、日本における各メソヂスト教会(メソヂスト監督教会・南メソヂスト監督教会・カナダメソヂスト教会)の共同機関誌であった『護教』に、「今更に改めて申上ぐるまでも無之侯へども、日本と云ひ朝鮮といひ、益々傳道擴張の好時機に向ひたること存侯、不肖の老生元より其任に當らず侯へども、天父の御裕道と諸同情とにより、殘軀を献げて天國建設の爲め大に舊勵致度覺悟に御座侯何卒諸兄姉におても協心同力、此の千載得難きの好機を空しく逸せざるやう、御盡瘁下されたく呉々

Foreign Missions of the Methodist Episcopal Church, 1908, p.3.

188 「韓国釜山だより」、『護教』、1904年10月15日；小川圭治・池明観 編、『日韓キリスト教関係史資料』、新教出版社、1984、83頁；『ハリス』、77頁。

189 S. Ogata, 'Nagoya District', *MJCMEC*, 1905, p.49; 小方仙之助、「名古屋連回報告」、『美以教會第廿二回日本年會記録』、1905、54頁；平岩愃保、「ハリス博士を歓迎す」、『護教』、1905年1月21日；「第三高等學校演說會」、『基督教世界』、1905年3月16日；「歓迎懇談會」、同書、1905年3月16日；「ハリス博士歓迎晩餐會」、同書、1905年3月16日；「青年會館に於ける歓迎演說會」、同書、1905年3月16日など参照。

190 『護教』、1905年1月28日参照。

も祈上候」[191]と赴任の心構えを表明している。

それ故、18年間という長い期間に日本を離れていたので、先ず監督として各地域の教会を訪れて教会の状況を視察することが重要であった。特に彼は日本の教会の信徒たちの霊的な状況を確認し、彼らを奨励するために、各地域の隅々に至るまで訪問を続けた[192]。また、それに加え、教会の財政状況を確認し、これに関連して指示できる行政的、財政的支援に努めた。そして礼拝堂建築の困難に直面している教会が財政的な限界を克服し、建築を仕上げることができた場合もあった[193]。これに加え、年会(Annual Conference)を主宰することも彼が担うべき重要な役割の一つであった。当時の日本のメソヂスト監督教会は東京を中心とする日本年会(the Japan Annual Conferecne)と九州地方を中心とする南部年会(the South Japan Annual Conference)など、2つの年会で組織されていた。この2箇所の年会は距離的に離れていたにもかかわらず、ハリスは監督として毎年同じ時期に催される年会を直接統括するため、長距離の旅もいとわなかった[194]。

また、ハリスは監督として、1907年のメソヂスト監督教会、南メソヂスト監督教会、カナダメソヂスト教会の三つの教派が合同して日本メソヂスト教会を設立することにおいて、重要な役割を担ったのである[195]。もちろん、当時の米国とカナダの三つの教会から各々二人ずつ合同に関する行政処理と管理のため、全権委員(commissioners) が共に参加していたので、これと関連してハリスに具体的に付与された任務があったわけではなかった。しかし、メソヂスト監督教会で日本と朝鮮を管轄するため、直接派遣された宣教監督として、特に本国の教会(メソヂスト監督教会)と日本の教会(日本のメソヂスト監督教会)双方が円滑に意志疎通を行えるように、彼は架け橋的役割を引き受けた。つまり、彼は日本メソヂスト教会が成立する前からずっとメソヂスト監督教会側の全権委員たちと十分に話し合い、日本内の他教派との交流が順調に行われるように協力していたのである[196]。

---

191 エム、シー、ハリス、「我が教會の諸兄姉に申上候」、同書、1905年1月14日。

192 彼が赴任した1905年、年会録の各連回会長老司たちの報告によると、ハリスが赴任したその年に各地域を見回し、宣教状況を把握した事実が記されている。M. Yamaka, 'Aomori District', *MJCMEC*, 1905, p.39；山鹿元次郎、「青森連回報告」、『美以教會第廿二回日本年會記録』、1905、45頁参照；Charles S. Davison, 'Sendai District', *MJCMEC*, 1905, p.52; シー、エス、デビソン、「仙臺連回報告」、同書、1905、57頁参照；K. Ishizaka, 'Tokyo and Shinano Districts', *Ibid*, 1905, p.55; 石坂龜治、「東京信濃連回報告」、同書、1905、59頁参照；Julius Soper, 'Tokyo-Yokohama District', *Ibid*, 1905, p.58；ジユリアス、ソーバル、「東京横浜連回報告」、同書、1905、62頁参照。

193 C. W. Huett, 'Hokkaido District', *Ibid*, 1905, p.43；シ、ダブルユ、ヒユーツト、「北海道連回報告」、『美以教會第廿二回日本年會記録』、1905、49頁参照；Charles S. Davison, 'Sendai District', *Ibid*, 1905, pp.51-52；シー、エス、デビソン、「仙臺連回報告」、同書、1905、57頁参照。

194 *Ibid*, 1905, p.1, 6；同書、1905、1、7頁参照。

195 1907年、日本メソヂスト教会の合同と成立をめぐるハリスの評価と展望は彼が1908年メソヂスト監督教会総会に提出した報告書に詳しく記されている。M. C. Harris, *QRHarris 1908*, pp.4-5.

196 これをめぐって、日本メソヂスト教会第1回総会では合同と関連して全権委員たちとハリスの間に取り交わした書簡が会議場で公開的に報告されかつ日文で添付された。そして、合同以降に出版された*the*

また、日本メソヂスト教会の成立を祝うため、総会で参加した来賓たちを迎える歓迎会が別に用意されていたが、その際に、これらのあらゆる順序と進行の責任がハリスに任せられていた[197]。それほど日本の教会において、ハリスという人物の象徴的な重みは相当なものであった。したがって、これまで日本の教会と日本人のために献身したハリスへ総会が感謝の意を表明したいとするのは当然のことであると思われる。結局、総会の9日目の6月3日に総会は、ハリスに対する次のような感謝の決議案を朗読された。

日本メソヂスト教會第一總會員一同は美以教會派遣日本及朝鮮宣教監督エム、シー、ハリス氏の高□なる人格と價値ある勤勞に對し衷心敬意を表し之を記録に留めんことを切望すハリス監督が日本帝國と日本國民の福祉に關する全心全靈の功勞に對しては我天皇陛下の敍勳によりて之を知るを得べし又我合同したる教會を設立せんが爲め同監督が自己の職務上に聯關する關係の如何に係はらず熱心之を唱導せられたるは本員等の感佩措く能はざる所なり本員等と協心して希望したる新教會は今や日本監督の管理の下に新たなる歴史を始めんとするに當りハリス監督に對する本員等の敬愛の精神を發表し而して日本メソヂスト教會は同教會の有力なる同情と又其事業に於て滿腔の協力を希望して止まざるものなり[198]

特筆すべき点は、この決議案に署名した人の中には彼の所属教会であるメソヂスト監督教会側だけではなく、南メソヂスト監督教会とカナダのメソヂスト教会側の会員も一緒に含まれていたという事実である[199]。それほど、彼は教派を問わず、皆から認められていたのである。他にも、日本メソヂスト教会 第1回総会の閉会祝祷をハリスが担当するようになったのもこれを証明する事実だと言えるだろう[200]。

一方、三つの教派の合同によって、日本メソヂスト教会が組織されたので、メソヂスト監督教会から日本の宣教監督として派遣されて活動していたハリスの身分にも変化が生じた。つまり、日本の教会がメソヂスト教会の最上位の組織である総会(General Conference)を独自に構成するようになったので、厳密にいえば、ハリスの役割はそのことで終えたと言えるだろう。しかし、総会は彼の存在を尊重し、日本メソヂスト教会の名誉監督(bishop

---

*Doctrines and Discipline of the Methodist Church of Japan 1907 with Appendix*にはその全文が英文そのまま掲載された。『日本メソヂスト教會第壹總會議事録』、1907、48、106-110頁。W. R. Lambuth ed., *the Doctrines and Discipline of the Methodist Church of Japan 1907 with Appendix*, Tokyo: Methodist Publishing House, 1907, pp.255-259.

197 同書、1907、47-48、50-51頁参照。

198 同書、63-64頁。

199 当時、この決議案に署名した名簿は次のようである。メソヂスト監督教会側：笹森宇一郎・古坂啓之助・小方仙之助・ソーパー(J. Soper)・デイヴィソン(J. C. Davison)、南メソヂスト監督教会側：吉岡美國・鵜崎庚午郎・西村靜一郎・ウォーターズ(B. W. Waters)、カナダメソヂスト教会：平岩愃保・高木正義・太田虎吉・コーツ(H. H. Coates)。同書、64頁参照。

200 同書、94頁参照。

emeritus)として推戴しかつ持続的な関係を続けていくことを決定した[201]。独特な点は、この提案がメソヂスト監督教会側から出てきたのではなく、日本カナダメソヂスト教会側の牧師である平岩愃保から言及されたことである。このように彼はメソヂスト監督教会側を越えて南メソヂスト監督教会、カナダメソヂスト教会側でも高く評価されていた。また、本国教会でも日本メソヂスト教会の名誉監督として推戴された事実を非常に肯定的に評価したのである[202]。

一方、日本メソヂスト教会内で彼の存在感と象徴性には利用価値があった。もちろん、日本メソヂスト教会の名誉監督として推戴され、以前のように年会主宰や事務処理などの公式的な活動と役割は相対的に減ったことは事実である。しかし、メソヂスト監督教会の日韓宣教監督として日本に残っているメソヂスト監督教会側の財産及び人事関連の業務は、彼が継続して責任を負っていた。そして、彼は可能な限り日本メソヂスト教会総会が催される度に参加し、日本の教会との交流を続けていった[203]。ここに日本メソヂスト教会は、毎回総会においてハリスに対する感謝の決議文を表した。次は、1911年の第2回日本メソヂスト教会総会で採択された決議案である。

監督エム、シー、ハリス博士に對する感謝決議案

本總會はメソヂスト監督教會の代表者監督ハリス博士を歡迎するを光榮とす本總會は監督の代表せらる教會が日本教化の爲め興へたる過去の援助を感謝し尚將來に於て東洋傳道のため特に日本傳道のため協同以て布教に従事し神國擴張事業を繼續せらるを悦ぶ而して本教會は監督に依りて吾人の感謝及敬意を母教會に傳達せられんことを切望す右決議す[204]

さらに、1915年の第3回日本メソヂスト教会総会では、高木壬太郎ら多数の提案によって、メソヂスト監督教会総会へハリスの日本及び朝鮮における宣教監督の任期を延長するように要請する次のような決議案が提出された。

ハリス監督に關する決議案

本總會は米國メソヂスト監督教會監督ハリス博士が日本政府及び民間有力者の間に有する勢力と我國基督教徒の間に有する名望とに就て、日本教化の爲め及び我日本メソヂスト教會發達の爲め過去に於て興へられたる功勞に對し、謹で感謝の意を表す。且本總會は現時東洋に於ける政治上の狀態に於るメソヂスト教會監督として繼續せられん事を希望するの意を表す。然れどもハリス監督にして若し監督職を辭退せら

---

201 同書、89頁。
202 M. C. Harris, *QRHarris 1908*, p.5.
203 『日本メソヂスト教會第貳回總會議事録』、1911、41、55頁参照；『日本メソヂスト教會第參回總會議事要録』、1915、50頁参照。
204 同書、1911、57頁；同書、1915、52頁。

れ又之を承認するが如き場合あらば、本總會は同監督が退隱監督及日本メソヂスト教會名譽監督として日本に留り、長く其有する勢力と名望とに由り我國教化の爲め及び我メソヂスト教會發達の爲め盡されん事を切に懇願するの意を表す。(高木壬太郎氏外數名提出)右を米國母教會に送られん事を決議す。(石坂龜治氏提出)[205]

このように日本メソヂスト教会総会が開催される度に彼に関する決議案が毎回採択された。日本国内で彼の存在感は無視できないほど影響力があったことは事実である。このように宣教監督として赴任し、日本で行われてきた彼の活動を評価すれば、彼は各地域の教会と信徒たちの事情を視察しかつ米国の教会と日本の教会の関係が柔軟に繋がり、疎通できるように中間的役割を担ってきたと見ることができる。

日本と共に朝鮮でも宣教監督としての就任は大きな期待を持つこととなった。先に日本メソヂスト教会の機関誌である『護教』でハリスは、宣教監督として就任した自分の抱負を明らかにしたように、彼は朝鮮でも日本と同じように伝道の拡張に良い時期であると考え、神の国を築くための目標を持って活動した。そのために、彼が重点的に行っていた宣教活動の一つは、まさに朝鮮米監理会の行政的な組織を整備し、継続的に拡張させていくことであった。すなわち、彼が日韓宣教監督として選出され、韓半島に入ってきた1905年当時は朝鮮での宣教が開始されて以降20年が過ぎ、8000人近い信徒数に成長したにもかかわらず、未だ朝鮮メソヂスト監督教会が独自の年会(Annual Conference)すら組織していない状況であった。そのようなわけで、朝鮮宣教会(Korea Mission)に停まっていた朝鮮メソヂスト監督教会の行政組織を年会水準にまで拡張する必要があった。その結果、韓半島に入った直後の宣教監督として彼が成し遂げたことは朝鮮メソヂスト監督教会宣教年会(Annual Mission Conference of the Methodist Episcopal Church)を組織したことであった[206]。たとえ、正式な年会(Annual Conference)ではなく准年会のような形態の年会であったが、それにもかかわらず朝鮮の教会なりの独自の行政と政策を樹立することができるようになった。そして3年後の1908年にハリスは朝鮮メソヂスト監督教会の行政組織をさらに改善させる結果を作りあげた。すなわち、宣教年会から正式に年会として昇格させたのである[207]。もちろん、宣教監督としてのハリスはこのあらゆる過程を統括し、会議の議長として導いていった。朝鮮の教会が成長しかつ発展した理由もあったが、その中にはハリスという朝鮮担当の監督がいたので、十分にできたことだと言えるだろう。

---

[205] 同書、1915、49頁。
[206] *Official Minutes of the Korea Mission Conference of the Methodist Episcopal Church*(以下*OMKMC*), 1905, p.11-22; 'the M. E. Mission Conference', *KM*, August, 1905, p.129.
[207] *Official Journal Minutes of the Korea Annual Conference of the Methodist Episcopal Church*(以下*OKAC*), 1908, pp.18-19; 'Notes', *KMF*, March, 1908, p.40.

以上のように、朝鮮メソヂスト監督教会が独自の年会を組織するようになり、これまで主に日本の東京に居住していたハリスの居住地が朝鮮京城へ変わるようになった[208]。これは在朝宣教師の積極的な要求[209]に加え1907年、日本メソヂスト教会の成立によって、日本内でハリスの役割が以前とは同じではなかったからである。もちろん、日本の教会側ではこれからもハリスが東京に居住することを望み、メソヂスト監督教会総会に請願するための決議文まで作成したが[210]、全般的な状況と都合上、彼は主な居住地を朝鮮へ移さざるを得なかった。その他にも彼は教会行政及び組織をめぐって、メソヂスト監督教会の朝鮮宣教25周年記念運動(Korea Quarter-Centennial Movement, Board of Foreign Missions of the Methodist Episcopal Church)にの副委員長（Vice-President）として活動し、米国教会の関心を呼び起こして朝鮮宣教のための募金活動にも積極的に乗り出した[211]。

一方、朝鮮の教会の行政を整備し、発展させた活動に加え、彼が朝鮮で行なった主な宣教活動の一つは日本での宣教と同様に各地域の巡回訪問活動であった。これは管轄監督として当然担うべき任務であった。但し、日本との違いをあげるならば、朝鮮での巡回は各地域の隅々を訪問、視察する微視的な巡回というより地方会(district)レベルの行事や地域の拠点教会あるいはキリスト教機関を中心に見回るマクロ的な性格が濃かった。現在、残っている資料を通じてハリスが来韓直後、約1ヶ月の間に巡回及び訪問したところは貞洞第一教会(the First Church)や尚洞教会(Mead Memorial Church)など朝鮮メソヂスト監督教会の代表的な教会であったことが分かる[212]。そして、当時朝鮮メソヂスト監督教会の代表的な機関誌である「キリスト会報」(Korean Christian Advocate)によると、1910年初頭にハリスの朝鮮におけるキリスト教関係機関の訪問記事が出てくる。この時、彼が巡回しながら活動した場所を具体的に調べてみると、公州永明学校の卒業式演説、京城英国聖書協会の定礎式開会祈祷と落成式祝辞、貞洞第一教会で催された協成神学校の第1回卒業式祝辞、原州地方会へ参加、アッペンツェラー(H. G. Appenzeller)記念会の司会、尚洞教会の礼拝説教、平壌

---

[208] いわゆる、1世代の韓国キリスト教史学者と言われる白樂濬は「ハリス監督は朝鮮メソヂスト監督教会において、監督駐在地を最後まで朝鮮に決めなかった」と主張した。白樂濬、前掲書、406頁参照。しかし、これは事実ではない。日本が朝鮮に居住した外国人を監視するため、1912年に調査・記録した「朝鮮在留欧米人名簿」(Directory of Foreign Residents in Chosun)によると、ハリスの名前と「京城府西部貞洞」という居住地、そして「宣教師」という職業などが明らかに記されている。「朝鮮在留欧米人名簿」(Directory of Foreign Residents in Chosun)、『朝鮮在留欧米人調査録1907-1942』、ソウル：永信アカデミー韓国学研究所、1981、96-97頁参照。

[209] *OKAC*, 1908, p.22.

[210] 「建議案」、『日本メソヂスト教會第壹回東部年會記録』、1908、117頁参照。

[211] 'Notes and Personals', *KMF*, January, 1910, p.3; 'The Korea Quarter-Centennial Report', *ARMEC*, 1910, p.185; the Board of Foreign Missions of the Methodist Episcopal Church ed., *Quarter-Centennial Jubilee of Korean Missions*, New York: Board of Foreign Missions of the Methodist Episcopal Church, Korea Quarter-Centennial Commission, 1910, p.1; エム、シー、ハリス、「英米所見」、『護教』、1911年4月1日参照。

[212] *The Korea Methodist*(以下*KM*), April, 1905, p.76.

南山峴協会で催された平壌地方会の演説、鎭濫浦碑石洞教会の定礎式司会及び説教、京城梨泰院教会の奉献式司式など、ある程度規模が大きく比較的重要な性格を持つ場所だということが分かる[213]。

このように、朝鮮でハリスが一般信徒たちと直接接することができる機会はあまり多くなかったことが容易に推測することができる。接することができたとしても、教会及びキリスト教の関連機関が主催する行事でしばらくの間会うことができただけである。しかし、それもハリスが伝えた説教や祈りや司会などの行事の中で行われる一方的な出会いだと言える。あるいはハリスの韓国語が上手ではなかったので、宣教師と信徒を介して行われる間接的な意志疎通と対話に留まるだけであった。このように朝鮮では日本とは異なり、米国人の宣教監督と一般信徒との隙間がかなり広がっていた。

ところが、これに加えハリスの朝鮮宣教において注目すべき点は彼が在韓日本人教会にも大きな関心を持って活動したという点である。このような彼の関心と活動が1911年8月26日の日本メソヂスト教会の機関誌である『護教』に次のように明らかに表れている。

目下朝鮮には多数の日本人が居る、而して其の人口益々増加する勢である、朝鮮へ移住するには政府の制限があつて厳しく、正当の目的があり資産を有する者でなければ朝鮮に移住することは出来ない。日鮮人は友隣の好み厚く又実際に結婚して居る、朝鮮に在る日本人は実業を営むに忙しく農耕を励むで居る、菅吏軍人は申す迄もなく学校教師も随分多く入込み日本人の為に学校を経営して居る、要之日本移民は甚だ有望である。それから日本人の社会には必ず基督信者がある、而して其信者は能く地方で光を輝かして居る、朝鮮では南北美以派と長老派教会とが妥協して地理的に伝道の範囲を定めた、美以派の範囲内に居る日本の布教は美以派が当つて居る、たとへば黄州の日本人二千人中には長老派教会の信者もあるが皆メソヂストにたることを喜で一の教会を造つて居る、朝鮮に在る日本人間には宗派の異同を伝ふもの杯は無いやうである。目下京城部長木原外七氏は専ら美以派の区域内を巡廻して居る、併し乍ら木原氏一人では足りない、氏の外に日本人伝道に当る為め日本語に通じた外国宣教師の一家族と婦人伝道者を監督する婦人宣教師が一名位要る、而して適任者があれば朝鮮に永住してもらいたいと思ふて居る、私は昨今朝鮮伝道の外に何をも念ふ余裕が無い、朝鮮に来て日本人間の伝道に従事せんとする宣教師があればメソヂスト三派の何れを問はず私は之を歓迎する[214]

このように彼は朝鮮に入って活動する時にも可能な限り在韓日本人に向けて関心を払っ

---

213 「永明学校卒業進級式」、『キリスト会報』、1911年6月30日；「捜聞更起」，同書、1911年7月15日；「聖書協会定礎式」、同書、1911年7月15日；「神学卒業式」、同書、1911年12月30日；「聖書協会落成」、同書、1912年2月15日；「原州通信一属」、同書、1912年2月29日；「アッペンツェラー牧師記念会」、同書、1912年3月15日；「ハリス監督入城」、同書、1913年3月8日；「平壌地方会」、同書、1913年6月23日；「鎭濫浦碑石洞礼拝堂の定礎式 」、同書、1913年10月6日；「梨泰院教堂奉献式」、同書、1913年12月1日；『ハリス』、120頁。

214 「ハリス監督朝鮮談」、『護教』、1911年8月26日、小川圭治・池明観 編、前掲書、389頁。

ていた。逆に、日本内に居住する朝鮮人に対しては宣教的にあまり大きな関心を持っていなかった。その他にも彼は伊藤博文など朝鮮内の主な日本人指導者たちと親密な関係を継続しかつ朝鮮総督府(統監府)の政策にも最大限協力する姿を見せた[215]。これはハリスの親日的な宣教活動の性格を示す一つの例だと見ることができる。

(4)引退以降の宣教

ハリスは1916年に引退した。70歳になる年であった。彼は1916年3月8日から14日まで貞洞第一教会にて催された第9回メソヂスト監督教会朝鮮年会を主催したが、閉会日である14日に年会員の前で告別の辞を述べ、朝鮮での公式的な活動を終えた[216]。それから東京へ着いた彼は3月24日、外交関係者をはじめ日本帝国政府の官僚、金融関係者(bankers)、商工業者、教界関係者など、百数十名の参加者と共に送別会を持ったが、この際に当時の外務大臣である石井菊次郎を通して日本帝国から2等瑞玉章(Order of Rising Sun, Second class)を授与された[217]。このように、朝鮮と日本での送別会が終わった後、帰国した彼は同年5月にニューヨーク、サラトガ(Saratoga)にて催されたメソヂスト監督教会総会での最後に日本及び朝鮮をめぐる宣教事業について報告した[218]。彼は総会に出席する以外にも各年会を巡回し、日本と朝鮮の宣教状況を報告しかつ米国教会の信徒たちの関心を盛り上げようとした。ところが、米国でのすべての日程を終えた彼は再び東洋に戻ろうとした[219]。そして、自分の生涯を日本で全うすることを公然と明らかにした。たとえ、宣教監督職から引退し、メソヂスト監督教会の公式な宣教師としての身分で活動することはできないとしても、妻と娘が葬られている日本を忘れることができなかったのである。こうして、彼は後任として日本及び朝鮮の統括監督として選出されたウェルチ(H. Welch)と共に東洋に戻ってきた。

引退後、東洋に戻ってきた彼はしばらく間、後任であるウェルチと共に日本と朝鮮の教会を訪問した。これは日本と朝鮮に対する背景と知識がそれほど深くなく、さらに宣教の経験が皆無であった後任者ウェルチのための引継ぎであったと見れる。それ故、序盤には日本と朝鮮での諸歓迎会と会議ごとにハリスはウェルチと共に参加しかつウェルチが統括監督と

---

215 『朝鮮の統治と基督教』、京城：朝鮮総督府、1923、6頁参照。
216 M. C. Harris, 'Farewell Words of Bishop Harris', *OKAC*, 1916, p.2.
217 *New York Christian Advocate*, May, 12th, p.610; Mrs. J. Victor Martin, 'A Japanese Estimate of Bishop Harris', *Northwestern Christian Advocate*, June, 14th, 1916, p.584; R. B. Eleazer, 'A Handful of Facts about Japan', *MV*, January, 1918, p.15.
218 M. C. Harris, *Quadrennial Report of Bishop M. C. Harris of the Methodist Episcopal Church for Korea and Japan 1912-1916*(以下*QRHarris 1916*), n.p., 1916; 河理斯、『河理斯監督の日本教会と朝鮮教会に対する報単』、n.p.、1916参照。
219 'Personal', *The Christian Advocate*(以下*CA*), September, 28, 1916.

して宣教状況をなるべく早く把握できるように大きな助けを与えた[220]。ある程度引継ぎが終わった後、ハリスは前から決心したように日本に居住を決めた。彼の居住地は東京青山学院の敷地の中にあった。これは日本人たちが引退したハリスのために、用意したところであった[221]。また、ここは妻と娘が葬られている青山霊園ともあまり遠くないところであった。

その後も彼は可能な限り日本の教会の公式的な場、例えば4年ごとに開かれる日本メソヂスト教会の最高議決機構である総会(General Conference)などに参加し、日本の教会の指導者との継続的な交流を交わした[222]。もちろん、彼は引退した身分だったので、正式に日本メソヂスト教会や他のキリスト教の関連機関から引き受ける肩書や役割などはなかった。しかし、日本の教会内で彼が持っていた存在感が相当なものであったので、それ自体が大きな象徴性を持っていたと言うことができる。また、朝鮮の教会との関係も完全に断絶されたわけではなく、交流が続いた。もちろん、日本の教会と比較すると、その頻度は比較的に低かったが、時折朝鮮の教会と交流し、より幅広い宣教的な領域を見せたこともある[223]。

一方、1919年には一時米国を訪問することになったが、その年の秋、彼は本妻フローラ・ベストの従妹であるエリザベス・ベスト(E. Best)と再婚した[224]。そして翌年(1920年)の春に彼女と一緒に日本へ戻り、既存の私宅である青山学院キャンパス内に居住しながら、余生を過ごした。そんな中、1921年3月にハリスは軽い脳卒中で苦労したが、ここで動脈硬化によって一週間以上を病床で過ごすしかなかった。その他にも肺炎もあり、急激な体力低下によって意識を失ってしまった。結局、1921年5月8日の午後6時に彼は青山学院内の私宅で息を引き取った[225]。彼の葬儀は11日午後2時、青山学院チャペルにて日本帝国の政府官僚、宣教師、日本の教会の関係者たちが集った中、日本メソヂスト教会の3代監督である鵜崎庚午郎の司式で行われた[226]。ハリスの墓は青山学院からあまり遠くない青山霊園であり、彼の最初の妻フローラ・ベストと娘フロレンスの隣に埋葬された。

---

[220] 後日、ウェルチは自分の自伝を通して、当時ハリスの人間味に感謝の気持ちを持っていたと記録した。Herbert Welch, *As I Recall My Past Century*, Nashville, Abingdon Press, 1962, p.78.

[221] William Burt, 'A Tour of Duty in the Orient', *CA*, June, 27, 1918; 'Bishop Harris', *ARMEC*, 1921, p.241.

[222] 『日本メソヂスト教會第四回總會議事録』、1919、59頁参照。

[223] 引退以降、朝鮮をめぐる足跡はMillie M. Albertson, 'The Louise C. Rothweiler Bible Training School', *The Minutes of the Korea Woman's Conference of the Methodist Episcopal Church*(以下*KWC*), 1917, p.30; Mary S. Stewart, Elizabeth S. Roberts, 'Medical Work at East Gate Hospital, Seoul', *KWC*, 1917, p.86; Millie M. Albertson, 'Woman's Bible Training School', *KWC*, 1918, p.18; 'Japanese Christians Condemn Military Policy in Korea', *CA*, August, 14th, 1919 ;『ハリス』、128頁参照。

[224] *A Tribute, Read before the Los Angeles Methodist Preachers' Meeting on June 6, 1921 to Bishop M. C. Harris, D. D., L. L. D., by Julius Soper*, D. D., p.9.

[225] Edwin T. Iglehart, 'The Passing of Bishop Harris', *CA*, June, 30th, 1921.

[226] *A Tribute, Read before the Los Angeles Methodist Preachers' Meeting on June 6, 1921 to Bishop M. C. Harris, D. D., L. L. D., by Julius Soper*, D. D., p.9; *BMCHarris*, pp.150-152.

まとめ

ハリスはキリスト教の家庭に生まれ育った。そして、米大陸の西部開拓に伴って進められたキリスト教宣教の流れはハリスが幼年期を過ごした地域も例外ではなかった。それ故、彼にとってキリスト教とは生活そのものであり、全てであったと言える。日曜学校、その中でも当時の日曜学校校長であったR. L.モリスとの出会いはハリスにとって宣教師としての召命を受け入れる最初の重要なきっかけとなった。南北戦争の間に志願、参戦して得た経験によって宣教師として備えるべき体力を十分に備えることができた。これに加え、彼が入学したアルゲニー大学は当時、C.キングスレーやJ. M.ソーバン監督などの宣教師たちを輩出した宣教的な情熱が強い福音的な学校であったため、在学中に、宣教師として備えるべき基本的な資質や学問的な素養などを得えることができたのである。また、大学時代に出会い、結婚したフローラ・ベストはハリスが宣教師の夢を叶えていくのにプラス要因となった。以上のように、宣教師を目指していた夢は順調に流れ、ついにメソヂスト監督教会の日本開拓宣教師の一人として派遣された。それから来日したハリスは函館を中心とする北海道で宣教活動を開始した。以降、東京地域と米西部湾岸を中心とする在米日本人の宣教活動、そして1904年にメソヂスト監督教会総会で日本と朝鮮両国の宣教監督として選出された後、1921年にこの世を去るまで、彼の生涯は宣教そのものであったと言っても過言ではない。

一方、ハリスの宣教を地域や民族と関連付けて見ると、それは日本と日本人、そして朝鮮と朝鮮人という二つのカテゴリーの中で理解することができる。この二つのカテゴリーを見てみると、ハリスの宣教活動は比較的に異なる様相を見せる。まず、日本と日本人について考察してみると、彼は一般庶民たちと直接的、人間的に接する姿がうかがえる。これはメソヂスト監督教会の日本宣教の先駆者として函館時代から一般民衆たちとの頻繁な出会いを持ったし、かなり長い期間、日本人たちを相手にしてきたので、日本語が上手だったことがその理由の一つだと言える。そのため、日本人たちとは身分と階級を超え、比較的直接的に出会う機会が多かった。

これに反して、朝鮮内での活動は上からの出会いであったと言える。ハリスが直接的な関係をもったのは、伊藤博文のような朝鮮総督府の政・官界の関係者たち、他教派の主な指導者たちと宣教師たち、そして朝鮮の信徒たちの中でも英語での疎通ができる限られた人たちであった。それ故、一般人あるいは信徒と出会う機会があまりなかった。たとえ民衆を会うとしても、教会やその他のキリスト者の関連機関での説教や講演などの一方的な宣教の場面であった。したがって、ハリスの朝鮮での巡回及び宣教活動は一方的であり、貴族及びエリート中心に偏る様子を示している場合が多かった。

なぜ、ハリスの宣教が日本と日本人、そして朝鮮と朝鮮の場合には異なる様相を帯びているのかをめぐっては次の2章でより具体的に説明する。それから、彼と同時代に生きてきた人物、つまり南メソヂスト監督教会側のランバスの生涯と宣教活動を比較・検討することによって具体的な考察を行っていきたい。

第2章：M・C・ハリスの日韓両国についての理解とその特色

第2章では、ハリスが日本と朝鮮に対して、宣教師という第3者の立場からいかなる理解を持っていたのかについて検討することを主な目的とする。一般的に人間の思想と行動様式は、いわゆる生活において累積された生き方によって構成されていく。つまり、一人の人物の生涯と思想は、相互交流とその影響の中で、時には確立され、時には修正される過程を繰り返すことで徐々に構成されていく。

ハリスにもまた同じことが言える。彼は子どもの頃に日曜学校で出会った先生との縁によって、海外宣教の夢を抱き、大学時代にはその夢を叶えるため、具体的な資格を備えていった。そして大学卒業と同時に、メソヂスト監督教会宣教局を通じて日本の開拓宣教師として派遣された彼は、1904年にメソヂスト監督教会総会で日韓宣教監督として任命されるまで、もっぱら日本及び日本人中心の宣教活動に尽力した。これだけを見ても、彼の東洋への認識がいかなるものかがわずかに推測できる。そしてそのような状況下において、彼は1905年から日韓の宣教監督として両国を統括すべき教会の指導者になった。以後1916年までに正式に11年に及ぶ期間、彼は日本と朝鮮に暮らしながら日本人と朝鮮人という両国の信徒を相手にしなければならなかった。そして1916年のメソヂスト監督教会総会から引退後、生涯最後の時間を日本で暮らしながら日本人と共に生活した。

本章ではハリスの思想的側面を検討する。彼が日本及び朝鮮に対してそれぞれどのような理解を持っていたのかを見ていく。まず、具体的な政治、経済、社会、文化という一般的な事柄への理解とキリスト教宣教に関わる理解に区分して考察する。続いて、彼が持つ認識において、日韓両国間の一致した共通点と相違点は何だったのか検討し、理解の幅をより広げていく。このように、内的思考の分析はハリスの生涯と彼の宣教活動をより深く理解、分析することに大きな助けとなるだろう。

第1節：日本に対する理解

米国は、建国から所謂膨張主義(expansionism)に伴い形成されてきたと言われる[227]。特に独立宣言書と憲法を基礎とし、米国の第3、4代大統領を歴任したトーマス・ジェファーソン(Thomas Jefferson)は、米国の膨張主義の基礎を確立した人物であった。人口増加と領土拡張による膨張主義は、大西洋沿岸から太平洋沿岸へ、すなわち東から西へ徐々に進んでいっ

[227] 米国のエクスパンショニズムをめぐるより詳細な内容は柳大永、『開化期 朝鮮과 美国 宣教師：帝国主義 侵略、開化自强、그리고 美国 宣教師』(開化期の朝鮮と米国宣教師：帝国主義の侵略、開花自強、そして米国宣教師)、前掲書、29-37頁参照。

た。そのような状況の中で、米大陸の先住民は膨張主義の犠牲にならざるを得なかった先住民は、自分の意思とは関係なく強制的に移住させられ、自由が許されず、非人道的な扱いを受けた。当時の米国教会も、この流れに便乗して住民の強制移住を黙認し、武力行使することが一般的であった。19世紀初頭、ついに太平洋沿岸まで進出した米国の膨張主義は米大陸を越え、太平洋を渡って東アジアにまで至った。

本来、米国の最終目的地は中国であった[228]。ところが、サンフランシスコから中国、その中でも1842年に結ばれた南京条約によって開港された上海までの最速航路は、太平洋を直線的に横切るものではなく、北から南方面に迂回する航路であった[229]。この航路を利用するためには途中で蒸気船の原料である石炭の供給を受けることのできる中継地が必要であった。すでに1850年にハワイが米国の石炭供給地となっていたが[230]、中国に入港前にもう一ヶ所必要な状況であった。そして気候など他の条件を考慮して一番ふさわしい地域がまさに日本であった。そこで1846年に日本を開港させようと試みるが失敗する。そして米国は、石炭供給地として日本を確保するため、1853年7月に再び開港を要求するが失敗する。しかし、約半年後の1854年2月、ペリー(Matthew C. Perry)が10隻の軍艦を率いて東京湾へ入った。その結果、1854年3月末に神奈川条約が締結され、米国は東アジアの航路をめぐる遭難船員の保護及び石炭と物資の補給地として日本をおさえることができたのである。

以上のように日本は西洋へ門戸を開放した。そして日本にも影響を与えた米国膨張主義は、米大陸同様に、キリスト教、すなわち米国の宣教師たちの進出を伴った。ハリスをはじめ米国メソヂスト監督教会の日本宣教もこのような時代の流れと大きく関係している[231]。より具体的な時期に言及すれば、禁教令が解除されたその年(1873年)の12月14日午前11時、ハリスは妻と共に日本の横浜に到着したのである。この時より形成されてゆく彼の日本観がいかなるものであったのかを、政治、経済、社会、文化など一般的な認識についての彼の内的理解とあわせて、具体的に見ていきたい。さらに彼の宣教的な側面をも検討する。

ハリスの日本理解を検討するために、最も信頼できる資料といえば、1907年彼が宣教監督在任中に著述し、米国で出版したChristianity in Japanをあげることができる。この書物は次のように8章で構成されている[232]。

---

228 同書、35頁参照。
229 同書、36頁参照。
230 同書、36頁参照。
231 米国のメソヂスト監督教会の東アジア宣教をめぐる内容は第5章で詳細に扱う。
232 M. C. Harris, *Christianity in Japan*, p.5.

<表 - *Christianity in Japan* 目次>

Chapters	Titles
Chapter1	国家(The Country)
Chapter2	国民(People)
Chapter3	宗教(Religions)
Chapter4	16世紀のキリスト教 (Christianity of the Sixteenth Century)
Chapter5	今日のキリスト教(Present Day Christianity)
Chapter6	日本でのメソヂスト監督教会 (Methodist Episcopal Church in Japan)
Chapter7	日本メソヂスト教会(The Methodist Church of Japan)
Chapter8	キリスト教の展望(The Christian Outlook)

その他彼が1908年と1916年に開催されたメソヂスト監督教会総会に日韓両国の宣教監督として提出した報告書*Four Years in Japan and Korea – The Quadrennial Report of the Missionary Bishop for Japan and Korea to the General Conference of 1908* と *Quadrennial Report of Bishop M. C. Harris of the Methodist Episcopal Church for Korea and Japan* などを通じて、彼の宣教活動と思想を検討することに役立つだろう。

(1)一般的理解(政治・経済・文化などの社会的な要素)

①山岳地帯と火山、そして地震と台風

英国ビクトリア時代の冒険家や旅人が、非西欧圏のある地域を新たに発見すれば、彼らはその地を英国に知らせるために、紀行文を書くことが一般的であった。目的は自国に自分たちが見つけた非西欧圏の地域を知らせるためであった。したがって、彼ら冒険家及び旅人は、新たに発見した土地が非常に価値ある地域だということを強調する傾向にあった。そして西欧人の視点ゆえに、西欧中心的・アングロ・サクソン中心の観点が濃厚なのも特徴の一つであった。このような当時の記述方法を「ビクトリアン発見レトリック」(Victorian discovery rhetoric)と言う[233]。このビクトリアン発見レトリックは時を経て、英国のみなら

[233] ビクトリアン発見レトリックに関しては柳大永、『初期米国宣教師研究 1884-1910』(初期の米国宣教師

ず西欧圏の全般的な記述方法となった。ところが、その記述方法の特徴の一つは風景を描写するにあたり、多くの形容的表現を活用し、とりわけ旅人の故郷を連想させる手法を多用していたのである。言い換えれば、新たに発見された地域の面積などを説明する上で、本国地域と頻繁に相互比較される形態と見ることができる。

日本に関するハリスの代表的な著書である*Christianity in Japan*も、ビクトリアン発見レトリックを十分に活用している。彼の日本理解は位置及び地形を把握することからはじまる。*Christianity in Japan*は、まず日本に関して地政学的(geopolitical)に把握していることである[234]。日本の領土区分について台湾とサハリンを除く全ての集合的な名称だと定義している。ところが、日本の領土を説明する上で、あえて台湾からサハリンまでを含めて言及した理由は、この書物が書かれた時代的状況を十分に考慮したものと考えられる。つまり、台湾は1894年に勃発した日清戦争の結果として、翌年(1895年)日本に割譲された。サハリンの場合は1904年に勃発した日露戦争の結果によって、緯度50°以南の地域を日本が獲得することになったのである。このようにハリスは、当時の東アジアの情勢を把握していた。次にビクトリアン発見レトリックが顕著に表れる部分は、日本の面積をハリスの本国である米国のカリフォルニア州と比較して説明している箇所である。本書の目的は米国人に日本のことを伝え、紹介するのが主な目的であった。

また、ハリスは日本の地形を思い浮かべる時、いくつか代表されるイメージを持っていると思われる。その中の一つは、山岳地帯(mountains)と火山(volcanoes)という地形的な特徴であった[235]。ハリスは日本の地形をヨーロッパのアルプス山脈のように描写しているが、これも美しく描写するビクトリアン発見レトリックの表現だと言える。特にサハリン側からはじまる北側の地形と中国から出発し、台湾を経て日本へ入ってくる南側の地形が日本で合流し隆起したものが、いわゆる美しい日本の地理的形態を作り出した結果だと絶賛している。同時にこのような地形は自然と温泉を発達させ、独自の治療法として日本人が利用している事実も付け加えている。これは西洋でなかなか経験できない日本独特の地理的特徴であるがゆえに、ハリスはこのような事実を強調できた。

ハリスが日本の地理的特徴を説明する時に欠かせないもう一つの事柄が地震であった[236]。しかし上記の引用文からも見られるように、地理的特性による自然災害において、ハリスが最も気に掛けていたことといえば、地震よりも台風であった。6月と10月の間にかけて発生し日本へ接近する強力な台風は、日本の自然災害の中で最も大きな被害を引き起こす

に関する研究1884-1910)、ソウル：韓国基督教歴史研究所、2001、204-206頁参照。
[234] M. C. Harris, *Christianity in Japan*, p.7.
[235] *Ibid*, pp.7-8.
[236] *Ibid*, pp.8-9.

要因だと考えた。このように日本は突発的な地震あるいは台風などの自然災害によって、大きな被害に遭う危険性を常に内包しているがゆえに、それに伴う注意が必要であると思った[237]。

それにもかかわらず、日本の地理的特性と関連してハリスが持ったイメージは、否定的要素を相殺する程に肯定的なものであった。彼は、「自然の一般的な様相は平和であり、温和であり、そして[人間にとって]友好(friendly)」[238]であると日本を肯定的に描写している。ところが、このような肯定的な要素を日本が持つことができるのは、日本が島国という特性に起因するものである。すなわち、日本は四方を海で囲まれた島国であるために、外敵の侵入に対する防衛が自然によって行われたからであると考えたようである[239]。このように、ハリスの持った日本のイメージとは島国固有の特徴、とりわけ敵の侵入において有利に対応し防御できる地理的な特徴を持つ国であった[240]。

②豊富な自然と動植物を保有する国

先述のように、ハリスは日本が島国である事実を明確に理解していた。それ故、日本がこれまで敵の侵入を防ぐことができる有利な条件を備えることができたと考えた。外敵の侵入から自然によって、保護を受けることができたのは、日本の自然環境が外的要素から破壊されなかったとの意味に言い換えることが出来る。したがってハリスにとって、日本は自然が豊かにのこっている場所であった[241]。すなわち、全世界のいかなる地域とも比べることのできない豊富な自然の生態系が息づいている所であったのである。特に日本が持つ自然の条件は多様な産物として見ることができた。そしてこの点において、日本は世界最高だと彼は躊躇なく主張するほど、日本を相当に肯定的に評価している。陸地の生物だけではなく、ハリスにとって日本は海と空、すなわち陸海空のすべてを網羅する自然環境の中で、全ての動植物は調和して生きている、いわゆる桃源郷(Utopia)のような所であった。この言葉は開発の余地が多く残っていることをも意味した。実際は、ハリスが持つ日本のイメージはまだ土地の耕作が十分に行われていなかった未開の地であった。無論、彼の視点からすれば、日本は土壌が豊かで、品質の高い農作物を作ることにおいては、素晴らしい条件を備えているとは言えなかった。

しかし、いまだ開発可能な土地が多数残っていることは、西洋人であるハリスの視座から

---

[237] *Ibid*, p.9.
[238] *Ibid*, p.9.
[239] *Ibid*, p.8.
[240] *Ibid*, pp.10-11.
[241] M. C. Harris, *Christianity in Japan*, pp.9-10.

すれば、日本が発展するのに十分な可能性を持っていることを意味している[242]。これに加えて、彼が見た日本の農業技術と農夫の知恵は他国よりも優れていた。しかしながら、日本が野菜と穀物、そして魚類などの農水産資源を開発し、より一層発展させるには、大変な困難が伴うと予測している。その理由はいかに優れた農業技術と知恵を日本人が持っていたとしても、西洋人のように肉の消費量が日本で急激に増加していったからである。

しかし、ハリスは日本がすでに19世紀末以来、農業社会から工業社会への急激な変化の中に置かれていると判断した。日本の豊かな自然環境を保護する意味では工業化は否定的な結果をもたらす原因となった。しかし一方で日本が近代化と工業化を通じて社会的発展を成し遂げたことにおいては、肯定的な認識をもたらす二律背反的な要因になった。これに関して詳しくは後述するが、ここで簡単に言及すれば、西欧文明の優越性の観点を東アジアないし日本へと投影したハリスの立場を少しでも確認できる。

③受容と模倣、そして一つ(one)になることを追求する日本人

日本の地理的特徴と言えば、何よりも火山と地震、そして台風などの自然災害による被害の多さであった。また島国ゆえに外部の侵略が殆どなかったことは、自然が日本に与えた祝福だと言える。それはまさに日本人が自然を保護し、これによって自然の恵みを豊かに享受できるところとなったと考えた。無論、19世紀半ばから西洋帝国主義の勢力によって行われた開放は急激な近代化と工業化を果たす基盤を築くことになったが、これは同時に近代文物の力で自然を開発し、農業生産量が減少することに伴う影響ももたらされた。それにもかかわらず、以上の内容をまとめてみると、日本は他国より自然の影響を相対的に数多く受けたていたと考えたのである。

それでは、この地に生きた日本人に対して、ハリスは一体どのように考えていたのか。

まず、宣教初期にハリスはアイヌ民族を日本の先住民として理解したようである[243]。このことは、メソヂスト監督教会の日本宣教を開拓していった初期宣教過程において、彼に与えられた最初の任地が函館を中心する北海道であったことから当然のことであると見ることができる。しかし、彼はアイヌ民族が日本の先住民ではないと気づくことで、北海道に留まることとなる。それと同時に、ハリスは日本人がどのような経緯によって日本に定着するようになったのかを、大陸から遡り検討しようとした[244]。ハリスの見た日本人は、本来東アジア大陸から移住して来た人々であった。遠くはモンゴルから中国、満州、そして朝鮮を通っ

---

[242] *Ibid*, p.10.
[243] *Ibid*, p.12.
[244] *Ibid*, pp.12-13.

て海を渡った後に入ってきた移住民であると判断した。後述において検討するが、ハリスは中国人とモンゴル人、満州人、朝鮮人、そして日本人を同一グループとして考えたのであった[245]。そしてこのような移住の流れを、いわゆる彼自身が経験した白人による西部開拓というフロンティア精神(the frontier spirit)と比較しつつ理解しようとした。つまるところ、この西部開拓という表現を用いるということは、日本人と米国人は歴史の中で、酷似した経験を辿ったといっても過言ではない。それ故に、日米両国が互いに理解可能な土台を整えることに繋がったと彼は考えた。この理解は、日本が朝鮮を併合・支配することへの素養を築いた出来事と考えられる。すなわち、彼が見たところ米国の西部開拓は日本の朝鮮併合とあまり相違点はなかった。そして元来日本人自体が大陸からの移住民であったがゆえに、朝鮮併合は同じ民族の統合として感じられたのである。このように白人であるハリスが捉えた日本人、朝鮮人、中国人などの東アジアの各民族は、単に同類の人種として理解される傾向が強かったと考えられる[246]。

類似した歴史的体験に基づく米国人と日本人の同一性を越えて、ハリスは東アジアの黄色人種が、当時の北中米並びに南米へと渡ったと考えた。したがって東アジアの黄色人種が北中米と南米の先住民たちと同一の人種的特徴を持っていると考えたのである。それほどハリスにとって東アジア、とりわけ日本人は彼自身にとって、親密に交流を持てる相手であった。

一方でハリスは、日本人が東アジアと南北アメリカ大陸の隔てを越えた人種的同一性を持っているという理解とは別に、日本人独自の特性が存在すると考えた。そこで彼は東アジア三ヶ国、つまり日本、朝鮮、中国を相互比較することで、日本人独自の特徴を明らかにしようと試みた。

日本人、朝鮮人、中国人、この三つの民族は実に特別一つの民族(one people)という外部的な特徴が著しく表れる類似性を持っている反面、彼らの神経的構造と精神的特徴においては相当な差が見える。日本人は彼らの構造において、独特な点がある。彼らは非常に神経過敏であり、行動がかなり素早い。この民族[日本人]は精神と肉体的行動、そして活動において我々がよく知っている民族の中で最も素早いと言われたりする。中国人または朝鮮人は冷静な英国人とドイツ人により類似する反面、日本人は活発で感情表現が露骨なフランス人と比較できる[247]。

245　他にもこのような彼の理解は言語(language)と関連しても同一であった。ハリスは日本語とハングルを非常に類似性のある言語として見なし、日中韓の東アジア三ヵ国が同じ漢字文化圏の中にあると理解した。それ故、ハリスは日本、朝鮮、中国を区分するよりも、包括的に理解しよう試みたと言える。*Ibid*, pp.18-21.

246　*Ibid*, pp.13-14.

247　M. C. Harris, *Christianity in Japan*, pp.13-14.

西洋人ハリスからすれば、日中韓三ヵ国の民族の身体的特徴を見分けることは容易ではない。しかし、内面的要素に眼を向けたとき、日本人は他の東アジアの民族性とは異なる特徴を持っていた。ハリスは日本人を「性格的に非常に敏感で、素早い行動と態度を持つ民族」と捉えた[248]。またヨーロッパの民族性と比べるとすれば、積極的で知的好奇心旺盛なフランス人と類似する点を多く見出すことができた。それは他の東アジア諸国と比べると、最初に西洋の文物を受け入れ、積極的に国を開放し、欧米諸国と向き合った日本の姿が、ハリスにこのような印象を抱かせるに至ったと推測できるだろう。

そのような姿はいわゆる近代化を受け入れた明治維新だけに限られたものではなかった。先程言及したように、日本人自体が中国、朝鮮などの大陸からの移民族であること、そして日本人が古代から大陸の文物を積極的に受容した歴史を持っていた事実をハリスは知っていたのである。以下はこれに関するハリスの言及である。

日本人は模倣的な人々と見なされる。本当にこの模倣的な特徴はこれらが東アジアの移住民であるが故に、[彼らが持っていた]本来の能力は否定された。…日本は自分たちの文明を朝鮮と中国から得て、また中国と朝鮮を通してインド文化を受容した。しかし、ここでは際立った内在的な力が含まれていて、文明の要素を取って来て、自分たちの特徴を入れた。西欧文明を吸収することにおいても日本人たちは精神(mind)的な部分に原初的な力の高い水準を保有し、発揮してきた。彼らは西欧文明を彼らのものとして作っただけでなく、新たな材料を受け取り、それをもって伝統的な方法と区別して使用した。例えば、日露戦争で日本は西欧で発展しているように、あらゆる軍事科学の利点を活用したと同時に、彼らなりの努力を傾けて、ライフル(the army rifle)や下瀬火薬のような独特な二つの独創性を有する発明を生み出した[249]。

かつて大陸から移住しその文物と文明を受容していた日本人は、ハリスが見たところでは非常に模倣上手な民族として理解されていた。しかし、これは模倣で終わるのではなく、いわゆる独自性を加えて発展させる形を取った。彼はこれに関する代表的な例として、日露戦に使用された日本人の軍事的発明を評価している。このような外部のものを積極的に受け入れ、これを模倣し、さらに一段階発展させる日本人の姿は「一つ」(one)という形として行われるものと彼は理解した。以下これに関するハリスの言及である。

日本人の間で観察できるのは多様な民族形態にもかかわらず、彼らの主な特徴は一つとなってきたので

---

[248] このような観点は彼が米国太平洋湾岸にて日本人宣教を担当した時にもメソヂスト監督教会の宣教機関誌である*Gospel in All Lands*に「日本人は仕事のあらゆることをするために、[技術を]早めに習得し、完璧な満足を与えてくれる」(They soon learn to do all kinds of work and give perfect satisfaction)と寄稿し、日本人の性格を明らかにしている。M. C. Harris, 'Japanese Methodist Missions on the Pacific Coast', *GAL*, June, 1897, p.257.

[249] M. C. Harris, *Christianity in Japan*, pp.15-16.

ある。自然は征服され、その痕跡は様々な人々に合わせられており、一つの中でそれらを作り出してきた。日本を訪問し、彼らを見て研究してみると、日本がその国の土壌と空気、すなわちあらゆるものの特徴の調和という事実がとても印象深かった。彼らは特に自然と一つとなった[250]。

ハリスが見た日本人の受容と模倣の特徴は、最終的に「一つとなること」(become one)へ集約されていった。しかし、上記の引用文にもあるように、この一つとなることは様々な特性が調和されるところの一致であった。この点をハリスは非常に高く評価した。しかし、このような観点は日清戦争(1894年)と日露戦争(1904年)の当事者である日本が、当時の東アジアを一つに調和し、形成していく過程としてあらわれることもあっただろう。このような観点から1910年に起こった朝鮮併合をハリスが見たとすれば、東アジアを一つに一致させ、調和しようとする日本人独自の特性として認識する可能性が高い。

その他ハリスは日本人の外的な特徴を一般的に日本人は西洋人よりも、また東アジア三つの国の中でも最も小柄な民族だと捉えた[251]。これはDNAの要素が原因というよりは、かつて脚をたたんで床に座っていた日本人の伝統的な習慣によるものであると考えた。そしてこのような伝統は、いわゆる椅子を使用する西欧の習慣が、近代化の要素として日本に受容された暁には、新しい世代に至っては変化が現れると考えた。これもまたハリスからすれば、日本人の外からの文化を積極的に受容・模倣する民族性である故に、十分可能なことであったと考えることができたであろう。

その他ハリスは日本人が総じて健康・衛生面の問題に対して徹底していたと評価した[252]。無論、これも日本が西欧文明との接触を通じてもたらされた近代化による結果であったことを彼は否定しなかった。このように、ハリスが理解した日本人の特徴は、受容に積極的で、それを模倣し、一段階更に発展させることであった。そしてこの特徴は西欧の文物と調和し、日本が近代化を成し遂げる点において、大きな長所になったとハリスは考えた。

④天皇制の尊重と近代化及び民主化の発展

ハリスの見た日本人は、誰よりも受容的なもので、その方法は第一に模倣を通じて行われた。そしてその模倣は単なる模倣に留まるのではなく、日本人なりの独特な形態へと発展させてゆく調和であった。ハリスの目にはこれがつまるところ「一つ」という一致を追求する姿に映った。ところが、このような形態は日本が近代化を成し遂げていく状況でも

[250] *Ibid*, p.13.
[251] *Ibid*, pp.16-17.
[252] *Ibid*, pp.17-18.

適用されるとハリスは考えた。もしそうであるならば、日本の政治的側面に対して、彼はいかに考えたのだろうか。

彼は基本的に天皇制を採択している日本の政治体制を尊重した[253]。共和制を採択している米国とは異なる日本の政治体制に対して違和感があったが、日本が天皇制の中で成し遂げた顕著な成果はそのような違和感を宥和させてしまうのに充分であった。ここで言われる実質的な成果とは、日本がこれまで維持していた一夫多妻のような前近代的な悪習を廃止し、一夫一妻などの啓蒙された新たな法律と秩序を持つことであった。すなわち近代化に関連するものであった。これに加えて、国民的共感の中に平和的王位継承が行われるのを見たハリスは、敢えて日本の政治体制に対して否定的認識を持つ必要がなかった[254]。

西洋人ハリスの視座からすれば、非倫理的で、非近代的な悪習を廃止した日本皇室の努力は非常に積極的に評価すべきものであった。特に明治維新以降の「和魂洋才」[255]を基本路線とした日本の姿は、西洋における発展と同じ土俵で比較できるほどにまで至った。そのため天皇制の統治システムが支配していた日本の政治構造に対して、彼が否定的態度を持つ理由はなかった。また1889年に成立した「大日本帝国憲法」、いわゆる明治憲法は概してドイツ及びプロイセンの憲法を模倣し、後には英国の憲法をモデルとしてより体系的な形で著された。伊藤博文が主導したこの新しい憲法の本来的な制定意図は君権を強化し、民権を弱化しようとする意図があった。[256]これはまさに天皇制の強化を意味した。したがって、明治維新をはじめ大日本帝国憲法(明治憲法)を経て天皇制を根幹とする日本の政治システムはより強化されていった。そのような状況にもかかわらず、ハリスは天皇制に対してあまり否定的認識を持たなかった。先に述べたように、天皇制という君主制を強化した政治システムであるにもかかわらず、その中で、日本が近代化されている姿を目撃することができたからである[257]。ハリスが見たところによれば、日本の政治体制はますます成長・発展していった。1889年に制定された憲法は日本の政治が一層成熟し発展することにおいて、大きな原動力となっていたのである。それは皇室に対する忠誠心を基礎とした近代化と民主的な姿として映った。

そして、これと関連して、ハリスが注目したことは宗教の問題であった。大日本帝国憲法の中で、その力が強大であった天皇制は、前近代的君主制の形を帯びていた。しかし、その

---

[253] M. C. Harris, *QRHarris 1916*, p.1.
[254] *Ibid*, p.2.
[255] 和魂洋才とは日本固有の精神を忘れることなく、その土台の上に西洋文化を調和し受容する、当時の日本の典型的な態度を意味する。
[256] 朝尾直弘・上田正昭・上横手雅敬・大山喬平・山本四朗　編、『要説日本歴史』、東京創元社、2000、309頁参照。
[257] M. C. Harris, *QRHarris 1916*, pp.2-3.

内容面においては近代化と民主化の成長をもたらした。これに加えてキリスト教が日本の憲法と法律の枠内で、確実な宣教の自由と保護を保証されたと考えた[258]。したがってハリスが以上のような当時の日本の政治体制について批判を加える理由はなかった。かえって彼は、第1回メソヂスト監督教会日本年会にて、「[明治]政府は1年間キリスト教においてより多くの障害物を除去したが、これは[教会]成長の原因ともなった」[259]と言及し、日本の政治状況において、非常に肯定的理解を持っていた。したがって日本の天皇制を評価し、キリスト教宣教においては有益となるものと考えることは当然であった。したがってこのようなハリスの理解は、彼自身が日本の政治家と交流するための基本的姿勢となった。

⑤米国の友邦

ハリスが見た日本は、東アジア諸国の中で、米国の第一の友好国として認識された[260]。東アジアの立場から見ると、1853年にペリーが黒船を導いて日本へ入り、翌年(1854年)には日米和親条約(または神奈川条約、Convention of Kanagawa/Kanagawa Treaty)を結ぶようになったことが、西欧帝国主義による圧迫と進出であると解釈できる。しかし、ハリスはこれを日米両国間の本格的な友情の始まりだと理解しかつ解釈する。そして日米両国の友情はハリスにさえ干渉できない絶対的な関係であった。もし日米両国の間に誤解が起きると、彼はこれを解消するために、積極的に尽力した。以下はこれに関するハリスの言及である。

余の総会に出席せんが為に米国に帰るや幾ばくもなく余は多数の教職員及び平信徒側に於て日本に対する感情の一変せるに心付けり、余は公私の席に於て日本は米国と戦はんとするの意ありや又た清韓両国に対する日本の処置等につき質問を受けたり、此等の質問はにオンに対する友誼の精神より出てたるが故に余は此疑雲を払ふ為に出来得るだけの援助を与ふるは余の義務なりと感じたり。幸にして余は最も信ずべき筋より事実を得るの位置にあり、日本は従来末だ曽て米国と戦争を夢みたることなし、日本が過去におて、殊に日露戦争中に於て我が若大の厚意に対する満足の情は依然として変はらず、而して余は平素重なる新聞雑誌並びに責任ある実業家の言論に注意し居れども米国に対して何等敵意の兆候を認むること能はず[261]

米国人にとってハリスは、日本に関する情報を把握できる消息筋のような存在であった。したがって20世紀に入って日米両国間の関係に摩擦や混乱が生じた時、彼は米国社会の中

[258] *Ibid*, p.3.
[259] M. C. Harris, T. Yamada, 'On Missions', *MJCMEC*, 1884, p.28.
[260] M. C. Harris, *QRHarris 1916*, pp.4-5.
[261] M・C・ハリス、「日韓両国に関する誤解を弁ず」、『護教』、1908年10月24日；小川圭治・池明観 編、前掲書、383頁。

で誰よりも積極的に日本を擁護・代弁する役割を引き受けたのである。このような彼の態度は、1916年メソヂスト監督教会総会における宣教監督職を辞任する最後まで変わることはなかった。ハリスは辞任するまで、日米両国は当時の時代的状況の困難の中でさえ、宣教師をはじめとして両国キリスト者たちの努力により円滑な関係を維持していくことができたと思った。さらに、ハリスの言葉を借りて表現するならば、既存の関係維持を越えた「非常に有意な改善」を追求し形成していったのである[262]。このように米国と日本の間の関係は、平和を追求する友好的関係であるとハリスは理解していた。そして彼は、日本と米国両国間を繋ぐ架け橋の役割を担おうと努力し 、それが自分に与えられた任務の一つだと考えた[263]。ハリスは彼自身が直接政治に関与することではなかったが、当時の情勢について大きな関心を持っていた。彼は、特に米国と日本両国の関係が円滑に維持されることができるような雰囲気を形成するために多くの力を注いだ。上記の引用文でも分かるように、ハリスは米国社会の中で、日本が平和を目指し努力していることを伝えるための仕事を自身の任務の一つであると考えていた。それほどに、ハリスは日本について肯定的に代弁し、日米の架け橋を担うことにおいて誰よりも献身的に尽くした。

また彼は両国の円滑な交流と協力関係を維持するために、次のような事項が必然的に要請されるべきであると考えた。これに関するハリスの言及である。

> 次の二つ[日米両国が友好的な関係を成し遂げていくにあたって]は必須と言える。すなわち、米国によって日本をより深く理解すること、そして日本によって米国に関してより深く知る知識である。相互各自の考えを知るため、この二つが叶う時、互いの利益を得ることができるだろう。米国は日本に対して差別してはならないものであり、逆に日本も米国に対してそのようにしなければならない[264]。

このようにハリスの日米両国に対する立場、つまり米国の友好国日本についての理解は、ハリス自身が所属していたメソヂスト監督教会を越えて、他教派の宣教師たちにも非常に強烈なイメージを持たせるに至ったようである[265]。そのように、日本を米国の友好国とかねてから信じていたハリスであったので、米国内で新聞などのメディアにより、日米両国の関係が悪化する度に、彼は日本を擁護する弁護士のように積極的に弁護していくしか手段はなかったのである。無論、当時日本の米国宣教師たちの多くは米国と日本両国の関係向上のため、日本擁護の立場に立っていた。ところで、その中でもハリスは日米両国の友好関係を誰よりも強調し、先陣に立つ代表者だったと言える。しかも、彼は「日本は永遠の平和及

---

[262] M. C. Harris, *QRHarris 1916*, pp.5-6.
[263] M. C. Harris, *QRHarris 1908*, p.7.
[264] M. C. Harris, *QRHarris 1916*, p.5.
[265] War Talk Unfounded, *MV*, February, 1911, p.5.

び好意の繋ぎに於て米国と提携せんことを求む」[266]と言及し、米国文化を受け入れる基盤の上に両国間の友好関係が維持され一層発展されることを望んだ。日本宣教の初期からハリスと親密な友好関係を維持し、1907年に日本メソヂスト教会が成立した当時、初代監督として選出された日本教会の指導者である本多庸一監督もハリスのそのような立場を非常に強調し証言している[267]。

以上のように、ハリスは日本が東アジアの中で、米国にとっての一番の友好国としての立場を維持し、もしこれに相反する意見や社会的な流れが現れると、誰よりも先に積極的に日本を弁護する態度を示したのである。

(2)宣教理解

①他宗教に関する理解

ハリスの理解の範疇の中に置かれていた日本の伝統宗教は、大きく三つに区分して把握できる。すなわち、神道と仏教、そして儒教である。

まず、神道について見ていくことにしよう。日本の代表的な伝統宗教の中で、ハリスが先に言及したのは神道であった。彼は、神道が東洋的宗教の中でも他の東アジア諸国では見ることの出来ない日本独自の伝統宗教であることを知った[268]。これと共にこの宗教は多神論的な世界観を持っており、同時に動物や植物のような自然のあらゆる対象物が人間と神秘的な関係を結ぶ、いわゆるトーテミズム的世界観を帯びていると理解した。しかし、その内容においては、キリスト教と相反する性格を持っていると考えた[269]。ハリスが見た神道教理の基本的性格の一つは、キリスト教と対比されるものであった。代表的なところは、人間本性に関する性善説(be born into the world with good hearts)であった。すなわち人間の原罪論から始まるキリスト教神学と非常に合致した性格を持っていた。このように、いわゆる善の本性を基にして他人のために道徳的実践を要求することが神道の代表的な特徴と考えた。そして日本人は神道が要求する道徳的啓明をよく守る存在であると考えた。またハリスが見出した神道の一つの特徴とは、アニミズム(animism)に傾倒していることであった。このような神道の特色は、精霊信仰を強調する日本人の思考観念と似ていることもハリスの捉えた神道の特色であった。

---

[266] M・C・ハリス、「日韓両国に関する誤解を弁ず」、『護教』、1908年10月24日；小川圭治・池明観 編、前掲書、384頁。
[267] War Talk Unfounded, *MV*, February, 1911, p.5.
[268] M. C. Harris, *Christianity in Japan*, p.22.
[269] *Ibid*, pp.22-23.

しかしながら、結局神道は不完全で、限界があると考えた。何よりも西洋文明による近代化という思考観念が拡張していた19世紀後半から20世紀初めの時代的雰囲気の中で、神道はその役割を十分に担うことができない宗教だと彼は考えたのである。したがって、ハリスは東アジアの中で、近代化に早期に着手した日本では神道はもはや適切な宗教ではないと確信することができた。したがって、キリスト教の福音を伝達することにおいて、神道とは相互対立し衝突することはないと考えた[270]。

神道以外に彼が日本の伝統宗教と捉えたのは仏教であった。しかし、日本の伝統宗教としての仏教理解は前述の神道とは若干性格が異なっていた。最も重要な点は、仏教の伝来と受容過程を理解することにあった。表面的に見ると、仏教が神道と区分された最も重要な点は、まさに外部から伝来とその受容過程にあると言える。すなわち、神道が日本の巫俗的概念から生じ発展した宗教であるのに対して、日本仏教は外部から導入・受容された宗教であった[271]。とりわけ朝鮮から渡ってきた僧侶を通じて日本が仏教と接するようになり、その中でも皇室と貴族階級を中心とした上から受容されたことは、仏教が日本国内で早速に根を下ろすことができる理由になったと考えた。すなわち、仏教が布教される中で、土着化に成功したとハリスは評価した。

一方、日本仏教の内的要素を分析すると、ハリスは仏教が相対的に神道よりも高等宗教的要素を持ちあわせていると考えた[272]。精霊信仰を強調する神道に比べて、道徳的規範と倫理性を持つ仏教はより発展した宗教的形態を帯びていた。そして人間をより一層重視する仏教の教理は、日本人に拒否されることなく受容された宗教であった。この故に、仏教が日本の代表的宗教の一つになったと彼は考えた。ところが、仏教も神道と同様に排他的宗教には見えなかった。したがって、ハリスの考える仏教は神道と対立せず、相互に調和する共存の性格を備えていると考えた[273]。ハリスの見た仏教には神道と互いに結びつくことができる要素が数多く存在した。彼はいわゆる神仏習合という概念をある程度理解していた。しかし、その結合(union)は相互同等な連合ではなく、仏教が神道を内包する性格の結合であった。

それ故、ハリスは、日本の仏教が神道のようにキリスト教に敵対しないと考えた。むしろキリスト教が仏教に良い影響を及ぼし、仏教の内的・外的側面を改革・発展させるための大きな役割を担ったと考えた[274]。さらに、彼は1880年にすでに「インドの知的・道徳的・宗

---

[270] *Ibid*, p.23.
[271] *Ibid*, p.23.
[272] *Ibid*, p.24.
[273] *Ibid*, p.24.
[274] *Ibid*, pp.25-26.

教的条件」(Intellectual, moral, and religious condition of India)という主題で開催されたある講演に参加し、「日本の仏教はインド本来の仏教よりもキリスト教により近い」(Buddhism in Japan was “much nearer Christianity than the original Buddhism of India)という講師の言及を聞いたこともあった。無論、ここにはキリスト教の神学及び信仰の要素が、仏教に根本的な影響を及ぼしたことにより、キリスト教色を帯びた西欧文明の近代化的要因が何よりも強く作用したのだと考えた。キリスト教が日本の仏教から受ける弊害は存在しなかった。寧ろ良い影響を与えたので、ハリスの仏教理解には否定的側面がほとんど表れていない。

最後に、ハリスの範疇内にあった日本の伝統的宗教は儒教である。儒教も仏教と同様に外部から日本に受容された外来宗教が起源だと彼は正しく理解していた。しかし、先に述べた神道及び仏教に比べ、儒教は日本国内でその影響力が非常に弱まっていると考えた[275]。他国同様、日本でも儒教は知識層を中心に受け入れられた宗教的な指導理念であった。しかし、ハリスは明治維新を通して、西欧文明を積極的に受け入れた日本において、儒教はその存在理由を失ってしまうほかなかったと考えた。ハリスは、儒教の概念を近代化とは全く異なる性格の宗教として理解していたのである。それ故、キリスト教宣教を推進する際に、儒教は決して脅威になることはないと考えた。むしろ前近代的な慣習と教えに縛られている儒教は自然に淘汰されなければならないと考えたのである。

これまで探ってみたハリスの日本宗教の理解を見ると、大きく二つにまとめることができる。第一に、神道・仏教・儒教という日本の伝統的な宗教がキリスト教の宣教において、それほど脅威になるとは考えられないといことである。そして第二に、ハリスは日本宗教の理解はキリスト教神学を基準に評価することで、西欧文明と近代化の状況の線上であると判断し見通したのである。したがって、ハリスは「キリスト教は日本人の間で、もっと大きく成長し、もっと大きく征服(conquest)することになるだろう。そして、やがてキリスト教は日本内で支配的な宗教となるのは疑いの余地がない」[276]と堂々と主張することができた。以上の言及をみると、彼は日本において既存の宗教に対して、無条件に批判するのではなく、むしろ協力関係を築くことで既存の伝統宗教に恩恵をもたらすことができるとの寛大な態度を見せている。

②西欧式近代化を伴った宣教

[275] *Ibid*, pp.26-27.
[276] *Ibid*, pp.42-43.

先述において、ハリスが神道と仏教そして儒教に代表される日本の伝統宗教についての不安や脅威をあまり感じなかった理由の一つは、その宗教は西洋人の見る近代的性格、つまり近代化には寄与するものではないと判断したからであった。もちろん、ここで言う近代化とは西洋人が眺める西欧文物の優越的先入観を意味していると言える。それ故、ハリスが日本に投影させた宣教思想は、日本人がキリスト教の福音を受け入れること自体が紛れもなく西欧的文物を受容する近代化の過程だと言える。彼は1916年に開催されたメソヂスト監督教会総会に提出した報告書の件で日本の仏教と神道に関連した項目を記述し、当時の東アジアに渡ってきたほとんどの宣教師がそうであったように、ハリスもまたキリスト教はいわゆる進歩的要素だと考えた[277]。これは伝統を守るための保守的要素ではなく、革新を追求する新しい精神であった。すなわち、彼にとって日本の既存宗教は過去と伝統に埋没している保守的要素であって、これと対比されたキリスト教は新しい世界へ導く改革の糸口として対比されたのである。事実彼はキリスト教に言及する時、「進歩」(progress)という言葉を度々使用する。ところで、ここで彼が理解した進歩という概念は、いわゆるキリスト教が西洋文物を基礎とした近代国家建設を伴う在り方を持ちあわせていることであった。彼の考える西洋文明は、当時権力と力を得ることのできる道であり、キリスト教を受け入れることが西洋文明を受け入れることに繋がる道であった[278]。それが彼の考えた進歩の意味であった。これと類似した考えは、1908年4月4日、日本メソヂスト教会東部年会の四日目に開催された 「ハリス監督聖職四十年記念会」[279]にて彼が話した次のような説教内容の中によく表れる。

基督教の書林に往きて愉快に堪へぬことは書架に例べてある書籍の萬國的であることであります、日本傳道者の書齋には英米獨の新しい書籍が這入つて居る、之は感謝すべきことで基督教が廣くなり大きくなりつあることを示して居るのでございます、新メソヂスト教會は基督教に對して小き考や、小き計劃や、小き理想を以て出來たのでありませぬ[280]。

ハリスはキリスト教を受け入れることが、いわゆる万国的、言い換えれば、当時のグローバル化を追求する道であった。そして日本人牧会者の書斎には東洋ではなく、英米圏とドイ

---

277 M. C. Harris, *QRHarris 1916*, p.3.
278 エム、シ、ハリス、「ハリス博士の書簡」、前掲書、1900年2月3日参照。
279 当時、日本メソヂスト教会東部年会録にはハリスの聖職40周年紀念会をめぐって次のように記録している。「午後七時半開會、ジエー、ジー、デビソン氏司會、讃美歌第百六十二を歌ひ、栗村左衛八氏以佛所書三章を朗讀し、小方仙之助氏祈禱を捧ぐ、ハリス監督は以佛所書三章八節を題として一場の説教を爲す。ペリー氏はハリス監督が聖職四十年紀念のため、奬學金 として一千圓を青山神學校へ寄付せられたる旨を報告すエチ、エチ、コーツ、津田仙二氏祝詞を述ぶ」「ハリス監督聖職四十年紀念會」、『日本メソヂスト教會第壹回東部年會記録』、1908、19-20頁。
280 エム、シー、ハリス、「聖職四十年(紀念説教)」、前掲書、1908年4月25日、3頁。

ツを中心とする西洋書物で溢れた。これはまさに日本でのキリスト教の拡張に対して、良好な兆候として理解した。当時、日本国内で発行されたキリスト教雑誌もまた、日本人に対して、他の学問と関連する近代的世界観と学術資料を提供するという意味で、彼は評価した[281]。つまり文書宣教の効果について言及している。また別の注目点としては、西欧の無神論主義と対抗するため、キリスト教雑誌が採択している方法もまた科学、文学、哲学、芸術など西洋のものを素材として扱っていることである。否それよりもむしろ、キリスト者ではない非キリスト者に対する適切な対応措置となっており、文書宣教の効果があったと彼は理解している。このようにハリスは初期日本のキリスト教受容過程において、西欧文化を学ぶための欲求が、非キリスト者に対し主要な動機の一つとして作用したと考えざるを得なかった。彼は日本で日本人に初めての洗礼が、英語と西洋文物を学ぶ目的を持った学生を中心に授けられたことを知っていた[282]。このように、彼はいわゆる近代化に代弁される西欧文化と西洋文物は、キリスト教の福音伝達と非常に密接な関連性を持っていたのである。そして今後も、そのような過程でキリスト教の福音が伝えられると彼は考えた。すなわち、キリスト教の福音と西欧文明の学びは同一線上で行われていくとき、非常に効果的であると考えたのである。このように、ハリスは日本で行われるキリスト教の宣教において、概ね西欧的な近代文物を伴う必要性があると考えた。

したがって、彼の日本宣教には福音と共に、近代化の意識が深く根付いていた。特に日本の福音化は中国と朝鮮、さらに南アジアの進歩(progress)、つまりそれは近代化を成し遂げるために必要不可欠な過程であると考えた[283]。

③社会的な救いの宣教

西欧式近代化に伴う宣教を他の言葉で表現すれば、キリスト教と西欧文物二つの要素による必然的な変化となる。つまり、宣教地で先祖代々伝わる悪習と弊害が残っていれば、キリスト教にはそれを矯正する義務があるということである。特に、ハリスは日本において、キリスト教にその役割を担う必要があると考えた。下記の引用は、ハリスが1909年10月7日、日本プロテスタント教会の宣教50周年を記念する教会に行った講演内容の一部である。ちなみに当時の彼の講演題目は「基督教と社会改良」[284]であった。

---

[281] M. C. Harris, Christian Newspaper in Japan, *GAL*, July, 1881, p.36
[282] M. C. Harris, *Christianity in Japan*, p.34.
[283] ハリスは著書、*Christianity in Japan*の最後の章であるThe Christian Outlookに'If Japan be left unevangelized, this will greatly retard progress in China, Korea, and Southern Asia'と言及し、日本宣教を西洋的近代化論に結びつけて、解釈している。*Ibid*, p.86.
[284] エム、シ、ハリス、「基督教と社會改良」、鵜飼猛 編、『開教五十年記念講演集附祝典記録』、教文館、

先づ私は日本に於る基督教の状態或は一般の世界に於ける基督教の状態をみるならば未だ罪に充ち苦みに充ち貧しきに充ちて居る不完全なる社會に對して心から同情同感を表して居るとは思はれない、印度に生れ給ひし釋尊は苦みある社會の有様をみるに忍ひず、安んじて宮展に居ることが出来なかつた、基督も愛のなき世に生れ給ひし時に之を見るに忍び給はず野に適き給ひました、而して、主の御霊は我にいます故に貧しき者、瞽者、聾者、を救はなければならぬとて救ひの福音を宜べ給ひました[285]

20世紀初頭、プロテスタント教会による宣教が開始されて50年という時間が流れたが、西洋人ハリスの見た東アジアの日本は、まだ罪、苦痛、貧乏に満ちた未熟な社会に見えた。ここに、キリスト教会が果たすべき使命があった。そしてこのことは、イエス・キリストが荒野に進んだ理由とその文脈を同じにすると考えた。すなわち、イエス・キリストが貧しい人、盲人、聾者などの社会的少数者を救う使命を、日本でもキリスト教がなすべき使命と同一視したのであった。ここで言う貧しい人、盲人、聾者は、いわゆる日本国内で代々伝わる社会的な悪習と弊害によって疎外された人々を意味すると考えることができた。彼は、社会的な救いを伴う宣教の重要性を強調しないわけにはいかなかったのである。

そしてハリスは社会的救済を成し遂げるためには、個人の信仰体験における劇的変化が必要であると考えた[286]。すなわち、祈りにより聖霊を求める姿勢が必要なのである。このような個人の信仰が生まれるとき、社会的救済を成し遂げるための宣教活動が成立する。そしてそれが日本社会を変化させることができると彼は確信した。聖霊で満たされたキリスト教が社会へ広がり、変化をもたらす原動力になると考えたのである[287]。それが社会の改善を引き出す原動力、つまり福音であった。これはハリスが個人に向けられた救いに留まらず、社会に向かう救いを目指す幅広い宣教理解を持たざるを得なかった根本的理由となった。しかし、これは厳密に言えば、当時の西欧文物に関する優越的理解を基礎とした、いわゆるオリエンタリズム(Orientalism)[288]の性格とその文脈を共有していると見られる。ここにはキリスト教宣教師という視点のみならず、西洋人としての視点も立ち現れていると言える。したがって、彼の云う社会的救済を求める宣教とは、近代啓蒙主義的な性格もまた含まれているのである。

それ故、ハリスは禁酒運動がキリスト教による社会の道徳的変化をもたらすと基本的に

1910、296-300頁。

[285] 同書、296-297頁。

[286] 同書、297頁参照。

[287] 同書、297頁参照。

[288] これはサイド(Edward W. Said)が東洋を劣等な「他者」として談論化し、東洋に対する西洋のヘゲモニーを確立する機能を行うと主張した「オリエンタリズム」(Orientalism)と同じ脈絡である。E. W. Said, *Orientalism*, New York: Vintage Books, 1979参照。

は考えていた[289]。それほどにキリスト教は倫理的・道徳的側面において、大きな影響力を持っていたと考えた。それ故、彼は米国でキリスト者たちを中心として行われている酒店廃止運動を一つの例にあげることができた。すなわち、米国キリスト教の禁酒運動が社会的救済の性格として理解されており、これを日本人に紹介した。それと同時に日本において、キリスト教を中心とする廃娼運動もまた、ハリスがどれほど社会的救済の性格を重んじたかを示していると言える[290]。以上のように、ハリスは日本を道徳的に変化させ、社会的に変化させることもキリスト教の役割と考えた。特に当時の日本で蔓延していた遊郭を廃止することもまた、キリスト教が先頭に立って取り組んでいく必要があると考え、彼もこの運動に積極的に参加した。

このように日本宣教において、キリスト教は前近代的社会的悪習と病弊などを廃止し、変化させなければならない重い責任を負っているとハリスは考えた。これはハリスが、社会的救済を重視する宣教理解を持っていたからこそ主張できたことである。そしてこのような理解は、彼が日本で教育宣教の必要性を強調せざるを得ない認識をもたらした。

④教育宣教の強調

前述したように、日本プロテスタント教会における最初の洗礼式が、西洋文物を学ぼうとする学生たちを中心に行われたことを、ハリスは経験した。したがって、彼は初期日本宣教の受容過程から20世紀初頭に至るまで、日本人の西洋文物を学ぼうとする高い意欲に注目していた。このような状況を彼は、「宣教の基盤を築くための教育[宣教]の必要性は当面の課題として受けるべきだと認識された。日本の若者たちはその言葉通り西欧科学と言語学習に情熱的にはまっている」[291]と言及し、教育宣教を強調する根拠とした。

先に見たように、日本のキリスト教はいわゆる近代化と同じ次元で理解された。すなわち、キリスト教と西欧的近代化が相互協力の中に密接な関わりを持つことで成立したと考えたのである。それ故、彼はキリスト教の助けにより、日本が近代国家へと成長すると考えた。そしてその方法は、近代式の学校システムを通じた教育宣教を強調することとその文脈を共有していた。事実、日本宣教の過程において、各宣教部は教派ごとに独自の大学などの教育機関を設立していった。ハリスは、このような宣教方法が日本でキリスト教の福音を伝えるとともに、いわゆる西洋式近代化を成し遂げていくにあたって、大きな力を提供すると

[289] 同書、298頁参照。
[290] 同書、298-299頁参照。
[291] M. C. Harris, *Christianity in Japan*, p.56.

考えた[292]。それはまさに日本が他国の宣教現場と区別される特徴だと彼は考えた。すなわち、ハリスは、日本で最も効果的な宣教方法の一つが教育宣教だと考えた[293]。教育宣教に重点を置かない宣教が失敗する可能性が高いことを警告するほど、彼は教育宣教の重要性を強調した。無論、ここで彼が言う教育とはキリスト教精神と共に西洋式近代教育が含まれていることを意味するのは当然であった。それ故、日本政府が運営する一般的な公立学校と比べても、ミッションスクールが遅れを取る理由はないと自信を持つことができたのである。このように、日本では教育宣教を通じ、学生たちが自然にキリスト教に接するようになることで、それによって信仰を持つに到る可能性が非常に高いと考えたのである。

初期の大半の日本宣教師たちは、ハリスのように教育宣教の重要性をよく認識しており、宣教師の私宅に小さな塾を運営するなど、多様な教育が宣教活動に伴って行われていた[294]。したがって、彼の所属するメソヂスト監督教会日本宣教部も、宣教初期から東京の青山学院や横浜の婦人伝道者養成学校、長崎の活水女学校や鎮西学院、そして函館の遺愛女学校などを設立し、教育宣教にかなり力を入れたことが分かる[295]。彼は以上のミッションスクールが継続的に発展できるように勇気づけた。彼は1916年に日韓宣教監督としての最後の任期を終え、メソヂスト監督教会総会へ提出した宣教報告書に次のような主張を述べている。

私は我が[メソヂスト監督教会の]学校が拡張できるように推奨しなければならないと考えている。私たちの宣教局は二つの機関を維持している。両機関とも35周年の記念式を開いた。普通学部(Academy)と神学部(Theological Seminary)、この全てを連合した青山学院(Aoyama Gakuin College)は、日本帝国内で有名な学校の一つである。[青山学院の]日本同窓会はこの[学校の]事業と資機材のために、20万円の寄付を約束した。メソヂスト監督教会は、彼ら[青山学院の同窓]と連合する必要があり、[学校]の発展のために、50万ドルを提供すべきである。他の機関は長崎で順調に運営されている学校[296]である[297]。

ハリスが本国総会に報告しつつ、メソヂスト監督教会の代表的な教育機関の例として取り上げた学校は、東京の青山学院と長崎の鎮西学院であった。彼は日本のミッションスクールと関連して、各学校の同窓をはじめ本国宣教局レベルの支援が行われる程に、教育宣教に相当な強調点を置いた。それほど、日本における教育宣教は効果的な成果をもたらす宣教方法の一つであると彼は考えた。事実として、日本のミッションスクールは日本人に高く評価

---

292 *Ibid*, pp.36-37.
293 *Ibid*, pp.36-37.
294 キリスト教学校教育同盟百年史編纂委員会 編、『キリスト教学校教育同盟百年史』、キリスト教学校教育同盟、2012、26頁参照。
295 メソヂスト監督教会の日本宣教において、初期の教育宣教については山鹿旗之進 編著、「合同に至るまでの日本メソヂスト監督教會」、『合同メソヂスト教会小誌』、n. p.、1923、15-20頁参照。
296 現在の鎮西学院を意味する。
297 M. C. Harris, *QRHarris 1916*, p.14.

されて運営されていた。例えば、ハリスは、メソヂスト監督教会の二つの学校、つまり青山学院と鎮西学院の場合のみを見ても、日本宣教における教育宣教が非常に重要であるということを自覚していた[298]。その理由は、ある意味で直接的宣教手段と言われる教会よりも、間接的宣教手段であるミッションスクールがキリスト教の福音をより効果的に伝えることができるツールとなっていたからである。特に、学校のチャペル時間は、若者が聖餐・洗礼にも積極的に参加できる機会を提供していると彼は考えた。したがって、ハリスは日本宣教における教育宣教の重要性を、宣教初期から一貫して強調することができたのである。

しかし、このようにハリスが教育宣教を強調してきたこととは異なり、彼自身が宣教現場で教育宣教と関連する活動をあげることは容易なことではない。ハリスの宣教活動の中で、教育宣教をめぐる仕事を敢えて言及すれば、次の三つをあげることができるだろう。第一に、函館にて開拓宣教を行っていた時に、彼の妻が自宅で女性たちに対して英語を中心に教えていたことである[299]。これは北海道地域最初の近代的な女学校である遺愛女子中・高等学校の前身である。妻が運営していた教育宣教事業であったので、ハリスとの直接的な関わりは大きくないが、間接的に協力した蓋然性は十分に持っている。第二に、札幌農学校の1・2期生との出会いである。米国(副)領事として公職を兼ねていた函館地域の開拓時期に、彼は札幌農学校の生徒たちを導き、洗礼を授けたことがある。この時彼が指導し洗礼を受けた代表的人物が、まさに内村鑑三、新渡戸稲造などであった。第三に青山学院との関わりである。ハリスは1879年から東京に拠点を置いて移住し、1886年に米国太平洋湾岸へと渡るまで、ずっとこの地域で宣教活動を行なっていった。そして、彼が1916年に引退した後、日本に戻り、1921年に死去するまで東京の青山学院キャンパス内に居住した。この間に彼が青山学院と関連し、間接的に教育宣教の活動を行った蓋然性は存在するだろう。

このように、ハリスの教育宣教と関連した断片的な痕跡、蓋然性を見ることができる。しかし資料を総合的に検討してみると、絶えず日本での教育宣教を強調した彼が、実は教育宣教の現場と密接な関係を結んでいたことを示すことは困難なことである。むしろ彼は日本国内での宣教現場において、教会を中心とする開拓宣教あるいは長老司及び宣教監督として、地方巡回と教会行政に関連する性格の宣教活動を行ってきたと言える。

⑤エキュメニカルな宣教協力[300]

---

[298] *Ibid*, pp.14-15.
[299] 山鹿旗之進 編、前掲書、55頁参照。
[300] 本研究で言及する「エキュメニカルな宣教協力」という用語は、宣教をめぐってプロテスタント各教派同士の協力精神とそれに関する事業などを意味することに限る。

ハリスの日本宣教におけるエキュメニカルな宣教理解を示す端的な例は、まさに1907年の日本メソヂスト教会成立過程と言える。彼はこれに関連した協議で全権委員のような実務者ではなかったが、その過程に積極的に参加・協力した。時に全権委員会の論議過程を日本教会に伝えることも行った[301]。そのように、ハリスは日本メソヂスト教会が成立する過程において、重要な役割を担っていた。特に、メソヂスト監督教会が南メソヂスト監督教会及びカナダメソヂスト教会側と円滑な交渉が進むように、全権委員たちの架け橋としての役割を受け持った[302]。彼はいかなる宣教師よりも日本教会の一致を求めた。特に日本でメソヂスト系教派が全て一致して、一つの教会を形成することが出来るように積極的に支援した[303]。その中でクランストンとレオナルドなどのメソヂスト監督教会側の全権委員は、ハリスの助けを受けて、南メソヂスト監督教会とカナダメソヂスト教会側の全権委員たちと、合同に関する論議を具体的に進めていくことができた。

しかし、メソヂスト監督教会側の立場から見ると、今回の合同運動には必ず解決しなければならない一つの重要な問題があった。それは当時、メソヂスト監督教会の日本と朝鮮の宣教監督として遣わされ、活動していたハリスの身分上の問題と直接的に関係していることであった。要するに三つの教派(メソヂスト監督教会・南メソヂスト監督教会・カナダメソヂスト教会)の日本宣教部が各々行なってきた教会行政組織を合同し、単一教会を成立することはまさに新しい教会行政組織の開始を意味した。すなわち、日本人が導く日本人教会を構成しようと合同を推進していたため、日本人監督が新たに選出されなければならなかった。したがって、既存のメソヂスト監督教会総会で日韓の宣教監督として選出され、日本教会を統括したハリスは必然的に、その監督職を降りる必要があった。言い換えれば、新たに設立される教会の行政において、ハリスの身分は曖昧になってしまう[304]。それ故、新たに成立する日本メソヂスト教会において、ハリスの身分問題はメソヂスト監督教会側で、自ら解決しなければならない重荷のようなものであった[305]。

基本的に1906年7月18日、米国ニューヨークバッファロー(Buffalo, New York)で、三教派の全権委員たちが集い日本教会の合同を正式に可決した[306]。したがって、日本メソヂスト教会の創立総会が数日も残っていないこの時点において、メソヂスト監督教会側から他教派にハリスの身分保証を特別に要求することも不可能であったが、かといって全権委員た

---

301 「ハリス監督談片」、『護教』、1908年6月30日参照。

302 *E. Cranston and A. B. Leonard's letter to M. C. Harris*, May, 19th, 1907; W. R. Lambuth ed., *The Doctrines and Discipline of the Methodist Church of Japan 1907 with Appendix*, p.256-257; 『日本メソヂスト教會第壹總會議事録』、1907、106-107頁。

303 *Ibid*, p.258; 同書、108頁参照。

304 *Ibid*, p.257; 同書、107頁参照。

305 *Ibid*, p.257-258; 同書、107頁参照。

306 澤田泰紳、前掲書、61頁参照。

ちが1904年のメソヂスト監督教会の総会で、日本と朝鮮の宣教監督として与えられたハリスの管轄権を朝鮮のみに限らせる教会法的権限を持ちあわせていることもなかった。このように、メソヂスト監督教会側の全権委員たちはこの問題を解決すべきであったが、数日後には日本メソヂスト教会が成立することを協議したゆえに、この問題を論議することは容易ではなかった。但し全権委員がこの問題をめぐり解決できたことは既存のメソヂスト監督教会から遣わされている日本宣教師たちとの関係だけであった[307]。

結局のところ、ハリスの身分に関する問題は翌年(1908年)に開催される総会において、正式に論議することが妥当であると全権委員は判断すると同時に、当事者であるハリスの意見を聞くことに解決の糸口を見出した。そしてハリスは、メソヂスト監督教会側の全権委員へ、この問題に関する返事を書き送った。ハリスの答えは単純明快であった。つまり、それはメソヂスト監督教会総会から与えられた4年間の日本及び朝鮮における宣教監督としての任務を最後まで順調に仕上げたいとの希望であった[308]。新たに成立する日本メソヂスト教会において、自分の立場が曖昧なものになることを十分に予想はしていたが、かといって自分の身分問題が合同運動に支障を与えてはいけないとの考えであった。自分の地位を考慮することなく、与えられた状況の中で、最善を尽くしたいとの思いをもつ彼にとって、この応答はエキュメニカルな宣教協力に対する積極的な姿勢よって可能な決断であった。

ところが、日本メソヂスト教会総会の5日目(1907年5月27日)、南メソヂスト監督教会の全権委員の一人であるランバス(W. R. Lambuth)が司会をしていた際に、ハリスと日本メソヂスト教会との関係に関する問題が公に提起された[309]。これによりハリスがメソヂスト監督教会の全権委員と相互取り交した書簡が総会書記によって朗読された。この際に日本メソヂスト教会の合同に向けたハリスの書簡は、総会会員たちに感動を与え、本多庸一の提案を受けて満場一致でこの書簡の全文を総会録に添付することが決議された。引き続いて総会13日目の6月7日には、日本のカナダメソヂスト教会側の牧師である平岩愃保によって、ハリスを日本メソヂスト教会の名誉監督として推戴しようという案件が提起された[310]。ここで総会会員の全員が起立して決議し、ハリスが感謝の挨拶を表した。

このようにハリスは、日本メソヂスト教会の一致が自身の地位と状況よりも優先であるという考えを持っていた。したがって、このようなハリスの立場が総会会員に感動を与えることができた。言い換えれば、日本宣教における教会の連合と一致する、つまりエキュメニ

---

[307] *E. Cranston and A. B. Leonard's letter to M. C. Harris*, May, 19th, 1907; W. R. Lambuth ed., *The Doctrines and Discipline of the Methodist Church of Japan 1907 with Appendix*, p.258; 『日本メソヂスト教會第壹總會議事録』、1907、107-108頁参照。
[308] *Ibid*, p.258-259; 同書、109-110頁参照。
[309] 同書、48頁参照。
[310] 同書、89頁参照。

カルを重視する宣教理解を持っていたゆえに、このような名誉監督という職を日本人から与えることができた。

このような彼のエキュメニカルな宣教協力に対する姿勢は1884年、第1回メソヂスト監督教会日本年会が組織された時点でも見ることができる。彼は第1回日本年会が開催された時に、美会各派連合協議会(Central Conference)の実行委員として推薦され[311]、翌年(1885年)の第2回日本年会の時にはマクレイ(R. S. Maclay)と共同名義で次のような決議文を年会に報告した。

第一、私たちはメソヂスト監督教会の日本年会員としてこの国で他のメソヂストと共にいかなる計画を採択するためにも、より親密な交際と相互調和のとれた活動を持つ。
第二、私たちは最も望ましい目的を果たすため、いかなる賢明な努力を尽くし、協力するために備えている。
第三、この報告書の写本は日本内の他のメソヂスト教会の宣教部に発送する[312]。

見方を変えれば、1907年の日本メソヂスト教会成立において、メソヂスト監督教会側の公式的な動きはまさにこの時から始まったと言える。また彼は監督在任中に合同のキリスト教大学(The Union Christian University)を構想し、より効果的な宣教が行われることを望んだ[313]。このような彼の活動と構想などは、何よりも彼がエキュメニカルな宣教協力に対する積極的な理解と姿勢を持っていたので、可能なことであった。事実、彼は20世紀の初頭に入った日本のキリスト教が直面している一番重要な問題の一つはまさにキリスト教界の合同であると考えた。1905年12月、東京の神田青年会館で開催された教役者会では、教会連合、聖書の改訂翻訳作業、教派連合の大学設立、全国連合伝道に関する論議が主に行われた。上記の議題は、概ね教派の連合事業と関連することであった。ハリスはその中でも、全国的にすべての教派が連合して伝道運動に乗り出すということを日本教会の一番重要な急務と考えた。ところが、この宣教が成功するためには、独断的な教派意識を捨てて、大きな枠組の一つでなければならないという意識転換の必要性を主張した[314]。つまり、「大同」というエキュメニカル運動の成功を成し遂げるためには、各教派の「小異」を捨て、犠牲を知る霊的覚醒の態度を持つべきだということであった。

このように、彼は教派を越えた宣教協力という大きな枠組の中で、教派意識にはとらわれず、美会各派連合協議会に積極的に参加することができ、1907年に日本メソヂスト教会が

311 *MJCMEC*, 1884, p.34.
312 *Ibid*, 1885, p.36.
313 M. C. Harris, *QRHarris 1916*, p.9
314 エム、シー、ハリス、「日本基督教界に於ける目下の急務」、『護教』、1906年2月24日参照。

成立することにおいても、監督の権威とは関係せず、犠牲を払う態度を堅持することができたのである

第2節：朝鮮の理解

19世紀半ば以降、東アジアの情勢は次第に西洋列強の開港要求と侵略による混沌の時期であると言えた。特に中国の広い大陸は西洋諸国の侵略と利害関係により、複雑な地域に分割し統治され、このような流れの中で、各国の教会は宣教師たちを派遣、宣教活動を行なっていくようになった。日本も武力を伴う要求によって、強制的に門戸を開放させられ、とりわけ米国内の各教派の宣教師たちが入り活動するようになった。朝鮮も帝国主義という時代の流れの中で、先の中国と日本同様に、強制的に門戸を開放させられた。しかし、中国及び日本と異なっていたことは門戸を開放させた主体が西洋列強ではなく、日本であったという事実である。

1868年、明治維新を断行した日本はすでに米国、英国、フランスなどの西洋列強と外交関係を結んでおり、西洋の多様な文物を受容していた状況であった。ところが、明治維新を断行した過程の中で、一部の階級(士族)が不満を抱くようになったが、彼らの不満を抑えるため、外に視線を逸らす必要があった。同時に欧米帝国と結んだ不平等条約を改正するための方法の一つとして、他国に門戸を開放させる必要性が生じていたのである。ここで朝鮮が重要なターゲットとなったのである。一方でこのような雰囲気と共に朝鮮内でも開花勢力を中心に門戸開放のための気運が益々高まっていた。このような情勢に便乗した日本は江華島にて雲揚号事件を起こし、このような力に基づいて1876年2月27日、12箇条の不平等条約である日朝修好条規、いわゆる江華島条約を締結した。ところが、この過程は20年前、日本が米国によって門戸を開放させられた事件と相当に似ている。すなわち、1854年2月、ペリー(Matthew C. Perry)が黒船を導き、江戸湾に入り、武力を行使した後に、3月末に神奈川条約という不平等条約が締結されたことと形が似ていたのである。朝鮮も日本と同じような過程によって門戸を開放させられた。つまり、日朝修好条規を起点として朝鮮は日本以外にも米国、英国、そしてフランスなどの西洋列強と不平等な外交関係を結ばれ、同時に中国及び日本と同じように西洋宣教師たちの進出を容認せざるを得ない状況に至った。

このような流れを見ると、来朝宣教師たちは朝鮮が門戸を開放した過程の中で、日本が主要な役割を担ったという事実を知っていたのである。同時に当時の西洋宣教師、その中でも米国の宣教師たちの東アジアへの進出過程は、サンフランシスコを出発、ハワイと日本を経て、朝鮮と中国順の航路を介して構成されてきたもので、必ず日本において異質な東アジア

文化に数日間接することができた。この過程の中で、来朝宣教師たちは、必然的にも、朝鮮に関する実情を日本で事前に知ることができたが、そのほとんどの情報は日本人あるいは在日米国人たちの視点と解釈が介在した内容になるしかなかった。

特にハリスは、1874年、メソヂスト監督教会が日本宣教を開拓した当時、派遣された初期の宣教師の中の一人であった。以後10年間、函館と東京を中心に、日本文化と日本人と交流し、1886年からは日本及び朝鮮の宣教監督として選出された1904年まで、米国太平洋沿岸の日本人宣教を中心として活動した宣教師であった。彼はこのような背景の中で、日本と朝鮮の宣教監督に選出され、東アジアに渡った宣教師であった。したがって、ハリスの朝鮮理解及び朝鮮内での宣教理解は、このような時代的な流れと彼の生涯を考慮しつつ見なければならない。

一方、朝鮮と関連してハリスが残した資料は大半が断片的なものである。これは日本と関連して"*Christianity in Japan*"のような単行本を著述したこととは対照的である。したがって、一部の学者の中には、1904年のメソヂスト監督教会で日本及び朝鮮の宣教監督として選出された記録が明らかであるにもかかわらず、ハリスの監督管轄権(supervision)が日本のみに限られていると誤って理解している場合がある[315]。これらの誤解を招くほどハリスは日本と比較して朝鮮に関連する著述が少なかった。ここでは一旦二つの理由をあげることができる。それは第一に、彼の関心が日本に集中していたからである。彼の生涯の中で、相当の時間は日本と関連している。日本の開拓宣教師として派遣され、以来米国に居住する時も、太平洋沿岸の日本人を対象として宣教活動を広げていった。そして1916年にメソヂスト監督教会総会から引退した後は、本国で余生を送ったのではなく、日本行きを決心し、1921年に死去するまで日本で残りの生涯を過ごした。このような生涯を見ても、彼がいかに日本への愛情が格別であったのかを推測することができる。そして第二は、日本に比べて朝鮮に関する豊富な知識を持っていなかったことである。後述においてより詳しく説明するが、彼の朝鮮の理解は概ね日本を経て形成された傾向が強い。したがって、ハリスの朝鮮

---

315 代表的に米国UCLA教授である玉聖得は、ハリスが日本のメソヂスト監督教会の監督として朝鮮を統括し、彼は朝鮮宣教師ではなかったと誤って理解している。(玉聖得、『다시 쓰는 初代 韓國敎會史』(書き直す初期の韓国教会史)、ソウル : セムルキョルプラス、2016、99、123頁参照)しかし、ハリスは1904年に催されたメソヂスト監督教会総会で公に日本及び朝鮮の宣教監督として選出され、日本メソヂスト教会の機関誌である『護教』の1910年12月17日の記事によると、「ハリス監督の住所は京城と定められた」という記録で、彼の居住地が京城に変わることが分かる。また、実際に日本が朝鮮に居住した外国人を監視するたち、1912年に調査・記録した「朝鮮在留歐美人名簿」(Directory of Foreign Residents in Chosun)にも、ハリスの名前と「京城府西部貞洞」という居住地、そして「宣教師」という職業などが明確に記され、ハリスの主な居住地がその頃にソウルにあったことが分かる。それ故、玉聖得が彼の著書である『다시 쓰는 初代 韓國敎會史』(書き直す初期の韓国教会史)に「ハリス監督は韓国宣教師ではなかった」と記したところは必ず訂正する必要がある。*JGCMEC*, 1904, p.353, 624;「朝鮮に於ける美以派伝道の二十五年」、『護教』、1910年12月17日 ; 小川圭治・池明観 編、前掲書、111頁参照 ;「朝鮮在留歐美人名簿」(Directory of Foreign Residents in Chosun)、前掲書、96-97頁参照。

(朝鮮人)理解と朝鮮に関する宣教理解は、米国と朝鮮などで刊行されたキリスト教の関連会議録及び雑誌などを通して、その断片的な記録から検討しなければならない。

(1)一般的理解(政治・経済・文化などの社会的な要素)

①日本による啓蒙(近代化)の必要性

ハリスは1904年、メソヂスト監督教会総会で日本と朝鮮を同時に管轄する宣教監督として選出された。その冬には東アジアへ渡り、本格的な監督職を担い始めた。ところが、彼が赴任した時期は、朝鮮の主権がますます日本の手中に入っていく時であった。赴任した翌年である1905年にはいわゆる乙巳保護條約という第二次日韓協約によって、朝鮮は日本に外交権を奪われ、1907年には日韓新協約によって軍事力を奪われた。このようなプロセスを経て、1910年には朝鮮のあらゆる主権が日本に奪われ、植民地となる時代的状況を迎えた。

以上のように、宣教監督として東アジアに渡ってきたハリスの赴任は、朝鮮の植民地化が進んだ時期と重なっていたのである。それ故、彼は日本帝国主義が朝鮮に対し干渉し、かつ圧迫した過程を経験できる時代の中に生きていた。しかし、日本による朝鮮の侵略過程を目撃し、活動したにもかかわらず、彼は朝鮮側の立場ではなく、日本による朝鮮支配と併合を擁護する立場に立っていた。なぜならば、彼は日本の支配によって朝鮮の近代化が可能となる好機と考えたからである[316]。そしてハリスは監督となった後に、東アジアへ渡り視察した朝鮮の姿は、未だ未開文明の束縛によって結ばれていた存在であった[317]。以上のような朝鮮の文明開化は、1868年の明治維新によって、かつての日本が経験した近代化と類似した事柄であると考えた。それ故、フィリピンと米国、そしてインドと英国の間で行われた場合のように、彼は朝鮮と日本も同じ観点で理解出来ると考えた[318]。つまり、ハリスにとって日本は朝鮮を啓蒙させる近代化の指導教師であった。したがって、この頃勃発した日露戦争の戦痕も、日本人たちが平和と文明の範囲の中で、選ばざるを得なかったことだと見なした。以上のように、ハリスは日本がかつて西欧の近代文明を受け入れた事実を顧みることで、朝鮮は西欧列強と同じ高度な発展を成し遂げることができると考えた。そしてこの発展は、日本という仲介を通して朝鮮にもたらされると理解している[319]。

以上の理解に基づき、彼は日本の朝鮮支配をめぐるいわゆる文明開発論の立場に立って

---

316 'News Calendar', *the Korea Review*, June, 1906, p.237-238.
317 「ハリス監督の対韓意見」、『護教』、1910年1月15日；小川圭治・池明観 編、前掲書、385頁参照。
318 同書、385頁参照。
319 同書、385-386頁参照。

いた。たとえ愛国心を根拠とする朝鮮内の反発を否定しようとも、日本による朝鮮の近代化を果たす過程において、必要不可欠なことだと考えた。このような考え方に捉われていたので、ハリスの朝鮮理解は必ず日本との関係において考えざるを得なった。つまり朝鮮が、日本から一方的な援助を受けるべき存在として認識されていたのである。以上のハリスの理解がより露骨に表れるのが、日韓併合に当たり、日本メソヂスト教会の機関誌である『護教』に寄稿した以下の記事である。

余が韓国にありて人民に告ぐる所は、宜しく日韓両国と接近し茲に新国を建設すべしとの事なり、殊に日本が韓国の指導者たるは天の摂理と謂ふべし、日本の助力を排斥するは韓国のために決して策の得たるものにあらず、余は福音の立場より旧来両国疎隔の情弊を打破し精神的に合同するを似て韓国の利益なりと思ふなり、余は到る処此の調和の福音を説くに努め居れり、余の信ずる所にては是れ神意にして恐らく此政網を措て韓国指導の良策あるべからず、故に余は如何なる反対あるも日韓両国民の間に此主義を説いて止まざる決心なり、要するに一方圧制の政策を打破し一方韓国孤立の窮境に陥るを未然に救済し両国合同して韓国の福利を増進するは目下韓国に対する政策の上乗なるものなりと確信す[320]。

ハリスは、日本が朝鮮を指導することは天の摂理だと言及した。それほど日本は、いまだ文明未開の中にある朝鮮を解放する責任を負うべきだと考えた。したがって、上記のように、日本と朝鮮両国が合同に至るべきであると強く主張することができた。以上のように、ハリスは必ず朝鮮が日本の助けにより、啓蒙化・近代化の道に進むべきだと考えた。換言すれば、日本はまさに西欧文物を受け入れる媒体となるということであり、それが朝鮮のためだと信じた。彼はこのような立場を終始堅持したので、彼は引退した後も、変わらず朝鮮が日本によって近代化され、啓蒙されると信じた。例えば、1919年は、3・1独立運動が起き、全国的に排日及び民族運動が盛んとなった時期であった。しかし、彼はこれまでも朝鮮という国の水準が日本の支配によって向上したと信じた[321]。また1907年、当時のハワイ・ホノルルで創刊された在米朝鮮人の日刊紙である『国民報』に「ハリス監督は朝鮮人と日本人をはじめ、ただ東洋文明のため、働く…」と記されているように、彼は朝鮮が日本の援助により発展する文明、つまり近代化の道に入ることができたと考えた。

無論、東アジアの日中韓三ヵ国の中で、日本が最も早く積極的に西欧の文物を受け入れ、西欧的近代化を成し遂げたのは否定できない事実である。しかし、日本の指導と関与によって、朝鮮が近代化を果たし、啓蒙されるという論理はいわゆる日本の官学者たちが主張した植民主義史観の流れと同じである。その中でもとりわけ典型的であるのが停滞性論である

[320] 同書、385頁。
[321] 韓国基督教歴史研究所　編、*The Journal of Mattie Wilcox Noble 1892-1934*、ソウル：韓国基督教歴史研究所、1993、279頁参照。

と言える[322]。したがって、植民主義史観と考えを主張したハリスの朝鮮理解に対して、朝鮮人たちがいかなる反応を見せたのかはよく推定できる。以上のように、ハリスが朝鮮理解をめぐり植民主義史観、その中でも停滞性論との関係は、彼の生涯と関連付けて検討する必要がある。すなわち、長年の日本との関わりゆえに、生涯を通じて自然と形成されていったと考えられる。

但し、ここで注意すべきは、彼が日本による朝鮮の近代化あるいは啓蒙化を支持したことは朝鮮と朝鮮人に対する憎悪や嫌悪によるものではないということである。確かに彼は日本によって朝鮮が近代化され、朝鮮人たちが啓蒙されると確信した。以下これに関連するハリスの言及である。

余は韓国の更新を望むの外に他意なき事前述の如くなるが、試に其意を布衍せんに、日本が韓国経営のために費したる資金は莫大にして此の一事を似ても韓国は日本を徳とせざるべからず、是外教育の制度を設け病院を開設するの類は皆日本が韓国を思ふの余りに出でたるものにて究竟の目的は韓国の更新にありとせざるべからず、更に司法部又は監獄の制度を見んに、固より日本は主権の地位にありと云へども韓国人も又提携して其局に当り居るにあらずや、余が合邦と云はずして合同と云ふ所以は玆にあり、而して日本が大韓政策を行ふに当り米国の此律賓に於ける経験、又は英国の印度に於ける経験或は日本の過去四十年に於ける経験は皆韓国の更新に資する大なるものにて之を思ふて余は韓国の為に日本の如き指導者あるを感謝せざるべからず[324]

ハリスは朝鮮のために日本が存在するという事実を疑わない。日本は明治維新を通して西欧文物による近代化を果たしたと考えられていたので、朝鮮も日本の協力を得て、速やかな近代化を成し遂げることができるとの単純な論理に捉われていたのである。無論、晩年を日本で過ごしたことのみを見るとしても、日韓両国の相対的比較の中で、彼の愛情は日本へ偏っていたが、彼が心から望んだことは朝鮮と日本の同等な発展であった。それ故、彼は日韓両国に関して、「望むらくは余が日本に対する忠義心は韓国に対して尽くさんとする余の奉仕に不都合なからんことを」[325]と言及することができたのである。しかし、朝鮮の近代化を果たすための方法が、朝鮮人の拒否感を起こす日本の論理に偏っていたのである。すなわ

---

322 停滞性論とは、当時、日本の官学者たちが主張していた植民主義史観の流れで、1902年に朝鮮を訪ね、「朝鮮の経済組織と経済単位」という論文を書いた経済史学者である福田徳三や喜田貞吉や四方博などによって言及された。これは韓国において、歴史発展の後進性を強調しながら、日本の朝鮮侵略と支配が当時の朝鮮社会を発展させるための行為として正当化した典型的な日本側の理屈であった。李萬烈、『韓國近代歴史學의 理解』(韓国近代歴史学の理解)、ソウル：文学과知性社、1981、282-285；『ハリス』、138頁参照。

324 「ハリス監督の対韓意見」、『護教』、1910年1月15日；小川圭治・池明観 編、前掲書、385頁。

325 M. C. ハリス、「日韓両国に関する誤解を弁ず」、『護教』、1908年10月24日；小川圭治・池明観 編、前掲書、384頁。

ち、彼の朝鮮理解は相手(朝鮮と朝鮮人)を配慮しない一方的な見方であった。

②朝鮮に対する実質的支配の認定

ハリスは朝鮮国内でも重要人物として待遇された宣教師であった。晩餐や会議などでも、外交官あるいは政治家のように手厚いもてなしを受けた。無論、これは彼がメソヂスト監督教会に派遣された「監督」(Bishop)という身分のためであると推定できる。当時、米国で、最大教派の一つであるメソヂスト監督教会の監督という身分として渡り、朝鮮と日本宣教部の財産と人事を統括したハリスは19世紀半ば以降、日本の開拓宣教師として東アジアに入り活動した初期とは周りの状況は大きく変化していた。特に監督として赴任した当時、朝鮮のメソヂスト監督教会は約8000人の信徒と培材学堂や梨花学堂などの教育機関、そして各地の医療機関などを運営し、朝鮮における教会の主な教派として成長していたが故に、朝鮮統監府(朝鮮総督府)も彼を軽く待遇することができなかった。さらに、彼は米国国籍の西洋人であった。したがって、朝鮮で主に接した人物たちは、自然と朝鮮統監府(朝鮮総督府)の人事など指導者レベルに限られる場合が多かった。代表的な人物がまさに朝鮮統監府の初代統監であった伊藤博文であった。ハリスは伊藤博文に会った場で以下のような言葉を交わした。

明治三十九年の二月に故伊藤公爵が統監として赴任せられたが統監は熱心に半島の敎化に力を盡し、當時の日本及朝鮮メソヂスト敎會の監督であつたエム、ジー、ハリス氏とは殊に親密の交際をなし、互に襟懷を披瀝して意見を交換したのであつたが、一夕ハリス氏と會談中に公爵の言として「政治上一切の事件は不肖之れに任らんも、今後朝鮮に於ける精神的方面の啓蒙敎化に關しては、冀くは貴下等其任に當られよ、斯くてこそ朝鮮人民誘導の事業は初めて完きを得べし」との一節は今も人々の傳へ知る所である。尚伊藤統監は平壤にある日本メソヂスト敎會の敎會堂建築の際には金一萬圓を寄附して同事業を援助し、其他にも京城にある朝鮮人所屬の中央基督敎青年會の事業を維持する爲めに毎年金一萬圓を下附して奬勵する所があつた[326]。

ハリスは当時、朝鮮国内の最高権力者である伊藤博文から、朝鮮の宗教上の教化を頼まれるほどに彼と親密な関わりを持った。以上のような両者の関わりと当時交わした言葉は、以後朝鮮総督府が朝鮮支配について定期的に発行した英文報告書にも収録され[327]、当時の多

[326] 朝鮮總督府 編、『朝鮮の統治と基督教』、京城：朝鮮総督府、1921、6頁。
[327] Sainosuke Kiriyama, ed., *Annual Report on Administration of Chosen*(以下*ARAC*) *1924-1926*, Keijo: Government-General of Chosen, 1927, pp.108-109; Foreign Affairs Section, ed., *ARAC 1930-1932*, Keijo: Government-General of Chosen, 1932, pp.87-88; Foreign Affairs Section, ed., *ARAC 1932-1933*, Keijo: Government-General of Chosen, 1933, pp.89-90; Foreign Affairs Section, ed., *ARAC 1934-1935*, Keijo:

くの人々が知るほどに有名であった。伊藤博文と親密な仲であった彼は、統監府などが主催する公的な場に頻繁に招かれ、朝鮮で居住する日本人高官及び外交官たちと交わった。朝鮮のメソヂスト監督教会(監理教会)を統括する監督であり、朝鮮国内の最高権力者であった伊藤博文と親密な関わりが持っていたゆえに、時にハリスは朝鮮統監府(朝鮮総督府)などが主導する公式な場に招かれ、貴賓のようにもてなされた。特に、ハリスはカトリック教会と聖公会などの主教と共に、キリスト教界の代表的人物として認識されていた[328]。もちろん、かつて彼が関わった日本人たちと、公的な場に参席することができたのは事実である。しかし、いわゆるメソヂスト監督教会、聖公会、カトリック教会の指導者の3人が「3人のビショップ」[329]と呼ばれたことを考慮すると、ハリスの監督としての朝鮮国内における活動が、日本人高官と共に行われたことは否認できない。

一方で、彼は朝鮮統監府と高位官僚を積極的に支え、時折彼らの立場を擁護する態度もとった。彼は1909年から1910年まで、第2代統監として赴任した曾禰荒助に対して「護教」に以下の意見を披瀝した。

> 或る一部にては曾禰統監が宣教師に対して冷淡なりとの批評あれども事実は必ずしも然らざるなり、若し然る傾向ありとせば是れ曾禰統監と伊藤公との比較論にして偶ま両者の正確の相違を示すものたるに過ぎず、統監は決して局量の狭き人にあらず、韓人に対しても多大の同情ある事は余の保証する所なり[330]

以上の引用文より分かるように、一部の宣教師たちが第2代統監として赴任した曾禰荒助に対して批判的な立場を取っていたとき、彼は曾禰荒助の立場を擁護し、統監府の政策を積極的に支持する立場を披瀝した。

一方、ハリスがこのような日本側の指導者との縁で朝鮮をめぐって話し合うことができたのは、日本が朝鮮を支配していた当時の状況を理解していたがゆえに可能であった。すなわち、朝鮮宣教を行うためには、朝鮮の実質的な主権を持っていた日本側の協力が必要不可欠であった。その中でも代表的な人物が伊藤博文であった。彼はとりわけ伊藤博文を通して、朝鮮国内の宣教が順調に行われると考えた[331]。実際に伊藤博文は、1907年にメソヂスト監督教会朝鮮宣教部が東大門に医療事業のための敷地を獲得する過程において、朝鮮政

Government-General of Chosen, 1935, pp.104-105；『ハリス』、147頁参照。

[328] *Mutel's Diary*, 1907年10月18日；Gustave Charles Marie Mutel、『뮈텔 주교 일기 4』(ミューテル主教の日記4)、韓国教会史研究所　訳、ソウル：韓国教会史研究所、1998、193-194頁参照。

[329] *Mutel's Diary*, 1907年10月18日；Gustave Charles Marie Mutel、『뮈텔 주교 일기 4』(ミューテル主教の日記4)、韓国教会史研究所　訳、ソウル：韓国教会史研究所、1998、193-194頁再引用。

[330] 「ハリス監督の対韓意見」、『護教』、1910年1月15日；小川圭治・池明観 編、前掲書、386頁。

[331] M. C. ハリス、「日韓両国に関する誤解を弁ず」、『護教』、1908年10月24日；小川圭治・池明観 編、同書、384頁参照。

府に圧力を与えることなど、絶対的な権力を持っていた[332]。ハリスは以上のような過程を知っていた。すなわち、伊藤博文をはじめ日本の高位官僚が朝鮮内で及ぼした影響力の詳細を知っていたわけである。それ故、彼は「殊に日本が韓国の指導者たるは天の摂理」[333]という理解を一貫して維持することができ、その理解に基づき、朝鮮国内で居留する日本人の高位官僚との結び付きを強めることができたのである。実際に彼は、「冷静なる批評家には余の所説余りに楽天的にして潤色に過ぎたるの観あるべし、余は忠誠の心を似て韓国に奉仕せり、而して個人的に伊藤公其他の高官と面晤し韓国の為めに弁ずる所ありたり」[334]、または「日本の助力を排斥するは韓国のために決して策の得たるものにあらず」[335]と言及し、日本側の高官たちとの出会いを自ら合理化させた。これがまさに朝鮮のためだと彼は堅固に信じていたのである。以上のように、日本の高位官僚たちとの親密な交流は日本の実質的朝鮮支配を認める理解の枠のもとで、行われたと考えられる。

③日本による合同、そして併合の必要性

朝鮮が日本に主権を奪われる過程において、ハリスは朝鮮人を刺激する主張を展開していった。その中で、朝鮮が日本の植民地となる1910年の日韓併合をめぐり、彼は日本側を支持していた。これについては先にも検討したように、朝鮮が日本によって、近代化の道に啓導されるという確信を持っていたからである。

或る宣教師に逢つたらこんなことを話して居た、或は日本人と朝鮮人との間に軋轢を生じ、遂に某理事官に訴へて其の裁判を乞ふた、ところが結局朝鮮人の勝利に帰したので其の朝鮮人は大に喜び若干の金を包みて理事官の許に持ちて往つた、すると理事官は大喝して其の金を斥けたので、其の朝鮮人は大に驚き怪しみつつ、之れを其の宣教師に話したとの事であつた。日本人官吏の公正厳格なるやり方はやがて次第次代に彼等韓民に善良なる感化を与ふることであらう、予の切望に堪えざるは日本の人々公私の別なく、正義と愛とを以て彼等に対し、所謂恩威併せ至る云ふ態度で、彼等韓民を開導して貰ひたいものである。日本帝国が後楯となりて韓国の政治に干渉するてふことは、彼等韓民殊に青年輩に非常なる刺激を与へたやうだ、之れは彼の国の将来にとりて甚喜ぶべきことであらうと思ふ[336]。

以上の引用文は、日本メソヂスト教会の機関誌『護教』が1906年にハリスの言及を整理

---

[332] *M. C. Harris' letter to John F. Goucher*, Octerber, 14th, 1907.
[333] 「ハリス監督の対韓意見」、『護教』、1910年1月15日；小川圭治・池明観 編、前掲書、385頁参照。
[334] M. C. ハリス、「日韓両国に関する誤解を弁ず」、『護教』、1908年10月24日；小川圭治・池明観 編、同書、384頁。
[335] 「ハリス監督の対韓意見」、『護教』、1910年1月15日；小川圭治・池明観 編、同書、385頁。
[336] 「ハリス監督談片」、『護教』、1906年6月30日；小川圭治・池明観 編、同書、382頁。

し、掲載した内容の一部である。1906年といえば、朝鮮がすでに日本に外交権を奪われ、主権も失っていた時期であった。当時ハリスはある同僚宣教師から朝鮮人をめぐる話を聞き、朝鮮が日本によって必ず導かれる必要があると確信した。これはいわゆる日本による朝鮮の「文明啓導論」だと言えるだろう。以上のように、ハリスが当時理解していた朝鮮社会と朝鮮人たちは不正と腐敗に陥り、正しい倫理意識が欠けていると考えた。したがって、不正と腐敗が蔓延していた朝鮮社会と朝鮮人に正しい倫理観を確立させる必要を、彼は切に感じていたのである。そして朝鮮を正しく啓蒙するためには、日本の役割が必要不可欠であると考えた。彼は日本人が公私の区別を為し、公平に朝鮮人と接する確信を持っていた。それ故、日本が朝鮮の政治に干渉することさえ否定的に捉えることはなかったし、今後の朝鮮のためには、むしろ必要なことであると考えた。以上のような「文明啓導論」の論理は、以後も継続して主張された。

ところが、ハリスが「文明啓導論」を主張した究極的な目的は、まさに朝鮮と日本両国の同等な発展であった。とりわけ、朝鮮併合の雰囲気が盛んとなった1910年頃には、彼はためらうことなく日本側の立場に立ち、朝鮮人を刺激するような発言を度々行った。宣教師であったゆえに、日本の朝鮮併合問題を彼はキリスト教用語を用いてその論理を展開した[337]。

また、ハリスは主張の論旨を見てみると、典型的な日本贔屓の立場に立っていた。ところが、ここで注目すべきことは、まさに日韓関係を構成する形態論である。すなわちハリスは「合併」あるいは「併合」という表現よりも、「合同」という表現を用いた[338]。彼は「韓国の更新」[339]というレベルで、合同という表現をもって言い表したわけである。この間、日本が朝鮮のため、多額の財政を投資したが、これだけを見ても、朝鮮の発展は日本のおかげであると考えた。その他近代的な教育制度の設置や病院の開設など、朝鮮の近代化に助力する日本の財政投資が、ハリスの視点からは非常に良き影響を及ぼしていると映ったのである。さらに、一部の朝鮮人たちが日本に協力する様子を見せたことは、彼が日本と朝鮮両国の合同論を支持するなかで、肯定的要素として作用した[340]。以下彼の言及である。

日韓は新基礎の上に合同すべし而して日本は誠実に韓国民の為めに指導し宣教師も亦これと協力して教化の実を挙げ、韓民は之れに順応して興国に尽くせば新韓国は茲に出現すべし、余は韓国の将来に対して悲観するの理由を見ず、両国の交際は益す友情的になりつつあり、地方に赴きて余の深く感じたるは日韓両国民が相接近して隔意なく交際せることなり、余は今後も両国民の間に協力一致の精神を失はず相提携して韓国の福利を図らん事を熱望して止まざるなり、之を要するに宗教家として余が韓国経営の為に貢献

[337] 「ハリス監督の対韓意見」、『護教』、1910年1月15日；小川圭治・池明観 編、同書、385頁参照。
[338] 同書、385頁参照。
[339] 同書、385頁。
[340] 同書、385頁参照。

せんと欲するは善男善女を造るにあり、而して是れ主義よりするものにて政策にあらず、余は韓国に対して小策を弄するものを戒む、宜しく根本の問題に触れ韓国の社会を改善する事に力を致すべきなり[341]。

俯瞰的に見ると、併合と合同は大きな差はない。しかし、彼にとって「合同」という用語は日本朝鮮両国の相対的関係というニュアンスが強い言葉である。一方で「併合」とは強制ないし主従関係を伴うニュアンスを持つ言葉である。つまり、上記の引用文で見たように、政治的意味合いを排除し、キリスト教的見地において必要なことであった。先の引用文で、彼が「天の摂理」という用語を用いたことだけを見ても、以上のような特色が容易に推測できる。とりわけ、朝鮮と日本の合同を神の御旨と解釈し、これに適用しようとした。

しかし、朝鮮と日本の関わりを「合同」という用語で表現した彼の立場はあまり長くは続かなかった。翌年1911年の『護教』に寄稿した文において、ハリスは「併合」という用語に換えて、日韓関係について論じているからである。彼は、「併し併合は政治上の變動に止まり…政治上の變革を平和の裡に成立せしめたことは感服の至りである」[342]と言及し、1年前の「合同論」もしくは「合同政策」を主張した自分の立場を翻し、「併合論」の立場に変更した。そして彼は、「米人の立場より日本と朝鮮とが親密の態度を保つを觀るは大に滿足するところである」[343]と第三者(米国人)の立場から、朝鮮が日本へと併合された事実を積極的に支持する立場を展開した。

彼の立場は、なぜ翌年1911年に「合同論」から「併合論」へと言葉を変えたのか。ここでは彼の立場を変えた事件に注目すべきである。すなわち、ハリスが日韓関係において、いわゆる「合同論」を主張したのは、日韓併合条約が発効される約7ヶ月前の1910年1月であった。そして彼の立場が「併合論」に変わり、新聞誌上に公開されたのは、条約が調印され発表された後約8ヶ月が経った1911年4月のことである。以上を考慮すれば、日韓併合条約が結ばれた事件が、既存の「合同論」を修正させたと言える。さらに、彼は日韓関係において、典型的に日本の論理を支持した人物であった。彼は、日本政府の論理によって朝鮮を理解した故に、「合同論」が「併合論」へと変化したことは大して不自然なことではない。

無論、4ヶ月後の1911年8月に掲載された『護教』の記者との朝鮮に関連するインタビューの中で、ハリスは「日本人が併合といふ事を征服と云ふやうな意味で用いて居るが朝鮮人は之を好まない、私は寧ろ協同とか合同とか云つた方がよいかと思ふのである」[344]と言及し、併合という表現に否定的な意味があると認めたこともある。しかし、彼が「協同」ある

---

[341] 同書、385頁。
[342] エム、シー、ハリス，「英米所見」、前掲書、1911年4月1日。
[343] 同書。
[344] 「ハリス監督朝鮮談」、『護教』、1911年8月26日；小川圭治・池明観 編、前掲書、390頁。

いは「合同」という表現を改めて使用しようとしたのは、単純に朝鮮人の反日感情を治めるための苦肉の策に過ぎなかった。

以上のように、彼の見た朝鮮は、日本と同等の立場で一つになる「合同」の段階を越えて、否応なく日本に合併される必要がある非近代化の国家、未開の国であった。したがって、日本の朝鮮に対する実質的支配を認めた彼の理解は、合同論を経て併合論に至る論理的展開が存在していたことが分かる。

(2)宣教理解

①エキュメニカルな宣教協力

ハリスは、日本と同じように朝鮮でもエキュメニカルな宣教協力方針に立脚して活動した。彼がエキュメニカルな宣教協力に対する肯定的理解を持っていた基本的理由は、まさに宣教部の間の「エネルギーの無駄と重複を避けるため」[345]であった。一方、米国北長老派教会(Presbyterian Church in the U. S. A.)の1906年の宣教報告書によると、「メソヂスト教会と共に連合に向かう特別な趣旨の運動は、メソヂスト監督教会のハリス監督によって提案され、宣教師たちが大きな熱情を抱いて着手した」[346]という内容報告が記されている。北長老派教会の宣教報告書に言及されているとおり、宣教地でハリスが行なったエキュメニカルな宣教協力は驚くほど推進力があった。他教派の報告書に記されているからこそ、単なる誇張とは言えないまぎれもない事実であった。これはハリスの宣教活動とそれに基づくエキュメニカルな宣教協力に対する理解ゆえに可能なことであった。

事実、彼のエキュメニカル精神は幼年時代にまで遡ることができる。ハリス本人はメソジスト教会に通っていたが、彼の両親はバプテスト派に通いながら、信仰生活を守っていた[347]。これを見れば、ハリスのエキュメニカル精神の根は、教派を区分することにおいて排他的ではなかった幼年時代の家庭環境にある。このような環境の中で、ハリスは他教派に対して寛大であり、好意的な姿勢を育んだ。子どもの時から自然に身につけたエキュメニカル理解は朝鮮宣教を理解し活動することにおいてもよく表れた。

1905年、ハリスが来朝した当時は、朝鮮の教会において、エキュメニカルな宣教協力が盛んとなっていた状況であった[348]。長老派教会の4宣教部(Presbyterian Church in the U.

---

[345] M. C. Harris, *QRHarris 1908*, p.18.
[346] *The Annual Report of the Board of Foreign Missions of the Presbyterian Church in the United States of America*, 1906, p.237.
[347] 倉部義郎、前掲書、2頁参照。
[348] 韓国基督教史研究会、『韓國 基督敎의 歷史Ⅰ』(韓国基督教の歴史Ⅰ)、209-213頁参照。

S. A., Presbyterian Church in the United States, Presbyterian Church of Victoria, Presbyterian Church in Cananda)とメソヂスト教会の2宣教部(Methodist Episcopal Church, Methodist Episcopal Church, South)が協議会を結成し、朝鮮福音主義宣教部公議会(the General Council of Protestant Evangelical Missions in Korea)を結成したのも、その年のことであった[349]。また、同年長老派教会とメソヂスト教会の英文機関誌が*the Korea Mission Field*で、そして翌年1906年には『キリスト新聞』という表題で協同で発行するほどに朝鮮の教会内におけるエキュメニカルな宣教協力事業が盛んになっていた時期であった。以上の状況下で、ハリスはメソヂスト監督教会朝鮮宣教部の指導者として赴任したのである。したがって、先に言及したように、彼の赴任で朝鮮宣教のエキュメニカルな展開が更なる勢いを得たことは事実である。

このことはハリスが来朝し、初めに主宰した1905年の第1回メソヂスト監督教会朝鮮宣教年会において確認できる。この年会において、朝鮮の各宣教部との連合事業をめぐる重要なテーマが論議された。とりわけ、宣教年会4日目の6月24日、メソヂスト教会と長老派教会の宣教師たちは、個別に朝鮮の教会の教育事業に関する連合問題を論じるために、貞洞第一教会に集った[350]。会議後、メソヂスト監督教会側は、南メソヂスト監督教会と長老会側と共に論議された議題を当時開催されていた宣教年会に報告し、これを基礎に年会員たちの共感を得て、関連委員会を宣教年会の下に組織した[351]。そして、翌日である26日にバンカー(D. A. Bunker)宣教師宅において、メソヂスト教会と長老派教会の2回目の会議が開かれた。そしてより一層具体的で現実的なエキュメニカル事業の論議が行われた[352]。

このとき、ハリスがこの会議に参加し、メッセージを伝え、議長を務めた[353]。そしてこの会議を母体として、朝鮮福音主義宣教部連合公議会(the General Council of Protestant Evangelical Missions in Korea)という朝鮮のエキュメニカル機関が設立された。当時ハリスが、この会議で伝えたメッセージの具体的な聖書箇所と内容を特定することはできないが、参加者であった長老会側のムーア(S. F. Moore)の報告から[354]、その時の状況を推測できる。ハリスは日露戦争の最中に満州地域を訪ね、ある日本人の将校と話し合った。その時の対話の一部を在朝メソヂスト教会と長老派教会の宣教師たちが共に集まり、エキュメニカル事業に関して論じていたところ一つの例え話を用いて説教した。その例え話とは、個人

---

349 白樂濬, 前掲書, 399頁参照。
350 'Union', *KM*, July, 1905, p.119.
351 *OMKMC*, 1905, pp.20-21; S. F. Moore, 'An Epoch-Making Conference in Korea', *Missionary Review of the World*(以下*MRW*), September, 1905, p.690 ;『ハリス』、185頁。
352 *Ibid*, 1905, p.20; 'Union', *KM*, July, 1905, p.119 ; 同書、185頁。
353 *Ibid*, 1905, p.20; S. F. Moore, 'An Epoch-Making Conference in Korea', *MRW*, September, 1905, p.690 ; 同書、185頁。
354 S. F. Moore, *Ibid*, p.691 ; 同書、185頁。

がいかに優れた能力を持っていても、合同して一つにならなければ、その能力は十分に発揮できないとのことである。さらに彼は宣教で朝鮮の教会が「イエス・キリスト」の名によって連合すべきだという考えを主張した[355]。会議において、彼は絶えず協力の重要性と必要性を強調し、速やかに朝鮮の教会が一つになるように切に願った。会議の中でハリスは以下のように発言した。

私は朝鮮のメソジスト信徒とその他のあらゆる教派の兄弟たちが協力の利益を追い求めるように、願う。私たちができる最善のことは讃美歌、キリスト教の文書、定期刊行物、教育、医療、社会福祉、そして福音伝道に関するすべてのことを一つにすることである。最後、そして最善は土着教会の信徒たちが連合することである。もし、我々の主が朝鮮におられると、これは成し遂げられる。なぜ、主の不在の中で、根本的ではない相違点を継続しようとするか。土着教会の信徒たちは皆一つであり、宣教師たちも一つである。神は各々別れている者たちがないように、連合される方である[356]。

ハリスは自分に与えられた機会を活用し、連合の重要性を強調し、朝鮮国内の各教派の間で円滑な意志の疎通が行われることを期待した。当時、宣教部代表としてこの会議に参加していた他教派の宣教師も、エキュメニカルな宣教協力の重要性を強調していたハリスの熱情を高く評価した。当時、会議に参加した長老派のゲイル(James S. Gale)は、「ハリス監督は私たちに協力という言葉で朝鮮に向かう最高のメッセージを伝えてくださった。[宣教]事業の多様なあらゆることにおいて、それ[協力]が満ち溢れるように！主は真実に主の僕たちが協力を希望していることをご覧になる」[357]とハリスのエキュメニカルな宣教協力方針を非常に高く評価した。ゲイルと同じ長老派の宣教師ムーア(S. F. Moore)も、エキュメニカルな宣教協力事業を強調したハリスを高く評価した[358]。

上述のように、他教派の宣教師にとって、ハリスの存在は朝鮮でのエキュメニカルな宣教協力を進めていく過程において、必要不可欠な存在であった。以上のように、ハリスのエキュメニカルな宣教協力方針を高く評価する他宣教部の態度は宣教師各々のレベルを乗り越え、宣教部レベルの公的な表明と評価に至るほどであった。例えば、長老派教会の宣教部はハリスを「全能な神の啓示」と表現するほど、彼のエキュメニカルな宣教方針を高く評価した[359]。うまくいかなかった朝鮮でのエキュメニカルな宣教協力事業が彼の尽力により、素晴らしい結果をもたらすことができたと評価したのである。このようにハリスは、朝鮮の教

[355] *KM*, July, 1905, p.122；同書、185頁。
[356] M. C. Harris, *Ibid*, p.123；同書、186頁。
[357] J. S. Gale, *Ibid*, p.121；同書、186頁。
[358] S. F. Moore, 'An Epoch-Making Conference in Korea', *MRW*, September, 1905, p.692；同書、186頁。
[359] 'Union', *The Korea Field*(以下*KF*), August, 1905, p.257；同書、186頁。

会での各エキュメニカル運動を行うことにおいて、非常に重要な役割を担っていた。

一方、長老派教会ではハリスのエキュメニカルな宣教精神によって、朝鮮の教会の宣教事業が順調に「協力」へと進むことができたと評価した。実際ハリスが追い求めたエキュメニカルな宣教理解は「協力」よりも「合同」あるいは「一致」(Unity)の意味が強かった。これは協力よりも一歩進んだレベルだと考えられる。つまり、ハリスは朝鮮でメソヂスト監督教会と南メソヂスト監督教会がいつかは一致できるだろうと期待していた[360]。言い換えれば、それは「協力」運動が「一致」に繋がり、発展するプロセスであった。このような彼のエキュメニカルな宣教理解が、朝鮮において実現した出来事が、「監理教会協成神学校」設立である。ハリスが宣教監督赴任前、朝鮮の教会の神学教育は独立した校舎も持たず、全国各地を巡回しつつ行われただけの運動にとどまっていた。この現状を知る彼は朝鮮において、メソヂスト監督教会の神学教育の体系化に力を尽くした。南メソヂスト監督教会の協力を得ることで、1910年ソウルの西大門の近辺に敷地を備え、監理教会協成神学校という牧会者養成機関設立に力を注いだ。そしてハリスは神学校設立のために、関連会議を主宰し、この計画の実現へと導いていった[361]。

以上からハリスは確固たるエキュメニカルな宣教精神を持ち、宣教地でこれを実現するため、力を尽くしたことが分かる。そして彼のエキュメニカルな宣教の特色は二つの段階で進められたことが分かる。第一に「協力」から「一致」に至るということである。彼が聖書公会[聖書協会]や朝鮮耶蘇教書会、その他各エキュメニカル機関の行事及び事業に積極的に参与したことはキリスト教会の一致を成し遂げるため、力を注いだ彼のエキュメニカルな宣教の具体的な形であると評価できるだろう。

しかし、「協力」から「合同」あるいは「一致」に至るエキュメニカル理解は、日韓関係と関連して日韓の「合同」から「併合」というレベルに至る認識と同じ流れであると言える。これは彼なりの親日的宣教という朝鮮宣教の枠組みの中で行われたからである。

②親日的宣教

ハリスが朝鮮という国をすでに知っていたという根拠として提示できる最古の資料は、1884年第1回メソヂスト監督教会日本年会録である。当時年会で論じられた主な案件の一つは朝鮮宣教であった。年会が開催される約3ヶ月前、日本宣教師であるマクレイ(R. S. Maclay)がメソヂスト監督教会宣教局(Executive Committee of the Foreign Missions of the

[360] 해리쓰(ハリス)、「教会通信」、『그리스도会報』(キリスト会報)、1911年5月15日；同書、187頁。
[361] *ARMEC*, 1909, p.179；同書、187頁。

Methodist Episcopal Church)とガウチャー(John Goucher)などに頼まれ、宣教の可能性を探るため、朝鮮を訪ねたことがあった。その後マクレイは日本に戻り、その結果を年会に報告した。そしてそれに対して、年会員たちが興味を示した。このように、朝鮮宣教の妥当性を受け入れる雰囲気が形成されていった。それ故、年会では、「朝鮮国伝道委員会」という特別委員会(Special Committee)が組織され、ハリスは委員として活動した[362]。彼は年会レベルで推進された朝鮮宣教の事業に参加することで、朝鮮への関心を持つに至る。

当時朝鮮国伝道委員会で論議し、年会に提出された請願により確認できることがある。それはまさに、メソヂスト監督教会が朝鮮宣教を開始する過程において、まずは日本年会によって導かれる必要性があるということである。すなわち、朝鮮国伝道委員会は、教育と医療の分野に宣教師が派遣されるべきだと主張した。また朝鮮に早急に入るのではなく、日本において朝鮮宣教のための準備期間を設けるべきとの内容が請願書には記されている[363]。このように、メソヂスト監督教会日本年会に属していた朝鮮国伝道委員会は、朝鮮宣教と関連して、「米国-日本-朝鮮」という宣教ルートを想定していた。当時ハリスは委員であったので、朝鮮宣教における彼の考えと委員会の方針は一致していると推測できる。

以上からハリスの朝鮮宣教観について理解できる。すなわち、米国人として日本宣教に対する考えが朝鮮の宣教にも投影されている。例えば、彼は日本のプロテスタント宣教50周年を記念し、招かれた講演で「日本帝國通じて此國の上に働き給ふた、今日の朝鮮は活動して居ります」[364]と言及したことがある。日本のキリスト教化は朝鮮のためにも非常に重要なことであった。以下ハリスの言及である。

> 将来日鮮人の一致は道徳心霊上の一致でなければならぬ、此の一致があれば政治上社会上の一致は自ら出来ると信ず、されば日本を基督教化するは朝鮮の為めに緊要である、精神的一致なくして政治上にのみ合同するも其は無益である、日鮮の民が基督教の信仰に由て一致結合するは是ぞ朝鮮の救済にして又朝鮮問題の解決である云々[365]。

ハリスは、近代化などの朝鮮における様々な問題を解くために、日本のキリスト教化が迅速に進められる必要があるとの信念を持っていた。これに関連して、彼は「もし、日本が非

---

[362] *MJCMEC*, 1884, p.2, 33-34.一方、日文記録には朝鮮国伝道委員会の委員としてハリスの名前が抜けているなど、英文記録とは委員名簿が若干相違である。これについては詳細な検討が必要である。『日本美以美教会第一年会議記録』、1884、38-39頁；『ハリス』、58頁。

[363] 一方、日文の年会記録には第一項と第二項のみが収録されているが、ハリスの名前が抜けている。本論文では第四項までの完全な項目が記されている英文年会録に基づき、ハリスの朝鮮国伝道委員会活動に資料的な価値をおく。*Ibid*, 1884, pp.33-34; 前掲書、1884、28-39頁参照。

[364] エム、シ、ハリス、「基督教と社会改良」、前掲書、299頁。

[365] 「ハリス監督朝鮮談」、『護教』、1911年8月26日；小川圭治・池明観 編、前掲書、390頁。

福音的な状況に置かれれば、これは中国や朝鮮や南アジアにおいて、彼らの進歩(progress)を妨げることになるはずである」[366]とさえ言及した。以上の考えを前提として、彼の朝鮮宣教に関する理解と活動は、まず日本宣教が優先的に考えられていた。1906年ハリスに出会った南メソヂスト監督教会の監督は彼に対して、「日本人にはまっている」(had gone daft over the Japanese)[367]と言い、釜山で活動していた北長老派教会の宣教師スミス(Walter Smith)はハリスに対して、「ハリス監督はキリスト教の監督ということよりも日本政府の手先として見なす方が一般的な実情である」[368]とさえ言及した。それ故、彼がいかに親日的な態度と宣教理解に基づいて活動したのかが推測できる。また彼は来朝宣教師たちにとっても、親日的な人物とみなされていた。これと関連してハリスの親日的な考えとその宣教活動によって、大きな衝突が起こったスクラントン(W. B. Scranton)との関係性は代表的な例である。スクラントンはメソヂスト監督教会宣教局に手紙を送り、ハリスの親日的な態度を批判した[369]。

事実スクラントンは、朝鮮の代表的な独立運動家たちが集まり、活動した□洞教会のエポワース青年会(Epworth league)を政教分離の観点において、解散させた経験があるほど日韓関係において、出来る限り中立的態度を堅持した宣教師であった。そのようなスクラントンさえも、ハリスを「極めて親日派」(pro and ultra Japanese) [370]と表現したが故に、朝鮮宣教においてのハリスの態度がいかなるものであったのかを容易に推測できるだろう。したがって、ハリスは今日の韓国のキリスト教史において、代表的な「親日派宣教師」と揶揄されていてる。彼の偏った日本中心の考え方は、1909年に日本プロテスタントの宣教50周年を記念する機会に彼が行なった講演にはっきりと表れている。

終りに臨むて一言を呈して置きます、此五十年記念會が始まつてより今晩に至るまで多くの教役者、兄弟姉妹がお集りになりました、實に精神が一致して居るとを神に感謝に堪へませぬ、外國の宣教師も大分参つて居りますけれども、もう皆日本人になつたやうてございます(拍手)もう違つたことはございませぬ、此處に集ふて居る外國宣教師はもはや亞米利加人でない、英國人でない、皆日本人であります、精神には日本人でございます、又精神的には基督にありて一つでございます(拍手)我等は不肖ながら日本の兄弟と共に合體して主イエス、キリストによりて愛する大和の國を救ふて盡くクリスチャンとするやうに致した

---

366 M. C. Harris, *Christianity in Japan*, p.86.
367 当時、ハリスに会った後、以上の言及を残した南メソヂスト監督教会の監督が誰なのかは具体的に分からない。但し、日本メソヂスト教会の合同を論じる過程で南メソヂスト監督教会側の全権委員として参加したウィルソン(A. W. Wilson)だと推測される。韓国基督教歴史研究所 編、前掲書、279頁。
368 *W. Smith's letter to A. J. Brown*, January, 30th, 1908；白樂濬、『韓国改新教史』、435頁再引用。
369 *W. B. Scranton's letter to A. B. Leonard*, May, 15th, 1905；李德周、『스크랜턴 – 어머니와 아들의 朝鮮宣教 이야기』(スクラントン-母と息子に於ける朝鮮宣教の物語)、ソウル：공옥出版社、2014、613-614頁参照。
370 同書、613-614頁再引用。

いものでございます。(拍手)[371]

日本の信徒を対象とする行事であったので、日本贔屓の視点で講演することは当然であるかもしれない。しかし、極めて親日的な考えに立つことは、当時の朝鮮と日本両教会の宣教を共に担っていた宣教監督としては、あまりにも偏った態度であると見られる。そしてすでに日本では、1907年に日本メソヂスト教会が成立し、独自の総会を持っていたゆえに、ハリスと日本の教会との直接的な繋がりは、日本メソヂスト教会の名誉監督(bishop emeritus)[372]という形式的な立場に過ぎない。日本で彼が担った実質的な役割といえば、メソヂスト監督教会の派遣宣教師との関係性を維持し、その宣教部の財産を管理することだけであった。したがって、彼は独自の総会を持たなかった朝鮮のことを第一に考える必要があった。それにもかかわらず、彼は朝鮮の教会よりも日本の教会に偏った言行と態度を見せたのである。

彼は以上の考えを持って、排日思想を持った在朝宣教師たちを説得することもあった[373]。ちなみに、日本メソヂスト教会伝道局の実行委員として、1908年に朝鮮に訪ねた平岩愃保は各地を視察し、当時の在朝宣教師たち大半が反日感情を持っていたと評価した[374]。これと関連して、ハリスは自分が継続的に日韓両国の問題を論じることにおいて中立的な立場であり、公平な姿勢を堅持するため尽力すると主張した[375]。そして朝鮮と日本両国間の誤解を解消するため尽力するとの考えを持っていた[376]。事実、ハリスが日韓両国間の葛藤と緊張状態の国民感情に対して理解できないことではなかった。彼は1911年、日本のメソヂスト教会の機関誌である『護教』とのインタビューで言及したことがある。

しかし、彼は長年、日本と朝鮮の間の誤解と葛藤を解くため尽力するとの考えを明らかにした[377]。そしてここで、キリスト教が大きな役割を担うことができると信じていた。しか

---

371 エム、シ、ハリス、「基督教と社会改良」、前掲書、299-300頁。
372 『日本メソヂスト教会第參回総会議事要録』、1915、49頁参照。
373 平岩愃保、「日本対在韓宣教師」、『護教』、1908年6月13日；小川圭治・池明観 編、前掲書、97頁参照。
374 ちなみに、20世紀初頭、在朝宣教師たちのほとんどは日本に対する反感を持っていた場合がある。日本メソヂスト教会の監督である本多庸一に頼まれ、伝道局実行委員として1908年、朝鮮を訪れた平岩愃保は在朝宣教師たちの排日思想について、以下のように原因を分析した。1在韓宣教師の半部は確かに排日なり、其原因は①日本のダークサイド(暗黒なる側面)を見たるが為め、②伝道上便宜を得ざる様になりたるが為め、例へば今迄の如く観察使より無代にて土地を貰ひ受くるを得ざる様に成りたる事③日本官吏の空威張りに出会したるが為め④日本下等社会の者が為したる暴挙乱雑を見たるが為め⑤或る少数者は感情的に日本を軽蔑する心を有するが為め⑥日本の真価を知らざるが為め2宣教師は一般に政治上何の考もなけれども韓人に誤まられて実に愚なる挙動を為す事あり。3宣教師は往々日本人を異教徒視する者尠からず。4宣教師中には日本を度外視して所謂米国人の愛国心に騒られ日本を誹謗する者あり。同書、97頁参照。
375 平岩愃保、「朝鮮巡廻紀行」、『護教』、1913年8月29日；小川圭治・池明観 編、同書、124頁参照。
376 M. C. ハリス、「日韓両国に関する誤解を弁ず」、『護教』、1908年10月24日；小川圭治・池明観 編、同書、384頁参照。
377 「ハリス監督朝鮮談」、『護教』、1911年8月26日；小川圭治・池明観 編、同書、389-390頁参照。

し、彼の宣教活動は時が経てば経つほどに、より一層親日的様相を呈していった。朝鮮(宣教)年会に頻繁に日本メソヂスト教会の要人を招いたことは、この一例として理解することができる。彼が宣教監督として赴任し、来朝した1905年から1913年に至るまで、朝鮮(宣教)年会に招かれ、参加した日本の教会の来賓たちは徐々に増えていった[378]。さらに1912年には日本メソヂスト教会の監督である本多庸一がハリスの配慮でメソヂスト監督教会中国宣教部の統括監督として来朝していたバッシュフォード(J. W. Bashford)監督と共に朝鮮年会を主宰したこともあった。また翌年(1913年)には、日本メソヂスト教会の第2代監督平岩愃保がハリスと共同で朝鮮年会を主宰した。とりわけ、平岩愃保は朝鮮年会で公に日本と朝鮮の教会の合同を主張し、多くの朝鮮人の反発を引き起こしたこともある[379]。このような発言が朝鮮年会で公に言及されたのは、「長く日本に居りて日本人を知れるハリス監督が朝鮮監理教会を主宰する今日は、さらに一転して朝鮮と内地とのメソヂスト教会合同を謀るべき時機に達せりと思はざる可らず」[380]と考えた平岩愃保の言及のように、親日的宣教理解に基づいていたハリスという存在のゆえに可能なことであった。

③在朝日本人の宣教

一方、ハリスは在朝日本人にもまた大きな関心を持っていたが、このようなハリスの宣教活動も親日的宣教の文脈の中で理解できる。1905年、宣教監督として来朝したハリスは、朝鮮で最初の礼拝を朝鮮の教会と共に日本の教会も訪ねる日程で巡回した[381]。当時ソウルでは、在朝日本人宣教を目指し、1904年にメソヂスト監督教会日本年会と日本南部年会が共同で派遣した、牧師木原外七がいた[382]。ハリスは午前に□洞教会で説教をした後に、夕方には木原外七の日本人教会を訪れて説教を行った。日韓両国の宣教監督として、朝鮮で日本人教会を訪問することがあった。赴任後1週目の夕礼拝を日本人の教会で捧げるほどに、彼は朝鮮においても日本人に対する特別な愛情を見せた。ある日、ハリスは東京に滞在していた時、日本メソヂスト教会の機関誌である『護教』の記者と朝鮮に関してインタビューした

---

378 1910年、第3回朝鮮年会の場合、当時の年会録を確認できないわけで参加していた日本キリスト教界の人事名簿を正確に分からない。但し、『그리스도회報』(キリスト会報)に掲載された年会の関連記事によって、木原外七が参加した事実のみ確認できる。*OMKMC*, 1905, p.18; *Ibid*, 1906, p.10, 13; *Ibid*, 1907, p.11; *OKAC*, 1908, p.15; *Ibid*, 1909, p.12-13; 「監理会(美以美会)毎年会第一回日記」、『그리스도회報』(キリスト会報)、1911年1月31日；*OKAC*, 1912, pp.6-7; *Ibid*, 1913, pp.5-7；『ハリス』、158-159頁参照。
379 平岩愃保、「朝鮮巡廻紀行 – 朝鮮監理会と日本メソヂスト教会との合同」、『護教』、1913年7月25日；小川圭治・池明観 編、前掲書、119頁；平岩愃保、「朝鮮巡廻紀行」、『護教』、1913年8月29日；小川圭治・池明観 編、同書、123頁参照。
380 平岩愃保、「朝鮮巡廻紀行 – 朝鮮監理会と日本メソヂスト教会との合同」、同書, 119頁。
381 *KM*, 1905, p.92.
382 *Ibid*, p.92.

ことがある。ところが、この時にも彼は朝鮮に居住する日本人に対する特別な関心を示した[383]。

ハリスは朝鮮に移住する日本人の増加に注目していた。しかし、彼はこれを朝鮮に向かう主権の侵奪過程としては理解していなかった。とりわけ、朝鮮に移住する日本人たちは日本政府の厳しい管理のもと、正当な目的を持って渡ってくるが故に、問題にはならないと考えたのである。

一方で、彼が当時増加する日本人の朝鮮移住を注目した理由は、在朝日本人を対象とした宣教の観点にある[384]。朝鮮に移住する日本人が増加していったがゆえに、国内での日本人居留地には必ず数人のキリスト者が居住するということが多かった。これはソウルのみならず、地方においても見ることの出来る現象であった。在朝日本人宣教もメソヂスト教会や長老派教会を中心に各宣教部が宣教地を分割し担当した。それ故、朝鮮のメソヂスト監督教会宣教部の担当地域に居住する他教派の日本人もメソヂスト監督教会に通いつつ信仰生活を守っていった。先述のようにエキュメニカルな宣教理解に基づいたハリスは、このような朝鮮宣教の状況を積極的に受け入れた。したがって、彼は朝鮮という宣教現場でも、在朝日本人たちの暮らしに大きな関心を示し、彼らを対象とする宣教が順調に行われるように努力した。彼は在朝日本人を対象とする宣教をめぐって、日本メソヂスト教会の機関誌である『護教』とのインタビューで以下のように言及した。

目下京城部長木原他七氏は専ら美以派の区域内を巡廻して居る、併し乍ら木原氏一人では足りない、氏の外に日本人伝道に当る為め日本語に通じた外国宣教師の一家族と婦人伝道者を監督する婦人宣教師が一名位要る、而して適任者があれば朝鮮に永住してもらいたいと思ふて居る、私は昨今朝鮮伝道の外に何をも念ふ余裕が無い、朝鮮に来て日本人間の伝道に従事せんとする宣教師があればメソヂスト三派の何れを問はず私は之を歓迎する[385]。

以上の引用文を見ると、ハリスが朝鮮宣教に尽力しているゆえに、在朝日本人宣教に力を注げる余裕がないと言っている。しかし、その文脈を詳細に見れば、彼はすでに在朝日本人宣教の状況を把握し外国人宣教師の男女一人ずつが必要であると主張するほどに具体的な考えを示している。そして在朝日本人宣教のため、人材が支えられるように、紙面を通して要請をしている。それほどに、ハリスにとって、日本人は朝鮮人に比べて愛情を注ぐ存在であった。これによって、無意識にも親日的言及と行動を示したのである。

---

383 「ハリス監督朝鮮談」、『護教』、1911年8月26日；小川圭治・池明観 編、前掲書、389頁参照。
384 同書、389頁参照。
385 同書、389頁。

④政教分離に伴う宣教

日本の第一代内閣総理大臣として朝鮮での権力を持っていた伊藤博文は、1906年から朝鮮統監府の初代統監として赴任した。ハリスはそれより1年前の1905年に来朝したが、同時期に政界と宗教界の指導者として赴任した二人は個人的な関わりを持った。ところが、ある日ハリスは伊藤博文から次のような提案を受けた。それは政治と関連することは伊藤博文が、宗教を含む精神的なことはハリスが担当するようにとの提案であった[386]。いわゆる政教分離を伴う提案であった[387]。当時伊藤博文に提案されたこの言及は大変有名で、後に朝鮮総督府の年次報告書にも掲載されるほどの出来事であった[388]。以上の引用文だけでは、ハリスがいかに答えたのか分からない。しかし、その後の彼の言動によって推測すると、当時伊藤博文の提案に非常に積極的に応答したと考えることが出来る。

その代表例を、1910年のある晩餐に参加した時、彼が言及した内容に見ることができる。朝鮮統監府は、1910年にスコットランド・エディンバラにて開催される宣教大会に参加するため出国準備していたハリスのために、特別な晩餐を備えてくれたことがあった。ここにハリスをはじめとした宗教指導者と日本帝国側の政治家が参加した。当時、ハリスは4年前の伊藤博文の要請を受け、朝鮮人に朝鮮統監府の政策を尊重するように伝え、朝鮮近代化において、宣教師たちが協力するようにとハリスは強調した[389]。したがって、朝鮮人が可能な限り、統監府に批判と否定的認識を持たないように、言わば政教分離の宣教政策を果たそうとしたことが分かる。そして彼の努力は日本人に大きな影響を与えた[390]。

ハリスは政教分離を徹底しつつ宣教を行うべきであると考えた。しかし、政教分離原則は、彼の意図したところと異なり、日本帝国に協力する政教癒着を生む結果となった。日本帝国は朝鮮の宣教師も同様に、このような宣教理解を持つように望んだ[391]。このように、ハリスが朝鮮宣教の原則として掲げた政教分離の考えは、むしろ日本の統治体系に順応する

---

386 朝鮮総督府 編、『朝鮮の統治と基督教』、前掲書、6頁参照。

387 当時、来朝した大半の米国の宣教師たちが政教分離という原則に忠実しようとしていた。柳大永、『開化期 朝鮮과 美國 宣教師: 帝國主義 侵略, 開化自强, 그리고 美國 宣教師』(開化期の朝鮮と米国宣教師：帝国主義の侵略、開花自強、そして米国宣教師)、前掲書、418-419頁参照。

388 Sainosuke Kiriyama, ed., *ARAC 1924-1926*, pp.108-109; Foreign Affairs Section, ed., *ARAC 1930-1932*, pp.87-88; Foreign Affairs Section, ed., *ARAC 1932-1933*, pp.89-90; Foreign Affairs Section, ed., *ARAC 1934-1935*, pp.104-105.

389 *Mutel's Diary*, 1907年5月17日；Gustave Charles Marie Mutel, 『뮈텔 주교 일기 4』(ミューテル主教の日記4)、463-464頁参照。

390 平岩愃保、「日本対在韓宣教師」、『護教』、1908年6月13日；小川圭治・池明観 編、前掲書、95-96頁参照。

391 平岩愃保、「朝鮮巡廻紀行」、『護教』、1913年8月29日；同書、124頁参照。

ことで、朝鮮の教会が政治に積極的に協力するようになる反動的な結果を生み出してしまった。それ故ハリスの政教分離に基づいた朝鮮宣教は、朝鮮人の反日民族運動を弱め、日本帝国が朝鮮支配を固めることに繋がった[392]。彼は政教分離原則によって、日本帝国からの協力を得ることで、朝鮮宣教のための大きな力と成ると考えた[393]。これに関してハリスは、1907年に宣教局主事レナード(A. B. Leonard)に書き送った手紙の中で、平壌とソウルなど主な地域にて開催された地方会(District Conference)の消息を伝え、以下のように言及した。

朝鮮から米国へ着いたばかりである。我が宣教部の重要なステーション(stations)をほぼ訪れ、関連事業を慎重に検討し、平壌とソウルにて開催された地方会(District Conference)にも参加した。地方会に多くの人々が参加したが、両地方からほぼ350名の教会の指導者たち(workers)が参加した。苦難と戦っている地方の報告を聴き、意外に力を得るようになった。完全に無くなったと思った二ヶ所、あるいは三ヶ所の教会は信徒数で小さな損失を受けただけで、かえってキリストへ向かう忠誠と情熱が増加するきっかけになったと報告された。良かったのは牧会者たちが彼らの報告の中で、日本人あるいは日本の軍部勢力の権威に対して、いかなる文句や不満を表出していなかった。逆に、誰かからいかなる提案なしに、彼らは彼らに施した親切な協力に対して、感謝の挨拶を表現した[394]。

ハリスが朝鮮で開かれた各地方会へ参加することで、安堵したことの一つは当時の朝鮮人牧師が日本人と日本軍部の行使する権力に対して、批判的言及を為すことはなかったということである。このような状況を彼は「幸いに」(Happily)と表現した。これはいわゆる政治と宗教は必ず分離して考えるべきであるという認識を土台に言及された考えであった。事実彼は宗教の政治参与には批判的であった。したがって朝鮮における宣教もまた政治とは分離されるべきだという固い信念を持っていたわけである[395]。代表的な例としては、朝鮮の信徒が教会の名で政治的集会に参加することがないようにハリスが取った代表的措置が、エポワース青年会(Epworth league)の活動を抑制したことがある[396]。反日民族運動の性格を強く帯びたエポワース青年会が年会期間中に積極的に活動を行おうとしたが、政教分離の考え故に、彼はこれを許さなかった。このように、ハリスは宗教つまりキリスト教が政治に関与することを望まなかった[397]。

また、彼が政教分離による宣教理解を朝鮮において浸透させようとしたのは、それはまさ

---

392 李德周、『韓國土着敎會形成史研究』、前掲書、304-305頁参照。
393 M. C. Harris, 'Christianity in Japan and Korea', *MRW*, March, 1911, p.188.
394 *M. C. Harris's letter to A. B. Leonard*, December, 20th, 1907.
395 M. C. Harris, 'Observations in Korea', *KMF*, May, 1908, p.69.
396 「ハリス監督談片」、『護教』、1906年6月30日；小川圭治・池明観 編、前掲書、382頁参照。
397 M. C. ハリス、「日韓両国に関する誤解を弁ず」、『護教』、1908年10月24日；同書、384頁参照。

に朝鮮のためであった。したがって、日韓併合も同様である[398]。そしてハリスは日韓併合をめぐって、「神の摂理」という表現を用いつつ、朝鮮人の反日民族意識抑制に尽力した。とりわけ、来世的信仰は朝鮮人が政治に対して深く関与することのないように生み出した宣教方法の一つであった。来世的信仰を中心とした宣教活動は、伝道運動あるいは復興運動などに注目することで、宣教に力を注ぐ活動である[399]。彼が伝道運動と関連して力を注いだ代表的宣教活動は、メソヂスト監督教会の朝鮮宣教25周年記念運動であった。1907年6月21日金曜日、ハリスの主宰した朝鮮宣教年会にメソヂスト監督教会宣教局の主事であるレオナルドが参加した。4日目の会議において、レオナルドは朝鮮宣教25周年記念運動を提案、年会員の同意を得た[400]。ここから始まったこの運動において、ハリスは副委員長(Vice-President)としての職を担い、米国の教会に朝鮮宣教への関心を喚起した[401]。当時、この運動を知らせる目的で、1910年に*Competent Witnesses on Korea as a Mission Field*という小冊子が刊行された。ハリスはここで「Save Korea」という文を寄稿するなどの積極的な行いを通じて、これを導いていった[402]。

また伝道運動をはじめ、彼が朝鮮で強調した宣教活動はまさに復興運動であった[403]。その復興運動は、1907年1月に平壌を中心に起きた「平壌大復興」を示している。この運動は韓国キリスト教史において、最も強烈な霊的覚醒運動と評価されているほど、当時の朝鮮の教会において大きな影響を及ぼした。そして当時のハリスは、朝鮮の宣教監督としてメソヂスト監督教会を統括していたので、大きな話題となっていた復興運動を直接目にすることができた。この復興運動は朝鮮の信徒たちにとって、霊的感情を呼び起こす素晴らしい現象であった。ハリスはこの事実を、後に本国の教会に紹介したことさえあった[404]。3年後に書かれた報告文にもかかわらず、当時の事件が非常に印象的であったゆえに、ハリスは復興運動が起きたその状況を忘れることはなかった。とりわけ、平壌という地域的な限界を乗り越えて、全国所々へ至る広がりに深い関心を持っていた。

ここで彼が強調したかったのは、社会的聖化のレベルではなく、聖霊による個々土着教会における倫理的な覚醒と変化であった[405]。聖霊による個々人の倫理的覚醒とその変化を強

---

398 「ハリス監督朝鮮談」、『護教』、1911年8月26日；同書、390頁参照。
399 Report to the Quadrennial General Conference, *the Journal of the 25th Delegated General Conference, Methodist Conference in 1908*, p.860; 白樂濬、前掲書、438頁参照。
400 *OMKMC*, 1907, p.12.
401 'Notes and Personals', *KMF*, January, 1910, p.3; 'The Korea Quarter-Centennial Report', *ARMEC*, 1910, p.185 ;『ハリス』、109頁。
402 M. C. Harris, 'Save Korea', George H. Scidmore, ed., *Competent Witnesses on Korea as a Mission Field*, New York: Board of Foreign Missions of the Methodist Episcopal Church, 1908, p.11.
403 Report to the Quadrennial General Conference, *the Journal of the 25th Delegated General Conference, Methodist Conference in 1908*, pp.861-862; 白樂濬、前掲書、391頁参照。
404 M. C. Harris, 'Christianity in Japan and Korea', *MRW*, March, 1911, p.189.
405 M. C. Harris, 'Introduction', W. A. Noble · G. H. Jones, *The Religious Awakening of Korea*, New

調した1907年の復興運動は、朝鮮の教会において、現実逃避的信仰が形成されることに影響を及ぼした。無論、復興運動の経験がむしろ社会参与の意志を高めた例もある[406]。しかし、それは奴隷解放、社会的悪習を打ち破ることなど近代化を伴う啓蒙的なレベルでの社会参与であり、キリスト者の政治的な参加を示すことではなかった。この視点で見れば、復興運動は信徒の現実逃避的信仰を形成することにおいて、基本的原則を提供した代表例であった。

以上のように、政教分離という原則を朝鮮で果たそうとしたハリスの宣教理解は朝鮮の教会において、伝道運動・復興運動として行われた。

⑤近代化を伴う宣教

1904年、メソヂスト監督教会において、日本と朝鮮の宣教監督として選出された後に、1904年末、日本を経て、1905年に来朝したハリスは、第一に朝鮮の視察に集中した。朝鮮半島の隅々をあまねく巡り、朝鮮人をはじめ外国人居住者と話し合った。彼の視察は今後朝鮮で行われる宣教の方向性と具体的手段を構想するための言わば、フィールドワークであった。3年後、ハリスが改めて朝鮮の状況を巡ってみると、以前とは異なる朝鮮の現状を見ることができた。それは「人々の悟りと進歩のための普遍的な欲求」[407]であった。まさにこれこそ朝鮮の近代化に繋がることであった。

また19世紀の半ば以降に来朝したほとんどの宣教師は朝鮮の近代化に深い関心を持っていた。言い換えれば、西洋人の視点からすれば、朝鮮は未開な国として見られたのである。それは西洋式近代化が行われるべきであるとの意味であった。ハリスもまた同様であった。これはハリスも朝鮮の政治及び社会的理解と関連して、近代化が迅速に行われるべきであると考えていたことを示している。このような見方は、いわゆるオリエンタリズムであると同時に、宣教師の典型的観点の一つであった。

一方、1885年、アッペンツェラーとスクラントンの来朝を求めて、本格化されたメソヂスト監督教会の朝鮮宣教25周年記念運動と関連して、当時の副委員長ハリスは本国教会が朝鮮へ関心を持つよう尽力した。ところが、彼が本国に朝鮮宣教への関心を呼ぶため掲げた理論は、キリスト教を媒介として、学校や病院や孤児院、その他社会福祉施設の発展を伴う啓蒙主義的文明論であった[408]。このように、福音伴う西欧式近代化は、彼の朝鮮宣教理解の

York: Board of Foreign Missions of the Methodist Episcopal Church, 1908, p.3.

[406] 李德周、『韓國土着敎會形成史研究』、前掲書、329-336頁参照。

[407] M. C. Harris, 'Observations in Korea', *KMF*, May, 1908, p.69.

[408] M. C. Harris, 'Save Korea', George H. Scidmore, ed., *Competent Witnesses on Korea as a Mission Field*, p.11.

基本的枠組みであった。これはいわゆる社会進化論(弱肉強食論)に基づく啓蒙主義文明観と同様に理解できる。

特にこれに加えて、彼の近代化理論は、日本の援助により行われることを望んだ。日本を通して、朝鮮が西洋式近代化を果たす方法論であった。したがって、朝鮮の近代化と宣教活動が密接に結びつくことが一番大切であると考えていた。それは朝鮮の古い秩序(order)が「キリスト教」と「日本」二つの要素のもとで、変化されていくということである[409]。そしてその二つの要素を通じて、朝鮮は過去から未来においてもなお発展、進歩すると考えた。このように、ハリスの朝鮮宣教をめぐる理解は、近代化と密接に結びついていたのである。ここで日本が朝鮮近代化を助ける、言わば媒介として考えられていた。

彼は朝鮮の教育体系を例えとしてあげて、日本が運営する官学と宣教部が運営するミッションスクールが、朝鮮で大きな人気を得ていると考えた[410]。そして官学とミッションスクールは朝鮮の「近代化」という共通点をもっていることが人気の理由であると、彼は推測している。すなわち、すでに西洋式近代化を果たした日本の教育システムと宣教部が営む教育システムが、朝鮮の古い教育体系を改善。向上させることができると考えたのである。したがって、西欧式近代の方法論を導入した官学とミッションスクールが、当時の朝鮮人に対して、知的好奇心を刺激する機会を与えると考えた。そして知的好奇心、言い換えれば、悟りと進歩の欲求を充分に満たすことは、朝鮮社会を改善並びに向上することであった。個人的レベルから社会的レベルにまで、その影響力を広げていくことである。

一方で1910年に、日本のプロテスタントは宣教50周年を迎えた。その折に開催された記念式にて、彼は「基督教と社会改良」というテーマで講演したことがある。当時、ハリスはキリスト教が基本的に社会を改善する目的を持っていると、考えていた[411]。その意味でキリスト教の福音を伝える宣教とは、個人を越えて、社会的なレベルにまで広がらなければならなかった。それ故、ハリスは朝鮮でもこれまで考察していき一連の宣教理解が必ず適用されるべきであると考え、その変化の過程に注目したのである。というわけで、以上のような宣教理解の枠組みにおいて、彼の関わった25年間において、朝鮮は大きく変化した。詰まるところ、彼の言及通りにキリスト教は朝鮮社会を改善・向上し、言わば、「蘇り、ますます進歩」という流れの中で、発展を果たしたと考えた。そして、彼は宣教師らしく、この原動力の源を「イエス・キリスト」であると考えた。

しかし、「イエス・キリスト」というキリスト教宣教の原理を外れて、より現実的視点か

---

409 M. C. Harris, *QRHarris 1916*, p.39.
410 M. C. Harris, 'Observations in Korea', *KMF*, May, 1908, p.69.
411 エム、シ、ハリス、「基督教と社会改良」、前掲書、299頁参照。

ら検討してみると、何よりも日本の役割を絶対に否定しなかった彼の宣教態度が、ここでも立ち表れてくることを確認できる。つまり、朝鮮が発展を果たすことにおいて、いわゆる家庭教師のような日本の役割が、非常に重要であるということを強調している。それ故、朝鮮の近代化は宣教の目的に伴う一つの大切な要素であって、ここで家庭教師である日本は、以上の性質をもつ宣教をより一層促進してくれる、言わば、潤滑油の役割を果たすと考えた。

まとめ

ハリスは、1873年末にメソヂスト監督教会の日本開拓宣教師として赴任し、函館をはじめ東京、そしてハワイを含めて米西部沿岸の在米日本人に宣教活動を行った代表的親日的宣教師であった。米国に暮らす時も絶え間なく日本教会と交流し、「私はアメリカに生まれた日本人です」[412]と言うほど、いかなる外国人よりも日本人に対する大きな愛情を持っていた。

それにもかかわらず、彼は大半の西洋宣教師と同様にオリエンタリズム的類型に立つ宣教師であった。まず、彼が見た日本は当時の西洋人のように大きな枠を外れることなく、地理や自然、文化に関する詳細な紹介を通して、西洋に伝える方法を採用しようと試みた。新たに発見された未開世界みたく描写することで、西洋人の関心を呼び起こそうとしたのである。さらに、彼の考えと宣教理解の中で、最も優先されたことは西洋的観点であった。すなわち、その観点とは西洋における代表的宗教キリスト教と西洋式近代文物に伴う理解である。

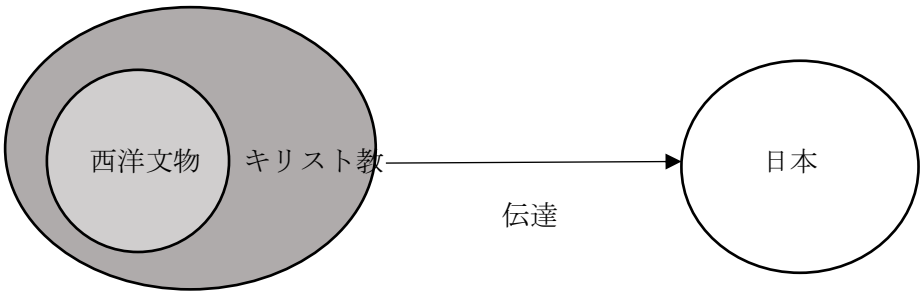
無論、東洋の伝統文化と宗教に関して、無条件に排他的立場のみを持っていたということではなかった。神道や仏教、儒教などの良い面にも眼を向けることで、キリスト教といかなる関係を結べるかに頭を悩ませた痕跡もある程度あった。また、日本人たちの長所と特色を見出そうとして、天皇制を中心とする日本の政治システムに敬意を表すこともあった。彼はこのような中で、日米両国が友好な関わりを結べるように尽力し、米国内における日本の立場を代弁することで、時に説得までも厭わない親日的理解とその枠組みを表現した。日本の伝統文化、伝統宗教と調和し、衝突することなく、キリスト教の福音が浸透するよう追い求めたこともまた、彼が表現した日本理解と宣教的な理解の一つの側面であると言える。

しかし、何よりも彼の考えと宣教理解において、その根底にあったことはまさに西洋的要素であった。すなわち、西洋の代表的宗教「キリスト教」と「西欧式の近代化」という二つ

[412] 島典英、「M・C・ハリス監督をめぐって」、『キリスト教史学』、第54集、キリスト教史学会、2000、22頁。

の要素が日本を理解する根本的な基礎となったのである。あえて、二つの要素を比較すれば、「キリスト教」というカテゴリーに「西欧式の近代化」が内包されているという形態であった。それ故、日本の伝統宗教を理解し、尊重することができたのはキリスト教に比べて、神道と仏教、そして儒教が持っていた限界を把握できたが故のことだと言えるだろう。既存の伝統宗教が成し遂げることの出来ない限界が、キリスト教には超えることが出来ると考えていた。彼は日本国内の他宗教に対して極端に偏る排他性を持っていなかった。さらに、近代化の観点からみると、西洋が東洋に比べ、相対的に優れているとの理解故に、このような範疇の中で、西欧文物を伴うキリスト教宣教を行うことが可能であった。一例として、彼が違和感を持つことこそが、日本の政治社会システムである天皇制をかえって尊重し、擁護することに繋がったと理解できる。言い換えれば、天皇制という政治社会システムの中で、西欧式民主主義体系と近代化導入に対して、皇室が積極性を見出したのである。このように、キリスト教の福音伝道である宣教とは、彼にとって、優越した西欧文化と文物を日本に伝えることをも含めるものであった。以上のハリスの日本(宣教)理解を簡単に図式によって表現すれば、以下のようになる。

<表 - ハリスの日本宣教理解>



以上の視点は彼の朝鮮理解においても同様であった。あらゆることが「キリスト教」と「近代化」二つの要素によって行われた。ハリスからすれば、当時の朝鮮は日本より未開な国家であり、改善の必要性を多分に持った国であった。しかし、日本とは異なり、さらに一つの要素が加えられる。それがまさに「日本」であった。朝鮮は独立して改革を為す能力がないと考えられていた。したがって変化をもたらす触媒が必要であった。そしてその役割を日本が担えると考えたのである。1873年末に東アジアに渡った彼は、日本が1868年の明治維新以降、順調に西洋近代文物を受け入れてきたことを見てきた故に、朝鮮近代化において、十分なモデル且つ教師になれると考えた。したがって、日本の朝鮮併合が朝鮮にとって

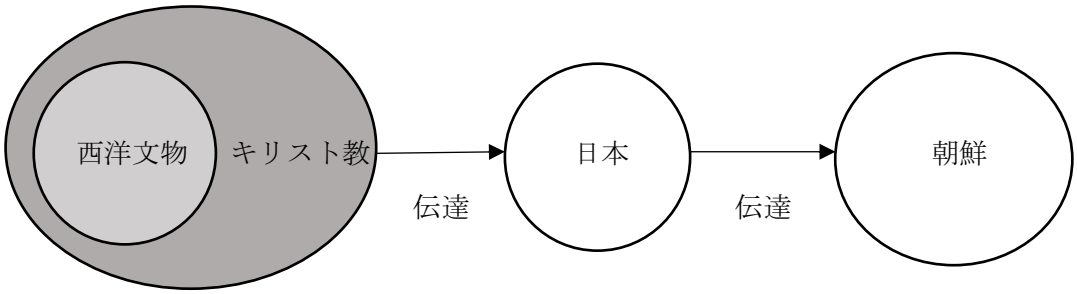
良いことであると考えた。このように、ハリスの朝鮮理解と宣教論的思考は「キリスト教」と「近代化」という二つの要素以外に「日本」という要素を念頭に入れて検討しなければならない。

それ故、朝鮮宣教と関連する彼の理解は三つの範疇の中で行われてきた。すなわち、朝鮮の近代化を成し遂げるため、西洋文物を伴うキリスト教の宣教が行われるべき必要性を切に感じて、ここで日本は朝鮮近代化において、良い影響をもたらすと考えた。したがって、朝鮮宣教は朝鮮という異国にもかかわらず、日本と日本人が介入することは必要不可欠であった。さらに、朝鮮人と朝鮮の教会の独立運動に対して、否定的に捉えるがゆえに、いわゆる政教分離という徹底的宣教理解の中で、朝鮮宣教を果たそうとした。しかし、彼の政教分離原則は、逆に日本の朝鮮支配を黙認する他の政教癒着の結果を生み出してしまった。彼の政教分離の原則は政教癒着として、そしてそれはまさに親日的理解に偏る宣教に帰結されざるを得なかったわけである。

しかし、彼が親日的宣教に帰結したのは、朝鮮に対する拒否感と排他的な意識に根差すことではなかった。実際彼は朝鮮の福音化に大きな期待を持っていた人物であった。彼は1907年12月20日、メソヂスト監督教会宣教局の主事レナード(A. B. Leonard)へと送った書簡を通して、「たとえ、朝鮮は小さな国であるが、疑いなくアジアにおいて、最初のキリスト教国となるだろう」[413]と言及したように、朝鮮で福音が広まるように、切に望み、その可能性をアジアのどこの国よりも高く評価した。しかしその方法は、朝鮮の立場からみると、一般的に受け入れ難い日本の観点が投影された西欧式方法論であった。

彼の朝鮮(宣教)理解を簡単に図式として表すと以下のようにまとめることができるだろう。

<表 ・ ハリスの朝鮮宣教理解>



[413] *M. C. Harris's letter to A. B. Leonard*, December, 20th, 1907.

以上の表で分かるように、朝鮮理解は西欧文物とキリスト教、そして朝鮮の間に、日本という要素が加えられる。そしてそれは日本によってフィルタリングされる過程であり、日本の視点に大きく左右されることと為る。

したがって、ハリスは日本では西洋文化とキリスト教を繋ぐ仲介者として、朝鮮では日本の朝鮮侵略を擁護した親日的宣教師として、捉えられている。

第3章：W・R・ランバス(Walter Russell Lambuth)の生涯と宣教活動

先に19世紀と20世紀にかけて、日韓両国との直接的な関係を結んでいたメソヂスト監督教会(Methodist Episcopal Church)の指導者(監督)であるハリスの生涯を宣教と関連して考察した。ところで、ここに比較することのできる南メソヂスト監督教会(Methodist Episcopal Church、South)の指導者(監督)は、W・R・ランバス(Walter Russell Lambuth)である。彼はハリスと同時代を生きてきた人物であり、生涯を宣教と密接な関連で生きてきた。特に、父親が中国の宣教師であったので、中国上海で生まれ、両親に従って宣教師になり、中国と日本で宣教師として活動した。また、南メソヂスト監督教会の海外宣教を総括する宣教局主事(Secretary of the Mission Board of the Methodist Episcopal Church、South)を経て、監督の場所まで上がるようになった当時、教界の主要な人物の一人であった。このような彼の足跡は、今日、世界の様々な所に残っているが、その中でも彼は、特に東アジアにおいて、日中韓の3国全てと縁があり、関係を持ってきた。

このような状況的前提の下、本章ではランバスの生涯をハリスと同様に宣教についてに検討したい。ここで彼の生涯は、1877年を境に、次のように分けて整理できるであろう。第1節：誕生と家庭環境、幼少時代は、大学教育と彼が中国に宣教師として派遣を受ける前までの時期(1854-1877)である。続いて第2節：中国と日本宣教、南メソヂスト監督教会宣教局の活動、監督としての活動など、彼が生涯を終えるまでの本格的な宣教活動に関する時期(1877-1921)である。

第1節：家庭及び教育

(1)出生と家庭

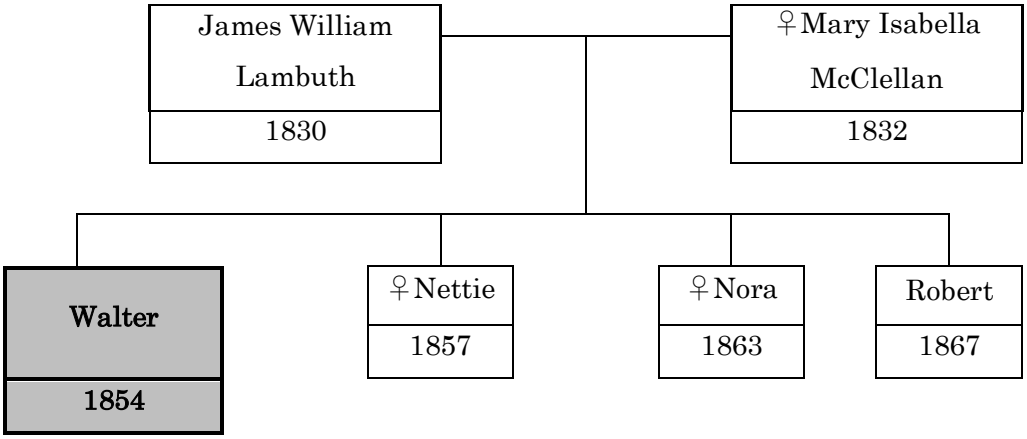
ランバスは1854年11月10日午前9時ごろ、中国の上海にて父のランバス(James William Lambuth)と母メアリ・イザベラ(M. I. McClellan)の長男として生まれた[414]。彼の家系を整理して図で表すと、次の通りである[415]。

---

[414] 'Entered into Rest', *MV*, November, 1921, p.323; *WRL*, p.15.

[415] 'Memoir – Rev. James William Lambuth, D. D.', *Minutes of the Japan Mission Annual Conference of the Methodist Episcopal Church, South*(以下*MJMACMECS*), 1892, pp.14-18; W. E. Towson, 'Mrs. Mary Isabella Lambuth', *Ibid*, 1904, 写真, pp.35-42; 'W. E. Towson, 'The Missionary History of the Lambuth Family', *MV*, April, 1917, pp.109-111; *WRL*, pp.32, 48-49; 『ウォルター・ラッセル・ランバス』, 322-325頁参照。

<表 ・ ランバスの家系図>



♀表示は女性

数字は出生年度

彼が中国の上海で生まれた独特の出生履歴を持つきっかけとなったのは、先に南メソヂスト監督教会の中国の宣教師として派遣され、活動することになった両親によるものであった。ところが、当時の中国は、一般的にアヘン戦争と呼ばれる第1次中英戦争の影響で不平等条約である南京條約(Sino - British Treaty of 1842)を締結された。これを契機に、英国に香港を割譲することになり、同時に広州、福州、厦門、寧波、上海など5つの港を通商港として開港した。以後、米国とフランスも中国と不平等条約を締結させるなど、他の西洋列強がますます中国に入って来てから居住し、通商を成した[416]。これは、文字通り武力による政治的、経済的圧迫と干渉を意味した。ところが、当時の一般的な状況を考慮する際に、門戸を開放したのは、まさに宣教師の進出と宣教が共に行われることを意味した。中国の門戸が開放された知らせが西洋に知られるようになり、各教派宣教局もその知らせにいち早く接し宣教師を派遣するに至る。

メソジスト教会に焦点を絞って見てみると、メソヂスト監督教会の場合1847年3月26日に開かれた中国の宣教のための調査委員会(the Committee of Inquiry)の報告結果に基づいて、福州を中心に宣教師を派遣することに決定した[417]。そしてその年のコリンズ(J. D. Collins)とホワイト(M. C. White)夫婦を正式に派遣することでメソヂスト監督教会の中国宣教が開始された[418]。そして南メソヂスト監督教会の場合は、これより1年遅い1848年にテイラー(C.

[416] J. M. Reid, *Missions and Missionary Society of the Methodist Episcopal Church, Vol.1*, New York: Phillips & Hunt, 1882, p.321.
[417] *Ibid*, p.326.
[418] *Ibid*, p.413.

Taylor)とジェンキンス(B. Jenkins)を派遣し、開拓宣教を行った[419]。ところが、南メソヂスト監督教会は、前述した5つの開港地の内、上海が拠点となった。このように南メソヂスト監督教会の中国の宣教が始まって6年後の1854年5月6日、当時新婚だったランバス夫妻が南メソヂスト監督教会より派遣を受け、ニューヨークから中国に向かって出航した[420]。そして4ヶ月と11日が経過した同年9月17日、ランバス夫妻は中国に到着した[421]。彼らの目的地は、すでに南メソヂスト監督教会の拠点宣教地になっていた上海であった。そして、中国に到着してから2ヶ月後の11月10日、宣教地である上海でランバスを出産した。言い換えれば、ランバスの親であるランバス夫婦がまだ宣教地である中国についての十分な言語と文化についての学習が行われていない状況で、彼が誕生したのである。

したがってランバスの親が南メソヂスト監督教会の派遣を受けて、ニューヨークを離れ、中国に向かった当時、メアリ・イザベラは、すでに妊娠していたという事実を知った。新婚夫婦でありながら、さらに一人暮らしではなく、子どもを授かった状況の中で、夫婦が共に数ヶ月にも及ぶ旅程がかかる中国に赴いた事実は、誰が見ても無謀な挑戦と言わざるを得なかった。また、たとえ西洋列強によってその門戸が開放されたとしても、当時の東アジアの中国は大きな危険にさらされる可能性が大きかった。出産のための医療施設が十分に備わっていたのだろうかとの疑問も持つしかない容易でない挑戦であった。それにもかかわらず、ランバス夫婦が、中国宣教師として喜んで派遣を受けることができたのは、彼の家の履歴を調べるとき、容易に理解することができる。

本来ランバス家は代々、米国内でも非常によく知られている宣教師一家であった。1917年4月に南メソヂスト監督教会の機関紙であるthe Missionary Voiceに掲載された記事によると、当時、「ランバスの家は南メソヂスト監督教会年報の次元を超え、約150年間遂げてきた宣教の働きの記録を持っている」(The Lambuth family have a record of missionary service of about one hundred and fifty years、a history without a parallel in the annals of Southern Methodism)と表現されている程に宣教と密接な関連を持っていた。つまり、家柄それ自体が、宣教師となる必然性と独自性を持っていたのである。実際にランバスの曾祖父と祖父はミシシッピ(Mississippi)州とルイジアナ州(Louisiana)でインディアンとフランス人を対象に開拓宣教に臨んだ初期の宣教師であった[422]。それによりランバス家は、周囲の環境と生活そのものがフロンティア精神と開拓宣教とにつながり、このことは自然と

---

[419] James Cannon Ⅲ, *History of Southern Methodist Missions*, Nashville: Cokesbury Press, 1926, p.96.
[420] W. E. Towson, 'The Missionary History of the Lambuth Family', *MV*, April, 1917, p.109; *WRL*, p.20.
[421] 'Memoir – Rev. James William Lambuth, D. D.', *MJMACMECS*, 1892, p.15; W. E. Towson, *Ibid*, p.109.
[422] *Ibid*, p.14; W. E. Towson, *Ibid*, p.109.

宣教の重要性を身につけるきっかけになる外なかったのである。また、ランバスの妻であるメアリ・イザベラとは、実際に彼が結婚する前、南メソヂスト監督教会の海外宣教師になろうと、志願した最初の女性でもあった[423]。このように、ランバス家においては宣教はいつも最優先事項であった。

したがって、上記のような背景と事実などを総合的に考慮すると、メアリ・イザベラが妊娠中である状況にもかかわらず宣教地に向けた長距離の旅を敢行することができたのは、彼らにとって当然といえるだろう。まさにこのような家系にランバスが、それも長男として生まれた。出生地は、米国以外の人種と言語、文化に満ちた宣教地の中国であった。そうであればランバスは、本人の意志とは関係なく、すでに出生前から宣教との関連付けが窺えた。彼は生まれながらすでに「母乳とともに宣教師の熱意と精神まで食べていた」[424]と指摘する者もいる。また、長男として生まれたという事実を考慮すれば、家父長的な状況の中で、それも、やはり代々受け継いできた宣教師一家の性格を受け継いでいかなければならないという責務を持たざるをえなかったと簡単に推測することができるだろう。彼には二人の妹と一人の弟がいたが、三番目のノラ(N. K. Lambuth)を除けば、残りの二人は皆、ランバスのように宣教地である中国で生まれた。

(2)中国での生活

先に説明したように、ランバスは歴史的な宣教師の家で2男2女の長男として生まれた。宣教地で生まれたのは自身のルーツであり、親の故郷である米国の記憶よりも、中国での記憶が上回るのは当然であった。ランバスの回想を見ると、彼の中国での生活の中で、最初の記憶が宣教師館(mission house)玄関の下で小さなカニを取ったことだと語っている[425]。これは、換言すれば、宣教地での小さな日常が、彼には異国的な要素ではなく、自然な生活として受け入れられたこととして見ることができるだろう。このように、ランバスの生活環境は、中国と米国という東西の二つの要素が調和の中で成り立つしかない背景に置かれていた。つまり、家の中では米国という西洋文化、家の外に出て行けば中国という東洋文化に接し、両者が交錯する幼年時代を送ったのである。それは強制的な接触というより、宣教師とその家族が直面しなければならない自然な姿であった。

時には上記のような東洋と西洋の文化が、迷信と科学という二分法的な要素で対立し理解されている場合もあった。ピンソンはランバス評伝にて、中国で過ごした幼年時代のエピ

---

423 W. E. Towson, *Ibid*, p.110.
424 *Ibid*, p.111.
425 *WRL*, pp.23-24.

ソードの一つを次のように紹介している。

彼[ランバス]が記憶しているのは、月食(eclipse of the moon)である。月食が起こる間、都市のすべての道はかなり騒がしくなる。喧しくしている人は中国人なのだが、彼らは激烈な月が従順な月を捕まえて飲み込んしまうと考え、鐘を叩き爆竹を鳴らして追い出してしまおうとしているのである。キリスト者ではなかった料理師は、月が最も暗くなって月食が最高潮に達したときに、中庭から家に飛び込んで入り、従順な月が消えようとしていると叫んだ。その時、幼いウォルターの母親が月食について説明してくれれば、迷信から由来した料理師が持った恐怖は無くなってしまい、再び素敵な満月の姿が現れたら、母の説明が事実であることに満足する様子を見せた。それから数年後に、ランバス夫人（Mrs. Lambuth）は中国語で千字文を書くようになり、それは全体の動きに対して中国人がよりよく理解できる助けになった[426]。

近代科学に関する知識が相対的に西洋に比べて発達していなかった中国、すなわち東洋人たちの姿が幼いランバスの眼には不思議に見えた。そのたびに彼の両親は、ランバスに東洋の迷信的要素を指摘した。したがってランバスは、自然と東洋の迷信的要素と西洋の科学的要素が衝突する際にどのように対処すべきか、身につけることができたと言うことができる。これは後に、より具体的に扱う主題なので、ここでは、少しの言及するに留めるが、当代の宣教師をはじめとする西洋人が一般的に東洋について持っていた西欧優越意識、すなわち「オリエンタリズム」(Orientalism)の典型的な特性が、ランバスにも例外ではなく妥当していたという事実を推測することができる。しかし宣教地の中国の上海で生まれ幼少時代を過ごしたわけだけ、ランバスは他の西洋人と差があったことは明らかである。

このように幼少時代を中国で過ごしたランバスは、東洋と西洋という二つの異質な文化の中で大きなカルチャーショックもなく、その両者をより自然に体得することができた。ところで、宣教師の子どもたちのカルチャーショックに関する適応と理解の程度は、親をはじめとする第1世代の宣教師よりも早く慣れるのは自然な過程であった。

また、宣教師の子どもだったので、彼の両親の宣教活動をすぐそばで見守ることができた。時々、彼の父親は、ランバスを連れて宣教の現場に出ることも多かった。これに関するピンソンの記述である。

ウォルターは六才の頃、父に連れられて城壁で囲まれた町の中の教会に行った。礼拝を執り行っている間、息子が退屈しないようにと、父は絵本を持って行った。眠ってしまって、椅子から転げ落ちたりしないように、ランバス博士は両側に扉のついた古風な説教壇の中に床几を置き、ウォルターにその上に坐って説教が終わるまで絵本を見ているように言って聞かせた[427]。

---

[426] *Ibid*, p.24.
[427] *Ibid*, p.25;『ウォルター・ラッセル・ランバス』、35頁。

彼の父親は、ランバスを連れて宣教の現場に参加することもあり、父親が説教をする場合には、父親と一緒に講壇に上がって説教が終わるまでいたりした。これはランバスの父親がかなり積極的で活動的な宣教活動を行っているため、可能なことであった。例えば礼拝堂という限られた場所を離れ路上伝道に躊躇せずに出て、積極的に福音を伝える宣教活動を行っていった[428]。宣教拠点である上海の様々な集落を、彼はあちこちを縫って、福音を伝えようとした。また、ランバスは、数年の間に南メソヂスト監督教会の中国宣教の総理(superintendent)として活動しながら、中国宣教の全体的な方向と行政を担当する指導者の役割を果たしたりもした。そして父親は他の人よりも優れた生来の言語能力を持っていたので、中国語を比較的早く習得することができたが、これは新約聖書を中国語に翻訳して伝道を行っていく上で大きな助けになった。そのほかにも、文書伝道の働き、つまりキリスト教の関連書物を翻訳するのにも力を注いで、中国人が福音を簡単に受け入れ理解するように努力を傾けた。このように父親J・W・ランバスは、誰よりも情熱的に福音伝道者として働き[429]、非常に積極的な働きを展開したので、息子のランバスは、これらの親の宣教活動をすぐそばで見ることができた。

さらに、親の宣教活動をただ眺めていただけではなかった。彼が4歳になった時に父親、J. W.ランバスの手に導かれて、初めての長距離宣教旅行に行くことになった[430]。目的地は、上海から約100キロ離れた蘇州であった。当時、中国人は小さく人形のような西洋の子どもの言葉と行動に多くの関心を持っていたので、彼はで大きな注目を集めていた。そういう意味ではピンソンは、4歳のときに父親と一緒に蘇州に行ったことがランバスにとって宣教活動の出発点(beginning his missionary work)と表現している[431]。

もちろん当時、彼は幼稚園にも行っていない乳児だったので、親の初期宣教活動を深く理解するには限界があった。また、ランバス自身が自らの宣教の具体的な目的意識と意味を付与した言葉と行動を十分に自覚していたとは言い難い。しかし、親の姿とその活動をすぐそばで見て聞くそのことだけで、宣教が何なのかについて、その基本を自然体得しながら成長することができたのである。彼はすでに母乳と一緒に「宣教師の熱意と精神を食べて(drank in missionary enthusiasm and spirit with his mother's milk)」[432]育ったと、指摘する者もいる。これは神学校現場で理論的に学ぶ宣教学的知識よりもさらに現実的であり、実践的な教育になったと言うことができる。

---

428 'Memoir – Rev. James William Lambuth, D. D.', *MJMACMECS*, 1892, p.15.
429 *Ibid*, p.15.
430 *WRL*, p.25.
431 *Ibid*, p.25.
432 W. E. Towson, The Missionary History of the Lambuth Family, *MV*, April, 1917, p.111.

(3)信仰教育と南北戦争

5歳になった1859年は、幼いランバスが東洋と対比される西洋の世界観と文化を直接体験することができるようになる起点になる。彼は母親のメアリー・イザベラおよび妹と一緒に中国、上海を離れて、親の故郷である米国に向かうことになる。父親であるJ. W.ランバスを宣教地に残し、皆が米国に帰国することになった主な理由をメアリー・イザベラは、自分の日記に次のように記録している。

神が創造し給うた中でも文化のおくれた国にあって愛してやまない我が家と学校に別れを告げ、涙はとめどなく流れ、心は悲しみに沈み、一週間近くが経つ。別れを告げたのは何故か。それは神が与えて下さった可愛い子供たちを、もっときれいな空気の中でキリスト教教育の恩恵を十分に受けながら育てられる家に連れてゆくためである。私は自分の義務を果たしていると信じている。もし果たしているのであれば、私には天からの加護があるだろう。もし果たしていないなら、どうか神様、進むべき道をお示し下さい[433]。

ランバスの母親、メアリー・イザベラの日記で明確に表れることは、ランバスが米国へ渡ることになった理由がまさに教育のためであり、アメリカでの完全なキリスト教教育による子育てのためであった。幼児期は家庭で父母を通じてある程度十分な教育が成されることもできたが、ランバスが次第に成長していく段階で家庭教育だけでは限界にぶつかるしかなかった。したかって、ランバスの母親は、子どもたちが安定した環境の中で体系化された教育を受けなければならない必要性を感じていたのである。例え中国が西洋に門戸を開放して17余年の時間が流れていたとしても、未だ西洋式教育方法と支援は十分と言えなかった。これに加えて、ランバスの母親はキリスト教的な雰囲気が濃厚な環境の中で子どもたちが育つことを切実に望んでいた、すなわち、キリスト教教育を通じて素養と情操教育が備わることを望んだのである。それは神から与えられた子どもたちに対する最も基本的な義務と感じたのである。本国にいた知人もランバスが、本格的な教育課程だけは、米国で受けることを望む気持ちが強かったと述べている[434]。そして1859年、ランバスは、母親、妹と一緒に米国に帰国するようになった。最初の2年間は、当時ニューヨーク・ケンブリッジ(Cmbridge、New York)に住んでいた祖父の家で一緒に住んだ。ところが、幼いランバスの初期の米国生活はそれほど順調ではなかった。何よりも大変だったのは、言語の問題であっ

---

[433] *Mary Isabella McClellan's Diary*, October, 1, 1859; *WRL*, p.27再引用 ;『ウォルター・ラッセル・ランバス』、36-37頁再引用。
[434] *WRL*, pp.28-29.

た。宣教地である中国にいた時、家の外の他の場所に行けば中国語に接したランバスであった。そして、彼が親しく過ごした同年代の友人はすべて中国人であったので、当時ランバスは、英語よりも中国語の方が比較的慣れていた[435]。しかし、ランバスは、周囲の知人の助けを借りて、ますます西洋、つまり米国の文化と環境に慣れたていった。

一方、ランバスは、祖父の家で一緒に過ごす中、何よりも、キリスト教教育を十分に受けることができた。参考までにランバスの外戚は、スコットランド(Scotland)にその根を置いており、ほとんどのスコットランドのキリスト者がそうだったように長老派の徹底した信仰と厳格な倫理意識を守り続けていた。彼は親戚と一緒に、基本的に毎朝家庭礼拝(family devotion)を守り、聖書を覚えたりした。そしてニューヨークの連合長老派教会(United Presbyterian)に出席し、安息日を徹底的に守る教えを学び、同時に誰よりも厳しい信仰教育を受けることになった[436]。彼の両親がメソヂストであったにもかかわらず、彼は厳格なピューリタン精神を所有している祖父の影響を受け、長老派教会に出席するようになったのだろう。そのメソジスト教会と長老派教会を行き来し、信仰教育を受けてきたランバスの幼年時代は、後日彼にとって他教派の理解とこれを通じたエキュメニカルな精神を所有することができる基本的な基盤を提供したと見ることができる。このように、中国の上海とニューヨークで親と祖父を介して学んできたエキュメニカルな宣教精神は自然に習得にされ、意味のある経験になった。

一方、ランバスが米国に帰国してから2年後の1861年、南北戦争が勃発した。これは、米国の歴史上、最も残酷で破壊的な戦争であった[437]。ところで、その背景には奴隷問題が主な原因となっていた。このように幼いランバスが本国で経験した米国の社会は、混沌と困難な状況に直面していた。もちろん祖父の住まいであるニューヨークは戦場とはかなりの距離があったので、戦争の傷を直接体験できる場所ではなかった。しかし米合衆国、すなわち北連邦(Union)の商業と貿易の中心地であったニューヨークでは、戦争関連の知らせが急速に伝播されてきた。したがって、家族をはじめ、周囲から戦争に関する状況を概略だけでも聞いて間接的な経験をすることができたと思われる[438]。さらに、特筆すべき点は、ランバスの親が南メソヂスト監督教会所属の宣教師だったという点であり、そして彼の祖父J・R・ランバス(J. R. Lambuth)は奴隷を所有していたということである[439]。つまり、実家の方は奴隷を所有しており、自分の親は奴隷制度を擁護していた南メソヂスト監督教会身分の宣教

---

435 *Ibid*, p.28.
436 *Ibid*, p.29.
437 柳大永、『美國宗教史』(米国宗教史)、前掲書、313頁参照。
438 ランバスの伝記を著したピンソンも南北戦争が当時、子どもであったランバスに大きな影響を及ぼしたと推測している。*WRL*, p.31.
439 *Ibid*, p.31.

師だったが、彼は最初の米国の社会に接して生活していたのは、奴隷制度に反対する雰囲気が強い北部連邦の中心ニューヨークであった。これに加えて、南北戦争当時、北部連邦軍の代表的指揮官であったマックレラン(G. B. McClellan)将軍は、母方の血統であった[440]。そして1863年に戦争が本格化しているときに、彼の家族は外戚を残してミシシッピに移住した。ところが、ミシシッピは米国から脱退してアメリカ連合国、すなわち南部同盟(Confederate)に独立した7つの州(state)に属していたので、当時のニューヨークと対立する地域であった。このように、ランバスの周囲の環境は、当時の米国の社会が抱える葛藤の極みを互いに行き来する状況の中に置かれていた。さらにこの時期、妹のネッティが猩紅熱によって亡くなりランバスは大きな痛みを経験した[441]。このように、ランバスの最初の本国の生活は、幸せよりも痛みと苦難の時期を送ったと言えるであろう。しかし彼が受けたピューリタン的な徹底した信仰教育は、子どもの頃のランバスが比較的堅実な信仰を所有できる基礎を提供したのである。

(4)宣教への召命と準備、そして結婚

父母の故郷である米国に行ってから5年後の1864年、彼の家族は再び宣教地である中国上海へ戻った。しかし、中国に戻ったランバスの健康は、目と気管支を中心としてあまり良くなかった。良くない健康状態で宣教地に継続して居住することは容易ではなかった。結局、彼は家族と離れて一人で米国に戻ることにした。 1869年5月19日米国行きの蒸気船に乗って本国に向かった。しかし、衰弱した調子のせいか、彼は深刻な船酔いを経験した。この状態で長距離航海を継続することは困難であったので、彼は、3日目に中間寄港地である日本の横浜にしばらく停泊したとき、ここで降りて休息をとり体調の回復を図った[442]。ところで、この時ランバスは日本に初めて接したのである。また、当時の日本は、明治維新という近代的変化を経験していた時であった。したがって、西洋文物や文化が横浜のような開港地を通じて急速に押し寄せていた状況であった。このように西洋文物を通じた日本の変革の初期過程を、彼は直接目撃することができたのである。そして、これまで中国に限定されていた、彼の東アジアの認識が日本にまで拡大することができた最初の経験となるきっかけになった。このように、日本の滞在時間は、少しの間だったがランバスにかなり強烈な印象を与えたと推測することができる。

そして何よりも、一人で長期間の帰国の旅を持ったランバスは、この時非常に意味のある

---

440 W. E. Towson, The Missionary History of the Lambuth Family, *MV*, April, 1917, p.110.
441 *WRL*, p.32.
442 *Ibid*, p.36.

時間を持つようになった。何よりも自分自身の将来について検討することができる時間を過ごしており、その結果、霊的な啓発の時間(spiritual birth hour)という貴重な経験を持つことができたのである[443]。そして彼は、米国に到着した後、中国の上海にいた母親に、次のような手紙を送って、キリスト者として命を捧げる約束を明らかにした。

筆を置く前に申し上げたいのですが、昨朝、南メソヂスト監督教会の礼拝に出席して、クリスチャンとして、神の御助けにより、けがれのない信仰生活を送る誓いを立てました。どうか私がその誓いのとおりに生きていくことができるよう、私のためにお祈りください[444]。

メソジスト神学的に表現するならば、この事件はランバスにおいての再生(rebirth)であった。この時を起点として、彼は人生の大きな方向をより具体的に準備して進むことができるようになった。それはつまり神の召命(calling)を意味した。次はこれと関連するランバスの告白である。

午後三時に愛餐会に出かけました。はじめは少しきまり悪かったのですが、スピーチを続けているうちに、そんな気持ちは消えてしまいました。私はどのようにして神を求めるようになったか、よくあなたが私に話してくださったことを語り、それでも大海原に一人ぼっちだったときは本当にその必要を感じたこと、そのことについて真剣に考えるように導かれ、救われるためにしなければならないのは、この身をイエス様の前に投げ出して全身全霊を捧げることだと思ったことを語りました[445]。

海の上に一人置かれた長距離の旅の中で、彼は再生の経験と共に神の召命を認識し始めた。その召命は具体的には宣教師の道(missionary task)を意味した[446]。このような信仰的体験と決断の中で、ランバスは、家族と離れている不安を克服して、心の安定を持つことができた。そして衰弱していた彼の体調も徐々に回復していった。

以後ランバスは、本格的に宣教師になるための道を歩もうと努力した。このため、まず関連する学業課程を修めていかなければならなかった。彼は1871年、11歳でバージニア州の近くに位置するエモリー＆ヘンリー大学(Emory and Henry College)に入学した[447]。入学してから間もなくYMCAを組織し初代会長として尽力するなど、誰よりも積極的な校内活動

---

443 *Ibid*, p.37.
444 *Ibid*, p.37;『ウォルター・ラッセル・ランバス』、49頁。
445 *Ibid*, p.40;『ウォルター・ラッセル・ランバス』、52頁。
446 *Ibid*, p.40.
447 *Ibid*, p.41.ちなみにピンソンの著書を日本語に翻訳し、出版した日本語版『ウォルター・ラッセル・ランバス －Prophet and Pioneer』の付録として載っているウォルター・R・ランバス略年譜には、ランバスがエモリー＆ヘンリー大学に入学した時期を1872年(18歳)だと間違って記述しておいている。『ウォルター・ラッセル・ランバス』、322頁参照。

を成し遂げていった。眼疾患に起因する健康上の問題でしばらく学業を中断したりしたが、最善を尽くして学業を修め、1875年に卒業、学士号(B.A.)学位を取得することになった。この学校は教会に関連する数多くの人物を輩出していたキリスト教主義教育機関であった[448]ので、先輩・後輩などを通じた教界の人物と自然に関係を結んでいくことができる機会を持つことができた。また、この学校の在学中、ランバスは、自分が医学を専攻すべきだという確固とした決心をすることになる。もちろん宣教師になろうとする決心に変わりはなかった。すなわち、医療宣教師(medical missionary)としての道を選択したいと決心したのである[449]。次は、これに関連する彼の言及である。

しかし一方では、この考えは日ごとに強くなってきており、今では私の義務が伝道者になるように導くのと同様、中国に行くよう導いているとも感じています。私はずっと、医学の修得が役に立つもので、実際中国で成功するためにも必須であるとさえ考えてきましたが、医学抜きでやらなければならないだろうという結論に達しかけていました。私は三年次の春学期に在籍していて、これまでのところ試験にも受かってきていますので、卒業証書をもらわずにここを去るとしたら悔やむことになります。そこで私は、医学過程にせよ別の過程にせよ、ここに留まって卒業することに決めました。私は医学を学びたいと思いますし、そうするつもりですが、すでに申しましたとおり(それにそのことでお叱りを受けることはないと存じますが)、私の希望は卒業すること、特に医学に関係のある研究をして卒業することです[450]。

ランバスは宣教師となるために医学を専攻したかったが、だからと言ってエモリー&ヘンリー大学の学業課程をすぐに中断するつもりはなかった。先にこの学校でラテン語、ヘブライ語、倫理学など[451]の学業を終えた後、その後に本人の具体的な専攻を考えようとした。そうしてランバスは1875年エモリー&ヘンリー大学を卒業、文学士(B.A.)学位を取得することになった[452]。

引き続き、彼は当時南メソヂスト監督教会の牧会者を養成した総合大学であるヴァンダービルト大学(Vanderbilt University)に入学した。ところで、ここは医学と神学を同時に勉強できる、つまり医療宣教師になろうと決心したランバスにとって最も適切な教育機関で

---

448 *WRL*, p.41.
449 *Ibid*, p.43.
450 *Ibid*, p.43 ;『ウォルター・ラッセル・ランバス』、54-55頁。
451 *Ibid*, p.43.
452 南メソヂスト監督教会の機関誌である*the Missionary Voice*の1921年11月号にはランバスの学歴に関してエモリー&ヘンリー大学に入学する前、テネシー州レバノン(Lebanon, Tennessee)へ位置するカンバーランド大学を経、エモリー&ヘンリー大学で1875年文学修士(M. A.)の学位を取ったと記されている。しかし、ランバスが21歳(1875年)の時、学部コースワークを(文学士、B. A.)ではなく、大学院コースワーク(文学修士、M. A.)を卒業したのは間違いの可能性が高い。それ故、*the Missionary Voice*の1921年11月号に記載されているランバスの学歴の中でカンバーランド大学(university)はカンバーランドにある高等学校(school)課程に、そしてエモリー&ヘンリー大学は大学院修士課程ではなく、学部課程に入学したこととして訂正しなければならない。'Entered into Rest', *MV*, November, 1921, p.323.

あった。一方その年彼は南メソヂスト監督教会から説教できる資格(license to preach)を得ることになった[453]。彼は学業と共に牧会に並行して携わり、彼の初めての牧会地はナッシュビルから何マイルも離れたウッドバインであった[454]。週末になれば馬に乗ってそこに行って祈祷会と主日学校、そして説教のために牧会現場で奉仕した後、再び学校に戻って来て学業に努めたのである。そして1876年には、南メソヂスト監督教会テネシー年会(the Tennessee Conference of the Methodist Episcopal Church, South)に入会することを許されたのと同時に、キーナー(J. C. Keener)監督から執事牧師按手を、1877年には長老牧師按手を受けることになり、宣教師及び牧会者として本格的な歩みを始めた[455]。前述のように、ランバスは学業と牧会に並行して取り組み、1877年ヴァンダービルト大学を卒業して神学士(B.D.)と医学士(B.M.)二つの学位を取得することになった。

一方、ランバスがナッシュビルで生活する当時、彼は2年という時間の大部分をケリー(D. C. Kelly)博士の家に下宿して過ごした[456]。ところでケリーは、1854年ランバスの父(J. W. Lambuth)とともに南メソヂスト監督教会の中国宣教師としての派遣を受けて宣教師として活動した同僚であった[457]。特別に南メソヂスト監督教会の中国宣教にあって医療奉仕事業を成し遂げていた。しかし中国現地でケリー夫人の健康問題によって本国へ帰国した後、ナッシュビルで居住していた[458]。父親の同僚宣教師であった親密なよしみによって、ランバスはケリー家庭の助けを受けて家族を離れて米国の生活に耐えて進むことができた。そしてランバスはここで一緒に生活しながらケリー博士の娘のケリー(D. Kelly)と親しくなり、結局1877年8月2日、マックケンドリー教会(McKendree Church)で彼女と結婚をすることになった[459]。彼女との結婚は、宣教師になろうと努力していたランバスにとって大きな力になった。彼女もやはり宣教師の子どもだったので、宣教師の事情を十分に理解することができる素養を持っていたのである。その上彼女の父親も、やはり何年かの間中国宣教師として活動した経験があったので、当時の東洋、その中でも中国宣教を準備していたランバスの宣教的目標を自然に共有して激励することができる精神を備えていた。

このように学業を終えて結婚をしたランバスは、その年(1877年)南メソヂスト監督教会宣

---

453 ピンソンの著書には、ランバスがエモリー&ヘンリーを入学した年(1871年)に説教することができる資格を取得したと言っているが、これは*the Missionary Voice*の1921年11月号の記録によって、ヴァンダービルト大学(Vanderbilt University)に入学した年(1875年)として訂正すべきである。*WRL*, p.47; 'Entered into Rest', *MV*, November, 1921, p.324.

454 *WRL*, p.47.

455 *Ibid*, p.47.

456 *Ibid*, p.48.

457 'Memoir – Rev. James William Lambuth, D. D.', *MJMACMECS*, 1892, p.15; W. E. Towson, The Missionary History of the Lambuth Family, *MV*, April, 1917, p.111.

458 James Cannon Ⅲ, *History of Southern Methodist Missions*, pp.98-99.

459 *WRL*, p.48.

教局(Board of Mission of the Methodist Episcopal Church,South)から中国宣教師としての任命を受けた。そして結婚して2ヶ月後、妻と共にサンフランシスコ(San Francisco)港から蒸気船に乗って中国に向かうことになった。

第2節：宣教活動

(1)中国の宣教

ランバス夫婦は、1877年11月中国の上海に到着した。彼は直ちに医療事業を始めるために準備し、その結果1ヶ月の後の12月に医療奉仕に着手することができた[460]。小さい診療所を開設したが、ここは何よりもアヘン中毒者を治療するという目的を持っていた。ランバスが中国宣教を開始するにあたって特にアヘンに関連した治療事業に集中することになったのには理由があった。それは当時アヘン中毒が中国社会の大きな社会的問題として台頭したためであった。すなわち、最優先的に当面の医療奉仕的課題だったのである。そしてピンソンによれば、ランバスはアヘンが中国社会の大きな問題として台頭した根底には西洋列強の貪欲さと干渉があるためだと考えたようである[461]。

もちろん中国が西洋列強によって強制的に門戸を開放することになったことは、アヘンによってもたらされた結果であった。19世紀に入って英国は中国を通じて茶を主な品目として輸入していた。しかし次第に中国茶を輸入するために決済する銀が不足すると、英国はインドで栽培したアヘンを中国に密輸出して稼いだ銀で茶を輸入することになった。ところでアヘンによる英国の対中国密輸出は、中国内農村経済の混乱を誘発させ、次第に銀が外部に流出して中国の財政的危機を招くことになった。ここに中国、当時の清国皇帝は英国が主導していたアヘンを全て没収して破棄する断固たる措置を取ることになる。これを口実として英国は中国と戦争をすることになったが、これがいわゆる阿片戦争(Opium War)として良く知られた弟1次中英戦争(1839-1842)であった。これによって英国と中国は南京条約という不平等条約を結ぶことになり、これを契機に中国は西洋列強に門戸を開放することになった。したがって英国がインドで栽培されたアヘンを中国に密輸出して、中国内ではアヘン問題が大きな社会的問題として浮上することになったのである。

ランバスは中国宣教師として派遣を受けて現地に入り、このような時代的状況を認識していた。そしてそれによる中国内の疲弊と危機に同情することになった。したがって、当時

460 *Ibid*, p.51.
461 *Ibid*, pp.53-54.

ランバスが中国社会の中で生活しながら医療面で直面しなければならなかった最も優先的な課題は、アヘン中毒に関連した問題を解決することであった。同時にアヘン中毒者を治療してこの問題を解決することは、自身と同じ西洋人が中国で犯した誤ちの責任を負うことでもあった。

1年目に、ランバスは上海で医療奉仕活動を開始した。その後、彼の活動範囲は上海を中心に隣接した南京、蘇州など郊外周辺に次第に拡張されていった[462]。先に述べた通り、彼の医療奉仕活動は何よりもアヘン中毒者を中心に行われた。そしてアヘンを禁止するための団体、すなわちアヘン防止協会(the anti-opium society)を病院内に組織して、医療機関と相互連動させて積極的な治療と予防に努めた[463]。もちろん彼はアヘン以外にも他の病気で苦労している患者を往診して積極的に治療することにも努めた。当時の彼の宣教報告によれば、ある週には診療活動のために約104マイルの長距離を行き来し、6つの市と村で診療と共に医薬品を普及させたという。また、初期二ヶ月の間には、91人の患者を治療するほど彼は非常に積極的な活動を展開した[464]。もちろん、彼の医療活動と関連して運営できる予算が限定されていたし、また、その金額も非常に少なかったので治療のための十分な設備を準備し難い状況でもあった[465]。それにもかかわらず、ランバスは与えられた状況下で最善を尽くして患者に寄りそった。それ故、ランバスの医療活動は肯定的な結果を生むことができ、周囲の患者からも肯定的な評価を受けることができた。

ランバスの活動が純粋な医療活動それ自体で終わったわけではなかった。彼の医療活動には必ず福音的な要素が含まれており、これと関連した宣教的活動が伴った。すなわち、往診と共に福音を伝えるための説教が行われ、アヘン中毒治療所では朝と夕方に患者の祈祷会への出席を義務化するなど、現地の人たちにキリスト教信仰が伝えられるように努力した[466]。事実ランバスは、医療奉仕者(medical missionary)とは、患者を治療することも重要だが、福音を伝える宣教師としての使命を優先的に考慮しなければなければならないと考えた[467]。したがって医療とキリスト教信仰が結びつくことで、真の意味での医療奉仕

---

462 ピンソンはランバスに於いて、初期中国での宣教の開始と活動順番、そして年度について正確に記述せず、混同しているようである。例えば、彼の著書51頁にランバスが1887年11月、上海へ着いた後、同年12月に医療宣教を開始、宣教を開始した最初の年(1877年)に同じ地域で阿片中毒治療所(opium refuge)を開設したと記している。(during his first year opened an opium refuge in Shanghai)しかし、53頁では、ランバスが1880年5月に上海で阿片中毒治療所を開所した(It was in May, 1880, that he opened an opium refuge in the city of Shanghai)と説明しているので、記録が相互に矛盾している。*Ibid*, p.51, 53.

463 *Ibid*, p.54.

464 *Ibid*, p.52.

465 *Ibid*, pp.52-53.

466 *Ibid*, pp.52-54.

467 W. R. Lambuth, *Medical Missions: the Twofold Task*, New York: Student Volunteer Movement for Foreign Missions, 1920, p.57.

(medical mission)が成り立ったのである。

このような状況の下、ランバスの家庭は困難な状況にも直面した。1880年の夏、妻の健康が悪化したのである。彼は妻を治療するために努力したが、状況は好転せず、結局妻のデイジーは米国に戻らなければならなかった。妻を本国に送ったランバスは、単独で宣教地に残って医療奉仕に集中した。しかし翌年1881年2月、予期しない出来事が起き、ランバス自身も米国に戻らなければならない状況に置かれることになった。同僚であるマッククライン夫人(Mrs. K. H. McClain)の健康が悪化して本国に戻らなければならなかったが、安全に帰国するためにランバスが同行しなければならなかった。したがってランバスも共に米国に戻るほかなく、結局その年3月16日サンフランシスコに到着することになった[468]。

たとえ自身の意志とは異なり宣教地を離れるほかはなかったとしても、本国での一時帰国はランバスの生涯を振り返ってみる時、非常に意味深い時であった。つまり、より効果的な医療奉仕者の結果を得るために、再教育の機会を持つことができたのである。彼は特に医療奉仕者というのは、可能な限り最高の訓練を受けなければならないと口癖のように主張しており[469]、加えて厳密な完全性を備えなければならないと考えた[470]。したがって本国にしばらく帰ったついでに、彼はもう少し深く医学知識と医療装備に関連した技術を習得しようと考えた。先ず彼は東洋、その中でも当時の中国が必要とするものが何であるのかを考え、ニューヨークに位置したベルビュー病院に通って研修を受けた[471]。その後、1881年5月20日、妻と共にニューヨークを離れてスコットランドのエディンバラに向かった[472]。エディンバラは、1835年広東省の医療奉仕事業を切り開いたパーカー(Peter Parker)博士の故郷として、1841年エディンバラ医療宣教会(the Edinburgh Medical Missionary Society)が組織されている都市で、本来医療奉仕に関心が多く寄せられる教育機関があった[473]。したがって医療奉仕者の道を歩んだランバスにも有意義な所と言えた[474]。ランバスは6週間に渡って医学に関連した研修を受け、続いて英国のロンドンに移って7週間、解剖学(Anatomy)と生理学(Physiology)および眼科研修を受けた[475]。このようにランバスはやむ得なく帰国したのであるが、時間を効果的に活用して自身の医療奉仕にあって重要な研修機関を得ること

---

[468] *WRL*, p.55.
[469] *Ibid*, p.57.
[470] W. R. Lambuth, *Medical Missions: the Twofold Task*, p.91.
[471] *WRL*, p.56.
[472] *Ibid*, p.56.
[473] W. R. Lambuth, *Medical Missions: the Twofold Task*, pp.111-112.
[474] ちなみに、エディンバラ医療宣教会が組織された当時、幹事(Secretary)として努めたロウ(J. Lowe)が*Medical Missions*という表題の医療宣教に関する冊子をエディンバラで出版したが、それから25年後である1920年、ランバスが同一の表題の書物を著して出版したことはランバスにとってエディンバラという地域自体が与える意味が重要であったことを推測できる。John Lowe, *Medical Missions – Their Place and Power*, Edinburgh: Oliphant, 1895.
[475] *WRL*, p.56.

ができた。このように想像だにしなかった研修課程を終えたランバスは、1882年11月20日再び宣教地である中国に帰ってきた。そして以前と同じように医療奉仕に集中し、全力を尽くした。特に1880年からすでに計画していた蘇州での医療活動を、1883年から同僚宣教師であるパーク(W. H. Park)とともに本格的に開始することになった[476]。

そのような中でランバスは、1884年末に突然中国の首都北京に移住した。これは、彼の妻が高温多湿な蘇州の気候に適応できず健康が悪化したためであった[477]。そして1年後である1885年11月9日、蘇州で開かれた南メソヂスト監督教会中国宣教部年例会の(Annual Meeting of the China Mission)で、ランバス父子は当時の中国宣教総理(superintendent)のアレン(Young J. Allen)に次のような辞任を請願することになる。

中国宣教部の総理アレン牧師へ

親愛するアレン牧師。私たちは[南メソヂスト監督教会]宣教局(the Board of Missions)に1886年8月1日付で効力が発揮されるように中国宣教部(the China Mission)に辞任を申し込みます。私たちもやはり米合衆国に復帰するための準備が成り立つように宣教局に丁重に要請します。

あなたの真実な

(署名) J・W・ランバス、W・R・ランバス

1885年11月9日、蘇州[478]

ランバスは、公的には1877年以降、約8年間推進してきた中国宣教を彼の父親と共同名義で辞任を請願した。ランバスが父親と共に中国宣教を辞任することになった理由を、大きく次のような4つに分けて整理できる[479]。まず初めに、ランバスの家族が北京に移住することになった理由として先に明らかにしたように、蘇州の気候がランバスの家族に適応するのが難しい要因があげられる。第二に、宣教方法と政策にあたって当時の南メソヂスト監督教会の中国宣教部の指導者であったアレンと相当な見解の違いが露呈したためであった。ランバスは1891年開かれた第2回エキュメニカル・メソヂスト会議(the Ecumenical Methodist Conference)で次のような主張をした。「医療と教育事業が[それ自体が]直接的な福音事業という事実を超越して魂のために猪突的な(hand-to-hand)福音事業を[より]強

476 'A Silver Anniversary', *MV*, January, 1912, p.8. 一方、キャノンⅢは蘇州病院の設立者をランバスだと記し、評価している。James Cannon Ⅲ, *History of Southern Methodist Missions*, p.118.
477 'Notes and Comments', *GAL*, January, 1886, p.42.
478 *ARMECS*, 1886, pp.7-8.
479 Melville O. Williams, Jr., 'From Mission to Annual Conference: The Work of the Methodist Episcopal Church, South, in China, 1848-1886', *Methodist History*, Vol.31, April, 1993, pp.155-156.

調しなければならないだろう」。第三に、儒教の伝統とキリスト教信仰の関係の問題が一つの要因になった。例えば、ランバスの父親J・W・ランバスは、当初から中西書院(Anglo-Chinese College)に対して批判的な考えを持っていた。J・W・ランバスは、中西書院には儒教的な雰囲気が非常に強く現れる反面、キリスト教の聖書教育が十分に成り立たないと問題点を感じていたのである。そして第四に、アレンなど中国宣教部と深刻な意見の違いがあった。1885年11月20日の手紙には、宣教師辞任請願が同封されていたが、そこでランバス父子は「私たちの[南メソヂスト監督教会の中国宣教部]の中で不道徳なことが急速に育ちつつあります。そして万が一これに気を掛けないのならば私たちの[中国]宣教部の存立が非常な威嚇を受けることになることでしょう」と言及している。これはランバス父子の観点から、当時南メソヂスト監督教会の中国宣教部の総理であったアレンが宣教事業を独断的に運営しているという意味を内包してのことであった。このような4つの理由によって、ランバスは中国宣教師を辞任して本国に戻ろうと考えた。

しかしこの請願は直ぐには承認されなかった。翌年(1886年)にも彼の所属は蘇州地方(Soochow District)内の病院事業に任命記されると記録されていたのである[480]。 それでもランバスはすでに北京に居住していたが、南メソヂスト監督教会と関連した宣教事業には関与してはいなかった。もちろん彼がパークと共に開始した蘇州の病院に全く関心がなかったわけではないが[481]、北京で南メソヂスト監督教会と全く関係ない新しい宣教活動を準備していた。 それはメソヂスト監督教会(Methodist Episcopal Church)との協力宣教であった。これと関連してメソヂスト監督教会宣教機関誌である*Gospel in All Lands*は1886年1月号に次の通り言及している

南メソヂスト監督教会上海宣教部に属しているJ. W. ランバス牧師の息子であるW. R. ランバス牧師が妻の健康問題によって中国北部(North China)へ移住することになった状況である。 彼は北京にある私たちの宣教部に合流することが期待される。彼は有能な医師であり有名な宣教師である[482]。

当時、北京はランバス父子と葛藤と摩擦がかなりあり、南メソヂスト監督教会が未だ進出しなかった地域へ南メソヂスト監督教会の兄弟教派であるメソヂスト監督教会が宣教活動

---

480 'Methodist Episcopal, South', *GAL*, April, 1886, p.188.
481 'Soochow and Corean Hospital Reports', *the Chinese Recorder*(以下*CR*), September, 1886, p.361.
482 原本は以下のようである。Rev. W. R. Lambuth, M. D., son of Rev. J. W. Lambuth, D. D., of the Shanghai Mission of the Methodist Episcopal Church, South, has been obliged to move his family to North China, on account of the health of his wife. It is expected that he will join our mission and be … at Peking. He is an able physician and a successful missionary. 'Notes and Comments', *GAL*, January, 1886, p.42.

を推進していた地域であった[483]。ここへ移住することになった理由の一つである妻の健康問題も、蘇州とは違い北京は典型的な内陸気候の特徴を有していたので問題になる要素はなかった。またメソヂスト監督教会は同じウェスレー神学に基づいており、教会行政も互いに大きく異なるところがなかったので、ランバスが彼らと協力して医療奉仕を担っていくのに問題がなかった。しかし中国宣教を辞任しようと公式に請願した状況で、妻の健康問題と共に中国宣教部との葛藤もあり、これ以上中国での宣教を持続することは容易ではなかった。事実メソヂスト監督教会測も、北京でランバスとの協力宣教にそれほど大きな期待を持つことはなかった[484]。反対に彼の父親の場合、すでに日本に関心を持っていたため、当時、ランバス父子は中国宣教にこれ以上未練を覚えることはなかったと推測することができる[485]。

このように1877年から始まったランバス父子の中国宣教は、1886年それほど肯定的でない雰囲気の中で終わりを迎えようとしていた。それにもかかわらず、特に1877年から始まった彼の中国宣教は、南メソヂスト監督教会の医療奉仕を主導していったという点において大きな意味があった。当時の上海、蘇州、南京などを中心に構成されていた南メソヂスト監督教会の中国宣教は、ランバスの義父であるケリー以後、20余年の間医療宣教(medical mission)が一度も実施されていない状況であった[486]。彼の義父もやはり長い間活動できなく、妻の健康問題によって本国に戻っただけに、活発な南メソヂスト監督教会の医療奉仕が成立したと評価するには無理があった。また南メソヂスト監督教会の最初の宣教師であるテーラー(C. Taylor)が1848年医療宣教師として上海から入って活動したが、その働きは5年に過ぎず、その成果も微小であった。したがって、ランバスが中国で公式に南メソヂスト監督教会の医療宣教を開始した開拓者とも見ることができる[487]。それほどランバスが中国宣教に残した意義は非常に重要だと言えるであろう。

(2)日本の開拓宣教

---

483 Missions in China, *GAL*, February, 1886, pp.80-81.

484 メソヂスト監督教会の宣教機関誌である*Gospel in All Lands*の1886年1月号にメソヂスト監督教会とランバスとの協力宣教に関する記事が載った以降、他の関連記事は表れていない。そして当時メソヂスト監督教会は北京より南京のPhilander Smith Hospital at Nankingという医療機関に注目し、力を注いでいた。'Philander Smith Hospital at Nanking' June, 1886, *GAL*, pp.270-272.

485 'Evangelization in Japan', May, 1886, *GAL*, p.207.

486 James Cannon Ⅲ, *History of Southern Methodist Missions*, p.107.

487 1926年、南メソヂスト監督教会の宣教歴史(*History of Southern Methodist Missions*)を編纂したキャノンⅢ(James Cannon Ⅲ)はランバスの中国宣教に関して「中国での医療宣教はランバス博士によって行われた」(The medical work in China was therefore founded by Dr. Lambuth)と言及し、評価している。*Ibid*, p.107.

中村金次は『南米宣教五十年史』において、南メソヂスト監督教会の日本宣教の開始と関連して次のように叙述している。

僚友たる米國メソヂスト監督教會が日本傳道を決議せしは明治五年にして開始せしは翌六年であり、加奈太メソヂスト教會が宣教師を送りしも同六年であつた。南メソヂスト監督教會は、その外國傳道に對する熱情に於てこれら二教團に劣らず、万延元年(一八六０年)[488]未だ切支丹禁止の制令の撤廢せられざる以前に、ダブルユ、ゼ、テ、サリヴァン（W. J. T. Sullivan）[489]を日本に任命し、醫學校に入學せしめて其の準備に餘念なかりしが、不幸南北戰爭の起るあり、國內紛亂を極めし爲めに力を外國に向こるの餘裕を欠ぎ、一時中止の餘義なきに至り、約半世紀の間、其計劃を延期するに至りしは、實に遺憾の極である[490]。

中村金次の記述のように、南メソヂスト監督教会は1860年すでに日本宣教に着手しようと具体的な計画まで立てていた。一方これと関連した米国側の資料を調べることにしよう。

最近近30年の間に米国の南北戦争の不幸な結果の一つとして、日本で私たちの伝道が延期されたのは、あまりよく知られていない事実である。その国が開放された後の1858年に、若い男[W.J. T. Sullivan]がミシシッピ大学(University of Mississippi)を卒業する前に、その年の注目を集めたが、当時その学校の総長は、裁判官ロングストリート(A. B. Longstreet)であった。その若者は、自ら「日が昇る王国」(Sunrise Kingdom)に使えるために宣教局に派遣を受けることを提案した。これは若者の洞察力によるものか、それとも宣教局の指導者たち［当時、スーレ(Joshua Soule)監督が委員長であり、セホン(E. W. Sehon)博士が総務(Secretary)であった］によるものであったのかは不明だが若者の提案が採択された。すると彼は医学の勉強をしながら派遣の準備をすることにした。彼はナッシュビルに来て、シェルビー医科大学(Shelby Medical College)で1年間医学に勉め、後にニューオーリンズへ行った。そして、ルイジアナ大学(University of Louisiana)で医学課程を修了した。しかし、その頃、ちょうど嵐のような戦争が勃発し、宣教局は(財政的にも)余裕がなかったので、日本への宣教事業は無期限延期された。事実、ランバス博士という他の医療伝道者(preacher physician)が初の総理(superintendent)となり、彼の両親と共に歴史的な宣教を行った1886年まで日本への宣教事業は開始されなかったのである[491]。

すでに他の教派に先立って、宣教師を決定し、具体的な宣教計画まで立てて準備していた南メソヂスト監督教会であった。本格的な近代化が進行されていない状況下にあったので、

---

488 一方、1923年に著述された『合同メソヂスト教会小誌』では南メソヂスト監督教会に於いて日本宣教のための計画及び決議が1859年にあったと記されている。タザリユ・イー・タウソン, 「南メソヂスト監督教會の事業」, 山鹿旗之進 編著、前掲書、n. p.、1923、22頁参照。

489 キャノンⅢ(James Cannon Ⅲ)の著書である*History of Southern Methodist Missions*にはW. J. Sullivanだと誤記されている。他の資料ではW. J. T. Sullivanと表記されているからである。James Cannon Ⅲ, *History of Southern Methodist Missions*, p.131; 'They Also Serve', *MV*, October, 1910, p.5; 中村金次, 『南美宣教五十年史』、神戸：南美宣教五十年記念運動事務所、1936、1頁参照。

490 中村金次、同書、1頁。

491 'They Also Serve', *MV*, October, 1910, p.5.

医学を中心とする宣教トレーニングも進行していた。しかし、南北戦争という不可抗力的な状況と財政難などにより、その計画は無期限中断され、その間に宣教師の派遣は見送られていたのである。以来、約25年の時間が経って南メソヂスト監督教会の日本宣教のための開拓宣教は、ランバス父子などによって開始されるに至ったのである。

1885年5月6日、南メソヂスト監督教会宣教局の第39回年次総会の(the39th Annual Meeting of the Board of Missions)[492]最初の日、キーナー(J. C. Keener)監督によって一つの案件が提案され、決議された。当時の議事録に記録された内容は次のとおりである。「日本での宣教を開始し、これに関連して総額3,000ドルの予算支出を承認し、決議する」(Resolved、that we establish a Mission in Japan、and that we appropriate therefor the sum of three thousand dollars)[493]。この案件が決議され、南メソヂスト監督教会宣教局は中国宣教部(China Mission)のランバスの父親であるJ・W・ランバスに日本の現地調査を要請した[494]。ちなみに当時の中国の宣教師たちは、高温多湿な中国上海、蘇州など亜熱帯気候に適応しにくく、日本での休暇を過ごすことが多かった。J・W・ランバス夫妻についてもこのように日本で休暇を過ごすことが多かったので、その経験を活かし、南メソヂスト監督教会における日本宣教の開始のための現地調査の適任者として相応しかったと言える。特に、彼らは息子ランバス夫妻、その中でも妻の健康により長期間中国に居住することが困難であると感じている中であった[495]。そして気候から言って、問題なく宣教活動を継続することができるところは、日本だと考えるようになった。加えて、当時のランバス父子はアレン(Young J. Allen)をはじめとする中国宣教部と宣教方法と政策をめぐって、大きな葛藤関係にあったことは先述のとおりである。このような事実を総合して見ると、彼は南メソヂスト監督教会宣教局の現地調査の要請を断る理由がなかった。そして彼は現地調査のため、1885年9月、日本を訪問し、報告書を提出した[496]。さらに、彼は「残念ながら、蘇州の気候はどうも私と家族の健康に適していない可能性があると報告しなければなりません」[497]と

---

492 神戸栄光教会は南メソヂスト監督教会における日本宣教の開始に関する年表をまとめながら、「米国南メソヂスト監督教会第39回年次会議(キーナー監督)日本宣教提議承認」著述しておいた。すなわち、日本宣教を開始しようと決定した会議を宣教局の年次会議(Annual Meeting of the Board of Missions)ではなく、年会、つまり英語で「Annual Conference」という概念で理解している。神戸栄光教会百年史編集委員会編集、『日本基督教団神戸栄光教会百年史 1886-1985年』、神戸: 日本基督教団神戸栄光教会、2005、481頁参照。しかし、これは誤った記録である。年会(Annual Conference)と宣教局の年次会議は召集主体と議長が異なる会議であり、それによって、会議の性質も全く異なるものとなる。'The Japan Mission of the M. E. Church, South, U. S. A.', *MAMJMMECS*, 1889, p.23.

493 *Ibid*, p.23.

494 'Memoir – Rev. James William Lambuth, D. D.', *MJMACMECS*, 1892, p.15; 'Memoir', *ARMECS*, 1893, p.38.

495 中村金次、前掲書、3頁参照。

496 'The Japan Mission of the M. E. Church, South, U. S. A.', *MAMJMMECS*, 1889, p.23.

497 中村金次、前掲書、3頁。

付け加え、自分と息子夫妻がもはや蘇州で宣教活動を継続することが困難であると言及したのである。その後もJ・W・ランバスは*Gospel in All Lands*など、当時発行されていた本国の宣教雑誌に日本に関連する記事を寄稿し、南メソヂスト監督教会において、日本宣教を開始するように、米国教会の注目を喚起しようとした[498]。

その結果をもとに、1886年4月20日、マックタイヤ(Holland Nimmons McTyeire)監督が日本開拓のための宣教師を任命[499]する内容を込めた書簡を上海[500]に送った。この監督の書簡を通して、ランバスは彼の父親であるJ・W・ランバス、そして、デュークス(O. A. Dukes)と共に、南メソヂスト監督教会の日本宣教の開拓的な初代宣教師として任務を付与されたのである[501]。このように、南メソヂスト監督教会の日本宣教が、最初の一歩を踏み出すようになった。そして、ランバスは開拓のための中心的な位置にいた。このように、南メソヂスト監督教会宣教局レベルでの行政的な手続きと支援が用意されると、正式に任命を受けた者が来日した。ランバスは自分よりも4ヶ月前に来日していた父親とデュークスの後に続いて、1886年11月24日に来日した[502]。彼が身を置いたところは当時、日本の開港地の一つである関西の貿易港、神戸であった[503]。彼は先の二人の宣教師と同時に日本宣教師として派

---

498 例えば、J・W・ランバスはメソヂスト監督教会の宣教機関誌である*Gospel in All Lands*の1886年5月号に、「Evangelization in Japan」を寄稿したが、初めから「日本の土着教会は自分たちの民族に福音伝道を果たすために、情熱的である。彼らは福音伝道と彼らの教会の支援のため、ヨーロッパと米国のキリスト者たちのように、とても開放的に貢献する。日本の福音伝道の方法において、難しさは他国より少ない方である」(The native churches in Japan are zealous in the evangelization of their people. They contribute for this and the support of their churches quite as liberally as Christians of Europe and America. The difficulties in the way of evangelization in Japan are less than in many other countries)と言及しながら、日本宣教の可能性と期待に関して非常に強くアピールしていることが分かる。J. W. Lambuth, 'Evangelization in Japan', *GAL*, May, 1886, pp.207-208.

499 W. R. Lambuth, 'Pioneering the Gospel', *MV*, September, 1920, p.277.

500 当時、上海を中心に活動していた南メソヂスト監督教会中国宣教部宛に送った手紙だと推測される。'The Japan Mission of the M. E. Church, South, U. S. A.', *MAMJMMECS*, 1889, p.23.

501 *Ibid*, p.23.

502 当時、H・N・マックタイヤ監督の書簡によって、日本の開拓宣教師として任命された宣教師たちの名簿と来日日付は次のようである。'Date of Arrival', *MAMJMMECS*, 1889, p.23.

名　前	入国日付	所属年会	その他(家族など)
J. W. Lambuth	July 25th, 1886	Miss. Con.	Mrs. Lambuth and daughter
O. A. Dukes	July 25th, 1886	Texas Con.	Mrs. Dukes (入国日付 October, 1886)
W. R. Lambuth	Nov. 24th, 1886	Tenn. Con.	Mrs. Lambuth and two children

503 神戸を南メソヂスト監督教会の日本宣教において、拠点として決めた理由は1887年にランバスが米国に提出した宣教報告書(Annual Report)に次のように、明確に言及されているそうだ。①メソヂスト監督教会は、神戸から200マイル北までと300マイル南まで、つまり関東以北、東海、北西九州を宣教地としている。②やがて前線開通する鉄道路線の中心である。③日本中で四季を通じて最も健康に適した開港である。④通至便な瀬戸内海を通して主要な地方都市と連絡ができる。⑤神戸は条約港(居留地)として米国、中国、英国と毎週連絡が取れ、外国人として居住ができ、また日本人に雇われないで宣教の仕事ができる。⑥地形的条件が優れており、大阪湾に接している。酷寒の冬と蒸し暑い夏が支配する長い海岸線のほぼ中央に位置されており、眺めが良くて、道路が広く良く、25万人がすでに居住している。その他、人々も私たちのように、ここで生活することが欲しいのは当然である。*WRL*, p.82.以上の内容は神田健次、「W・R・ランバスの瀬戸内宣教圏構想」、『W・R・ランバスの使命と関西学院の鉱脈』、関西学院大学出版会、2015、

遣を受けて、本来同じ日付に来日するはずであったが、やむを得ず、日程を延期せざるを得なかった[504]。おそらく、病院と医学校を中心に北京でメソヂスト監督教会との宣教協力[505]を終えなければならない必要性があったからだと推測される。

その間に南メソヂスト監督教会のウィルソン(A. W. Wilson)監督が、デニー(Collins Denny)牧師と一緒に日本を訪問し、1886年9月17日[506] 、J・W・ランバス、デュークスと一緒に日本宣教の開始のための集まり(inauguration meeting of the Japan Mission)を持つようになった[507]。残念ながら、日本宣教が公式的に開始される歴史的瞬間をランバスは共にすることができなかったのである。しかし、1年後の1887年9月24日土曜日の午前9時に開催された第1回南メソヂスト監督教会日本宣教部の年次総会(the First Annual Meeting of the Japan Mission of the Methodist Episcopal Church, South)には参加することができた。会場はランバスの私宅であり、開拓宣教師に任命された三人の宣教師、つまりランバスをはじめとするJ・W・ランバス、デュークスが共に参加し[508]、 J・W・ランバスの聖書朗読(詩編120編とピリピ人への手紙)と祈りによって、開会された。さて、ここで注目すべきことはランバスが日本宣教部の総理(superintendent)となったことであった[509]。たとえ開始当時参加者が三人と非常に少数であったとしても、総理として任命されたのはランバスの指導力

6-7頁にも簡単にもまとめられている。

504 'The Japan Mission of the M. E. Church, South, U. S. A.', *MAMJMMECS*, 1889, p.23.

505 ランバスは北京でメソヂスト監督教会の中華北部宣教部(China North Mission)との協力の下、医療宣教を行った。W. R. Lambuth, *Winning the World for Christ*, New York: Fleming H. Revell Company, 1915, p.193; 神田健次、「中国におけるW・R・ランバス宣教師の足跡を求めて」、前掲書、73-76頁参照。

506 ちなみに、ランバスを創立者として記念している神戸栄光教会はこの日を教会の歴史的な起源としている。しかし、この日はランバスがまだ来日する前だったので、参加できず、日本人が信徒として参加したかどうかの記録も全く記されていない。厳密にいうと、この日は南メソヂスト監督教会の日本宣教が日本という宣教地で公式的に開始されたのを意味することである。それ故、この日を基準として教会が設立されたという理屈は正しくない。以上のような歴史的な事実と資料に則して、神戸栄光教会の創立日を訂正する必要がある。もちろん、『日本基督教団神戸栄光教会百年史 1886-1985年』でも神戸栄光教会の創立日をめぐって、幾つかの主張などを簡単に言及しているが、確実な資料提示と明確な論理との根拠なしで、9月17日に創立されたと主張している。神戸栄光教会百年史編集委員会編集、前掲書、89-90、481頁参照；「神戸栄光教会」、『関西学院事典』(増補改訂版)、学校法人関西学院、2014、170頁参照; 神田健次、「南メソヂスト監督教会によって創設された教会と学校」、前掲書、27頁参照。

507 'The Japan Mission of the M. E. Church, South, U. S. A.', *MAMJMMECS*, 1889, p.23; Gross Alexander, *A History of the Methodist Church, South in the United States*, New York: The Christian Literature CO., 1894, p.125.

508 午後8時に続開したイブニングセッション(Evening Session)からはモーズリー(Rev. Crowder B. Moseley)とゲインズ(Miss. N. B. Gaines)も参加した。*MAMJMMECS*, 1887, p.2.

509 その他、デュークスは会計(Treasurer)、J・W・ランバスは書記(Secretary)としても任命された。後に、ランバスは1892年、南メソヂスト監督教会日本宣教年会(the Japan Mission Conference)が組織される前である1891年まで、日本宣教部の総理として指導力を発揮した。但し、1888年の年次会議録の任命記には総理という名義が全く言及されていないが、以降の会議録にはランバスが持続的に総理として明記されていることを考慮すれば、総理としての任務は中断されずに続いていたと推定できる。また、1891年の年次会議の時に、彼は米国に帰国して、不在中であったが、それにもかかわらず、総理として明記されていた。*Ibid*, 1887, p.1; 'Appointments of the Japan Mission of the Methodist Episcopal Church, South, for the Year, 1888-1889', *Ibid*, 1888, p.4; *Ibid*, 1889, p.1; *Ibid*, 1890, p.10; *Ibid*, 1891, p.1.

が認められこともあるが、期待を受けていたことをも意味するだろう。彼を中心に組織された日本宣教部は、本国宣教局からも積極的な支援を受けることができた。当時本部宣教局の会計(Treasurer)が父親の同僚であり、自分の先生でもあるケリーだったからであった[510]。

南メソヂスト監督教会の日本宣教は、総理であるランバスの責任と指導の下で、順調に推進されていった。1886年12月3日に、南メソヂスト監督教会日本宣教部の初の教会議会(the first church conference, 教會議會[511])が開かれたが[512]、当時の統計によると、6人の西欧人、1人の中国人、1人の日本人で構成された。そして、夜間ごとに開かれる読書館(reading-room[513])と呼ばれる教育施設などで宣教活動が行われていたことを知ることができる[514]。そして、翌年(1887年)9月に開催された第1回年次総会の統計には、3つの教会、64人の成人洗礼者、10人の幼児洗礼者、66人の仮入会者(會員)、4人の神学生などをおくほど急激に成長していった[515]。

初期の日本宣教において、ランバスは最初の居住地である神戸を中心として活動していった。1886年12月31日、南メソヂスト監督教会日本宣教部の第2回四半期会議(second quarterly conference)で、彼は神戸巡回区(Kobe Circuit)の担当者として任命され、同時にここが日本宣教部の中心(head quarters)になった[516]。1888年の第2回年次総会では、彼は広島部会(Hiroshima District)の主部長老(Presiding Elder[517])として任命され、広島から松山、大分などの地域に至るまで、本州、四国、九州を網羅する広大な範囲の地域で宣教を開拓していった[518]。本来、広島は1887年12月31日に開催された第2回四半期会議で、広島巡回区(Hiroshima Circuit)に設定され、彼の父親であるJ・W・ランバスに与えられた管轄区域であった[519]。しかし、四国と九州地域まで含まれる広島部会として拡大編成されたので、この地域をJ・W・ランバスが担当するには体力的に無理があったであろう。このようにランバス父子の努力と情熱によって、南メソヂスト監督教会日本宣教部の宣教ルートはますます

---

510 *Ibid*, 1887, p.1.

511 中村金次はこの会議を教会会議(教會會議)と称しているが、これは正確な名称ではない。南メソヂスト監督教会の教理及条例によると、教会議会(教會議會)という表現が相応しい。『南メソヂスト監督教會教理及條例』、南メソヂスト出版舎、1896、48-51頁参照。

512 ちなみに、初期の日本における南メソヂスト監督教会の歴史をまとめた中村金次は12月3日に教会議会が開かれたので、それに則してこの日が今日の神戸栄光教会の創立日と主張している。筆者もこの理屈が正しいと思う。中村金次、前掲書、3頁参照。

513 この読書館はパルモア学院(Palmore Institute)の前身で、現在、神戸の啓明学院の中高等学校である。「啓明学院」、『関西学院事典』(増補改訂版)、133頁参照。

514 'The Japan Mission of the M. E. Church, South, U. S. A.', *MAMJMMECS*, 1889, p.23.

515 'Statistics of the Past Year's Work', *Ibid*, 1887, p.3.

516 'The Japan Mission of the M. E. Church, South, U. S. A.', *Ibid*, 1889, pp.23-24.

517 「Presiding Elder」という英語表現を当時のメソヂスト監督教会側は「長老司」、南メソヂスト監督教会側は「主部長老」と表記して使用した。

518 'Appointments of the Japan Mission of the Methodist Episcopal Church, South, for the Year, 1888-1889', *MAMJMMECS*, 1888, p.4.

519 'The Japan Mission of the M. E. Church, South, U. S. A.', *Ibid*, 1889, p.24.

西側へと展開することになった。ただし、先に述べたように、ここでは他の地域に比べて非常に広い範囲を管轄する必要があったため、それに伴う多くの困難があった。これに関連する彼の宣教報告である。

同労者があまりいないこの地で、「宣教」事業を行うことは全体的に不足しているのが現実です。しかし、これに立ち向かって、私たちの同労者は不十分な力と余力をもって、前進しています。先んじる時間の中で、広島教会(the Hiroshima Church)は、相対的により良い条件下にあると言え、信徒たちは、徐々に増加している様であり、いくつかの事業が積極的に行われています。この都市と岩国両方そうです。…広島巡回区(the Hiroshima Circuit)は、この都市の「宣教」事業のための一人と巡回宣教のための一人、つまり、二人の男性同労者が必要になります。そして、学校「事業」のための女性の二人が必要なのが実情です。…「もっと多くの人々とより多くの同労者たちを与えてください」(More Men, More Workers)と叫びながら、神の召命によって進みました。大分の北部と南部、松山近くの他の地域、そして広島と山口との間にある村は、私たちに開いており、助けを求めているが、我々ここまで手を伸ばすことができないのが実情です。助けのために、教会の偉大なリーダーである方の祈りを望んでいます。不十分な中で、私たちは、海の彼方を眺めています。私たちは、助けの手を熱望しますが、この助けはまだ来ていません。私たちは、人々の助けを非常に切望して探しています[520]。

ランバスの宣教報告に強調されているように、この地域は、何よりも、人的資源が不十分な状況であった。したがって円滑な日本宣教が行われるために、彼は人材補充の必要性を痛感しており、そのために本国に積極的に要請する姿勢をとった。その後ゲインズやウォーターズ(B. W. Waters)、そしてウェインライト(S. H. Wainright)が広島と大分などに合流し、ランバスの管轄区域である広島部会はますます安定と成長を手にするようになった。しかし、何よりもランバスの宣教活動において、大きな助けになったのはまさに日本人の現地指導者の協力であった。以下は、1890年年次総会に提出された彼の宣教報告（Reports of Missionaries in Hiroshima District）の中の広島巡回区に関する内容である。

私は豊かな恵みの貴重な経験、死からの保護、この世の中にて与えられる聖霊の感化、神の真実の中に存在する信仰、そして、キリストの王国のすべての広がりを願う私たちの喜び、そして、最後と闇の権威をひっくり返し、また、他の害悪から導いてくださった全能なる神に溢れる穏やかな心と真心を込め、湧き出る感謝を捧げながら、この報告を残したいと思います。…広島で活動している4人の勧士(exhorter[521])のうち2人は福音の働きにおける一つの大事なもの「信仰共同体」を組織し、成長のための実質的な希望を抱き与え、また、2方面における積極性、すなわち①広島と近隣の半径10マイル内の村々での礼拝説教、②

[520] W. R. Lambuth, 'Report of Presiding Elder of Hiroshima District', *Ibid*, 1889, p.13.
[521] 当時、日本南メソヂスト監督教会の「教理及条例」において、勧士の任務は主任伝道者(今日、教会の主任担任教師を意味)の指導の下で、機会がある時に祈祷会及び勧導を担当することであった。『南メソヂスト監督教會教理及條例』、85-86頁参照。

岩国の対岸の下関方面に私たちの働きの道が直ぐ計画されることを通知ました。私たちの宣教はハワイとサンフランシスコの福音会(the Gospel Society)の子孫たちがここに居住しているため、特別な利点を持っています。加えて実は、2年の内に壮大な鉄道がこの地域全体を貫通する予定でありますが、これは私たちに先んじた判断を与え、私たちの計画を賢明に作られ、私たちの[宣教の働き]に大いなる力を吹き込むことができます。確かに、ここは6人の居住宣教師と10人ほどの日本人信徒の指導者が約300万の人々が暮らしている広島と山口県の境界内に限って見たときに、より旺盛で広範囲な福音の働きが要求されている状態です[522]。

その他、四国の松山では教会内の乱れが深刻であったが、有能な日本人指導者の協力の下で、混乱が収束しつつあり、大分地域では特に南メソヂスト監督教会日本宣教部が養成していた神学生たちが熱心に伝道に従事していた[523]。もちろん、あまりにも広範囲な地域なので、ランバスは持続的な人的資源の必要性を訴えたが[524]、 その中でも日本人指導者たちの協力と積極性によって、彼の管轄区域はますます成長していくことができた。このように、自分に託された広い地域を巡回したランバスの努力と情熱は、他の宣教師と現地の日本人指導者とよき協力関係を築いていった。

一方、1890年の第4回南メソヂスト監督教会日本宣教部年次総会では、広島部会を広島部会と松山部会の二つの部会に分離することが決議された[525]。非常に広い地域的な困難があったにも関わらず、持続的な成長を伴った結果であった。そして広島部会は、既存の広島巡回区を管轄していたウォーターズが、ランバスは新しく組織した松山部会を担当することになった。彼の管轄区域となった松山部会は、四国西部の松山市巡回区と九州東海岸に面している大分巡回区が中心であった。いくら二つの部会に分離され、以前より管轄面積が小さくなったとしても、相変わらず広範囲であった。

このようにランバスは自分に与えられた広い範囲の宣教区域を管理し、時間が許す限り宣教現場の所々を訪問し、円滑な宣教の働きが行われるように助けを与えた。本国の宣教局から宣教師が派遣され、来日した場合、積極的に迎え、時には赴任することになる宣教地まで一緒に同行して案内する役割もいとわなかった[526]。このように、日本宣教活動において

---

522 W. R. Lambuth, 'Reports of Missionaries, Hiroshma District', *MAMJMMECS*, 1890, p.12.
523 *Ibid*, p.13.
524 ちなみに、彼の父親であるJ・W・ランバスももっと多くの人的資源が備えられるために、本国に持続的に要請した。J・W・ランバスが「私たちには果たすべき重要な役割がある；もっと多くの人々が派遣されるように、彼ら[米国教会]に言って欲しい」(We have a great work to do; Tell them to send more men)と叫んだ彼の要請は彼の死後、1893年にランバスが日本宣教部の総理として米国に宣教報告する際に、引用したものである。それほどランバス父子は日本での役割と宣教事業において、もっと多くの宣教師が派遣されるように呼び掛けたのである。*ARMECS*, 1893, p.67.
525 *MAMJMMECS*, 1890, p.11.
526 例えば、バイス(Miss. Mary F. Bice)の場合、彼女が本格的に広島部会で宣教を始める前に神戸に着き、10日間ランバスの私宅に泊まり、その後、広島に移住する時に、ランバスが同行し、宣教をめぐるすべて

彼の役割を簡単に表にまとめてみると次の通りである[527]。

＜表 - 初期の南メソヂスト監督教会の日本宣教においてのランバスの役割と管轄区域＞

期　間	役割と管轄区域	参　　考
1886-1887	日本宣教の総理、神戸巡回区の担当	日本宣教の開拓
1887-1888		現在、残っている関連記録がない
1888-1889	日本宣教の総理、広島部会の主部長老	
1889-1890	日本宣教の総理、広島部会の主部長老	
1890-1891	日本宣教の総理、松山部会の主部長老	妻の健康問題のため、1891年に一時帰国
1891-1892	日本宣教の総理	米国に滞在中

また、ランバスは医療宣教を中心に活動した中国とは異なり、日本では教育宣教に多くの関心を傾けた[528]。1888年、神戸のJ・W・ランバスの私宅で開かれた第2回南メソヂスト監督教会日本宣教部年次総会の初日のセッションで、ランバスは若者のための良い教育施設が神戸に必要であると力説して日本宣教部なりの機関の設立を提案した[529]。そして、翌年(1889年)、彼が学校設立のための敷地を購入した後[530]、神学部(Biblical Department)と普通学部(Academic Department)から成る関西学院が設立され、日本における近代教育とキ

の過程を案内した。*ARMECS*, 1891, p.52.

[527] *MAMJMMECS*, 1888, p.4, *Ibid*, 1889, p.8, *Ibid*, 1889, pp.23-24, *Ibid*, 1890, p.11; *Ibid*, 1891, p.1, 12; *ARMECS*, 1891, p.68, *Ibid*, 1892, p.31.ちなみに1892年度の宣教報告書(*ARMECS*)で、神戸巡回区の主部長老がW・R・ランバスに表記されているが、これはJ・W・ランバスの誤記である。

[528] ランバスが日本で医療宣教より教育宣教に相対的な関心を払った理由は当時、日本の状況を考慮したからである。すなわち、日本はすでに1886年、明治維新以降に急激な西欧化と近代化を行っていたので、中国のように医療機関を通す宣教に注意を注ぐ必要がなかった。James Cannon Ⅲ, *History of Southern Methodist Missions*, p.139.これに関して、南メソヂスト監督教会が宣教100周年を迎え、公に発行した*Missionary Centenary 1819-1919 World Survey*に以下のように記されている。「日本の医療事業(Japan Medical Work)。1.私たちの任務(The Task Before Us)-日本での医療事業は主に政府と個人的に日本の専門家(private Japanese practitioners)によって行われる。2.私たちがすべきこと(What We Have)-我が宣教部(mission)は日本で医療宣教の任務を担っていない。」*Missionary Centenary 1819-1919 World Survey*, Nashville: Missionary Centenary Commission Methodist Episcopal Church, South, 1919, p.42.もちろん、日本は当時に西洋の近代教育システムもすでに備えていたので、厳密にいうと、教育宣教も医療宣教と同じ状況だったと言える。しかし、日本で教育宣教を重視することができたのは何よりキリスト教指導者の養成を目指していたからである。*WRL*, p.81.一方、ランバスが個人のレベルとして一回だけ、日本内で医療宣教を行った記録はある。これに関しては『神戸又新日報』、1887年9月25日；『ランバス資料』、97-98頁；神田健次、「宇和島におけるランバス先生の足跡」、『学院史編纂室便り』、No.44、関西学院大学 学院史編纂室、2016年12月10日、2-3頁参照。

[529] *MAMJMMECS*, 1888, p.1.

[530] 'The Kwansei Gakuin – New Theological College', *MV*, January, 1912, p.51.

リスト教教育が同時に行われる基盤を提供することとなった[531]。ランバスは巡回宣教とともに神戸原田の森に位置する関西学院を中心とする教育宣教にも力を尽くした。特に神学部で講義し、日本人教会指導者を養成することに力を注いだ。実際には彼の地方巡回は試験期間や夏休みやクリスマス休暇などの隙間を利用し行われた場合もあったので、彼は相対的に教会設立をはじめとする地域宣教よりも教育宣教に集中したと見ることもできる[532]。このようなランバスの努力に基づき、関西学院は南メソヂスト監督教会宣教局が宣教地で設立したキリスト教系の学校の中で最も規模が大きな学校になったのである[533]。

このように、日本宣教の初代管理者であった彼は開拓時期から初期のすべての宣教事業の過程において、非常に重要な役割を担っており、加えてその影響力も強かったと言えるだろう。さらに、先に検討したように、総理としての役割のみならず、神戸・広島・松山を中心とする地域宣教においても大きな関心を持って巡回し、同僚の宣教師並びに日本人の教会指導者たちと共に調和のとれた協力を果たしていった。したがって、「南メソヂスト監督教会日本宣教部はランバスに負い目を負っている」(We are indebted to Dr. W. R. Lambuth, Superintendent of the Japan Mission[534]) と本国に提出した宣教報告は過言ではなかったのである。

(3)南メソヂスト監督教会宣教局での活動

1891年8月26日、第5回南メソヂスト監督教会日本宣教部の年例会の(Annual Meeting)が神戸の南美以美神戸教会(現神戸栄光教会)で開催された。しかし今回の年例会議は例年と違い監督あるいは宣教部の管理責任者でない松山巡回区の担当者であるモスリが開会説教をして、J・W・ランバスが議長代行になって初日の会議を主管した[535]。開会をする前会議の出席人員を確認したが、当時会議録に記録された内容は次のとおりである。

監督と総理の不在の中で、ウォーダーズが要求により会議を宣言した。 会員点呼を取ると最近意に反して本国に入ることになった総理ランバス、ハリン嬢(Miss Kate Harlan),ケインズ嬢(Miss N. B. Gaines),ストライド(Miss Strider)を除いて皆在席した[536]。

---

[531] J. C. C. Newton, 'Kwansei Gakuin: Where and What', *MV*, February, 1915, pp.74-75; 'A Thousand Students under Christian Instruction', *MV*, February, 1917, p.48.
[532] *MAMJMMECS*, 1890, p.12.
[533] J. C. C. Newton, 'Bishop Lambuth and Kwansei Gakuin', *MV*, November, 1914, p.622; J. C. C. Newton, 'Kwansei Gakuin: Where and What', *MV*, February, 1915, p.75.
[534] *ARMECS*, 1891, p.43.
[535] *MAMJMMECS*, 1891, pp.1-2.
[536] *Ibid*, p.1.

一般的に宣教地で毎年公式的な会議が開かれる場合、本国で監督が訪問するとか、もしくは監督が訪問できない場合には該当宣教部を実質的に代表する総理(superintendent)が議長になって日程を導いていくことが慣例であった。しかし上の会議録に記録されているように、その年は本国から監督が訪問できず[537]、総理であるランバスも当時日本に留守中であったため日本宣教部の年例会議の開会はランバスの父親であるJ・W・ランバスが議長代行として行なった。そして以後のすべての会議は、デュークス、ローリンズ(J. M. Rollins)、デマリー(T. W. B. Demaree)等の宣教師が戻って主宰した[538]。

では監督が留守の場合、日本宣教部の総理としてこの会議を主管しなければならない義務があったランバスはなぜ本国に戻ったのであろうか。家族の健康問題により直ちに本国に戻らざるを得なかったのである[539]。彼は1891年にすでに家族と共に帰国していた。それでも日本宣教部の総理としてその責任を疎かにしてはいない。彼は例え本国に帰っていたとしても、自身に任された松山部会など宣教現場を直接巡回することはできなかったが、日本宣教部の総理として最大限の任務を全うしようと努力した。彼が日本宣教部の総理名義で本部宣教局に1892年宣教報告書を提出したことだけを見ても、宣教地に不在の状況であるにも関わらず人員が補充されるように要請するなど努力した痕跡を見ることができる。しかし彼の不在は、南メソヂスト監督教会日本宣教部に少なくとも困難を招いたことは事実である。以下は彼の1892年度宣教報告書に記録された内容の一部である。

幸いにもショー(S. Shaw)牧師夫婦が来日してきて、広島部会の新しい中心であると言える山口で宣教活動をし、デイビス(W.A.Davis)牧師が今松山の宇和島で熱心に仕事をするようになり、1年間多くの力を得ることができました。しかし現在私たちの宣教は、数的に見た時に足踏み状態の中にあります。やむを得ない事情でハリン嬢、そしてランバスとその夫人が米国に帰り、アトリー(N.W.Utley)の健康が優れず私が年例会(Annual Meeting)以降、仕方なく米国に帰らなければなならなかった後で私たち［南メソヂスト監督教会の］宣教は深刻なほどにその動力を失ってしまった状態であります。宣教現場にいる私たちを非常に激励しながら、この勇敢な宣教部[日本宣教部]が日毎直面しなければならない必須的な要求と関連して、すでに完全に消尽してしまった時間とすでに枯渇したエネルギーでかろうじて維持している状態の中で、日毎自分自身を守らなければならない日本の現状において今直ぐに必要なことは迅速な[人員]の補強です[540]。

---

537 当時、南メソヂスト監督教会は日本と中国など、東アジアの宣教地で宣教部年次会議を開催する場合、宣教地巡回及び会議主宰のため、監督を派遣することが一般的であった。したがって東アジアを訪問した監督は日本と中国などの宣教部を巡りながら、各宣教部の年次会議を主宰した。それ故、中国も1891年には監督が訪れなかったので、パーカー(A. P. Parker)が議長となり、南メソヂスト監督教会中華年会(China Annual Conference)を主宰した。马光霞、「监理会在华事业研究(1848-1939)」、济南：博士學位論文、山东大学、2012、328頁。

538 *MAMJMMECS*, 1891, pp.1-9.

539 *WRL*, p.97.

540 W. R. Lambuth, 'It is the sound of a trumpet', *ARMECS*, 1892, p.43.

上記の宣教報告書で自ら明らかにしているように、自身を始め幾人かの同僚宣教師たちがやむを得ない事情で帰国しなければならなくなり、南メソヂスト監督教会の日本宣教は困難な状況に置かれることになったことを認めている。もちろん、ランバスが本国に帰ることが直ちに日本宣教を辞任し、完全に帰国することを意味していなかった。家族の健康問題による仕方のない帰国であったので、再び宣教地である日本に復帰することを念頭に置いた一時的な帰国であった[541]。翌年の1893年度宣教報告書にも日本宣教部の総理として報告した[542]ことがこれを証明する。

しかしランバスは本人の意図と異なり、再び宣教現場である日本に戻ることはできなかった。当時、南メソヂスト監督教会宣教局の機関誌として発行された*the Methodist Review of Missions*の編集者として仕事を担当し[544]、宣教局と関連した仕事を始めることになったのであり、彼の豊富な宣教的経験が宣教局の行政をはじめ多様な方面において大きな助けとなったのである。このように宣教局内で彼の役割は次第に重要になっていった。そのような中、1893年に宣教局幹事(Secretary)の一人として勤務していたポッター(Dr. Weyman H. Potter)が突然この世を去ることになった[545]。当時、ポッターは宣教局の幹事として就任して2、3ヶ月しか経たない状況であった[546]。思いがけない状況に宣教局は彼の仕事に対応できる人物を急遽探さなければならなかった。したがって既存の宣教局の行政と状況に慣れたランバスが、自然にその役割を代行して継承することになったのである。宣教師家系で生まれ、宣教現場の経験が豊富だったことはもちろん、すでに*Methodist Review of Missions*の編集者として宣教局と関連した仕事をしていたので、ランバスが最も適合した人物であった。ランバスが協力幹事(associate Secretary)となり宣教局の行政を助けたこともあった[547]。

このようにランバスの合流によって、当時南メソヂスト監督教会宣教局はジョン(I. G. John)、モリスン(H. C. Morrison)など3人の幹事体制で運営されていた[548]。その中でもランバスに任された任務は、宣教地と宣教師、そして本国間の各種連絡を取り扱う通信幹事(Corresponding Secretary)の役割であった。すなわち、南メソヂスト監督教会から派遣された宣教地たちと彼らが活動している全ての宣教現場を、本国の教会と円滑に結び付けな

---

541 ピンソンによると、ランバスは約2、3週、それとも少なくとも1年以内に再び宣教地である日本へ戻る計画でしばらく帰国したとその時の状況を解釈している。*WRL*, p.97.
542 W. R. Lambuth, *ARMECS*, 1893, p.67.
544 "Lambuth, Walter Russell", *Encyclopedia of World Methodism Vol.2*, p.1376.
545 James Cannon Ⅲ, *History of Southern Methodist Missions*, p.58.
546 *WRL*, p.99.
547 *Ibid*, p.100.
548 *Ibid*, p.99.

ければならなかった。そして1894年、南メソヂスト監督教会総会(General Conference of the Methodist Episcopal Church, South)でランバスは正式に通信幹事として任命された[549]。1902年の総会では、宣教局主事(General Secretary)とより重要な位置に上がることになった[550]。つまり、南メソヂスト監督教会宣教に関して実質的に行政の責任を負い、管理する指導者になったのである。

宣教局で勤務するようになってランバスが作り上げようとしたものは、宣教事業(missionary enterprise)が人間の思考の中で最もすぐれ、かつ真摯なものになるように目指したことである[551]。そのような中で、彼は特に若者に大きな関心を寄せて、南メソヂスト監督教会内の共励会(Epworth League)をはじめ学生ボランティア運動(Student Volunteer Movement)という超教派的団体と関係を持っていた[553]。自身が宣教現場で培った経験を伝えて、若者たちが自発的に宣教に参与するように動機と刺激を与えたのである。こうして彼は、若者たちを中心として活動する機関に大きな関心をもち、この活動を通じてより躍動的に多様な宣教の潮流を形成していこうと力を注いだ。

宣教局内部の行政と米国内宣教運動を支援する仕事以外にも、彼は海外の宣教現場を直接訪問して点検しなければならない役割も任された。宣教局に勤務するようになって初めて訪問するようになったところは南米のブラジルであった[554]。彼は1893年、ブラジルを訪問することになったが、ブラジルは東アジア以外で初めて訪問した国であった。ここを訪問しながら彼は、南メソヂスト監督教会のラテンアメリカ宣教がブラジルを中心に順調に行われるように行政的支援に助力した。そしてキューバ宣教に着手するための準備過程も、ランバスの行政的支援の下で進められていった。彼は米国とスペインの間の米西戦争(Spanish – American War)が終結されると、1898年キャンドレー(W. A. Candler)監督、ベイカー(H. W. Baker)牧師と共に独立したキューバ(Cuba)を訪問して、島々を回って宣教開始のために必要な事項を検討したりもした[555]。

また東アジアにも関心を持ち続けた宣教地であった。特別にまだ南メソヂスト監督教会として宣教活動が着手されていなかった朝鮮に彼が関心を持ち始めた[556]。朝鮮宣教は、彼

---

549 *Ibid*, pp.99-100. ちなみに、*Encyclopedia of World Methodism*と『ウォルター・ラッセル・ランバス – Prophet and Pioneer』の後ろに添付されているランバスの年譜には彼が1894年の総会で主事として任命されたと記されているが、これは間違って表記されている事実である。'Lambuth, Walter Russell', *Encyclopedia of World Methodism Vol.2*, p.1376; 『ウォルター・ラッセル・ランバス』、324頁。
550 *WRL*, p.111.
551 *Ibid*, p.100.
553 *Ibid*, p.100.
554 *Ibid*, p.101.
555 'The Entrance of Methodism', *MV*, June, 1920, p.168.
556 W. R. Lambuth, 'Korea: Past and Present', *the Methodist Review*(以下*MR*), November-December, 1894, pp.204-210.

が宣教局で通信幹事として在任した時期である1895年から本格的に計画され始めたのである[557]。当時、今日の教育部次官と言える学部次官(he Vice Minister of Education)である尹致昊[558]の要請などにより、ヘンドリックス(E. H. Hendrix)監督と中国宣教師であるリード(C. F. Reid)が1895年10月朝鮮を訪問することになり、翌年(1896年)8月リードが家族と共に来韓するようになり、南メソヂスト監督教会の朝鮮宣教が開始されるに至ったのである[559]。ところでこの過程でランバスは、朝鮮宣教のために特別基金を用意して、開拓宣教師であるリードなどと連絡をやり取りして宣教局による行政的な支援と助言を与えた[560]。そして1899年[561]には直接東アジアを巡回して、宣教がちょうど開始された朝鮮を訪問し、また9月27日に開催された第3回南メソヂスト監督教会朝鮮宣教会(the Third Annual Meeting of the Korea Mission of the Methodist Episcopal Church,South)の議長となって会議を主宰することもした。そして宣教局総主事(General Secretary)として就任した後、1907年、彼は再び東アジアを歴訪し[562]、朝鮮を訪ねて以前と同じように韓半島内各地を巡回し、同行していたウィルソン(A. W. Wilson)監督と共に年次会議(Annual Meeting[563])に参席した。また宣教局主事で朝鮮最初の南メソヂスト監督教会教員である尹致昊が1906年開城に設立した教育機関である韓英書院の校舎建築のために、本国の支援を結びつける役割も果たした[564]。

ところで1899年以降、しばらく東アジアを転々とした彼がその年にアジアを訪問するこ

---

557 キャノンⅢは南メソヂスト監督教会が朝鮮宣教を開始するようになったルートを大きく以下のような二つにまとめている。①南メソヂスト監督教会に於いて、中国宣教の延長線として行われたルート、②尹致昊の宣教要請によるルートである。以上のような二つのルートが合わせられ、南メソヂスト監督教会の朝鮮宣教が本格的に行われたと評価している。James Cannon Ⅲ, *History of Southern Methodist Missions*, p.156.

558 南メソヂスト監督教会の朝鮮宣教を開拓することに於いて、尹致昊と関連する内容は*T. H. Yun, of Korea and the School at Songdo*, Nashville, Board of Missions of the Methodist Episcopal Church, South, 1907参照。

559 C. F. Reid, *the Opening of Korea*, Nashville, Board of Missions of the Methodist Episcopal Church, South, 1899, p.7.

560 これに関連して*WRL*, p.104; *W. R. Lambuth's letter to C. F. Reid*, March, 4th, 1897, May, 10th, 1897, May, 13th, 1897, June, 13th, 1897, November, 27th, 1897; 李徳周、『宗橋教會史1900-2004年』、56、63、67、69、74、88頁参照。

561 梁柱三は1930年に彼が編集し、出版した『朝鮮南監理教會三十年紀念報』を通して、ランバスの最初の朝鮮訪問を1989年だと記しているが、これは誤記である。当時、会議録と新聞など、いかなる資料でも1898年にランバスが朝鮮を訪れたという事実が記録されていない。梁柱三 編, '랜벗트監督의畧歴', 『朝鮮南監理教會三十年紀念報』, 299頁参照；*Minutes of the Annual Meetings of the Korea Mission, Methodist Episcopal Church, South, 1899, 1900 and 1901*(以下*MAMKMMECS 1899-1901*), 1901, pp.1-5.

562 1907年、ランバスはアジア巡回を終え、本国に戻った後、彼の旅に基づいてまとめ、翌年(1908年)*Side Lights on the Orient*という書物を出版した。この本の内容によると、彼がサンフランシスコを出発し、ハワイ、日本、朝鮮、中国、マレイシア、インド、スリランカ、ネパールなどを訪問したことが分かる。W. R. Lambuth, *Side Lights on the Orient*, Nashville: Publishing House of the M. E. Church, South, 1908.

563 *Minutes of the Annual Meetings of the Korea Mission, Methodist Episcopal Church, South*(以下*MAMKMMECS*), 1907, pp.3-11.

564 *T. H. Yun, of Korea and the School at Songdo*, p.31.

とになった理由があった。それは日本メソヂスト教会(Methodist Church of Japan)の合同と関連する仕事のためであった。米国を出発したランバスは、通常の航路によりハワイを経て東アジア国家の内、最初に日本を訪問することになった。そして、その間、日本国内でメソヂスト監督教会(Methodist Episcopal Church)、南メソヂスト監督教会(Methodist Episcopal Church, South)、カナダメソヂスト監督教会(Methodist Church of Canada)など3つの宣教部を中心に、日本メソヂスト教会を成立させたのである[565]。そして宣教局主事であるランバスは、1907年5月22日水曜日、東京青山学院講堂で開催された日本メソヂスト教会第1回総会に、当時同行していたウィルソン監督と共に南メソヂスト監督教会側全権委員として参加することになった[566]。総会に参加した彼は、全権委員として日本メソヂスト教会の合同を現場で確認できたし、時には総会の議長を代行して会議を導く役割も果たした[567]。その他にも、ランバスは日本メソヂスト教会の合同において他の全権委員よりも重要な役割をなし遂げ、新しく組織された教会の教理と条例を編纂したのである。6月6日木曜日、総会は全権委員を代表してランバスとその他日本人牧師および宣教師らに教理と條例の基礎案を作成することを委任した[568]。そして彼は新条例編纂委員会(a committee on the Book of Discipline[569])の委員として日本メソヂスト教会の教理および教会法などを編纂し、基本的な教会の骨格を形成したのである[570]。

この他にもランバスは、ますます増加していた在朝日本人対象の伝道が成り立つように、元山という具体的な地域を提示して助言をすることもした[571]。その結果1908年、工藤繁という日本人伝道者が派遣されて、元山を中心にした在韓日本人伝道が本格的に始めた[572]。前年度(1907年)にランバスが朝鮮を訪問して、南メソヂスト監督教会宣教地域を中心に巡回した経験があり、同時に宣教局主事という位置にいたので可能なことであった。

*The Methodist Review of Missions*の編集長から始まり、宣教局で勤めることになったランバスは、協力幹事、通信幹事、そして総主事として重責を引き受けることになった。このような過程と任務を通じてランバスは、活動範囲をさらに拡張させる契機を得ることがで

---

565 *ARMEC*, 1908, p.23; *Ibid*, 1908, p.59.

566 当時、合同全権委員の名簿は以下のようである。南メソヂスト監督教会側：A. W. Wilson、W. R. Lambuth、メソヂスト監督教会側：Earl Cranston、A. B. Leonard、カナダメソヂスト教会側：A. Carman、Alexander Sutherland。『日本メソヂスト教會第壹總會議事録』、1907、2、24、154-155頁参照。

567 同書、45、58頁参照。

568 同書、77-78頁参照。

569 当時、新條例編纂委員は以下のようである。本多庸一、平岩愃保、平澤均治、高木壬太郎、D. S. Spencer、H. H. Coates、Julius Soper、W. R. Lambuth。同書、13、77-78頁。

570 当時、日本メソヂスト教会の教理と條例は英文と日文が同時に編纂、発行された。その中、英文の教理と條例はランバスの編集によって出版された。W. R. Lambuth ed., *The Doctrines and Discipline of the Methodist Church of Japan 1907 with Appendix*, p.3(Introduction).

571 J. T. Meyers, 'Hiroshima District, September-March, 1907-1908', *ARMECS*, 1909, p.57

572 『日本メソヂスト教會第一回西部年會記録』、1908、126頁参照。

きた。言い替えれば、宣教師として中国と日本という東アジアの限定された範囲を超えて、もう少し広い観点と見識を持つことができるようになったのである。

(4)監督としての宣教活動

宣教局での活動は、ランバス自身にとっても広い視野を持って新しい経験を成し遂げることができるという点で大きく役立った。同時に宣教局活動を通じてのランバスの諸活動は、南メソヂスト監督教会内でも非常に肯定的な評価を受けることになった。特に彼の在任期間中に着手されたキューバと朝鮮の開拓宣教、そしてブラジル宣教をより堅固にさせた点は、高い評価を受けるのに充分であった。また、本国でも果たせなかったメソジスト教会の合同を宣教地である日本で成し遂げたことは、ランバスの能力を際立たせることであった。そのような中、1910年の南メソヂスト監督教会総会(the General Conference of the Methodist Episcopal Church,South)が開催され、ランバスは南メソヂスト監督教会の最高指導者である監督(Bishop)に選出された。ところで彼の監督選出は、総会で即興的に成り立ったのではなく、すでに決定された雰囲気の中で自然に成り立ったことであった[573]。それまでの宣教局事業を通じて、彼が果たした全般的な活動が肯定的で高い評価を受けていたからである。

まず、彼に任された監督職の地域的範囲(episcopal area)は、ヨーロッパを中心とした西欧圏と南米のブラジル、そしてアフリカなどであった[574]。そのような理由でランバスは本国で過ごす時間より宣教地で送る時間がさらに多くなった。ランバスが監督として就任した後、最初に訪問した海外宣教地はブラジルであった。ブラジルは彼が1894年総会で正式に宣教局の通信幹事に任命されて以後初めて訪問したところであった。彼は単純に宣教状況を見渡す目的だけを持って訪問したのではなく、ブラジル宣教をより発展させるための自らの計画も構想して訪問したのである[575]。

ランバスが訪問した当時、1886年に組織されたブラジル年会(the Brazil Conference)とともに1910年に組織された南部ブラジル年会(the South Brazil Conference)の二つの年会

---

573 *WRL*, p.120.

574 当時、メソヂスト監督教会では海外宣教地を統括するための宣教監督(Missionary Bishop)という監督職が別にあったが、南メソヂスト監督教会はそれと同じような任務として別に定められていた監督職はなかった。すなわち、海外宣教を中心として活動する監督だとしても同様に監督だと称していたのである。しかし、唯一に*the Missionary Voice*の1921年7月号にはランバスの職責が東洋担当の宣教監督(Missionary Bishop to the Orient)だと記されている。'Social Service at Laura Haygood', *MV*, July, 1921, p.218.

575 'A Voice from Brazil', *MV*, January, 1911, p.22.

で構成されていた[576]。彼は二つの年会を中心にブラジル宣教が順調に推進できるように管轄監督として責任を全うした。ランバスがブラジルに訪問するたびに、ブラジル宣教師らと現地教会指導者は彼を心より歓迎したし[577]、時には彼の訪問を通じて慰労を得ることもあった[578]。以下はこれと関連した、南メソヂスト監督教会の宣教雑誌*the Missionary Voice*の記事である。

私たちは最近非常に楽しい時間を過ごし、私たちの愛するランバス監督が1年前に私たちと共にされて以来、彼が離れた後幾月の間困難を経験した。ところが彼が再び私たちと共に時間を過ごす特権を私たちは享受することができた。彼は私たちに、人の心と人生に触れて変化させるための福音の力のメッセージを携え、私たちのもとにきた。私たちは心を尽くして感謝の意を表す[579]。

上の記事でも見ることができるように、彼は監督という権威を前面に出そうとはせず、形式的な行政処理にだけ留まる監督ではなかった。宣教に関する彼の豊富な経験は、ブラジル宣教にあっても宣教師らと現地指導者などに有益な助言になったと言える[580]。また、彼は教会関係者だけでなく一般の人たちともためらいなく会って対話し、ブラジル現地の状況を多角的に把握しようとした[581]。その上彼は現地の言語、すなわちポルトガル語学習に時間を費やし、宣教師と現地の人たちの心を理解しようと努力した[582]。時には宣教師の子どものために幼児洗礼を施して宣教師家庭を慰めた[583]。さらに、何よりも本国にいる時は、機会があればブラジル宣教のための講演を行い、監督の位置から行政的に最善をつくして努力をした[584]。彼は、幾度も[585]ブラジルを訪問して宣教状況を検証してより積極的な宣教が推進できるように後援したのである[586]。

---

576 James Cannon Ⅲ, *History of Southern Methodist Missions*, pp.188-189.
577 H. C. Tucker, 'Brazil - People's Central Institute, Rio de Janeiro', *MV*, April, 1912, p.225.
578 H. C. Tucker, 'Notes on a Trip to Northern Brazil', *MV*, February, 1912, pp.102-103.
579 C. A. Long, 'Brazil – Letter from Brazil', *MV*, December, 1912, p.737.
580 'Letters from Miss Bennett and Miss Gibson', *MV*, December, 1913, p.716.
581 Mrs. J. B. Cobb, 'Brazil – A Land of Paganized Christianity', *MV*, March, 1913, p.165.
582 *MV*, November, 1911, p.16.
583 'Letters from Miss Bennett and Miss Gibson', *MV*, December, 1913, p.716
584 ランバスがブラシルをめぐって米国で行なった講演及び行政的な支援に関しては'The Leaders' Conference', *MV*, February, p.4; 'Conference of Mission Boards', *MV*, March, 1911, p.10; *MV*, July, 1911, p.6; 'Brazil', *MV*, July, 1911, p.25; 'Woman's Work', *MV*, July, 1911, p.26; 'News Notes and Personals', *MV*, October, 1911, p.15; H. C. Tucker, 'Brazil – Notes Current', *MV*, December, 1911, p.39など参照。
585 ちなみに、ピンソンが1910–1914年の間、つまりランバスの一次の監督在任中、ブラジルを訪れた回数を2回だと言及しているが、これは事実でない。南メソヂスト監督教会の宣教機関誌である*the Missionary Voice*の1913年12月号の記事のみ読んでみても、ランバスのブラジル訪問が4回目だと記されていることが分かる。*WRL*, p.120; S. A. Belcher, 'At Work Again', *MV*, December, 1913, p.743.
586 ランバスが監督として務めた一次期間を中心にブラジル宣教と関連して*the Missionary Voice*に載った記事は'A Voice from Brazil', *MV*, January, 1911, p.22; 'A Just Tribute to Mrs. S. C. Trueheart's Work', *MV*, January, 1911, p.24; 'The Leaders' Conference', *MV*, February, p.4; 'Conference of Mission Boards', *MV*, March, 1911, p.10; *MV*, July, 1911, p.6; 'Brazil', *MV*, July, 1911, p.25; 'Woman's Work', *MV*, July,

ブラジルと共に彼に任されたもう一つの宣教地はアフリカであった。アフリカは彼が最も心血を注いだ地域であると言える。ランバスの後任に宣教局総主事の職をひきついだピンソンは、1910-1914年の宣教局業務報告に次のような内容を記した。

最も大いに関心を引き、重要であった事件と言えば、1914年初めにコンゴ宣教部(Congo Mission)として良く知られた新しい宣教を開くためにランバス監督と私たちの最初の宣教師が暗黒大陸と言われるその土地に到着して、その門の前に入っているということです。少し遅い感じがあるがそれでも黒人らと関係がある私たちのこの[米国]土地の中で永らくアフリカに向かった義務感を現わし、幾つかの事件が成り立って教会の心を動かすように刺激させました。ところでその教会のある部類(branch)によって人食い人種地域に大胆に入るようになりました。 まだアフリカ宣教の歴史の中で新しい一頁を書くほど私たちメソヂストが優勢であるとか、しっかりとその席をつかんでいないのか、どうなろうが、これ一つだけでも教会の開拓者精神を立証しているといえる[587]。

ランバスのアフリカ宣教、その中でも中央アフリカに位置したコンゴ宣教は南メソヂスト監督教会から大きな注目が注がれた。南メソヂスト監督教会として、アフリカ宣教を初めて切り開いたためである。もちろんメソヂスト監督教会と南メソヂスト監督教会と奴隷問題によって分裂する以前に、すでに1832年フィラデルフィアで開催された総会(General Conference)でコックス(M. B. Cox)をアフリカ、リベリア(Liberia)へ派遣する決議が成立し、翌年この決議が実行された歴史的事実があった[588]。大きな枠組で見ればこれはやはり南メソヂスト監督教会の海外宣教の歴史だと言えるが、分裂以後のリベリア宣教はメソヂスト監督教会側で一貫して主導しており、南メソヂスト監督教会では総会で公式に放棄したので関係がないと言えた[589]。したがってランバス主導の下に成り立ったアフリカ宣教は、南メソヂスト監督教会にとって開拓宣教のような性格を持っており、彼によって大きな注目

1911, p.26; 'News Notes and Personals', *MV*, October, 1911, p.15; 'News Notes and Personals', *MV*, November, 1911, p.14; *MV*, November, 1911, p.16; H. C. Tucker, 'Brazil – Notes Current', *MV*, December, 1911, p.39; H. C. Tucker, 'Brazil - People's Central Institute, Rio de Janeiro', *MV*, April, 1912, p.225; 'Personal and News Notes', *MV*, December, 1912, p.715; C. A. Long, 'Brazil – Letter from Brazil', *MV*, December, 1912, p.737; 'Brazil – Bishop Lambuth on Brazil', *MV*, January, 1911, p.41; Mrs. J. B. Cobb, 'A Land of Paganized Christianity', *MV*, Mach, 1913, p.165; 'Movements of Missionaries', *MV*, May, 1913, p.265; 'Sailed for Brazil on July 14', *MV*, July, 1913, 写真; 'Letters from Miss Bennett and Miss Gibson', *MV*, December, 1913, pp.715-716; C. A. Long, 'Brazil – Central Institute', *MV*, December, 1913, p.742; S. A. Belcher, 'At Work Again', *MV*, December, 1913, p.743; Paul E. Buyers, 'Capivary', *MV*, December, 1913, p.744; Virginia Howell, 'Brazil – Visiting Collegio Piraciicabano', *MV*, January, 1914, p.32; 'Home on Furlough or Returning to the Field', *MV*, July, 1914, p.397など参照。

587 W. W. Pinson, 'Quadrennial Report of the Board of Missions', *MV*, May, 1914, p.265.

588 J. M. Reid, *Missions and Missionary Society of the Methodist Episcopal Church, Vol.1*, pp.155-162.

589 事実、メソヂスト監督教会と分裂された以降、南メソヂスト監督教会のレベルでリベリア宣教を継続しようとする動きもあった。しかしながら、分裂以降、1844年に開催された最初の総会で南メソヂスト監督教会はメソヂスト監督教会との摩擦を避けるため、リベリア宣教を公に中断することを決議した。それから南メソヂスト監督教会に於けるアフリカ宣教はいわゆる「神が与えられる機会」(providential opening)として保留し、待っていたのである。James Cannon Ⅲ, *History of Southern Methodist Missions*, p.230.

を浴びるようになったのである。

彼はコンゴ宣教を本格的に切り開くために、それに先立ってペイン大学(Paine College)の黒人教授であったギルバート(J. W. Gilbert)と共にアフリカ現地調査に出向くなど、周到に事前準備作業を行っていた[590]。そして現地調査と関連した彼の経験を手紙および講演、説教などを通して本国に知らせ、アフリカ宣教に関する南メソヂスト監督教会としての関心を喚起していった[591]。そのような雰囲気が熟すると、すぐにランバスは1913年5月7日から10日までダラスのテキサスで開催された南メソヂスト監督教会宣教局年例会議にアフリカ宣教に関する調査報告書を提出した。次は当時の雰囲気を伝えている*the Missionary Voice*の記事内容の一部である。

全体会でおそらく最も記憶に残る時間は二日目の朝会(morning’s session of the this second day)を閉会する瞬間であった。ランバス監督はアフリカの宣教事業を設立するための観点が入った直接書いた調査報告書を提出した。(人々の心を動かしたこの文書は例年報告書に全文が載せられるだろう)それは非常に印象的であった。その活動は非常に荘重で、その[宣教]事業の開始のために20,100ドルの金額が策定された。アフリカでの宣教事業のために決心していたブッシュ(C. C. Bush)牧師、ムンパワー(D. L. Mumpower)博士、ストックウェル(J. A. Stockwell)氏など三人の若者たちがこのために委員会に紹介された。賛美が始まり、委員会会員たちと顧客をはじめとする全ての会衆をゆるがす大きな感動の波の合間に、多くの人々が支援者の手を握って前に出て来、彼らの成功を祈った[592]。

南メソヂスト監督教会によるアフリカ宣教への時機が熟した中で、ランバスの調査報告書は本格的な議論と実行をもたらせる契機になった。また、彼はアフリカの現地調査を通じて、コンゴという具体的な宣教地を決めることができた。このために彼は当時コンゴを支配していたベルギー政府に、宣教開始に関する協力を要請したのである[593]。

以後ランバスは、アフリカ、コンゴ宣教を切り開くため、それに先立ってフランス語を学習するために二ヶ月余りベルギーに入ってきていた開拓宣教師らと11月第1週にベルギーのブリュッセルで合流した[594]。そして1913年11月9日、アントワープで蒸気船アンバスビルに乗ってコンゴに向かって出航した[595]。ランバスは、ムンパワーをコンゴ宣教の総理

---

590 ‘Prospecting in Africa’, *MV*, May, 1912, p.269; ‘Anniversary Sermon’, *MV*, July, 1913, pp.399-400.
591 ‘The Negro in His Native Land and in Our Native Land’, *MV*, January, 1913, pp.59-60; J. W. Beeson, ‘Bishop Lambuth and Dr. Reid at Meridian Colleges’, *MV*, April, 1913, pp.207-208; ‘Anniversary Sermon’, *MV*, July, 1913, pp.399-400; W. R. Lambuth, ‘Prospecting in Africa’, *MV*, May, 1912, pp.269-270.
592 ‘Annual Meeting of the Board’, *MV*, July, 1913, p.388.
593 *Ibid*, pp.388-389.
594 Mrs. C. C. Bush, ‘Africa – Methodist Missionaries in the Congo’, *MV*, May, 1914, p.290; ‘The Founding of the Congo Mission’, *MV*, August, 1914, p.468.
595 ‘En Route to Wembo-Niama’, *MV*, January, 1914, p.3.

(superintendent)に任命し[596]、現地に到着するやいなや彼らと共に宣教開始のための諸般事項を点検し、宣教活動を指揮した。ここでもやはり、ブラジル宣教と同じように長い間の宣教経験に基づいたランバスの助言により宣教が順調に進んで行った[597]。このようにアフリカの開拓宣教のためのランバスの指導力は、南メソヂスト監督教会内部でも高く評価されたのである[598]。

一方、ブラジルとコンゴと共に、日韓中を中心に東アジアに対する彼の関心は監督になっても続いていた。1918年4月24日から26日まで、ナッシュビルのパブリッシングハウスで南メソヂスト監督教会の第72回宣教局年例会議が開催された。この時議論された主要議題の中の一つは、南メソヂスト監督教会宣教局の海外宣教師のうち東洋、ブラジル、メキシコとキューバなど三カ所に、それぞれ4年任期の居住監督(resident bishop)を選出することであった[599]。この会議を契機にして、東洋を全面的に担当する監督の必要性が継続的に議論され、東京を担当する監督が選任されるに至った。次は1919年当時これと関連した南メソヂスト監督教会の宣教雑誌*the Missionary Voice*の記事である。

東洋で宣教教現場に関する監督の管理任務は、マックマリー(W. F. McMurry)の後に続きランバス監督によって成り立っている。マックマリー監督と交際を分けた多くの友人は、彼が他の[宣教]現場に任命され、非常に寂しい心を伝えた。ランバス監督は彼が直接経験して知っている中国、日本、そして朝鮮に関する

596 'The Founding of the Congo Mission', *MV*, August, 1914, p.468.
597 John A. Stockwell, 'Africa - Newsy Letter from Congo', *MV*, September, 1914, p.528.
598 アフリカ開拓宣教と関連して、ランバスが言及されている*the Missionary Voice*の記事は'Prospecting in Africa', *MV*, May, 1912, pp.269-270; 'Our Bishop in the Heart of Africa', *MV*, May, 1912, pp.290-291; 'Annual Meeting of the Board of Missions', *MV*, June, 1912, p.324; 'Personal and News Notes', *MV*, December, 1912, p.715; Mrs. J. D. Hammond, 'Paine College and Annex', *MV*, January, 1913, p.23; John Wesley Gilbert, 'Pioneering in Africa', *MV*, January, 1913, p.35; 'Notes', *MV*, March, 1913, p.186; J. W. Beeson, 'Bishop Lambuth and Dr. Reid at Meridian Colleges', *MV*, April, 1913, p.207; 'the Second General Missionary Conference', *MV*, June, 1913, p.323; 'Brethren Dwelling Together in Unity', *MV*, June, 1913, pp.359-360; 'Annual Meeting of the Board', *MV*, July, 1913, pp.386-387; 'Anniversary Sermon', *MV*, July, 1913, pp.399-400; 'the Missionary Conference', *MV*, August, 1913, p.456; Mrs. J. A. Landis, 'Annual Session of the Memphis Conference', *MV*, August, 1913, p.505; 'Ragland - Setzer', MV, September, 1913, p.515; 'En Route to Wembo-Niama', *MV*, January, 1914, p.3; W. R. Lambuth, 'Letter from Dr. Lambuth', *MV*, January, 1914, pp.12-13; 'Letter from Misses Bennett and Gibson', *MV*, January, 1914, p.14; 'Continuation Committee of the Edinburgh Conference', *MV*, April, 1914, p.199; W. R. Lambuth, 'Latest Letters from Africa', *MV*, April, 1914, p.226; 'W. R. Lambuth, Stranded on an Island', *MV*, April, 1914, pp.226-227; W. W. Pinson, 'Quadrennial Report of the Board of Missions', *MV*, May, 1914, p.265; Mrs. C. C, Bush, 'Methodist Missionaries in Congo', *MV*, May, 1914, p.290; 'Moving Pictures from Mission Lands', *MV*, July, 1914, p.388; 'Home on Furlough or Returning to the Field', *MV*, July, 1914, p.397; 'Africa – the Founding of the Congo Mission', *MV*, August, 1914, pp.468-471; John A. Stockwell, 'Africa – Newsy Letter from the Congo', *MV*, September, 1914, p.528; D. L. Mumpower, 'A Great Mission in the Making: Varied Activities at Wembo-Niama', *MV*, March, 1915, p.132; W. F. Junkin, 'What the Methodists Did for the Presbyterians', *MV*, October, 1915, p.479; Mrs. T. Fort, 'Annual Meeting of the New Mexico Conference', *MV*, December, 1916, p.576; W. R. Lambuth, 'the Story of Malandola', *MV*, March, 1917, pp.83-84など参照。
599 R. B. Eleazer, 'Annual Meeting of the Mission Board', *MV*, June, 1918, p.161.

民族と慣習に基づき[その宣教現場を]担当しようとするだろう[600]。

ランバスは1919年マックマリー(W. F. McMurry)の後任として東洋担当監督に任命され、彼によって日韓中の三ヶ国を中心とした東アジア地域に多くの関心を持たないわけにはいかなかった。もちろん彼は、以前にも東洋[宣教]現場委員会(the Committee on Oriental Fields)の委員長として南メソヂスト監督教会東アジア宣教政策に関心を持ち、業務にあたっていた[601]。このように東洋担当監督になった彼は、その年から毎年一回ごと東アジアを訪問することになった。1919年の後の東アジア訪問は、日韓中東アジア三ヶ国の宣教事業にあってそれぞれ「朝鮮の独立運動」「山東省問題」そして「反米の雰囲気が高まっている問題」などの問題に直面しつつ遂行されたのである[602]。

一方、1907年以後12年余ぶりに監督になって訪問した東アジアは、当時通常の航路により日本、朝鮮、中国の順であった。ちょうど日本を訪問した1919年は日本メソヂスト教会の第4回総会が開催される年であった。ランバスは10月23日から東京銀座教会で開催された総会に参加した。総会9日目の10月31日の午前会議で、彼は当時日本メソヂスト教会監督だった平岩愃保によって本国から参加した来賓らと共に総会員たちに紹介され、午前の会議の最後の祝祷を担当した[603]。その他にも総会10日目に挙行された日本メソヂスト教会の第三代監督である鵜崎庚午郎の監督聖別式に按手委員として共に参与し[604]、翌日の11月2日には会議に先んじての礼拝にて説教を担当した[605]。ところで何よりも当時新しく監督に選出された鵜崎庚午郎は、ランバスによって洗礼を受けた者であった。また、ランバスが設立した関西学院神学部の第1期卒業生だったので、ランバスが撒いた福音宣教の結実とも見ることができる[606]。

このように総会出席と共に日本の宣教現場[607]を訪問した彼は、続いて朝鮮を訪問した。朝鮮は、彼が日韓中参加国の内、特により多くの関心を傾けた宣教地であった。当時中国は

---

600 'Woman's Work – Brief Editorials', *MV*, June, 1919, p.177.
601 R. B. Eleazer, 'Annual Meeting of the Mission Board', *MV*, June, 1918, pp.164-165.
602 *W. R. Lambuth's letter to Mrs. J. V. John*, July, 31th, 1919; 『ランバス資料』、146頁参照。
603 その日、総会員たちに紹介された来賓はランバス以外には彼を同行した南メソヂスト監督教会宣教局の主事であるローリングス(E. H. Rawlings)、メソヂスト監督教会の訪問委員であるガウチャー(John F. Goucher)、メソヂスト監督教会日韓担当監督であるウェルチ(Herbert Welch)、メソヂスト監督教会女子宣教会の東部年会代表であるスペンサー(Miss M. A. Spencer)などがいた。『日本メソヂスト教會第四回總會議事録』、1919、37頁参照。
604 同書、41-42頁参照。
605 同書、5頁参照。
606 H. L. Hughes, 'Nation-wide Welcome to Sunday School Convention', *MV*, January, 1921, p.7;「鵜崎庚午郎」、『関西学院事典』(増補改訂版)、25頁参照。
607 1920年、日本を訪れた時には彼が前に日本宣教師として管轄した大分などを巡回したこともあった。I. M. Worth, 'The Completion and Dedication of the Oita Plant', *MV*, December, 1920, p.376; W. R. Lambuth, 'Mayor of Oita at Dedication of the Loving Neighbor Institute', *MV*, December, 1920, p.377.

すでに南メソヂスト監督教会の最初の海外宣教地として、数多くの宣教師が派遣され中華年会という独立的した行政組織が構成され基盤が固まっており[608]、日本の場合は先程見たように教会行政的に言うと中国よりもさらに発展して1907年日本メソヂスト教会という総会を成立させた状況であった。中国及び日本に比べて、南メソヂスト監督教会の朝鮮宣教は、ランバスが東洋担当監督に任命される1年前の1918年に年会を構成するほど、相対的に宣教の歴史が浅かった[609]。したがってランバスが監督として就任した以後と以前をあえて比較しようとするなら、朝鮮に対する関心が以前より相対的に高まったと見られるのである。

ランバスは、1895年頃南メソヂスト監督教会が朝鮮宣教を準備する時から、通信幹事として本国と宣教現場を繋ぐ役割を担っていた。そして1899年と1907年、すでに二度に渡って朝鮮を訪問し、宣教現場を巡回した経験があったので、朝鮮の状態と宣教状況に対しては全体的に理解していた。特にランバスが監督として朝鮮宣教と関連して残した具体的な痕跡のうち幾つかを言及しようとするなら、泰和社会館(Seoul Evangelistic Center for Women[610])の設立支援、そして満州-シベリア地域を中心とした朝鮮人開拓宣教をあげられるであろう。

本来ランバスは、南メソヂスト監督教会の朝鮮宣教において学校と病院などの機関を通した間接的宣教方式も教会設立と共に非常に重要視していた。その代表的な事例が太和社会館の設立を支援したことであった。この機関の設立者である南メソヂスト監督教会派遣宣教師マイヤーズ(Miss M. D. Myers)が、泰和社会館設立に関して記したのが以下の文章である。

1.[泰和社会館]事業の歴史

何年か前に私たちはソウル都心内で女性のための一般的な事業をしようと計画したが、ここには常に大きな困難があった。いかなる建物も得られるような能力がなかったので、互いに会って共に利用できる建物自体が私たちにはなかった。しかし1920年夏、ランバス監督がこの宣教現場を訪問した時、彼は私たちの[宣教]事業を進行させるための計画の必要な要素を知るようになり、一緒に朝鮮の女性事業にあって大きな機会があるということを発見した。宣教師らと共に政治家のようだったリーダーシップと主を信じる驚くべき信仰を通じて、宣教師を奉仕の最も高いビジョンに導いた彼は明月館(Bright Moon Restaurant)

608 南メソヂスト監督教会中華年会(the China Conference of the Methodist Episcopal Church, South)は1886年組織され、1910年まで宣教局の派遣宣教師と中国人牧師を合わせ、約65名が年会員(死去、移籍など含め)として活動していた。马光霞、前掲書、320-321頁参照。

609 'Notes and Personals', *KMF*, December, 1918, p.268; *ARMECS*, 1919, p.116.

610 今日の泰和基督教社会福祉館で、初期の宣教師たちは「Seoul Evangelistic Center」という英文表記を使用した。Miss Mamie D. Myers, 'Seoul Evangelistic Center for Women', *KMF*, February, 1922, p.33.

で一般の人たちに良く知られたソウル都心のど真ん中に非常に大きな財産を購入してくれたのである[611]。

朝鮮において最初の女性福祉事業、すなわち太和社会館の開始はランバスの支援と働きに負うところが大きい[612]。そのような意味で、実際の設立者はマイヤーズという女性宣教師だったが、後日三代目館長を歴任したワグナー(E. Wagner)はランバスをこの機関の象徴的な創立者として評価している[613]。

これと共にランバスが朝鮮宣教のために残した大きな業績は、まさに満州-シベリアの朝鮮人宣教を切り開いたことである[614]。これは彼が監督として在任している間、海外宣教と関連してアフリカ宣教を切り開いた事件に劣らず南メソヂスト監督教会内に大きな争点になった。朝鮮でいわゆる沿海州と呼ばれるシベリアは、満州と同じように韓半島と接していた所なので、早くから朝鮮人が日照りと洪水などで生計が困ったり人や、役人たちの横暴に耐えかねて人が少しずつ越境していた所である。朝鮮が日本から外交権を強奪された1905年以後には圧迫を避けて満州-シベリアに渡っていく者が急激に増加した。南メソヂスト監督教会は、早くから朝鮮の国境地帯へ渡った朝鮮人を宣教の対象として関心を持っていたこともあり[615]、ランバスはこのような南メソヂスト監督教会朝鮮宣教部の課題を把握していたのである。

そして1919年に第2回南メソヂスト監督教会朝鮮年会が開催されていた元山で、ランバスはウラジオストックをはじめとするシベリアと満州各地域の宣教の可能性を検討するように調査を指示した[616]。このようなランバスの調査指示は、翌年(1920年)5月、南メソヂスト監督教会の宣教局年例会議で承認され[617]、この承認によってその年(1920年)の 9月に開催された第3回南メソヂスト監督教会朝鮮年会でランバス監督は再びクラム(W. G. Cram)を総

---

611 Miss Mamie D. Myers, 'Seoul Evangelistic Center for Women', *KMF*, February, 1922, p.33.

612 梁柱三 編、『朝鮮南監理教會三十年紀念報』、35頁参照 ; J. S. Ryang ed., *Southern Methodism in Korea Thirtieth Anniversary*, Seoul: Board of Missions of the Korea Annual Conference of the Methodist Episcopal Church, South, 1930, p.35.

613 王來、『泰和社會館沿革』、1938参照。この記録は1939年ビリングズレー(Miss Alice Margaret Billingsley)が館長として務めていた時期、泰和社会館が新しい建物を建築する時、定礎石の中に入れた物の中の一つである。李德周、『泰和基督敎社會福祉館』、ソウル : 泰和基督敎社會福祉館、1993、120頁再引用。

614 満州・シベリア開拓宣教と関連して、南メソヂスト監督教会宣教機関誌である*the Missionary Voice*に寄稿された記事は'Fathering the Doughboys in Vladivostok', *MV*, December, 1919, p.366; 'Five Millions for Missionaries', *MV*, June, 1920, p.175; 'To Open Work in Siberia', *MV*, January, 1920, p.9; 'The Awakenings in Korea', *MV*, July, 1920, p.217; W. R. Lambuth, 'Fruitful First Year of Siberia Mission', *MV*, Octorber, 1921, p.301など参照。

615 尹春炳、『韓國監理教教會成長史』、果川 : 監理教出版社、1996、566頁参照。

616 梁柱三 編、『朝鮮南監理教會三十年紀念報』、33頁参照 ; J. S. Ryang ed., *Southern Methodism in Korea Thirtieth Anniversary*, p.33.

617 W. G. Cram, 'Report of W. G. Cram, Superintendent. Siberia-Manchuria Mission', *Minutes of the First Annual Meeting of the Siberia-Manchuria Mission of the Methodist Episcopal Church*, South(以下*MSMMECS*), 1921, p.5.

理として、また鄭在徳を満州-シベリアの開拓宣教師に任命した。この地域の開拓宣教は順調に進行され、毎年肯定的な結果を産むことができた[618]。この規模は、満州-シベリアだけの教会組織を別に構成できるほどであった。その結果ランバスは、1921年7月、クラムおよび梁柱三と同行してシベリア視察にでることになり、宣教の肯定的な結果を確認することになった。このように肯定的な状況を確認したランバスは7月31日から8月1日までの二日間で、シベリアのニコルスク-ウスリスクで南メソヂスト監督教会満州-シベリア年会を組織することになったのである。7月31日、主日朝11時から始まった創立年会でランバスは、ヘブライ人への手紙11章8節をテキストとして、アブラハムの天命について説教し、信頼と従順、そして犠牲精神を強調した[619]。このようにランバスの広い宣教的見識と決断力、そして推進力は満州-シベリア内の朝鮮人のための開拓宣教の原動力になったのである。

そして本と朝鮮を経て、通常の航路に従って到着した終着地中国では、当時中国内に深刻な社会問題として浮び上がっていた飢謹問題に大きな関心を持って注視した。このような社会的困難を見たランバスはこの問題を解決するための救護対策に尽力し[620]、本国にも知らせて米国教会からの協力と援助を得ることができるように努力した[621]。

その他にも彼は米国内の異民族宣教など多方面にも関心を持って活動した。特にその中でも米国内の朝鮮人宣教[622]とメキシコ人宣教[623]においてマイノリティに関心を注いで宣教的活動を推進したのである。

しかし1921年、東洋担当監督として三度目に東アジアを歴訪したその年、彼の健康はそれほど良くない状況であった。それにもかかわらず、彼は監督の職を全うするために無理に東洋に出かけて行ったのである。彼は日本の軽井沢で南メソヂスト監督教会日本宣教部会議に参加している間激烈な痛みを感じ、それによってその年の9月13日、横浜にある総合病院で急遽手術を受けることになった[624]。しかし結局彼は回復できず、9月26日にこの世を去ることになった[625]。

---

618 1年が経過した1921年には1,261名に至る非常に驚くべき成長結果が現れた。*Ibid*, p.12.
619 *Ibid*, 1921, p.5.
620 'China Relief at Work in China', *MV*, May, 1921, p.157.
621 1921年1月に作成した彼の報告書が米国で*China Famine Conditions which I Have Just Seen*という小冊で出版され、この報告書に基づいて要約された文が南メソヂスト監督教会宣教機関誌である*the Missionary Voice*の1921年3月に掲載された。W. R. Lambuth, *China Famine Conditions which I Have Just Seen*, New York: The American Committee for China Famine Fund, 1921; W. R. Lambuth, 'What I Saw in the Famine Area', *MV*, March, 1921, p.71.
622 William Acton, 'Korean Life in America', *MV*, June, 1916, p.253.
623 'Organization of the Texas Mexican Mission', *MV*, January, 1915, p.6; 'Mexican Christians Faithful', *MV*, April, 1915, p.150; Mrs. T. Fort, 'Annual Meeting of the New Mexico Conference', *MV*, December, 1916, p.576.
624 *WRL*, p.13.
625 'Bishop Lambuth Gone', *MV*, October, 1921, p.294.

まとめ

南メソヂスト監督教会の宣教の歴史を整理したキャノンⅢは、彼の著書*History of Southern Methodist Missions*でランバスに関して次の通り言及している。

20世紀の始まりは以前の教会とは比較できない世界を通じた宣教的前進の機会を持ってきた。この期間の間ランバス博士は南メソヂスト監督教会宣教師団体の指導者であった。超教派的な歴史の中でもランバスより教会の宣教的作用と共により広い接触を持った人は誰もいなかった。彼は彼の教会が代表するすべての宣教現場と共に宣教師として宣教局主事、あるいは監督として一つの才能、または、他の中で相互協力していった。このような理由で彼のストーリーは個々の[宣教]現場に関連したのを除いては完璧に話されることはできない[626]。

キャノンⅢの言及のとおり、20世紀初期、南メソヂスト監督教会の海外宣教はランバスを除いては完全に理解し難い。それ程ランバスの生涯と宣教という用語は非常に密接な関係を持つ。彼の一族は、伝統的に宣教と関わり、南メソヂスト監督教会内でも深い信頼を受けていた。その上彼が生まれたところは、本国(米国)でなく宣教地(中国)であった。中国宣教師であった両親の影響で幼年時代の大部分を宣教地である中国で送った。他の言語と文化など異国的だといえる要素が、ランバスには深くなじんでいたのである。言い換えれば、両親の言語と文化(西洋)、そして宣教地の言語と文化(東洋)がランバスに自然に調和を作り出せる条件が与えられたことを意味する。そしてこれは、いわゆる異文化に対する排他的先入観を事前に除去できる要素をランバスが身に備えていたと言えるだろう。結局、東洋の文化と西洋の文化、そしてその中でキリスト教という三種類の要素は、互いに排他的なものでなく、相互理解と調和の中で形成されることができたのである。

したがって、南北戦争の間に本国に帰った時にも、当時の米国社会内で大きな対立や社会的問題であった黒人と奴隷制度は、彼にとっては大きな衝撃にはならなかったのである。しかも、彼の母方は北部連邦の拠点の一つであるニューヨークにあり、一部は北部連邦軍の主要な指導者として活動もしていた。したがって、彼の両親が当時、奴隷制度に賛成した南メソヂスト監督教会に所属していたとしても、それ自体がランバス自身にそれほど重要な影響を与えていないと推測できる。かえってランバスは、心情的に奴隷制度に賛成する南部連合軍より、これに反対した北部連邦軍により近かった立場をとることができた。そのために彼は当時、黒人でペイン大学の教授だったギルバートと仲間意識を持って共に、南メソヂスト監督教会のアフリカ宣教の開拓のために喜んで旅立つことができた。そして、その結果南

[626] James Cannon Ⅲ, *History of Southern Methodist Missions*, p.58.

メソヂスト監督教会の未開拓の宣教大陸であったアフリカの門が彼の指導の下、開かれることができたわけである。

宣教師の家に生まれて、宣教師の子どもとして宣教地で幼年期を送った彼は、本来宣教師になろうという具体的な目的意識を持っていなかった。 しかし、健康上の問題で一人で中国を離れ、本国に帰らなくてはならない海の上で、彼は重要な経験をすることになる。つまり、船上で彼は人間の孤独や寂しさの極端を経験しており、これと関連した内面の争いがあった。いわゆるウェスレー神学の観点から見ると、再生(rebirth)の経験であった。そしてこの内面での苦労は、彼を信仰的経験と平安を感じさせてくれる基本的な土台になった。このような状況の中で、本国に戻った彼は、大学で宣教師としての召命をさらに具体化させようという思いを抱き、医療宣教師になる決心をし、それを実践に移したのである。

ランバスは親と志を同じくして中国に医療宣教師として派遣を受けており、上海と蘇州を中心に医療活動をしていく。しかし、アレンをはじめ、当時の南メソヂスト監督教会中国宣教部の指導者らと宣教方法と政策において見解の相違を見せるようになり、さらに妻の健康悪化によって結局中国宣教師職を辞任することになる。しかし、彼に新しく与えられた仕事は、同じ東アジアの一つである日本の開拓宣教であった。ところで、日本はすでに明治維新を通じて医療の近代化を成していたために、彼の活動は宣教の全般的な指導的運営と教育宣教を中心に行われていった。しかし、日本にいるときにも妻の健康はあまり良くなく、結局、本国に帰国するしかなかったのである。

一方、彼の帰国は、ランバス自身の人生においてもう一つの転換点となった。それは南メソヂスト監督教会宣教局という教会行政の中心部での経験であった。海外宣教師としての経験を基に、彼は全世界の宣教地を隈なく見れる機会を持つようになった。つまり、個別の宣教現場で取り組んできた彼の視野に幅白いスコープが与えられるようになったなったのである。その結果、彼は宣教局総主事を経て海外宣教を主に担当する監督の職務に就任することになった。彼は監督在任期間中、アフリカのコンゴと満洲とシベリア地域の朝鮮人宣教などを開拓し、ブラジル宣教の状況をより強固にしてきた。また、1919年からは日中韓を中心とする東洋担当監督として毎年東アジアを訪問し、宣教地を巡回した。ところが、ランバスにとって東アジア、すなわち中国と日本、そして朝鮮が持つ意味は相当大きかった。彼の実質的な故郷(上海)で、日本宣教部の総理、つまり指導者としてのリーダーシップを本格的に発揮できたところであった。そして特にその中でも、当時の支配と被支配という政治・社会・経済的パラダイムの枠組みの中で、日韓関係を調和的に果たしていかなければならない責任を担う難しい宣教地であった。彼はこのような東アジアの宣教地の中で、キリスト教宣教師として第3者の立場を十分に活用した。これは、先に第1章でみた同時代のハリスと

は極めて対照的な姿でもある。つまり、二人の人物の生涯を通じてみたとき、日本と日本人というパラダイムの中で東アジアを理解したハリスに比べて、ランバスはより柔軟な立場を駆使して困難な状況に対応できたと言えるであろう。

第4章：W・R・ランバスの日韓両国についての理解とその特色

本章では、ランバスが日本と朝鮮両国をどのように理解し、利害関係に関してそれぞれどのような態度をとっていたのかを検討することを主な目的とする。彼は19世紀から20世紀にわたった一時代を生きてきた人物で、しかも南メソヂスト監督教会の宣教師、また宣教局主事、そして監督に至るまで、一教派の重要な位置に着き様々な活動をしてきた。特に、彼の全生涯が宣教と密接な関係を持っていたことは、先に見たところである。著名な宣教師の一族を背景に持ち、親の宣教地である中国で生まれ、幼年時代を過ごした。それ故、彼の故国である米国よりも中国という東アジアの文化と環境に慣れ親しんでいた。特に、宣教師の子どもとして、宣教地への適応力は両親よりも高かったと言える。

彼は本国に戻って学業を終えた後、本人も宣教師になり中国に戻った。東アジアに戻った彼は、当時南メソヂスト監督教会の中国宣教において主要な拠点である上海と蘇州市などを中心に活動した。彼は医療宣教に集中するのであるが、アレン(Y. J. Allen)をはじめ、当時の南メソヂスト監督教会中国宣教部との宣教政策及び方向に関する対立と摩擦により宣教地を変更することになる。そこで両親のJ・W・ランバス(J. W. Lambuth)夫婦などとともに日本開拓の任務を与えられた。すでに政府の主導の下に近代医学が導入されていた日本では、彼の宣教は教会開拓、総理としての地方巡回、そして教育を中心に行われた。宣教師としての彼の力量と活動は、本国教会でも高い評価を受け、南メソヂスト監督教会宣教局の幹事を経て、主事という職務に就任することになった。しかし、彼の活動はここに止まらず、メソヂスト教会の監督に就任し、彼の指導力はさらに高い評価を受けるようになる。彼は監督に選出された以降も、宣教と密接な関連をもっており、アフリカ、中南米、欧州、東アジアなど世界各地の宣教地をまわり、生涯を通して宣教の監督として重要な貢献を果たしたのである。

上記のような多様かつ幅広い宣教活動の足跡を残したランバス宣教理解を把握するためには、より立体的な接近と検討が要求されると考えられる。特に彼が残した宣教活動を分析するためには、何よりも彼の宣教理解と思考の枠組に関する内面的な検討が必要である。したがって、本章では3章で見たランバスの生涯と併せ、思想的側面を検討するある。その中でも日韓両国と関連しする政治、経済、文化など社会的側面とキリスト教の宣教的側面中心にその理解を把握する。

このようなアプローチは、近代化の欲求と帝国主義の膨張が絶頂に達した19世紀末と20世紀初頭にかけた時代的状況、そして民族的緊張感が非常に拡大されていた日韓両国の関係の中で、西欧教会がどのように東アジアを理解していたのかを探る手掛りとなるだろう。

それ故、本章は以上のような研究目的をもって、ランバスの両国の理解を具体的に検討する。

第1節：日本の理解

日本の南メソヂスト監督教会内でランバスの存在感は、1892年の南メソヂスト監督教会日本宣教年会録(Minutes of the Japan Mission Annual Conference of the Methodist Episcopal Church、South)に出てくる次のような内容を通じて容易に推察することができる。

牧師ランバス博士に関する決議案(Resoulution Concerning Rev.W.R.Lambuth、D.D.)
決議案-今回の年会に誰もが言うことなく、我々が心から愛している、前総理(superintendent)である牧師ランバス(W.R.Lambuth)博士が不在しているのは非常に残念なことである。私たちはいつも彼と彼の家族の為に祈りながら、この地球上のどこでも主が彼の行く道を導いて下されば、私たちの同労者であり、指導者である彼に対し、我々の広く温かい心の中に彼を記憶するだろう[627]。

1892年6月20日から27日まで、南メソヂスト監督教会の南美以美神戸教会で開かれた第1回日本宣教年会の最終日、同僚の宣教師であるニュートン(J.C.C.Newton)とデュークス(O.A.Dukes)の署名による年会の上記の決議は、ランバス不在に対する無念の思いを表明するものであった。当時、ランバス以外にもアトリー(N. W. Utley)も年会に不在だったが[628]、年会において不在会員について何らかの決議を行ったのはランバス一人だけであった。これは、ランバスの日本南メソヂスト監督教会における存在が他の宣教師より大きかったことを意味している。第4章第1節では、19世紀と20世紀にわたって米国南メソヂスト監督教会宣教師であり監督を歴任したランバスが、日本・日本人についてどう理解しており、加えて、日本宣教について、どう考えていたのかを考察した。ランバスが活動した当時の東アジアは、数多くの教派と宣教師たちが活発な宣教業績を残し、その土台を固めていた。特に日本は、東アジアで朝鮮と同様に米国中心、そして教派中心的性格が強く現れた宣教現場でもあった。その中で南メソヂスト監督教会で日本の開拓宣教師、また宣教局主事、そして監督として影響力を発揮した人物がまさにランバスであった。したがって、彼の日本に対する理解と認識を検討することは、日本教会史と宣教師についての研究において一つの重要な意味を持っている。

627 *MJMACMECS*, 1892, p.13.
628 *MJMACMECS*, 1892, p.6.

ランバスの日本・日本人及び日本宣教を理解するため、参照することができる代表的な資料としては、まず彼が著述し1908年に発行された*Side Lights on the Orient*があげられる。この書は、彼が宣教局主事として1907年にアジアを訪問して残したスケッチを基にしている[629]。したがって厳密な意味では、当時訪問したアジア各国を全般的に扱っている著書なので、日本だけを記述された資料というわけではない。それにもかかわらず、この資料が彼の日本・日本人及び日本宣教理解を検討する上で主要な資料と言えるのは、その内容の多くを日本と朝鮮、そして中国という東アジア3カ国に割いているということである[630]。 その中で日本と関連した目次を見ると次のようになる[631]。

<表 - *Side Lights on the Orient*の目次中日本に関する項目>

Chapter	Titles
7章	The Land of the Rising Sun
8章	Yokohama
9章	Benkei The Giant
10章	Under the Mountains to Lake Biwa
11章	Arima, the Crater City

ランバスはこの著書を、若者、その中でも特に南メソヂスト監督教会の数多くの子どもたちを読者として想定して書いている。彼は、西洋、特に米国の若者にあまり知られていない東洋の光と影(lights and shadows)についてより現実的な理解と認識を持つようになることを願っている。そして東洋人が必要とするもの(something of human need)が何であるのか知り、ここに西洋人たちが彼らの必要を満たす為に神が下さった機会(God-given opportunity to meet that need)であることを著している[632]。このような著述の目的を考慮して日本に焦点を合わせてみると、彼はこの著書を通じて日本をより客観的に西洋に紹介し、彼らが必要とするものが何であるのか確認しようとしたことを知ることができる。西洋(米国)が日本の要求に適切に対処できる姿勢を持つことが、彼の根本的な意図だったということである。その意味で、ランバスの著書である*Side Lights on the Orient*の7-11章は彼の

[629] W. R. Lambuth, *Side Lights on the Orient*, p.7.
[630] 全部25個の章(Chapter)で構成されている目次(Chapter)の中、半分以上である14個の章が日中韓三ヵ国に関する項目である。
[631] W. R. Lambuth, *Side Lights on the Orient*, p.9.
[632] *Ibid*, p.7.

日本理解を把握する上で基本的な資料になっているといえる。

また、関西学院キリスト教主義教育研究室で編集した「ウォルター・ラッセル・ランバス資料」、『関西学院キリスト教主義教育史資料Ⅲ』[633]もランバスの日本理解を知る際に重要な資料となる。ちなみにこの資料集はMethodist Publishing Houseに保管されていた原稿を日本語に翻訳して1980年に出版した資料集であり、中国(中国-一つの解釈、Articles on China)と日本(日本雑記、Articles on Japan)、そしてランバスの個人書簡(Letters from Walter R.Lambuth)など、大きく三つの項目から構成されている。その中でも日本と関連した項目は、具体的に次のような手順で構成されている。

<表-ウォルター・ラッセル・ランバス資料」での日本雑記(Articles on Japan) 細部項目>

Chapter	Titles	Recorded
1	東京と神戸	1919
2	二つの世界の間で	unknown
3	日本の攻略	1907
4	日本人のもてなし	1907
5	日本の首都での現在の出来事	1907
6	瀬戸内海をめぐって	unknown
7	光のすじ	1907
8	百六十五人の弟達	unknown
9	日本	after 1916
10	島から大陸へ	unknown
11	緊急の必要	unknown

この資料はランバスが数回にわたって日本を訪問した経験と、時代的な状況認識、そしてこれによって感じた個人的な感想を主な内容としている。枠にとらわれない自由な形式を取っているために、ランバスの日本理解を知る上で非常に重要な資料として評価できる。もちろん英語文献の日本語訳であるということは、この資料が持つ大きな限界である。現在、時間・空間的な制約によって原文そのものを直接確認できないが、それにも関わらず、ランバスが著述した未完の原稿をもとに翻訳されたという点を考慮するならば、それ自体、本章

[633] ウォルター・R・ランバス、関西学院キリスト教主義教育研究室 編、「ウォルター・ラッセル・ランバス資料」、『関西学院キリスト教主義教育史資料Ⅲ』、関西学院キリスト教主義教育研究室、1980。

の主題を把握するにおいて重要な意味を持つことは明らかである。

このほかにも他の宣教報告書と雑誌などに残されたランバスの著述は、彼の日本理解と認識を検討することにおいて重要な1次資料になる。

(1)一般的理解(政治・経済・文化などの社会的な要素)

①東洋の関門-日出ずる国

帝国主義の傾向が強まった18-19世紀に東洋を訪問した西洋の探検家たちは、本国に戻って自分たちが旅先で見て感じた経験を本国に紹介することを常としていた。彼らは著書を出版したり、講演を通じて自分たちが経験した東洋の姿を紀行文という形式で紹介したりした。特に、当時の西洋人にとって東洋は、未知なる極めて異質的な地域だったために、探検家たちの記述が東洋を理解する基本的な教材となったのである。ところが彼らが残した記録又は書籍は、概ね次のような特徴をもっていた。まず、探検地域を非常に美化させる傾向がある。そして第二に風景を描写する際に、多くの形容詞を使用しているが、特に旅行者の故郷を連想させる表現を多く使った。そして最後に旅行者らが観察者になって対象を完全に主観的に描くという形式をとった。つまり、旅行者が観察しているその地域の価値を評価する位置にいるような形をとることである。このように大きく三つに整理された修辞法の構成要素は観察する対象地域が非西欧圏の場合に顕著に現れた。 これをいわゆる「ビクトリアン発見レトリック」(Victorian discovery rhetoric[634])という。

一方、西洋の宣教師たちもこれと似たような叙述方法をとる場合が少なくなかった。一般的に彼らは本国に帰る度に、信者たちに自分の宣教を紹介する報告書や講演を要請された。宣教師たちは、最初に宣教の自然環境に言及しながら話を展開していった。当時の西洋人にとっては東洋は神秘的なところであったので、地理的特徴と自然環境を描写し、聴衆の注意と関心を集中させる必要があった。したがって、自分が宣教活動を通して直接見て体験した事実を、紀行文形式、つまりビクトリアン発見レトリックの大きな枠組から外れないように紹介した。

ランバスも本国に非西欧圏を紹介する際に、概ねビクトリアン発見レトリックの三つの構成要素を活用しながら話を展開していった。まず彼は、西洋人の観点を持って日本の地理的特徴を米カリフォルニアと比較して、故郷を連想させるレトリックを活用した[635]。そし

634 ビクトリアン発見レトリック(Victorian discovery rhetoric)については柳大永、『初期米国宣教師研究1884-1910』、前掲書、204-206頁参照。

635 『ランバス資料』、103頁参照。ちなみに、南メソヂスト監督教会の宣教機関誌である*the Missionary*

て特に彼が、1907年に東洋を訪問した後、翌年米国で出版した*Side Lights on the Orient*では計25章のうち5章を日本に関して割当てて記述しているが、その中で最初の第7章の小題がこのような性格に合致する[636]。第7章の小題は、'The Land of the Rising Sun'、つまり「日出ずる国」ある。この見出しを通じて著者であるランバスは、読者が東洋で太陽が最も先に浮上する日本の地理的状況を思い浮かばせながら、それ以降の内容を展開しようと試みていることを容易に知ることができる。ランバスは、米大陸を離れ、長い間太平洋を渡った後、初めて接することになる東洋の国が日本であることを知らせている[637]。換言すれば、日本が東洋の関門であることを間接的にアピールしているのである。このような日本に対する理解は彼の晩年もずっと続いており、その意味で特別に日本の下関は、中国と朝鮮という東アジア大陸と日本をつなぐ連絡通路のような重要性を持つと強調している[638]。また、ランバスは相当美辞麗句を駆使して描写している。つまり、ランバスが船上から見た日本の姿は、雪のように白いカモメが海と海岸線の上をとびまわっており、海の上には海草が揺れていた。これは一般的に平和な港湾都市、あるいは漁村で見られる風景であった。

船舶が主要な運送手段だった当時、米国人にとって日本はサンフランシスコを離れハワイ・ホノルルを経て太平洋を航海した後、初めて接することになる東洋であった。日本国内でも、最初に東京湾から入って横浜港に停泊することになるが、富士山は遠距離でも見ることのできる日本のシンボルであった。ランバスにとって船上で見た日本の印象は、雪に覆われた富士山の頂上が陽光に反射して非常に美しく、偉大な自然の存在として目に映した。そして何よりもその姿は、「日出ずる国」として日本に関する強烈な印象を与えた[639]。このようにいわゆる日出ずる国である日本は、東洋の足がかりとして理解され、これは同時に島国(an insular country)という地理的特徴を備えた海洋国家として描かれ、理解されたのである。

また海洋国家である日本の印象は、彼が瀬戸内海を回りながら感じた感想ともつながる。南メソヂスト監督教会の日本宣教が、神戸、広島、松山、大分、下関など瀬戸内海沿岸都市を中心に行われた地域的特徴を持っていたので、彼の宣教活動も、その範囲を大きく外れなかった。したがって、彼の宣教活動もいわゆる使徒パウロが地中海を中心に展開していった

---

*Voice*の1918年1月号に載った日本関連の記事も以上のような著述方法によって記された。すなわち、「日本は厳密にいうと、400か所が超える島々で構成され、アジアの東岸に沿っている。朝鮮は1910年に[日本]帝国に併合された。日本を構成する一連の帯のようになっているこの島々は2000マイルが超える長さであり、これは[米国の]メイン(Maine)からキューバ(Cuba)まで並んでいる長さである。しかし平均的に広さは10マイルより小さい方である。」R. B. Eleazer, 'A Handful of Facts about Japan', *MV*, January, 1918, p.11.

636 W. R. Lambuth, *Side Lights on the Orient*, p.9.

637 *Ibid*, p.56.

638 『ランバス資料』、39頁参照。

639 W. R. Lambuth, *Side Lights on the Orient*, pp.60-61.

ように、瀬戸内海の周辺の拠点を巡回する方式で行われていった。つまり、瀬戸内海をよく行き来していたランバスは、島国であり、海洋国家としての印象をさらに強いものにした。特に彼が見た瀬戸内海は、米国のセイントローレンス川とも比較される広大さと美しさを内包したところであった[640]。したがって、彼はこの瀬戸内海を航海する際、多彩な島々が点在する美しい自然の姿を見ながら、「まるで天国のように見えた」[641]と絶賛していたのである。

一方ランバスは、日本が島国の地理的特徴を持っている国であると同時に、火山や地震など自然災害が頻繁におこる地域として理解した。特に、彼は関西の有馬地域での経験を記録している[642]。関西の有馬地域は、南メソヂスト監督教会の宣教師たちがよく集まって休養を楽しんでいた場所でもあり、1907年以降は南メソヂスト監督教会日本宣教師会が、ここで開催されている[643]。ちょうど1907年に日本メソヂスト教会の合同に向けた南メソヂスト監督教会側全権委員として日本を訪問したランバスは、会議の開催地である有馬を訪問して、地震と関連した日本人の心配と恐れを聴取している。このようにランバスは、火山と地震など自然災害が多い日本の特徴を知った[644]。これは彼が船上で眺めた島国日本の平和と静穏の一面とは違い、より現実的かつ具体的な日本の地理的状況理解であった。

総合してみると、ランバスの日本に対する理解は、その他の西洋人と同様、地理的特性を把握することから始まった。つまり、海に面している静かで穏やかな島国日本は、いわゆる「日出ずる国」という印象が強かったといえるが、そのことは日本が東洋の関門という意味を含蓄していた。言い換えれば、西洋と東洋が接する最初の経由地ということである。さらに火山と地震など自然災害が頻繁な国であることを認識しており、これに関する警戒心も持っていたと言える。

②ランバスが見た日本の特徴

ランバスにとって日本は、地理的特徴から太平洋を横切って東洋と出会う、いわゆる最初の関門という印象が濃かった。島国、すなわち典型的な海洋国家の特徴を持っていたのである。そして東京湾に入る時に見える富士山と頂上付近に積もった雪が太陽に反射される時の光彩は、一幅の水彩画を連想させる美しさを感じさせた。何台もの蒸気船が行き来する村

640 『ランバス資料』、86頁参照。
641 同書、89頁。
642 W. R. Lambuth, *Side Lights on the Orient*, p.86.
643 *Year Book of the Japan Mission and Minutes of the Annual Meeting of Missionaries of the Methodist Episcopal Church, South*(以下*YBJMMECS*), 1907, p.4.
644 W. R. Lambuth, *Side Lights on the Orient*, p.61.

は思ったより静かで、海に出る漁夫の姿に平和が感じられた。ランバスが日本の地理的特徴を通じて感じる印象は、概ねそういったものであった。もちろん上記のような印象と表現は、彼が1907年に日本を訪問した後、その感想を本国に伝えるための目的として記述されたので、誇張された面がないとは言えない。しかし、当時の西洋人たちに東洋に対する関心を呼び起こすため、一般的な記述方法が用いられたと言えるのである。

それではランバスは、日本人のことをどのように理解したのだろうか。先にランバスが、外的に日本人に対して受けた第一印象は、日本人たちが小さな体格を持っているということである[645]。東洋人と比較して相対的に大きな体格を持つ西洋人の目からは、自ずと日本人は小さく見えたのであろう。中国上海生まれで幼年時代を中国で過ごし、東洋人に慣れた方だったランバスにさえ日本人の体格は小さく見えた。このように、小柄な日本人が腰を曲げて、お辞儀をしたり、挨拶する姿は、ランバスにもやや不慣れな面があった。もちろん、頭と腰を曲げてあいさつするのは東アジアにおいて一般的な姿である。しかし、これに加えて日本人はより頭を深く下げ、これを繰り返すのが日本人だけの独特な特質だと思った[646]。

また、ランバスは、日本人のガニ股を彼らの一般的な身体的特徴だと思った。1907年、日本を訪問して横浜の街を歩く時、一人の作業員が電柱工事のために登る姿がランバスには印象的であった[647]。さらに、特別な専用装備も備えないまま、ただ足袋だけを履いて上手に登る姿は、ただ不思議でしかなかったのである。ランバスはその理由を日本人の身体的特徴から探した。 一般的に東洋、その中でも特に日本は畳をはじめとする床文化を持っている。畳に座る時に日本人たちは足を交差する、つまり胡坐をかいて席に座ることになる。ランバスはこのような日本の床、つまり畳文化について早くから知っていて、それによって多くの日本人はO脚という身体的特徴を有していると考えた。したがって、日本人は梯子などその他の基本的な道具を備えないでも、電柱を上手に上り下りができたと考えたのである。日本の文化と日本人の身体的特徴に関したランバスなりの観察であった。

一方、ランバスは内向的性格を日本人たちの内的、心理的特徴だと思った。彼は伊達[648]という日本人に会い、その時の印象を自分の著書に記録している[649]。伊達という人物は、日本南メソヂスト監督教会の宣教の土台を固めた信徒であった。ランバスはその家族に会いながら普通の東洋人とは何か違うことを感じた。つまり、彼が知っていた日本人の一般的な性格は、内向的な東洋人の範疇から大きく脱しないが、この家族はそうではなかった。彼らは

---

645 *Ibid*, p.63.
646 『ランバス資料』、57頁参照。
647 W. R. Lambuth, *Side Lights on the Orient*, pp.67-68.
648 伊達に関するより詳細事項は*Ibid*, pp.57-60参照。
649 *Ibid*, p.65.

自分の心や気持ちなどを積極的に表現する方だったのである。しかし、ランバスが思うに東洋人と同様日本人も相対的に積極的で活発な性格である西洋人たちに比べて、自分の気持ちを表現するのを自制する、いわゆる内向的性格を持っていると理解していた。

その他にもランバスは、日本人が清潔さと衛生に相当気を使っているという印象を受けた[650]。日本人は、時間と金銭的な余裕があればいつもお風呂を楽しむ姿に出会った。それ故、日本人が他の民族よりも清潔で衛生に関心があると考えたのである。特に衛生に関する部分は、医者でもあったランバスにとって関心を抱くのは当然であった。元々、医者という専門職の観点から、日本が衛生において改善されなければならないと考えていたが、東洋の中でも日本は、例外的に清潔な国であるという印象を与えた。このように自分の身体と居住地を清潔に維持しようとした日本人の衛生観念はここに止まらず、さらに公衆衛生につながっていった。

このようにランバスが見た日本人は個人の清潔を越えて公衆衛生が習慣的に身についた民族であった。これは似たような時期に朝鮮を訪れた観光客や宣教師たちが、朝鮮の非衛生的な道と汚い環境を見て、否定的な記録を残したのとは対照的であった[651]。ランバスも同様であった。彼は予防医学(preventive medicine)、衛生学(hygiene)、そして公衆衛生(sanitation)と関連して論じる際、中国と朝鮮、インド、フィリピン、メキシコ、そして南米などの宣教では医療宣教が必須要素であることを強調しながらも、日本は対象外の宣教地と見なしていた[652]。それ故に、ランバスが西洋の宣教師として、東アジアの他の国の中で、日本と朝鮮をあえて比較する際に近代化と関連して日本についてより良い印象を持ったと推測できる。

一方、ランバスが考えた日本人たちの徹底した衛生観念は、戦争によりさらに明確になった[653]。帝国主義列強の対立と葛藤が激しかった19世紀末から20世紀初頭にかけて、日本も西洋列強のように、多くの戦争を経験した。多くの死傷者が出て命を落としたことは言うまでもない。しかし、医者でもあったランバスの立場からさらに残念だったのは戦争のあおりを受けて二次被害をこうむることであった。つまり、伝染病による死亡者の増加である。しかし、ランバスが見た日本はその他の国家に比べて伝染病による死亡者が少数であった。彼はこの原因を7つの項目で分析し、整理している[654]。日本人の徹底した衛生管理が非常に効果的であると考え、日常で衛生に気を使う日本人の生活習慣が軍隊でも引き続がれて疾病

---

650 *Ibid*, p.68.
651 *Ibid*, p.84.
652 W. R. Lambuth, *Medical Missions: the Twofold Task*, p.90.
653 『ランバス資料』、108頁参照。
654 同書、109頁参照。

を最大限抑制できたというのである。また、徹底した飲食物管理と入浴して体の疲れを取る姿も、公衆衛生に徹底していた日本人の姿を示す一面であると分析した。上記のような衛生観念が徹底した日本人だったので、伝染病の拡散やその2次疾病が予防できたのであると考えた。さらに、ランバスは1904年に勃発した日露戦争で日本が勝利できた理由の一つは、兵士たちの徹底した衛生管理であると考えた[655]。それだけ日本人の衛生概念は、医者であるランバスから見てもかなり水準が高い方だったのである。

総合してみると、ランバスにとって日本人は、西洋人と比べて小ぶりな身体条件を持っており、典型的な床文化によって大半が曲がった脚を持っているという印象が強かった。加えて、自分の意向を積極的に表現する西洋人たちと違って、静粛を美徳と考える東洋人の典型的な内向的性格を所有した民族であると考えた。一方、ランバスが日本の生活習慣を高く評価した部分として、それは何より自分の身体と居住地をはじめ、周辺環境を清潔に維持しようとした衛生観念であった。特に医師でもあったランバスの目には、その他の中国及び朝鮮と比較して衛生観念に徹底した日本人の生活や文化が西欧的近代化の基準に最も近いと判断したのである。

③稲わらと竹の国

自然災害が頻繁に起きるということは、換言すれば巨大な自然の力に順応するしかないと解釈できる。そして自然の力に順応するしかないというのは、自然の材料を利用して、日常を営むということである。ランバスが理解した日本の姿は、東洋の関門であり、海洋国家(島国)である以外に、自然に順応する特性であった。特に、ランバスにとって日本は木材を主な材料に使用する国として理解されており、その中でも稲わら(straw)と竹(bamboo)が普遍的な材料として使われている印象を持っていた。彼は日本で行く地域ごとに上の二つの材料が、社会や文化、そして生活の中で広く活用されていたことを発見した。他の国を訪問しても、この二つの材料を目にすればすぐ日本を思い出すほど、それだけランバスにとって稲わらと竹は日本を象徴するシンボルであった。

彼は日本の宣教師として、約5年余に渡って滞在し、また宣教局総主事として日本を訪問するたびに、日本で稲わらが生活の中の多様な用途で使われていることを確認してきた[657]。特に、日本においては熱い太陽の下、水田で働く女性たちが背中の後ろに体全体を覆うほどの大きさの稲わらでできた蓑を着用していたことを印象的に記憶していた。事実それと同

655 同書、112-113頁参照。
657 W. R. Lambuth, *Side Lights on the Orient*, pp.137-138.

じ姿はほかの国でも見当たらず、日本人だけの独特な生活文化だったからである。また、牛が山道で滑らないようにわらを足に結んでいたのも、多様な生活分野にこの材料が有効に使用されているということを直接確認できた一例であった。

その他にも、稲わらは日本の生活文化で象徴する畳の材料だが、ランバスは畳が船で椅子のように乗客の座席の材料として使用されていた事実を見ている[658]。このように、稲わらが日本人たちの生活中で有用かつ普遍的に使用されているという事実を彼は興味深く見出しているのである。

また、稲わらと共に竹も日本社会の生活文化の中で非常に有用な材料として使用されているという事実をランバスは確認している[659]。厳密にいうと、稲わらと竹は元々東洋文化においてよく使用される有用な材料である。竹そのものに親近感を持っていたランバスだったので、彼は「非常に多様に使用されていること」(At all events it has a greater variety of uses)[660]が竹であると明確に言及することができた。この引用文は、ランバスが中国を訪れた当時記した内容の一部で、彼はそこで竹を見たとたん、日本を思い出した。それほど、日本人の生活の中で竹が非常に多様で効率的に活用されているということを彼は経験していた。とりわけ、食事礼儀に関して、箸の使用が普遍化されていた日本で、ほとんどの箸が竹で作られたということをランバスは知っていた。

その他にも、ランバスが滋賀県の琵琶湖を巡回する時、同行したある西洋の婦人(Mrs. W. A. Davis)が、日本の竹で作られた弁当箱(bamboo basket)を持参していたことを見、興味を持ったことがある[661]。それほど、日本の社会の中で、多様にかつ普遍的に使用されていた竹が彼に強烈な印象を与えた。

このように、ランバスは日本人が稲わらと竹などを生活の様々な分野で、活用していることを経験していた。このような彼は、日本文化に対して攻撃的・排他的姿勢ではなく、関心と綿密な観察を通して接しようとした。西洋人が東洋に進出していく過程で、他文化に対する排他的な姿勢と武力を伴う場合が多かった。しかし、ランバスは米国の有名な宣教師の一族出身で、本国ではない宣教地(中国)で生まれ、幼年時代を宣教地で過ごし、他文化に対する違和感が相対的に少ない方であった。そのような背景があったので、日本固有の文化的な特性と生活を細かく観察する姿勢を持つことができたのである。

④日本文化と近代化の土台の上で行われた発展と成果

---

658 *Ibid*, p.77.
659 *Ibid*, p.139.
660 *Ibid*, p.139.
661 *Ibid*, p.80.

日本が東アジアの諸国に比べ、相対的に西欧の文物を早い時期に受け入れたのは周知の事実である。米国の大陸から太平洋を渡って最初に接する地理的要件を備えたことも一つの理由になり得るが、明治維新による自主的な改革とそれによる積極的な西欧文物の導入が、日本の近代化を推進した要因の一つである。したがって当時の東アジア諸国と比較する時、相対的に近代西欧式技術が普遍的に受容された方である。換言すれば、この点は日本人が西欧の文物に対する基本的な理解があり、これを日本人の生活に積極的に適用させるのに拒否感がそれほど大きくなかったと見られる。しかしこれが日本独特の伝統的技術を全く軽視したという意味ではなかった。「和魂洋才」に代表された当時の日本の立場は、基本的に日本の精神を守る土台の上に西欧の文物を受け入れて利用するものであった。したがって西欧文物を通じた積極的な技術導入と日本の伝統である知恵と技術が可能な限り共存できたのである。実際に、南メソヂスト監督教会日本宣教師としてランバスと同僚だったマイヤーズ(H. W. Myers)は、『日本へなぜ宣教師たちを派遣しなければならないのか』(Why Send Missionaries to Japan?)という本の中で、いくつかの項目を言及しながら、むしろ日本が自分たちより長い文明化の歴史を持っていると評価するほどであった[662]。

そのような時代的環境の中で、ランバスは日本人たちの生活の中の知恵と彼らの賢明な技術に感嘆する場合もあった。換言すれば、日本の文化と技術を無条件に軽視する排他的な立場を取らずに、それらを認め、尊敬する姿勢を示している。以下は1907年に日本を訪問した時、横浜の街を歩きながら感じたことの記述である。

私たち一行は約1/2バレルぐらいの大きな籠の中に満ちていた水とサツマイモを盛り込んでいたある八百屋の前を通り過ぎた。ある少年が根本を稲わらで一緒に縛っておいた自分の身長より大きい二つの棒をもってあちこちかき回しながらサツマイモを洗っていた。それは棒下部がお互いに交差するのを除いてはまるで[火鉢で火の玉を拾い上げるのに使う]火かき棒の片方と同じであった。その方は非常に汚いものをとてもきれいに洗う効果的な方法であるようであった[663]。

医師でもあったランバスが、宣教場所の衛生施設に関心をもっていたのは当然であった。そして日本人たちが東アジアの諸国に比べ、相対的に清潔な衛生観念を持っていたことも

---

[662] マイヤーズ(H. W. Myers)はなぜ、日本へ宣教師たちを派遣しなければならないかに関して、南メソヂスト監督教会宣教雑誌である*the Missionary Voice*1918年1月号に寄稿した文で三番目の項目に次のように記述した。日本人たちは私たち自身[西洋人]よりもっと長く文明化を成し遂げた文明化された人たちである。400年前、彼らは法律と歴史、芸術、そして文学と共に安定した政府を維持していた。ペリー提督がこの地に入った時、彼らは日本が高いレベルの文明された国であることを見つけた。H. W. Myers, 'Why Send Missionaries to Japan', *MV*, January, 1918, p.20.

[663] W. R. Lambuth, *Side Lights on the Orient*, p.67.

先に見たところである。街頭を見回しても、衛生面に配慮する日本人たちが彼の目によくとまった。ところがある日、横浜の街を見回る時に、八百屋でサツマイモを洗っていたある少年が彼の目にとまった。一人の少年の日常的な姿に過ぎなかったが、ランバスは八百屋で少年がサツマイモを洗う姿を見ながら、日本人の生活の中の知恵に感嘆した。このランバスの態度は、非西欧的な文化を自分より下のものとして無条件に軽視するような西洋人の傲慢な態度とは無縁だったと言える。彼は、日本文化と生活を効果的かつ効率的なものとして高く評価していた。

また、横浜である日本の女性が洗濯を乾かしてアイロンをかける姿が、彼には大変印象的だった[664]。しかし、洗濯物の乾燥とアイロンかけが、同時に行われるという事実が彼には不慣れな場面であった。一般的に洗濯物を乾かした後、別にアイロンかけることが西洋はもちろん、東洋の諸国の方法であるが、日本ではその二つが同時に行われる姿を見て、日本人の生活の知恵に感嘆した。ところで、ここで注目すべきは、彼が自分の目で目撃し、感嘆したのは、ある特別な技術者の方法ではく、ただ日常生活の中の知恵であり、それを評価したのである。

一方、ランバスは日本人の生活の知恵のみを肯定的に考えたものではなかった。それよりも西洋式の近代化に非常に積極的であり、これを受容しようとする姿勢について、より高く評価した。1910年以降、彼はすでに日本が世界の列強の一国として成長したことを認めていた[665]。ランバスが見ると、1868年の明治維新以降、西洋文物を積極的に受け入れた日本はすでに半世紀ほどで世界の様々な列強と対等な立場に立っていると見なしている。とりわけ驚いたのは、天然資源の不足と東洋人という不利な条件にも関わらず、それを克服し、近代化を成し遂げることができたということであった。その中で、日本の工業分野が中心的な役割を果たしたと思った[666]。ランバス自身が経験し、かつ発行された様々な資料を参考しながら調べた日本の姿は、前例がないほどの急激な成長を成し遂げた国であった。米国との貿易もますます増加し、1910年代半ば以降は日本において大きな比重を占めるほどであった[667]。土木技術分野も同様であった。1907年、日本メソヂスト教会の成立と関連し、南メソヂスト監督教会の全権委員の一人として日本を訪問した彼は当時、滋賀県を巡る機会を持つようになった。その中にも琵琶湖を用水として京都で使用できるという事実を確認した彼は、日本の土木技術を非常に高く評価した[668]。ランバスは滋賀県と京都府の地域的

---

[664] *Ibid*, p.68.
[665] 『ランバス資料』、102頁参照。
[666] 同書、103-104頁参照。
[667] 同書、104頁参照。
[668] 同書、58頁参照。

境界線上で、大規模の土木工事を成し遂げた日本人たちの知恵と技術に感嘆し、さらにその工事を主導した人物が大学を卒業したばかりの若者だったという事実にもう一度驚いた[669]。日本の近代化を通して、日本人がこれを自らの力で成し遂げたという点において、ランバスは日本の技術的レベルを高く評価するほかなかった。

このように明治維新以降、西欧の近代技術と文物を積極的に受け入れた日本は、ランバスが見るに驚くべき成長を成し遂げた東洋の中の西洋であった。日本の技術は西欧と比較しても、後れを取らないほどであり、東洋と西洋の技術を釣り合うように使用していたので、日本の発展に高い可能性を見ていた。したがってある分野にあっては日本の技術が西欧のものを乗り越えることができると考えた。微生物に関連する医学的分野がそうであった[670]。上述したように衛生に徹底した日本人たちの生活習慣にも連結される伝染病の問題は、医師でもあったランバスが関心を強く持つ部分であった。特に、日本におけるこの問題への対応は西洋の方法に優るものがあった。ペストに感染したネズミを調る日本製の装備を携えて、日本の細菌学者たちは大学を離れ、現場へ行くほど、積極的な姿勢を取っていた。これは何よりも日本の学界が、それほどこの分野にあって、自信を持っていたため、可能なことであった。このように微生物と関連する医療分野において、ランバスが見た日本は、日本人の知恵と共に近代的な医学技術が調和した代表的な例の一つにほかならない。また、農業も同様であり、ランバスが見るに西欧から受け入れた技術を日本が改良し、もっと良い品質で、発展させた場合もあったからである[671]。

このようにランバスは、日本の日常生活を注意深く観察する姿勢を取りながら、日本人の生活に見出される知恵を探求しようとした。そして早くから積極的に収容した西欧式近代化が、日本で順調に発展している姿を目にすることができた。したがって彼にとって、日本は西洋と東洋が調和を成している、言い換えれば、東洋の中にある西洋のようなイメージを持つ国だったのである。

他方、このような彼の観点は、いわゆるオリエンタリズムとも関連している。基本的に西洋の文物を、東洋と比べ、優越的だと見なしている観点が土台に敷かれていたのである。しかし、これまでの例を見ると、ランバスの日本理解が全面的にオリエンタリズムに埋没されていたものではなかった。このことはすなわち、日本をアフリカのように迷信的であり、無知な非近代化国家とは認識していなかったということである[672]。東アジアなかでも、日本

669 W. R. Lambuth, *Side Lights on the Orient*, pp.79-80.
670 『ランバス資料』、84頁参照。
671 同書、90頁参照。
672 ちなみに、ランバスは1917年、南メソヂスト監督教会の宣教機関誌である*the Missionary Voice*アフリカに宣教の当時、出会ったある女性に関する文を寄稿した。ここで彼女の一生を紹介し、アフリカの迷信的であり、非文明的な要素を批判した。結局、キリスト教によって、文明化の道に入ることができたと言

に関しては一方的に西洋が優位、東洋は劣等という見方ではなく、東洋の技術と文物も肯定的な部分は十分に認める立場を取ったのである。

⑤強い宗教性と神道と仏教に代表される伝統宗教

ランバスが理解した日本の伝統的な宗教はどうだったであろうか。何よりも彼は日本のどこに行っても日本人の生活の中で、容易に宗教的側面を見ることができた。日本人の村の生活や祭事は宗教と密接に結び付いており[673]、特に、神棚の存在は日本人の生活の中で、宗教的性格を表す重要な要素でもあった[674]。それほど、日本人は生活の全般に至るまで、宗教性を帯びていると分析した。偶然、瀬戸内海の北岸に位置した村で祭りを目撃することになったが、ランバスはこの祭りを見ながら、日本人がかなり熱狂的な宗教性を持っていると感じるようになった。特に、命を賭けるほどに危険な場面と瞬間が繰り返されることを見て、それにもかかわらず、このような祭りを楽しむのは熱狂的な宗教性がその中に内在しているためだと考えた。

一方、神棚が祭りの中心に位置付けられている現象を見ながら、日本の生活文化の底辺には神道という宗教が根を下ろしていることを知ることができた。実際に、ランバスは日本の創造神話とその伝説が、神道を基礎としていることを理解していたのである。彼は瀬戸内海に沿って、宣教旅行において立ち寄った淡路島で、島に関連した神話を聞いたことがある[675]。神道は、日本の創造神話と密接な関連を結び、そしてその文化は一般の人たちの生活根底で、自然に一つの文化として定着していたのである。しかし、ランバスが理解した日本の神道は、生活文化に根付くと共に、とりわけ日本人の愛国心を鼓吹する重要な役割を担当している宗教であった。彼は神道と愛国心の関係について、以下のように言及している。

「愛国心は神道の生んだ愛児である。」それは英雄的行為と自己犠牲が二千年以上にわたって成長してきたものであって、深い宗教心と密接に結びついている。「日露戦争に召集された何千何万の若者からは、故国に名誉の凱旋をしたいという希望の表明は聞かれなかったということである。一般に口に出る願いは、

及している。W. R. Lambuth, 'The Story of Malandola – An African Slave Girl Who Became a World Winner', *MV*, March, 1917, pp.83-84.また、同年5月、南メソヂスト監督教会女性宣教師会(The Woman's Missionary Council)主催で開催される講演会で、ランバスは彼の講演テーマを「アフリカの征服」(Conquest of Africa)と題したこともある。'How Shall We Conduct the May Program', *MV*, April, 1917, p.124.このような内容を見ると、ランバスはかなり未開の地域として見なしたアフリカとは異なり、日本が近代化を追い求める努力を肯定的に評価したと推測できる。

673 『ランバス資料』、91-92頁参照。

674 同書、92-93頁参照。

675 同書、86-87頁参照。

招魂社[676]にまつられるということだけであった。これは『魂を招く宮』という意味であって、天皇と祖国に身を捧げるすべての者の魂が集まると信じられている所である。」(注)乃木将軍夫妻は千九百十二年に、崩御せられた君主の御遺体が墓所にむけて出発されたその時に自害した。これは祖先崇拝の現われであって、そうすることによって、天皇にお仕えしていたその魂は、生前その肉体の中にあったときのように、死後も同様にお仕えするものと考えられている。[677]。

この記述は、1916年以降、すなわち日韓併合が結ばれてから、帝国主義的な性格が次第に強化されてきた時期に書かれたものであり、ランバスは神道が愛国心をさらに高めている役割を果たしていると感じたようである。特に、神道は日露戦争などを経験した日本人が国家のために積極的に戦争に参加する動機を与え、自己犠牲を祖先崇拝の概念に裏打ちされて天皇のための名誉ある死であるという考えを与えていると理解していた。ちなみに、ランバスが当時、国家神道と宗教神道としての概念を明確に区分して理解していたかどうかをここでは確認できないが、彼が理解していた神道は、日本人にとって国家に対する忠誠と全体主義的な一致を強調する国家神道的意味合いの強いものであった。

ランバスは、仏教も神道と同様に、日本人にとって社会に深く根を下ろしていると観察していた。但し、全体主義的な愛国心を強調する神道と比べ、相対的に仏教は民衆的な特徴を感じ取っていた。この点は、ランバスの東洋訪問記である*Side Lights on the Orient*の第9章(Benkei The Giant)を通じて確認することができる[678]。

ランバスが宣教局総主事として日本を訪問した1907年、当時には源義経という歴史の人物が多くの子どもたちに伝説的な英雄として尊敬されていた。その物語が印象的だったランバスは1907年、東洋訪問を終えた翌年、米国で出版した*Side Lights on the Orient*の1章を割き、西洋人たちに紹介するほどであった。ところが、この章を見ると、ランバスが仏教をいかに理解しているのかについて断片的ながら把握することができる。ちなみに、ここで源義経に関する物語を簡単に要約すれば、以下のようである。

源義経は、いわゆる「恐怖及び不名誉とはかけ離れた武士」(the Knight without Fear and without Reproach[679])であった。それほど源義経の勇気は凄く、彼の名前はよく知られていた。一方、源義経に劣らないほど多く尊敬を受け、一緒に言及された人物が弁慶であった。弁慶は夜ごと京都の五条の橋を通り過ぎる通行人と決闘し、999本の刀を収奪し、まもなく1,000本目を獲得する目前であった。いつものように、戦いを挑み、刀を奪おうとしたが、彼は敗北した。常に自身の力を信じていた弁慶は、刀1本を残して、自身の目標を達成でき

676 今日の靖国神社を意味する。
677 『ランバス資料』、109-110頁。
678 W. R. Lambuth, *Side Lights on the Orient*, pp.69-75.
679 *Ibid*, p.69.

なかったのである。ところで、彼は敗北を認め、むしろ自身を屈服させたその男に一生服従することになった。この時、弁慶を屈服させた人物がまさに源義経であった。以降、弁慶は源義経を主君として仕えながら、誰にもまさる献身を見せ、日本の歴史上人気ある人物となったのである。

ところが、ここで注目すべき点は、ランバスが彼の著書で紹介している弁慶の物語には仏教的な特性が強く表れているということである。源義経と弁慶が鐘を鋳造するために、さすらいの僧侶に偽装した物語[680]や、弁慶が僧侶に偽装して琵琶湖付近に生活しながら、近くに三井寺というお寺を設立したこと、そしてこれと関連していわゆる弁慶の釜の物語[681]、インドにある池から持って来た聖水だと伝えられている「閼伽井」という井戸の物語[682]などは、仏教的な色彩が強く滲み出ている内容だと言える。これは以前から仏教が日本社会と文化の中に深く根ざしていたこと、ランバスが日本を訪問したその当時にも一般の民衆の間で広い影響力を発揮していたことを示すものである。したがって弁慶の話を西洋人たちに紹介しようとしたランバスが考えるに、日本で仏教の位置は文化の中に深く根を下ろしている生活宗教であった。日本の行く先々、彼の視野には仏教寺院がよく目にとまり[683]、道沿いにも仏像が置かれたのを見た[684]。そのように仏教が日本人の生活の中に、普遍的に根を下していることを確認することができたのである。

以上のことをまとめてみると、ランバスは日本の伝統的な宗教を大きく神道と仏教という二つの柱として理解していた。これは1910年代末、南メソヂスト監督教会が日本の伝統宗教に対して理解した枠と概ね似ている。当時、南メソヂスト監督教会では、日本へ宣教師たちを派遣する理由を列挙し、日本の伝統的な宗教として仏教と神道という二つをあげている[685]。このように、彼が属していた南メソヂスト監督教会において、日本宗教の理解と大きく反していなかったと言える。ところでランバスが、神仏習合など神道及び仏教に関連する日本の宗教的な特色を詳細に把握していたのかは確認できない。

一方、ランバスは他宗教に対して、それほど排他的ではなかった。これはおそらく彼が宣教師の家庭で育ち、自分も宣教地(中国)で生まれ、幼年時代を過ごしたので、異国文化を体験して来たからだと推測される。それ故、ランバスは東アジアに関わって以来、他宗教に攻撃的・排他的だった一部の西洋宣教師たちと違い、仏教寺院を見学するなど、相対的に寛容

680 *Ibid*, p.70.
681 *Ibid*, pp.71-72.
682 *Ibid*, p.72.
683 *Ibid*, p.83.
684 *Ibid*, p.88.
685 H. W. Myers, 'Why Send missionaries to Japan?', *MV*, January, 1918, p.20.

な態度を持つことができた[686]。彼が仏教的な背景を持つ弁慶の物語を批判的な仕方ではなく、文化的なレベルで本国に紹介することができたことも、他宗教に対する寛容性を持っていたこの表れであった。したがって彼が、弁慶の伝説が込められている琵琶湖近くに位置した寺院を躊躇なく訪問することもできた。もちろん、他宗教に対する寛容性がキリスト教の宣教無用論を意味することではない。これと関連する詳細は彼の宣教理解の項目で取り扱うことにする。

⑥オリエンタリズムの観点から見た帝国主義

ランバスが観察した日本の伝統的な宗教は、神道と仏教という二つの柱で支えられていた。社会の底流には仏教と神道が色濃く反映しており、地域ごとにこの二つの宗教に関連する特色が目立っていた。時折、彼は他宗教を尋ね、東洋的の格言にも一定の知識と理解を持っていた[687]。ランバスが、西洋人として東洋的な伝統に関して寛容な精神と合理的な理解とを示していた人物と言える。

一方、彼が観察した日本の政治的な状況理解はどうだったであろうか。ちなみに、彼が天皇制を中心にしている日本の政治体系に対して強く批判した記録は見出せない。むしろ日本の天皇制が日本社会の一致と結束において、肯定的な影響を及ぼしていると見なしていた。ランバスは日露戦争の最後の激戦地だった中国の旅順を訪問し、そこに駐屯している日本人の大佐と対話を交わしている[688]。その対話の中で、日本軍が勝利することができた特徴的な面を二つ見出すが、それは階級による徹底した服従、そして天皇に対する忠誠であった。このような日本軍の特徴は、日本社会の典型的な部分であった。とりわけ、天皇に対する忠誠は宗教的に神道を意味し、これはまさに日本人の愛国心と呼応するものであった[689]。したがってこのような体系が不文律のようになっていたので、日本がロシアという列強との戦争でも結局、勝利することができたと考えた。換言すると、ランバスは天皇制を取っている日本の政治システムに関して、大体肯定的な観点を持っていたと考えられる[690]。

また、1907年に日本を訪問した時、駐日米国大使(L. E. Wright)が皇室の中で、大使の職

686 W. R. Lambuth, *Side Lights on the Orient*, p.73.
687 *Ibid*, p.80.
688 'Anniversary Sermon', *MV*, July, 1913, p.398-399.
689 『ランバス資料』、109-110頁参照。
690 南メソヂスト監督教会に属していた日本の他の宣教師たちも日本の天皇システムをめぐって、それほど否定的な観点を持っていなかったようである。一例で1921年10月5日、東京にて第8回万国日曜学校大会(World Sunday School Convention)が開催された当時、この行事を本国の信徒たちに紹介したヒューズ(H. L. Hughes)は、文の冒頭で「200万人が居住する大きな異邦人の国である天皇の都市」だと描写した。H. L. Hughes, 'Nation-wide Welcome to Sunday School Convention', *MV*, January, 1921, p.7.

務を務めてきたという事実を知ることになり、当時、天皇をはじめとする日本政府が日米関係において、友好的な関係を持続していると考えたようである[691]。彼は日米関係のみならず、キリスト教に対する天皇と日本政府の態度も協力的な姿勢が見られると考えた。もちろん、彼が直接、天皇と謁見し、話し合ったことはないが、日本政府の官僚などを通じて受け取った天皇のメッセージは、そのようなランバスの認識をより確かなものとしたと言える。一例で、1907年4月の世界基督学生連盟大会(World Student Christian Federation)が東京にて開催された時、これを祝うために、朝鮮統監である伊藤博文が天皇の代理で電報を送ったことがあった。この電報の受信者はこの大会の議長団として日本メソヂスト教会の監督だった本多庸一であった。当時、伊藤博文の電報が印象的であったのか、ランバスは電報の全文を添付し、続いて以下のように記述している[692]。

極東の最も偉大な政治家であり、四分の一世紀以上も天皇の主要な助言者であった人から、メソジスト教会の牧師で会議の議長団の一人でもあったY・本多博士宛に発送されたこの電報は、多額の贈り物を伴ったことでもあり非常に重要である。これらは戦争終結時に同様の贈り物が天皇からYMCAに贈られた先例があり、このことはこの国と隣接する大陸で、多数の人達にとって新時代が始まったという確信を筆者に与えた。この人達は信仰を告白したクリスチャンではないにしても、徳性の価値とキリスト教文明の力と影響を認めていることは疑わない[693]。

これ以外にも、当時、南満州鉄道株式会社[694]の総裁である後藤新平がこの大会長のフリーズ(Carl Fries)博士など参加者たち多数を招待し、歓待したことなども、ランバスにはかなり印象的に思い出に残った[695]。そして同年、救世軍の創立者であるブース(W. Booth)司令官が日本を訪問した時、彼が天皇に会い、キリスト教の宣教事業の意義を認められたという事実に非常に重要な価値を付与している[696]。

これを見ると、天皇と伊藤博文をはじめ日本政府が、本人たちはキリスト者ではないにもかかわらず、キリスト教に関して概ね好意的な態度を表していたというランバスの認識を見てとれる。したがってランバスはあえて日本の天皇制という政治システムと帝国主義的な性格が強く表れる日本政府に対して、否定的な立場と態度を持ってはいなかったのである。むしろ日本の政治システムが日本国内のキリスト教宣教に肯定的な効果で作用できる

691 『ランバス資料』、80頁参照。
692 同書、72-73頁参照。
693 同書、73頁。
694 南満州鉄道株式会社とは日本軍が満州を円滑に支配するために、1906年から1945まで運営した鉄道運送企業であった。それ故、当時、日本の帝国主義的な性格を明確に表した体表的な企業の中の一つであった。インターネットのウェブサイトhttps://ja.wikipedia.org/wiki/南満州鉄道参照。
695 『ランバス資料』、73-79頁参照。
696 同書、70頁参照。

と考えた。

ところで、これを日韓関係に焦点を絞って見る時、ランバスは日本の朝鮮支配に関して、確実に確固とした立場を表してないことが推測できる[697]。実際にランバスは場合によって、日本の朝鮮支配を肯定的に考える時もある。時折日本で、朝鮮人を重要な行政上の位置に登用したりもするという噂を聞いたことが、日本の朝鮮支配に関してある程度黙認した理由にもなった[698]。

しかし、ランバスが西欧的な文物と技術の観点から見ると、日本の朝鮮支配は肯定的な要素が非常に多いと見なした。直接、朝鮮を訪ね、目撃した朝鮮の状況は、すでに西欧的な様式を受け入れた日本によってかなり改善されている姿だったからである[699]。もちろん、アジアを商業的なことと関連し、いわゆる支配下に置こうとする日本の計画だということをランバスは十分に認知していた[700]。それにもかかわらず、このようなところを黙認あるいは暗黙的に同意したのは、ランバスもオリエンタリズムの枠組みの中で縛られている西洋人だったからである。それ故、彼はこのような点を念頭において、帝国主義の列強として次第にアジアの各地に進出していた日本を認めているのである。

しかし、日韓関係に関する彼の立場はここに留まらない。他方ではオリエンタリズムの観点で全面的に束縛されるよりも、朝鮮人の立場に立っている態度を見せたりもした。そのため、このような観点に置かれる時、彼は朝鮮人に対する哀れみと慰めの感情を表したりもしている[701]。

以上のようなことをまとめてみると、すでに西欧文物を積極的に導入し、20世紀初頭には列強に位置した日本を高く評価したことが分かる[702]。そして日米関係とキリスト教について、友好的な態度を表した日本の政治体制に対して、積極的ではなくても肯定的に見ていることを確認することができる。しかし、これは全面的に「西欧的な文物」を相対的に優越することに考える典型的なオリエンタリズムと連結される時に限られた態度であった。

(2)宣教理解

①開拓宣教師としての責任感

697 日韓関係に関するランバスの理解は彼の朝鮮理解をめぐるところでより具体的に扱う。
698 『ランバス資料(2)』、32頁参照。
699 『ランバス資料』、113-114頁参照。
700 同書、83頁参照。
701 同書、86、114頁参照。
702 同書、102頁参照。

ランバスは、当時全世界に派遣された南メソヂスト監督教会所属宣教師たち、とりわけ在日宣教師たちから尊敬と信頼を受けていた[703]。有名な宣教師の家系の出身で、宣教地で生まれ育った独特の履歴は、南メソヂスト監督教会の中で、宣教と関連する彼の立場を形成する上で役立っている。さらに、日本の開拓宣教師というタイトルは、日本宣教師たちに助言者として信頼感を与えるに十分であった。言い換えれば、このようなランバスの位置は、日本の教会に一貫して影響力を及ぼすことができたという意味である。それほど日本宣教を開拓した[704]という彼の経歴は、大きな意味があった。

J・W・ランバス夫妻、そしてデュクス夫妻と共に南メソヂスト監督教会の日本開拓宣教師として派遣されたランバスは、初代日本宣教部の総理としての職務を与えられることになる。ランバスは、1886年南メソヂスト監督教会において日本宣教の展開と共に指導者として活動しはじめた[705]。したがって、それ以降に日本に派遣された宣教師たちから、日本の宣教事業を計画し、推進するのに多様な面において多くの尊敬と信頼を受けたのは容易に推測できる。

例えば、ランバスが東洋を担当する監督として任命され、日本を訪問した時、軽井沢にて開催された南メソヂスト監督教会の所属宣教師たちの年次会議に参加した際、講演などを通じて日本宣教師たちを励まし、大きな慰労と力を与えた。それほど日本の開拓宣教師としてランバスが持っていた幅広い知恵と経験は、後輩宣教師たちに貴重な助言となることができた[706]。

さらに、ランバス自身にとっても、開拓宣教師として日本宣教に対する愛着が誰より強かったと言える。実際にランバス自身も、日本の開拓宣教師という自覚と誇りを持っていた[707]。

これは日本宣教をめぐって、彼の責任感と関連して理解できる特色だと言える。このような責任感が、まさに宣教地としての日本へより多くの宣教師が必要だという彼の積極的な訴えに繋がった[708]。特に、人的資源が一層補強されることができるように、本国教会の支援を要請した[709]。このように、彼が日本宣教師として初期に重点を置いた宣教の一つは、まさに人材の補充であった。キリストが弟子たちを向け「収穫は多いが働き手が少ない」(マタイによる福音書9:37)と言及した状況と変わらない。それほど日本の宣教現場は非常に広い

---

703 Maud Bonnell, 'Lambuth Memorial Bible School, Kobe', *ARMECS*, 1908, p.73.
704 R. B. Eleazer, 'A Handful of Facts about Japan', *MV*, January, 1918, p.14.
705 'A Silver Anniversary', *MV*, January, 1912, p.8.
706 J. C. C. Newton, 'Japan Mission Has Notable Meeting', *MV*, November, 1919, p.332.
707 W. R. Lambuth, ''Pioneering the Gospel', *MV*, September, 1920, p.277.
708 『ランバス資料』、60-61頁参照。
709 W. R. Lambuth, 'Reports of Missionaries in Hiroshima District', *MAMJMMECS*, 1889, p.13.

が、この現場で活動できる人材が十分ではなかった状況だったのである。

また、彼は日本宣教師職を辞任した以降にも日本に対する関心を継続して持っていた。とりわけ、1919年から南メソヂスト監督教会における東洋担当の監督として任務を与えられた以降、毎年日本を訪問したが、なるべく日本教会に対する支援が円滑に成し遂げられるように、積極的な助けを与えようとした。その中の一つが、米国の教会から実質的な援助が行われるように、両国教会の間を繋ぐ架け橋の役割であった。1886年に創立された神戸の南メソヂスト監督教会の教会(現在の神戸栄光教会)の建築をめぐる内容が代表的な例である[710]。

両国教会を繋ぐ架け橋の役割だけではなく、可能な限り日本の行政官僚及び政治家たちに会い、効率的に宣教が行われるように努力したこともあった。上述した神戸の南メソヂスト監督教会の礼拝堂建築をめぐって、彼は相応しい敷地を確保するために、当時兵庫県知事を尋ね、積極的な協力を要請したこともあった[711]。翌年の1920年には、九州大分を訪問したが、そこで彼は南メソヂスト監督教会の社会事業の施設である愛隣館(the Loving Neighbor Institute)の奉献式を執り行うために、参加したことがあった[712]。ランバス自身も当時、奉献式に参加したエピソードを*the Missionary Voice*に掲載するほど、非常に意味ある時間だと考えていた[713]。ところで、愛隣館の建物を建てようとした計画は、1907年に彼が宣教局総主事としてしばらく大分地域を訪問した時、企画されたものであった。ランバスは13年余りの長い時間が過ぎ、実現されたにもかかわらず、その場所を忘れず、再び訪問した。これは彼が東洋担当の監督という義務もあたったが、ここに加え、彼が元々持っていた日本に対する宣教的な関心が継続していたことを示していると言えるだろう。

以上のように、彼は南メソヂスト監督教会において、最初の日本の開拓宣教師としての誇りを持っており、それを継続的に自覚していた。そのような自覚のもとで彼の日本宣教は彼の関心を離れることはなかったのである。

②教育宣教

マタイによる福音書4章23節には「イエスはガリラヤ中を回って、諸会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、また、民衆のありとあらゆる病気や患いをいやされた」と記され、イエス・

710 『ランバス資料』、60-61頁参照。
711 同書、39頁参照。
712 I. M. Worth, 'The Completion and Dedication of the Oita plant', *MV*, December, 1920, p.376.
713 W. R. Lambuth, 'Mayor of Oita at Dedication of the Loving Neighbor Institute', *MV*, December, 1920, p.377.

キリストの宣教活動が要約されている。これは、「教育」(会堂で教え、educational mission)、「福音伝道」(御国の福音を宣べ伝え、evangelistic mission)、「医療」(あらゆる病気や患いをいやされた、medical mission)など、三つの宣教要素を指すと言える。宣教学者たちは、この箇所を典拠として、上の三つの要素を宣教の主要な方法論だと言及する。一般的に、19世紀以降、西欧の教会における東アジアの宣教方法も、教会と学校、そして病院という三つ要素を中心として行われたと言える。

一方、ランバスも長い期間宣教師として活動しながら、このような三つの要素を大事に考えた。しかし、時期と場所によって、ランバスが重点をおく要素は異なっていた。元々、ランバスは厳密にみると、医療宣教師として活動を開始し、この働きを通して自らの使命を成し遂げようとした。したがって、彼がはじめに宣教師として派遣された中国の上海と蘇州、そして北京において病院などを中心に活動したのは当然のことであった。しかし中国に続き、遣わされた日本でも彼が医療宣教を行うことは容易ではなかった。ちなみに、1919年に米国の南メソヂスト監督教会の宣教百年記念事業会で発行した*Missionary Centenary 1819-1919 World Survey*を見ると、基本的に南メソヂスト監督教会が日本の医療宣教をめぐって、その性格をいかに規定しているのかよく把握できる。その内容から、当時に南メソヂスト監督教会が日本での宣教において医療宣教を重要に考えていないことが分かる[714]。むしろ、医療宣教よりも教育宣教に相対的に重点を置いて行っていた[715]。すでに、日本は明治維新以降、近代的な医療技術の導入と適用を国家の主導のもとで行っていたからである。したがって、南メソヂスト監督教会があえて医療宣教を重要な日本宣教の政策として設定しておく必要がなかったのである。さらに、ランバスも教育宣教を強調し、尽力しようとした。ランバスにとって日本は医療よりも教育宣教に重点をおくべきであると考えたので、彼は自然に日本の教育状況を考慮し、それに相応しい宣教的な方向を展開していった。

日本宣教の初期に、ランバスが本国に送った宣教報告を見ると、教育宣教に重点を置こうとしたことが容易に分かる。彼は広島部会(Hiroshima District)の主部長老(Presiding Elder)を務めていた1889年に、広島女学校が恒久的に存続する可能性を持ち、再び新しく出発しようとする過程を報告した[716]。また、松山でも学校が運営されているが、これからこの学校が教会と相互緊密な関わりを結んで、肯定的な宣教の結果を生み出すだろうと展望している。これはまさに教育宣教を通じ、日本の宣教がより拡張できるだろうというランバ

---

[714] *Missionary Centenary 1819-1919 World Survey*, p.42.

[715] *Missionary Centenary 1819-1919 World Survey*の一般的な調査(General Survey)によると、四番目の項目に「まずまず拡張される現場の中で、福音を伝え、キリスト教系の学校の要求を提供するために、宣教部(missionary body)を補強すること」だと記述していた。これは南メソヂスト監督教会が日本宣教に於いて、教育宣教に重点を置いていたという証拠である。*Ibid*, p.39.

[716] W. R. Lambuth, 'Reports of Missionaries in Hiroshima District', *MAMJMMECS*, 1889, p.13.

スの期待の表われだと言える。このように、日本では教育宣教を中心として行われるべきだというランバスの宣教理解が込められていることを推測できる。そして彼は、その理解に基づいて教育宣教に重点をおくために尽力した。翌年にもそれを物語る宣教報告がある[717]。地理的に、広島部会の主部長老として広島を中心に九州地域まで包括する範囲を統括することは簡単なことはなかった。さらに、彼は神戸の関西学院神学部で直接牧会者を養成することに力を注いだ。これを見ると、本人が日本において、いかに教育宣教に重点を置いていたかを見ることができる。

ランバスは、かなり広範囲な地域を統括していたので、直接各地を訪問することはなかなか難しかった。それにもかかわらず、ランバスが一方では安心できたのは、彼が設立し、養成した学校の神学生たちが各地に入り、積極的に活動していたからである[718]。日本で教育宣教に重点を置いている状況が、肯定的な影響を及ぼしている一つの例であった。したがってランバスは、日本ではもっと教育宣教に関心を持ち、力を傾けようとしたのである。当時、大分を中心に活動した同僚宣教師であるウェインライト夫婦が、日本でなぜ教育宣教に重点をおかなければならないのか、ランバスに教示したことも大きな理由になった。すなわち、大分地域で、信仰共同体の構成員たちの大多数が学生だったということである。そしてその学生たちを通じ、家族に福音が宣べ伝えられる一連の過程を、ランバスは同僚宣教師の報告をよって知らされていた。

ランバスは、より積極的に日本宣教が教育を中心に行われるように尽力した。このような彼の観点が投影され、実現された代表的な例が、まさに神戸の関西学院であった。関西学院は、彼が敷地を確保する過程から設立するまで、かなり力を注いだところであった[719]。1907年、日本メソヂスト教会が合同し、設立される前までの歴史をまとめている『合同メソヂスト教会小誌』は、これめぐって以下のように叙述している。

[日本の]南メソヂスト監督教會の他の特色は、基督教々育のため、多數の人物を用る、多額の資金を投ずる事である。ダブリユ、アル、ランバス博士の創立したる信仰と攝理の子なる關西學院の他所の購はれたる際には、手許に一弗の金なく、又差當り何の目當もなかつたのである。然るにその學院が今日では、中學、神學、文學、および商業の四門部になつて居る。學院は常に、德育と智育に就きて、高尚な理想を懷いて居る[720]。

---

717 W. R. Lambuth, 'Reports of Missionaries, Hiroshma District' *MAMJMMECS*, 1890, p.12.
718 *Ibid*, p.13.
719 'The Kwansei Gakuin - New Theological College', *MV*, January, 1912, p.51; J. C. C. Newton, 'Bishop Lambuth and Kwansei Gakuin', *MV*, November, 1914, p.622; J. C. C. Newton, 'Kwansei Gakuin: Where and What', *MV*, Feburary, 1915, p.74.
720 タザリユ・イー・タウソン、「南メソヂスト監督教會の事業」、山鹿旗之進 編著、前掲書、32-33頁。

以上の言及のように、南メソヂスト監督教会は日本宣教において教育宣教に重点を置いたが、ランバスが設立した関西学院はその中心に位置づけられていた。このようにランバスの望み通り、関西学院は南メソヂスト監督教会の日本宣教の初期に、肯定的な影響をもたらした。外的な要素のみならず、内的な要素の変化が関西学院の中で始まったのである[721]。それは学内の霊的覚醒であった[722]。ランバスは、関西学院で宣教師と日本人学生たちが一緒に経験した霊的覚醒は、学校の枠を乗り越え、日本全域に及ぼしかねないという期待感を持っていたのである。特に、神学部から輩出される教役者は将来、日本の福音伝道活動を導いて行く希望になるとランバスは考えた。

また、この霊的覚醒は外形的な要素に限らず、学生たちの内面を変化させる原動力になることができると見て、大きな期待を持っていた。学生たちの間で起きた霊的覚醒は先輩と後輩をお互いに会わせるきっかけになり、このように相互に伝えられた霊的覚醒は拡張され、将来に大きな信仰復興の開始になる可能性があるという同僚宣教師の報告を聞いた[723]。ランバスの期待通り、関西学院の出身たちは日本各地で伝道活動に積極的に参加し、南メソヂスト監督教会の宣教領域を広げた。また、日本を越え、海外でも関西学院出身たちは目覚しい活躍を果たしていった。1913年、南メソヂスト監督教会の宣教機関紙である*the Missionary Voice*のある記事に「米太平洋沿岸で活動している(関西学院出身)彼らは皆ここの沿岸の日本人たちの間で、能力の人であり、影響力がある」[724]と記述されているほど、関西学院を通じて教育宣教の肯定的な効果をランバスが確認することができた。

さらに、関西学院は1915年当時、南メソヂスト監督教会の全世界の宣教地で最も大きな規模の教育機関と評価されるほど発展した[725]。それ故、南メソヂスト監督教会宣教局をはじめ、在日宣教師たちの中でも関西学院は非常に高く評価されたのである。ランバスが日本で重点を置いた教育宣教が確実な結果をもたらしたからである。また、日本人たちの間でもランバスを尊敬する雰囲気が培われ、とりわけ、関西学院から輩出された人材たちの中で、そのような雰囲気が強かった[726]。このように、ランバスが日本で展開した教育宣教、その中でも関西学院を通じた宣教の結果はかなり効果的であった。その卒業生たちを通し、日本宣教が続けて発展できる方向で行われてきたからであった。代表的な例が鵜崎庚午郎であった。彼はランバスによる感化で洗礼を受け、関西学院神学部の第1期卒業生として輩出され、後日には日本メソヂスト教会の第3代監督として選出され、日本の教会を導いていく指導者

---

721 『ランバス資料』、100頁参照。
722 同書、100頁参照。
723 同書、100-101頁参照。
724 J. C. C. Newton, 'Kwansei Gakuin: Where and What', *MV*, Feburary, 1915, p.74.
725 J. C. C. Newton, 'Bishop Lambuth and Kwansei Gakuin', *MV*, November, 1914, p.622.
726 J. C. C. Newton, 'Japan mission has notable meeting', *MV*, November, 1919, p.332.

となった[727]。このように、ランバスは日本宣教において、教育を大事に考え、その中心には関西学院があった。

さらに関西学院以外にも、ランバスが南メソヂスト監督教会の日本宣教において重要視した教育機関は広島女学院であった。1886年に設立されたこの学校は、南メソヂスト監督教会が日本のキリスト教女子教育のために尽力した機関であった。ランバスもこの学校の重要性をよく知っていた[728]。ちなみに、広島女学院はゲインズ(N. B. Gaines)という若い女性宣教師が初代院長としての務めながら、日本の女性のための重要な機関として位置づけられていた[729]。それと共に、ランバスも広島女学院の初期設立から、その発展過程を詳しく知っていた[730]。ランバス一家がこの学校の初期設立に当たって、一定の助力をしたからであった[731]。このように、彼が日本の教育宣教に関して言及する時、関西学院と共に広島女学院は彼の主要な関心を占めていた教育機関であった。したがって両教育機関が将来、日本の優秀な教育機関として発展できるという手ごたえを持っていた。

上述ように、ランバスは南メソヂスト監督教会の日本宣教において、一部の教育機関が将来には大学という高等教育機関に発展することを希望し、期待した[732]。このように、彼が日本宣教で根本的に期待するのは、将来日本がキリスト教という土台の上に基盤が構築され、発展するために、教育宣教が最も重要な役割を果たすことだという確信があったからであった。それ故、日本国内で南メソヂスト監督教会が運営するミッション系の学校が発展するために、十分な経済的支援がなされなければならないと主張した。

高等教育機関以外にも、彼は幼稚園をはじめとするキリスト教による初等教育も日本で効果的な宣教の結果をもたらすと信じた。九州の大分地域の場合がその代表的な例であった。1920年、東洋担当の監督として日本を訪問した時、南メソヂスト監督教会の社会事業施設である愛隣館の奉献式を執り行うために、参加したことがあった。ここでは幼稚園も共に運営されていたが、ランバスはキリスト教の精神で運営される幼稚園を通じ、幼児教育が大人たちに肯定的な影響を与えていることを直接目撃した[733]。すなわち、それは伝統とい

---

727 H. L. Hughes, 'Nation-wide Welcome to Sunday School Convention', *MV*, January, 1921, p.7;「鵜崎庚午郎」、『関西学院事典』(増補改訂版)、25頁参照。

728 『ランバス資料』、98-99頁参照。

729 小田切快三、『ゲーンズ先生物語』、学校法人広島女学院、1966、序参照。

730 ランバスはこの学校の初期設立過程に関して、南メソヂスト監督教会の宣教機関誌である*the Missionary Voice*の1920年9月号に、日本の南メソヂスト監督教会の初代伝道者の中に一人である砂本貞吉を米国の教会に紹介しながら、広島女学院の初期設立過程について簡略に扱った。W. R. Lambuth, 'Pioneering the Gospel', *MV*, September, 1920, p.278.

731 'The Biggest Girl's School in Methodism', *MV*, Feburary, 1921, p.43；小田切快三、前掲書、47-52頁参照。

732 『ランバス資料』、98-99頁参照。

733 W. R. Lambuth, 'Mayor of Oita at Dedication of the Loving neighbor Institute', *MV*, December, 1920, p.377.

う過去に拘るよりも、未来志向的な期待感を与えてくれた。また、ここの幼児教育を通じ、一人一人が人格として尊重されている姿もランバスがここを訪問し、確認した事実であった。しかも当時、愛隣館の奉献式に参加し、祝辞をした大分市長が、宣教師たちが運営する教育機関を通じ、肯定的な結果を得ていると語ったこと[734]も、ランバスが日本において教育宣教の重要性をより確信した理由になったのである。このように、ランバスは当時、南メソヂスト監督教会の日本宣教において教育宣教を重視するという大きな宣教政策を確信をもって堅持していた。そしてこのように日本という宣教地で教育を強調したランバスの宣教認識は、後日彼が本国でも有用に活用する宣教的な方法論にもなった。とりわけ大学及び神学校などで神学生や宣教師候補生などを指導するために、彼は講義に招待されたりもしたのである[735]。その際、ランバスは豊かな宣教経験を後輩たちに伝え、教育宣教に重点を置いた日本での宣教方法とその理解は、後日、本国で積極的に活用されたのである。

③聖書中心的な宣教

ランバスは日本宣教と関連し、教育に大きな関心を持ち、力を注いだ。関西学院を始め、各地に設立された南メソヂスト監督教会系の教育機関が円滑な宣教の動力になるように支援と協力を惜しまなかった。それほど、ランバスは日本宣教において、教育が占める重要性を強く認識していたということである。

ところが、その教育機関、すなわちミッションスクールで行われる教育の中心には、聖書が位置しなければならないと彼は考えた。近代化と関連する知識習得も、ミッションスクールの重要な宣教的役割だと言えるが、何よりもこれと共に聖書教育が先行しなければならないと考えたのである。これはミッションスクールの設立目的がキリスト者を育成することで、聖書教育の基盤の上に近代文物と関連する知識習得が行われなければならないということであった。聖書を中心とする信仰教育を土台にしないで行われる教育は、存在理由を失うことと同様だと見なした。そして何よりも聖書中心的な教育が、キリスト教系教育機関の内実をさらに堅固にすると考えた。これは関西学院で起きた学内の信仰復興を通じ、聖書教育の重要性をもう一度悟ることになった。ランバスがこの話を1915年から1920年頃まで、

---

[734] *Ibid*, p.377.

[735] 一番代表的なことは彼が1914年、アフリカの宣教旅行を終えた後、本国に帰り、母校であるヴァンダービルト大学(Vanderbilt University)の招待で宣教講演をした。当時、彼が講演した内容をまとめ、1915年に単行本で出版したが、これがまさに*Winning the World for Christ*である。W. R. Lambuth, *Winning the World for Christ*, New York: Fleming H. Revell Company, 1915.その他にも、彼はエモリー大学(Emory University)などで宣教をテーマとして講演したこともある。'Mission at Emory University', *MV*, Feburary, 1916, p.53; 'Scarritt Bible and Training School', *MV*, May, 1921, p.155; 'Missions in Emory University', *MV*, June, 1921, p.165参照。

関西学院で務めていた南メソヂスト監督教会の宣教師であるデイビス(W. A. Davis)[736]から聞き、以下のように記録して残した。

デイビスによると、1920年に関西学院で驚くべき信仰復興が起きたという[737]。当時、普通学部で務めていた田中義弘は、新入生が入学すると、彼らを上級生と相互親密な交わりと信仰的な養育が行われるように誘導した。ところで、そのような相互交わりと関わりが大きな信仰復興を起きたのである。このような驚くべき信仰復興に関心を傾けたデイビスは、そのような根本的な原動力は何なのか考え、聖書研究だという結論に達することになった。このような報告を聞いたランバスは、改めて日本で教育宣教の重要性をさらに深く確信することができ、その中心には聖書があるということも同時に確認できたのである。したがって聖書中心的な教育は、ミッションスクールの設立根幹になり、教育宣教が日本でもっと成熟し、発展することができる土台を提供すると考えたのである。

実際に、ランバスが理解していた枠で南メソヂスト監督教会の日本宣教の開始は、聖書と密接に結ばれていた[738]。彼は1915年、自身の母校であるヴァンダービルト大学で、宣教をめぐって数回にわたる講義を頼まれたが、この時初期の日本宣教に関して次のように言及している。南メソヂスト監督教会の日本宣教において、最初の日本人協力者[739]である砂本貞吉がまだ信仰的に未熟で、米国に居住していた時、聖書研究を通じて確固たるキリスト教の信仰を持つことができたと表明している[740]。ちなみに、ランバスと砂本貞吉は、日本の初期宣教時代から宣教師と現地教会の指導者として親密な友情を交わした間柄であった。

ここで5年間一生懸命働いた砂本は暇があれば日本語聖書を読むことによって信仰的に豊かな経験をするようになる[741]。しかし基本的な信仰訓練がなかったので、聖書を読む途中理解できない箇所もかなり多かった。そのたびに彼は諦めず、より忍耐をもって聖書研究に取り組んだ。聖書をより深く理解しようとした情熱で、夜間学校まで通っており、また英語と日本語聖書を対照しながら、その意味を把握するのにかなりの力を注いだ。聖書を探求しようとしていた熱情と共に聖書に直接接する姿勢も尊重しようとした。結局、深い聖書の意味を把握しようとした彼の情熱と姿勢は、信仰の感動を体験できる確固とした機会を提供くれた。それはいわゆるメソヂストでいう再生(rebirth)の体験であった。

ランバスは日本の開拓宣教師として、そして総理の職責を務めながら、砂本貞吉と巡回宣教を通っていた時、上記の個人的な証言を本人から直接聞くことができた。これは日本宣教

---

736 「Davis [デーヴィス]、William Albert」、『来日メソジスト宣教師事典』、63-64頁参照。
737 『ランバス資料』、101頁参照。
738 W. R. Lambuth, *Winning the World for Christ*, p.235 ;『キリストに従う道』、172頁参照。
739 W. R. Lambuth, 'Reminiscences of Early Missionary Work in Japan', *MV*, January, 1918, p.19.
740 W. R. Lambuth, *Winning the World for Christ*, p.235 ;『キリストに従う道』、172頁参照。
741 W. R. Lambuth, 'Pioneering the Gospel', *MV*, September, 1920, pp.277-278.

において、聖書が占めるその重要性と肯定的な効果を確認することができる一例だと言える。ところで、ランバスが聞いて知っていた砂本貞吉の聖書を通じた再生の体験は、日本でまた別の実を結ぶことになる。砂本貞吉は、母親を含め家族にキリスト教の福音を宣べ伝えるための目的を持ち、神戸から故郷である広島へ向かった。故郷で母親を含めた家族にキリスト教の内容を教えると、彼らは大きな関心を表した。ところが、このような関心は、砂本貞吉の家族に限られたことではなく、周辺の人々にまで広がった。彼の要請でJ・W・ランバスとデュクスなど、南メソヂスト監督教会の日本開拓宣教師たちが広島に到着した時には、すでに砂本の兄が営んでいた工場の倉庫で100人前後の村人たちが、聖書研究を自主的に行っていた[742]。そしてその中で、信仰を告白し、洗礼まで受けた支援者も出た。宣教師が到着し、組織的に具体的な聖書研究が続くようになった。ランバスは当時の状況を約20年が過ぎた1907年に回顧し、以下のように記録している。

[この町の人々は]宣教師の到着は大喜びで迎えられた。上述の事情が詳しく話され、宣教師が驚いたほどの熱心さで、彼らは福音の理解にとりくみ始め、一章また一章と説き進むにつれて、一心に彼に耳をかたむけたのであった。彼が二度目に訪問してみると日本家屋の畳の上で行なわれていた礼拝の始まる前に、グループのリーダーが部屋の中央に進み出て、古い日本のしきたりで床に頭をつけて、うやうやしくお辞儀をし、次のような言葉を述べた[743]。

砂本貞吉の要請を受け、ここを訪問した父親と同僚宣教師であるデュークスの報告によると、この町の人々は聖書を情熱に探求しようと、一節ごとにその中に盛り込まれている意味を深く把握しようとする熱心な態度が見えたのである。このように、聖書に基づき、行われたこの会は次第にキリスト教の福音を理解し、信仰を受容する過程に繋がっていった。以降、宣教師たちが再び訪問した時、ここに日本的な礼拝堂が建てられ、日本式の丁寧な礼法を備え、礼拝を捧げる姿を見ることができた。

---

742 W. R. Lambuth, 'Pioneering the Gospel', *MV*, September, 1920, p.278.ちなみに、ランバスが同じ宣教機関誌である*the Missionary Voice*の1918年1月号に掲載した記事にも、これと類似した以下の内容が記されている。「ついに、彼[砂本貞吉]が日本へ帰って来た時、彼は仏教徒である彼の母親がキリスト教の信仰を受け入れ、改宗し、宣教師たちを助ける者になることができるという確信を持つようになった。彼は広島へ下がった。そこはまだ私たち[南メソヂスト監督教会 の日本宣教部]がまだ進出していなかった場所であった。砂本貞吉が広島へ下がった2週間後、私たちは彼の手紙を受けたが、手紙には次のように書かれていた。「私の母親が[福音に]関心を表しています。ここに来て、私を助けてください」それでJ・W・ランバスとデュクスは瀬戸内海の沿岸を運行する船に乗り、そこへ向かった。砂本は彼の兄弟が運営する店で、小さな聖書勉強会を開いていた。ところが、彼の兄弟は靴下製造者(stocking maker)であった。この会は彼の兄と義姉、母親，妹として構成されていた。宣教師がここに到着した時、彼が言った。「あなたがこの会を担当してください。私はこの聖書勉強会を周りの友たちに知らせます」一ヵ月も経っていない内に聖書勉強会は100人に増えた。W. R. Lambuth, 'Reminiscences of Early Missionary Work in Japan', *MV*, January, 1918, p.19.

743 『ランバス資料』、94頁。

このような話を聞いたランバスは、日本人が諸国よりも聖書に対する畏敬心と尊重する態度が相対的に高い方であることに気づいた。これはいわゆる、東洋の経典文化と関連し、言い換えれば、東洋文化圏である日本では聖書中心的な宣教が特別に効果的であるという意味である。実際に先に見たランバスの言及を見ると、聖書が、日本人がキリスト教に接する有効な手段であると言える。それほど、ランバスは聖書が日本宣教において、かなり効果的で、これによって、より豊かな宣教の結果を得ることができると考えた。

このように日本で聖書教育は諸国に比べても相対的に強調され、このような日本宣教の性格をよく把握していたランバスは聖書を中心とする教育的な部分をより強調しようとした。それ故、聖書中心的な宣教と関連する彼の理解は、ミッションスクールをはじめとする教育宣教に繋がり、その他にも教会と各機関事業による宣教でも聖書教育はその中心に置かれなければならないと考えた。

④使徒時代の教会

草創期、南メソヂスト監督教会の日本宣教は、神戸を中心として瀬戸内海沿いを西に移動しつつ進んだ。ランバスは、総理として各地域を巡回訪問しながら励ましたり、各地から宣教報告を聞き、宣教状況を検証していた。ところが、1890年頃、ランバスは大分で活動したウェインライト(S. H. Wainright)から宣教報告を聞いた。それは大分地域で起きた驚くべき霊的復興(spiritual revival)と関連することであった。日本メソヂスト教会が成立する以前までの歴史をまとめた『合同メソヂスト教会小誌』はこれをめぐって、「リバイバルの精神が甚だ旺んであつた。ウェインライト博士の傳道して居た大分に於る、聖靈の降臨は、その感化の範圍と、之が恒久の結果とに於て、最も著るきものがあつた。今日の傳道界に活動する重なる牧師は、このリバイバルの時に、傳道の召しを蒙つたのである」[744]と注目し、日本の南メソヂスト監督教会の宣教の歴史において、重要な出来事であると評価した。

ランバスも大分で同僚宣教師であるウェインライトの宣教報告を聞き、そこで起きた霊的復興に関心を示した[745]。とりわけ、ランバスはウェインライトの報告を、キリスト教に対する迫害の中で起きた霊的復興だったので、より貴重なものだと考えた。報告によると、4人が一部屋に集まり、協力して祈る姿はまるでペンテコステの出来事を想像させるものであった。すなわち、ランバスは東洋の礼法とキリスト教の聖霊運動が結ばれたいわゆる、土着的な信仰様態の姿を見出したのである。しかも、ウェインライトの宣教報告の中で言及さ

[744] タザリユ・イー・タウソン、「南メソヂスト監督教會の事業」、山鹿旗之進 編著、前掲書、26頁。
[745] 同書、26-28頁参照。

れる日本人兄弟(吉岡美國)は、使徒言行録7章の後半に記述されている初代教会のステファノを想起させる人物であった。実際に、ランバスは日本教会をまるで使徒たちが活動した初代教会のように言及しながら、日本宣教の大きな潜在力と可能性を思い、次のように記述している。

日本で最も興味深い事実の一つは下関市のメソヂスト教会の牧師である砂本貞吉に関することである。彼はエモンス(G. C. Emmons)牧師、ローリングス(E. H. Rawlings)牧師、.ハウエル嬢(Miss Mabel Howell)、そして私が我らを日本で朝鮮に連れて行く蒸気船を待っていたサンヨホテル(San-Yo Hotel)で呼んだ。灰色のひげを生やしている彼の外見は著しい目立ったし、全体的に見た時、東洋人のようであった。彼は我らを自身の家に招待しようとしたが、我らは彼の招待に応じた。彼の家はとても小さな日本の伝統家屋であった。そこで何人の子どもたちと彼の夫人に会うことができた。ところが、まもなくそこが彼の自宅の一部だという事実を気づくことになった。彼の家は一週間に三回礼拝を捧げる礼拝堂(chapel)で使われた。また、私的な仕事もできるとても立派な空間であった。彼は「家庭教会」(The church in thy house)と言ったが、その際いわゆる、使徒時代(the days of Apostle)が連想された[746]。

1920年、ランバスが、東洋担当の監督として同僚たちと一緒に東アジアを訪問し、日本を経由して朝鮮に渡ろうとする時に、ランバス一行は下関で砂本貞吉に会った。しばらく砂本貞吉の家に招かれ、彼の家を訪問することになったランバスは、そこが毎週三回も礼拝を捧げる礼拝堂も兼ねているという事実を聞き、使徒時代の教会を思い浮かべたのである。このようにランバスにとって、日本は使徒たちが旺盛な活動を展開した初代教会と類似していた。

そしてランバスが見た日本人伝道者砂本貞吉は、まるで新約聖書の使徒言行録に見られる使徒パウロのようであった[747]。瀬戸内海の北部海岸に沿って移動した彼の足跡は、使徒パウロがアンティオキアを出発し、小アジアを経てギリシャ、ローマに至る伝道旅行と対比できるものであった。砂本貞吉の情熱によって、行く先々で回心と宗教的覚醒が起こっていた。それ故、ランバスは砂本貞吉と同じ日本人伝道者の活動と共に、日本が新約時代の初代教会の性格を強く示していると感じ取ったのである。

但し、日本教会の宣教的な姿をまるで新約時代の初代教会のように感じたが、全国的に急速に拡張するにあたっては、限界があるように感じた。すなわち、各地域で起きた霊的復興と宣教的情熱が、地域と地域を繋げる拡張性を持ってなかったのである[748]。したがって一見すると、初代教会のように情熱的な伝道の情熱が見られた日本宣教が、局地的な限界に直

---

[746] W. R. Lambuth, 'Pioneering the Gospel', *MV*, September, 1920, p.277.
[747] *Ibid*, p.278.
[748] 『ランバス資料』、93頁参照。

面することになったと理解していた。しかし、ランバスはこれについて、反対に肯定的にも理解しようとした。換言すれば、まだ伝道の手が届かないところが多いというのは、挑戦できる機会が多く与えられているということであった。それ故、ランバスは「日本にはプロテスタントのキリスト者は六万ぐらいしかいないにしても、あちらこちらで曙光がさしつつあり、キリスト教文明はやがて国中に行きわたるであろうと思われる。まがう方なき証拠が幾つも見られるのである」[749]と言及しながら、日本宣教の可能性を継続して確信していたのである。

元山復興、平壌大復興、そして百万人救霊運動など、霊的覚醒及び伝道運動が南メソヂスト監督教会を皮切りに全国的に、教派を超えて展開された朝鮮の教会に比べ、日本における宣教は局地的性格をもつ限界があると見なした。それにもかかわらず、ランバスは日本で宣教を実現していくことにおいて、たとえ規模は小さいが、将来に無限の可能性を持っていると考えた。

⑤近代化の完結に繋がる宣教

南メソヂスト監督教会が宣教百年を記念するために組織した宣教百年記念事業会は、1919年に世界各地における宣教現場の状況を分析した*Missionary Centenary 1819-1919 World Survey*を刊行した。ところが、ここでは南メソヂスト監督教会の日本宣教をめぐって、自分たちに与えられた任務について七つの項目をあげている[750]。七つの内容の中、ここで注目しようとするのは第一の項目である。すなわち、「キリスト教文明の要素を熱望する人々に福音を宣べ伝える」[751]という内容である。ここで「キリスト教文明」とはまさに「キリスト教」と「文明あるいは文物」という二つの要素の結合を意味する。言い換えれば、「キリスト教」と「文明」という二つの要素が共に行われる宣教である。これがまさにランバスが日本で追い求めた宣教の基本的な方向であった。

ランバスは、1907年に南メソヂスト監督教会宣教局の主事として東アジアを訪問した当時、約50年前の日本の状況を思い出した[752]。そしてペリーが導いた艦隊の武力によって、不平等条約を結び、門戸を開放したことを日本にとって非常に有益な事件として評価した。それはまさに長い期間、外部と断絶された日本が「キリスト教文明」(a Christian civilization)と接することができる機会を持つようになったからである。言い換えれば、「西

[749] 同書、100頁。
[750] *Missionary Centenary 1819-1919 World Survey*, p.39.
[751] *Ibid*, p.39.
[752] W. R. Lambuth, *Side Lights on the Orient*, p.62.

洋の近代文物」(civilization)と「キリスト教文化」(Christianity)という二つの要素が共に日本に入り、肯定的な影響を及ぼすことができると考えたのであった。いわゆる、オリエンタリズム的な傾向にある典型的な西洋人宣教師の立場であった。

ランバスは日本宣教において、他宗教に対してあまり否定的な立場を取らなかったということは先述した。それは当時、ランバスにとって他宗教がキリスト教にあまり脅威的ではなかったということを意味する。同僚宣教師であるマイヤーズ(H. W. Myers)は、「日本になぜ宣教師たちを遣わさなければならないのか」という問いに関して、「日本は仏教と神道という自分たちのみの宗教を持っているが、これは高次元的であり、立派な道徳的な教えを持っている。私たちは時折、このような宗教がキリスト教よりもっと良いと話した。…しかし、配慮が深い日本人たちはこのような[他]宗教たちとその教えが、彼らの人生ですら彼らを救うための力を持っていないと躊躇なく認める」と見なしていた[753]。日本の伝統的宗教は、高次元的であり、立派な道徳的教えを持っているという誇りを持っており、キリスト教以上の高いレベルのものであるという自負もあるかもしれないが、日本の伝統的宗教は結局、救いという究極的な問題の前で限界をもっている。したがってこの問題を解決できることはキリスト教だけであり、ランバスの考えも上述のようなマイヤーズと同様であった[754]。

一方、ランバスは東洋の儒教思想に深く影響されていた1人の日本人と対話を交わした[755]。その対話は、キリスト教を紹介しようとしたランバスの意図通りには進まなかった。キリスト教に関して、いくら説明しようとしても、徹底して儒教思想を信奉していた相手は、巧妙にランバスの論理を反駁したのである。ところが、対話の焦点が父子関係に至ると、状況は少しずつ変わり始めた。もちろん、儒教の立場の相手は、いわゆる父子有親という五輪に固執し、譲歩しなかった。しかし、ランバスは儒教の立場を尊重しながらも儒教の足りなかったところ、すなわち、神の父性を強調しながら、儒教の短所をキリスト教によって満たすことができるということを強調した。つまり、伝統的宗教の足りなかった部分がキリスト教によって、補完できるという論理だったのである。これは相手の伝統的宗教を尊重しながらも、キリスト教の長所を説得することができた対話法であった。このような方法は、キリスト教と伝統的宗教の間の対話のみに限られなかった。いわゆる、近代文明と関連し、対話を交わす時にも同様の論理で相手を説得しようとした。

例えば、関西学院の院長を務めた吉岡美國は、過去に京都のある学校で教員として勤めていた。彼は西洋文明の重要な基礎がどこから始まったのか知ろうとし、この鍵を把握するた

---

753 H. W. Myers, 'Send Missionaries to Japan', *MV*, January, 1918, p.20.
754 W. R. Lambuth, *Winning the World for Christ*, p.29 ;『キリストに従う道』、22頁参照。
755 *Ibid*, p.29 ; 同書、22頁参照。

めにランバスの自宅に訪問し、この時、ランバスはその解決策を見つけるよう提案した[756]。約2週間の集中的な聖書研究は、吉岡美國がキリスト教について好意的に考えるよう奨励し、結局、キリスト教の福音を受容し、洗礼を受けることになったのである。すなわち、西欧文物の基盤はまさにキリスト教にあるという意図が、相手に完全に伝達されることができた代表的な例であった。このように、宣教地で福音を受け入れ、キリスト者になった人たちは無限の潜在力と可能性を持っている存在だと見なした[757]。

結局、キリスト教は日本の伝統宗教を補完することであり、西洋文物の基盤をなす源のようなものであった。したがって、ランバスが考えた宣教は、キリスト教によって完成されることであり、さらにキリスト教の福音を受け入れた人々の完全な変化が必ず伴わなければならなかった。まさにこれはランバスが考えていた完全な宣教の形へ進む道であった。いわゆるウェスレー神学で言われる「キリストの完全」(Christian Perfection)を目指して進むことであった。このように完全な宣教を成す過程で、各々個人の「更生」が要求された。以下はこれに関する彼の言及である。

心の中に働ける聖靈の結果と〻果して何ぞや、即ち神によりて生れたる人〻「イエス、キリストと信ずるもの」(約翰第一書五章一節)彼〻「罪を犯さず」(約翰第一書三章九節)彼〻「正きを行ふ者なり」(仝二章廿九節)彼〻「兄弟を愛す」(仝三章十四節)彼〻「世に勝つ」(仝五章四節)彼〻「惡き者の爲に誘〻るゝことなし」(仝五章十八節)是れ聖靈によりて生たるものにして斯の如き徴候あれば則ちキリストの所謂更生〻其中に在なり、故にもし之を欠ぐものあらば是れ愆と罪とによりて死せるなり、ニゴテモ〻大人なり博學なりと雖も主イエス、キリストの宣ひし更生の語を悟ると能〻ざりし、されば學術、爵位〻以て我儕をキリストによりて來る救の知覺に至らしむるゝ能〻ず實に此の世の科學、知識、知慧〻決して聖靈の働きを人心に惹起すこと能〻さるなり聖書に云〻ずや「性質のまゝなる人〻神の靈のことを受けず」と抑も父なる神の愛〻我儕の救の由て來る源泉なり、キリスト嘗てニゴテモに告て宣く「夫れ神〻其生給へる獨子を賜ふほどに世の人を愛し玉へりと〻凡て彼を信ずる者に滅亡ゝなくして永久生命を受しめんがためなり」(約翰傳第三章十六節)と[758]。

ランバスが日本で強調したのは、各個人の変化、すなわち、「生まれ変わる」(rebirth)ことであった。特に、日本はすでに明治維新以降、物質文明において、かつて近代化に成功した国という性格を持っていた。したがって、新約聖書のヨハネによる福音書3章3節、「人は新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない」という聖書個所によって日本で説教した主な理由は、西欧近代化ですべてが完成されることではなく、キリスト教という宗教が

[756] W. R. Lambuth, 'Reminiscences of Early Missionary Work in Japan', *MV*, January, 1918, p.19.
[757] W. R. Lambuth, *Winning the World for Christ*, p.236 ;『キリストに従う道』、173頁。
[758] ランバス 述、西村静一郎 譯、汝新に生れざる可らず(*Ye must be born again*)、n.p.、1892、3-4頁。

基盤となるべきことを強調する必要性があったからであった。以上の引用文で分かるように、「学術」、「科学」、「知識」、「知恵」が決して究極的な救いの道を開くことができないと主張した理由がここにあったのである。

以上のように、救いの道はまさに天国に入る道である。ところが、ランバスが以上の説教を通し強調するところは、各個人が大きな変化を経験しないと、救いという完成の道に入ることができないということである[759]。これはまさにランバスが日本で強調しようとした宣教的な方法論であった。かつて西欧式近代化を成し遂げ、物質的な豊かさを享受している日本には霊的な覚醒が必要だと思ったのである。言い換えれば、近代化が完成を成し遂げるためには、その土台にキリスト教が繋がる必要性があった。そのように、日本は近代化とキリスト教が相互関係を結び、行われなければならないことを力説していたのであり、それが日本で彼が推進しようとした宣教方策であった。

⑥エキュメニカルな宣教協力

先にランバスの生涯で検討したように、彼は宣教師の子として生まれて育ち、両親のように宣教師になった。したがって、彼の基本的な宣教理解は、両親から相当部分を受け継いだことを推測できる。ところが、彼の両親であるJ・W・ランバス夫妻は宣教地で他教派とをエキュメニカルな宣教協力を推進した代表的な宣教師であった[760]。これに関して、1910年代、南長老会(the Presbyterian Church in U. S.)で発行した宣教機関誌である*the Missionary Survey*の1915年2月号に関連記事が掲載された[761]。この記事は、ランバスと共に南メソヂスト監督教会のアフリカ・コンゴ宣教を開拓したムムパワー(D. L. Mumpower[762])が宣教過程の中、南長老派教会のコンゴ宣教部の協力に感謝し、1914年7月号に寄稿した「What the Presbyterians Have Done for the Methodists」[763]をめぐって、

---

759 同書、2頁参照。

760 Mrs. W. F. Junkin, 'What the Methodists Did for the Presbyterians', *the Missionary Survey*(以下*MS*), February, 1915, pp.136-137. ちなみに、この文は内容の一部がやや省略され、南メソヂスト監督教会の宣教機関誌である*the Missionary Voice*の1915年10月号にも掲載された。Mrs. W. F. Junkin, 'What the Methodists Did for the Presbyterians', *MV*, October, 1915, p.479.

761 Mrs. W. F. Junkin, 'What the Methodists Did for the Presbyterians', *the Missionary Survey*(以下*MS*), February, 1915, pp.136-137. ちなみに、この文は内容の一部がやや省略され、南メソヂスト監督教会の宣教機関誌である*the Missionary Voice*の1915年10月号にも掲載された。Mrs. W. F. Junkin, 'What the Methodists Did for the Presbyterians', *MV*, October, 1915, p.479.

762 ムムパワー(D. L. Mumpower)はヴァンダービルト大学医学部(Vanderbilt Medical Department)出身で、ランバスの後輩であり、ランバスの指名によって、アフリカ宣教のための最初の医療宣教師として選ばれた。W. F. Quillian, 'the Methodist Training School', *MV*, March, 1913, p.186.

763 D. L. Mumpower, 'What the Presbyterians Have Done for the Methodists', *MS*, July, 1914, pp.530-532.

南長老派教会のジュンキン夫人(Mrs. W. F. Junkin)が回答した形式の文である。当時、ランバスをはじめとする南メソヂスト監督教会のコンゴ宣教の開拓団はすでに、アフリカ宣教を開始していた南長老派教会の宣教部から人的資源をはじめとする多様な方面の協力を受け、アフリカ宣教を開拓していくことができた。ランバスは、上述したようにエキュメニカルな宣教方針に立脚し、南長老派教会と共にアフリカ宣教を成し遂げることができた。

ところが、これより40年余り前の1870年代に、南長老派教会が中国宣教を開始した当時は逆に、南メソヂスト監督教会から助けを受けた。この時、南長老派教会の中国派遣宣教師だったデュボーズ夫婦を積極的に助力したのが、まさにランバスの父親であるJ・W・ランバスであった。J・W・ランバスは、宣教地で教派主義にとらわれず、人的あるいは物的資源までも協力を惜しまなかった。この時、ランバスは青少年期だったが、自分の両親が宣教地で教派にとらわれな宣教協力を直接見て育ってきたのである。

そのような成長過程の中で、彼は両親のように宣教師となり、中国と日本を経て、本国で宣教局総主事と海外担当の監督として生涯を過ごした。特に、彼は宣教局と関連する事業を行政的に担当しながら、諸教派との多様な交流と協力を推進し、関連したエキュメニカル会議にも参加するようになった。したがって彼は、南メソヂスト監督教会という一つの教派を乗り越え、次第に広い視野を持つことができた。そのようなエキュメニカルな宣教協力は日本でも適用されていった。最も代表的な例が、1907年の日本メソヂスト教会の設立である。当時、彼に与えられた最も重要な役割はまさに新たに組織された教会の新条例案を作成し、編集することであった。したがって彼は新条例編纂委員会(a committee on the Book of Discipline[764])に委員として参加することになった。そして合同の翌年である1908年に英文で発行された新條例は彼の編集であった[765]。

ランバスはメソヂスト三派を含め、あらゆる全権委員の中で、唯一日本宣教を経験した者であった。したがって日本の状況と事情をよく知っていたランバスが、新條例の英文編集を実質的に担当することになったのは自然なことだと言える。さらに、ランバスは南メソヂスト監督教会宣教局総主事として宣教行政の実質的な業務を担当していたので、彼ほどこの作業に相応しい人物はいなかった。しかも、ランバスほどエキュメニカルな宣教協力に関して、深い知識と理解を持っていた人物がいなかった。

ちなみに、彼は1891年に帰国した後、1894年から南メソヂスト監督教会宣教局で務めるようになった。ところが、1年前の1893年に本国で北米海外宣教協議会(the Foreign

---

764 当時、新條例編纂委員は以下のようである。本多庸一、平岩愃保、平澤均治、高木壬太郎、D. S. Spencer、H. H. Coates、Julius Soper、W. R. Lambuth。同書、13、77-78頁。

765 W. R. Lambuth, 'Introduction', W. R. Lambuth ed., *The Doctrines and Discipline of the Methodist Church of Japan 1907 with Appendix*, Tokyo: Methodist Publishing House, 1908, p.3.

Missions Conference of North America)が創設され、エキュメニカルな宣教協力事業に関する様々なテーマが論じられるようになった。宣教局で務めたランバスも、自然にこの協議会に参加することになった。彼は誰よりもこの会に積極的に参加し、当代のエキュメニカルな宣教協力の動向をよく理解・把握していた[766]。このような文脈で、1901年4月24日に南メソヂスト監督教会のニューオーリンズ宣教師協議会(the New Orleans Missionary Conference)が開催された[767]。この時、ランバスは「南メソヂスト監督教会の海外宣教事業の歴史、政策、そして見通し」(History, Policy, and Outlook of the Foreign Missionary Work of the M. E. Church, South)にテーマで講演をした[768]。エキュメニカルな宣教協力と関連する彼の講演は、参加した多く人々に強烈な印象を残した。結局、彼の講演内容は、その後南メソヂスト監督教会の海外宣教における重要な原則として承認されることに至った[769]。それは以下のように大きく4つの原則としてまとめられた。

1.現地のキリスト教伝道者に高い地位を与え、もっと大々的に大胆に用いるべきである。新約聖書の使徒たちの先例を見れば、教化したいと願っている国で働き手を募るのが望ましいということが分かる。
2.何を教えるかということを、注意深く見守る必要がある。私たちは道徳、聖職者、教義の体系や制度を教えるために派遣されているのではない。-人であり給う生けるキリスト、福音書のキリストを伝えるために遣わされているのである。無意識のうちにキリストの御顔をヨーロッパ化してしまっていることが多すぎるのである。
3.この人たちに対する伝道にふさわしい者が派遣されなければならない。すなわち、この仕事のための訓練を受けた、最もすぐれ、最も有能で、最も広い教養を身につけた者である。
4.私たちの伝道の最終目的は、各教派の支部を設立することではなく、その土壌に天の王国の種を植え、その結果、その国の特質に最も適合した形でのキリスト教を発展させることでなければならない。もちろん、キリスト教の大原則は守られなければならないが、礼拝形式と牧師の職制の両面ではこれらの制限を越え、最大限に自由な発展が許されるべきである[770]。

以上の4つの原則を簡単にまとめると、1.現地の伝道者に高い地位を与え、活用すること、2.宣教師として派遣するのはキリストのためであること、3.宣教に相応しい者が訓練され、派遣されること、4.礼拝と制度などをその国に適合させ、自由な発展ができるようにすることである[771]。ここで注目すべき点は、特に3番目の項目を除いた他の項目が宣教の土着的な

---

766 *WRL*, pp.102-103.
767 *Ibid*, p.110.
768 *Ibid*, p.112.
769 神田健次、「草創期のエキュメニカル運動とW・R・ランバス」、『関西学院史紀要』、第18号、2012、58-59頁参照。
770 *WRL*, p.113 ;『ウォルター・ラッセル・ランバス』、134頁。
771 神田健次、「草創期のエキュメニカル運動とW・R・ランバス」、前掲書、59-60頁参照。

展開を強調することだと言える。現地の指導者を養成し、現地の人々によって、宣教地の適合する形で行われるべきだということである。これと関連し、ランバスは以下のように語る。

伝道地には生命と力に満ちた教会建てられている。それは現地に根を下ろした、いわば土着の教会であり、からし種のように、小さな芽が成長し、今では大きな枝をはっている。古い伝道地の教会では次第に自覚が深まり、さまざまな自己表現を生み出している。信仰の種がまかれ、栽培され、すでに百年以上の時が経過した当然かつ理由のある結果と言えよう。力量のある現地のリーダーが育成され、キリスト教が次第に土着し、賛美歌や祈りも自国語で創作されている。したがってこれらの伝道地におけるキリスト教は豊かに結実し、たとえ宣教師団が撤退してももはや根こそぎにされることはない[772]。

現地の言語と文化でキリスト教が定着する時、換言すれば、宣教の土着化が行われた時、キリスト教は宣教師がいなくても安定的に発展していくことができると考えた。しかも、ランバスはヨハネによる福音書17章21節の「父よ，あなたが私の内におられ、私があなたの内にいるように、すべての人を一つにしてください。彼らも私たちの内にいるようにしてください」という聖書個所を、エキュメニカルな宣教協力において最も重要なテキストとして考えた[773]。したがって1907年日本メソヂスト教会が成立する当時、全権委員として参加し、積極的な合同運動が行われるように先頭に立つことができたのである。

このように日本であらかじめ経験した彼のエキュメニカルな宣教理解と認識は、その3年後にスコットランドで開催されたエディンバラ世界宣教会議(World Missionary Conference at Edinburgh)でより具体化され、展開していく大きな土台になった。1910年6月14日から23日まで10日間開催されたエディンバラ世界宣教会議は、全体で８つの分科委員会[774]として組織され進められ、この時、ランバスは第2分科委員会である「宣教地での教会」(The Church in the Mission Field)の副委員長(Vice Chairman)として任命された。第2分科委員会で相互論議の末に採択された事柄の一つは、いわゆる画一化(unifornity)を止揚し一致(unity)を追い求めることだった。すなわち、「多様性の中の一致」だったのである[775]。このような論議が進行する過程の中で、副委員長として活動したランバスの役割と貢献が非常に重要であったことを容易に推定することができる。そして宣教地、とりわけ日本メソ

---

[772] W. R. Lambuth, *Winning the World for Christ*, pp.239-240 ;『キリストに従う道』、175頁。
[773] 神田健次、「草創期のエキュメニカル運動とW・R・ランバス」、前掲書、65頁参照。
[774] 当時、8個の分科委員会は以下のようである。1. Carrying the Gospel to all the Non-Christian World 2. The Church in the Mission Field 3. Education in Relation to the Christianization of National Life 4. Missionary Message in Relation to the Non-Christian World 5. The Preparation of Missionaries 6. The Home Base of Missions 7. Missions and Governments 8. Co-Operation and the Promotion of Unity. https://en.wikipedia.org/wiki/1910_World_Missionary_Conference参照。
[775] 神田健次、「草創期のエキュメニカル運動とW・R・ランバス」、前掲書、62頁参照。

ヂスト教会の合同過程にあたって、全権委員として直接参加した経験は、彼がエキュメニカル運動を主導的に導いていく指導者としてその役割を担うことができたと言える[776]。

これまでの論議をまとめてみると、彼のエキュメニカルな宣教協力が土着的宣教と結合し、宣教地で適用されるように実施されたということが分かる。そしてその代表的な例が、まさに日本メソヂスト教会という合同教会の成立過程で彼が表した理解と態度であった。

第2節：朝鮮の理解

西洋列強によって、門戸を開放したアジア諸国と違い、朝鮮は日本によって開港された。すなわち、朝鮮の場合は、門戸を開放させた主体が同じ東洋圏内の国であり、その門戸開放の性格がまったく違った。東洋によって、東洋が門戸を開放することになったのである。それほど西洋の観点から見ると、朝鮮の開放は、当時代的な状況の中で極めて遅すぎることであった。1876年に江華島条約という不平等条約を基にし、1882年に米国、1883年に英国など、西洋列強との条約が繋がった。

メソヂスト教会の宣教も、そのような時代的潮流の中で行われた。まず、1884年6月にメソヂスト監督教会の在日本宣教師であるマクレーが朝鮮を訪問し、教育と医療に関する王の許しを受け、メソヂスト監督教会の宣教基盤が造成された。そして翌年にスクラントン(W. B. Scranton)とアッペンツェラー(H. G. Appenzeller)、スクラントン夫人(Mrs. M. F. Scranton)がそれぞれ医療と教育、女性教育を担当する宣教師として派遣されて来朝し、本格的なメソヂスト監督教会の朝鮮宣教が開始された。一方、南メソヂスト監督教会ははメソヂスト監督教会より10年余り遅れた。しかし、南メソヂスト監督教会の朝鮮宣教も開港以降に開始された宣教という点において、メソヂスト監督教会の宣教開始とその性格的な面で大きな違いはなかったと言える。ともかく、南メソヂスト監督教会は、1895年10月、ヘンドリックス(Eugene Russell Hendrix)監督と中国の駐在宣教師であったリード(C. F. Reid)が宣教開始のため、事前調査として来朝した後、翌年にリードが再びソウルに入り、本格的な南メソヂスト監督教会の朝鮮宣教も始まった。当時、南メソヂスト監督教会が朝鮮宣教を開始するための準備過程で、ランバスは本国の宣教局に務めながら、全ての過程を行政的に調整していった。したがってランバスは、朝鮮宣教の全般的な流れと過程を熟知して

776 ランバスはエディンバラ世界宣教会議で論議された事項が以降にも継続的に行われるように組織された世界宣教会議継続委員会(the Continuation Committee of the World Missionary Conference)のメンバーとして参加し活動した。'Notes and Comment', *MV*, July, 1911, p.8; W. R. Lambuth, 'Second Meeting of the Continuation Committee', *MV*, December, 1912, p.716; 'Continuation Committee of the Edinburgh Conference', *MV*, April, 1914, p.199など参照。

いた。

このように南メソヂスト監督教会の朝鮮宣教が開始される過程から関与していたランバスは、以降何度も朝鮮を尋ねる。そして1910年代末からは、南メソヂスト監督教会の東洋地域を担当する監督として来朝し、特に、満州・シベリア地域の朝鮮人宣教に関心を持ち、晩年を過ごしたのは先に論述したことである。また、その他にも今日の泰和基督教社会福祉館を設立にも尽力し、とりわけ南メソヂスト監督教会朝鮮宣教の行政的な局面と関連し、影響を及ぼした人物であった。

それ故、ここでは先に検討したランバスの宣教活動に基づき、彼が朝鮮をめぐって、いかなる理解と態度を持っていたのか探求しようとする。そしてこの過程は、先に検討した彼の日本理解と比較することによってより深く理解される。

一方、ランバスの朝鮮関する資料として、日本と同様に1907年に宣教局総主事として東洋を訪問した後、その旅と観察及び考察を記録し、1908年に出版した*Side Lights on the Orient*があげられる。この著書の特色に関しては、先に探ったように彼の日本理解と関連する冒頭ところに言及したので、ここでは省略する。この著書で朝鮮をめぐる項目とその題目は以下の通りである[777]。

<表 - *Side Lights on the Orient*の目次の中、朝鮮に関する項目 >

Chapter	Titles
12	Outdoor Life in Korea
13	The Sreets of Seoul
14	The Tiger Hunter
15	Country Folks
16	The Rubber Church

また、関西学院キリスト教主義教育研究室で編集した「ウォルター・ラッセル・ランバス資料(2)」、『関西学院キリスト教主義教育史資料Ⅴ』[779]もランバスの朝鮮理解を考察することにおいて、重要な資料となる。先の日本側資料と同様に、Methodist Publishing Houseに保管されていたランバスの未刊行原稿を日本語に翻訳したものである。この資料の構成は、

[777] W. R. Lambuth, *Side Lights on the Orient*, p.9.
[779] ウォルター・R・ランバス、関西学院キリスト教主義教育研究室 編、「ウォルター・ラッセル・ランバス資料(2)」、『関西学院キリスト教主義教育史資料Ⅴ』、関西学院キリスト教主義教育研究室、1984。

朝鮮(朝鮮雑記, Articles on Korea)、ハワイ及びインド(ハワイおよびインド篇, Articles on the Hawaiian Islands and India)など、大きく二つの部分に分けられる。その中で、朝鮮をめぐる項目は以下のような小題目で構成されている[780]。

<表 - ウォルター・ラッセル・ランバス資料(2)」朝鮮雑記(Articles on Korea)細部項目>

Chapter	Titles	Recorded
1	朝鮮年会[781]	1919
2	朝鮮のジャンヌ・ダーク	after 1919
3	下関からソウルへ	unknown
4	朝鮮人の特質	unknown
5	朝鮮情勢	after 1907
6	朝鮮の首都	about 1907
7	朝鮮における新生の時	about 1919
8	朝鮮、好機到来	about 1909
9	朝鮮における教育事業	After 1919
10	朝鮮、過去と現在[782]	1894
11	朝鮮人の克己心	unknown
12	伝道百周年記念運動-朝鮮・満州・シベリア	after 1921.3

以上の章題目を見ると、朝鮮の教会めぐる行政的な事項、そして朝鮮人に関する特色、朝鮮の社会・政治的な状況など、様々なテーマで記されていることが分かる。また、記録された年度も多様である。彼が朝鮮を訪問する前の1894年から始まり、1907年、1909年、1919年、そして晩年と言われる1921年に至るまで、多様な時代的背景の中で書かれた資料であることを確認することができる。もちろん、以上の資料はほとんど学問的な形式というより、朝鮮に関する書籍を通じての間接的な情報、あるいは直接朝鮮を訪ね、感じたことを記

780 『ランバス資料(2)』、3-4頁参照。

781 この文章は、元々ランバスが南メソヂスト監督教会の宣教機関誌である*the Missionary Voice*の 1912年12月号に「Christianity in Korea to Stay – Interesting Glimpses of Our Work in That Land」と題して寄稿したものである。W. R. Lambuth, 'Christianity in Korea to Stay – Interesting Glimpses of Our Work in That Land', *MV*, December, 1919, pp.356-366.

782 この文は元々ランバスが南メソヂスト監督教会宣教機関誌である*the Methodist Review*の 1894年11-12月号に寄稿した文である。W. R. Lambuth, 'Korea: Past and Present', *MR*, November-December, 1894, pp.204-210.

録したエッセイの性格が濃い。それ故、枠組みにとらわれない自由な形式に記述されている資料と言える。但し、先の日本理解と関連するところで活用した資料のように、英文の原書ではなく、日本語に訳され、一旦フィルタリングされたという事実がこの資料の限界である。それにもかかわれず、この資料はランバスの一次資料に基づいて翻訳されたものなので、朝鮮理解をめぐる事実を把握するのに問題がない。

他にも*the Methodist Review*(後に*the Methodist Review of Missions*で題号変更)や*the Missionary Voice*など当代、南メソヂスト監督教会で公に発行した宣教雑誌あるいは朝鮮で発行された新聞及び雑誌、そして宣教報告書と年会録などに残った記録を、基本的に資料として活用することができる。

最初に、ランバスがいつ朝鮮を知るようになったのか、朝鮮人と初めて出会うようになったのか検討してみよう。結論から言うと、現在残っている資料ではその正確な日付と時期を把握することは難しい。但し、残っている資料を土台に知ることができたのは、尹致昊(ユン・チホ)という人物との出会いであり、この出会いが朝鮮人と最初の接触であると推測できる。ちなみに、尹致昊は南メソヂスト監督教会が朝鮮宣教を開始することにおいて、重要な役割を担った信徒である[783]。

ランバスが尹致昊という朝鮮人と出会ったという事実は、尹致昊が残した日記によって確認できる。1888年10月3-4日付(旧暦9月28-29日)の尹致昊の日記内容を見ると、当時尹致昊は中国上海のミッションスクールである中西書院を卒業した後、校長アレン(Y. J. Allen)と教授であるボンネル(W. B. Bonnel)の推薦と勧めで、米国のナッシュビルにあるヴァンダービルト大学へ向かう途中であった[784]。ところが、19世紀末から20世紀初頭、東アジアと米国に寄港した船は、ハワイと日本にしばらく立ち寄った。したがって尹致昊も神戸で一日中停泊するようになった。当時ランバスは神戸を拠点として南メソヂスト監督教会の日本開拓宣教師として活動していた。尹致昊が神戸にしばらく停泊した最初の日(3日)、彼はランバスを始め、宣教地視察のため来日していたウィルソン監督など、南メソヂスト監督教会の宣教師たちと会うことができた。同日、尹致昊に会ったランバスは、彼に三通の手紙を渡したが、多分その中の一つは尹致昊のヴァンダービルト大学に入学するための推薦状だと推定される。ちなみに、ランバスはヴァンダービルト大学出身で、中国宣教師を経て日本宣教師として東アジアで活動していたので、ランバスの推薦は相当有効に働いたのであろう。このように尹致昊に手紙を渡すほど、ランバスは朝鮮人である尹致昊を高く評価していた

783 James Cannon Ⅲ, *History of Southern Methodist Missions*, pp.156-158.
784 『尹致昊日記』、1888年10月3-4日参照。

と言える[785]。

尹致昊の日記によると、翌日(4日)午前、個人的にランバスに会うために自宅を訪れたが、会えなかったという。尹致昊が個人的にランバスの自宅を訪れたぐらいなら、この当時もその両者の関わりはある程度親交があったと思われる。ちなみに、尹致昊が上海で本格的に南メソヂスト監督教会側の宣教師たちとの関わりを結んだのが1885年初頭であった。その時、ランバスは蘇州の病院を中心として医療宣教に集中した時であった。それ故、両者は1885年当時すでに会っていたと推定することもできる。このようにランバスは尹致昊という朝鮮人に会い、これを機に朝鮮との関わりが始まったと見ることができる。

ランバスが直接朝鮮を訪問したのは尹致昊との出会いから11年余り過ぎた1899年、すなわち、宣教局に務めた時であった[786]。南メソヂスト監督教会の海外宣教を行政的に統括するために、朝鮮宣教が開始してあまり経ってない時点で朝鮮訪問の必要性を感じ、来朝することになったと推定される。それ以降、ランバスは8年後の1907年、宣教局総主事として勤めた時、再び朝鮮を訪問することになった。長い間、東アジアを訪問しなかった彼がその年に朝鮮を訪問することになったのは、まさに日本の教会の事情のためであった。すなわち,1907年5月、メソヂスト監督教会、南メソヂスト監督教会、カナダメソヂスト教会など、三派のメソヂスト教会が合同し、日本メソヂスト教会が成立することになった[787]。この時、ランバスは南メソヂスト監督教会側の全権委員(commissioner)の一人として、日本メソヂスト教会の創立総会に参加した。そして日本を訪れるついでに朝鮮をはじめ、東アジアの各地と宣教地を視察したのである。

以降、ランバスは1910年に南メソヂスト監督教会総会で監督として選出された後、1919年、1920年、1921年と毎年一回ずつ朝鮮を訪問した[788]。監督として選出された後、約10年という長い時間が流れた後に朝鮮を訪問できたのは、ランバスが1919年から東洋を担当する監督になったからである。このように、ランバスは宣教局総主事及び監督に在任した当時、5回くらい朝鮮を訪問しながら[789]、朝鮮の教会と来朝宣教師たち、そして朝鮮人たちと

---

785 『ランバス資料(2)』、6頁参照。

786 梁柱三は1930年彼が編集・刊行した『朝鮮南監理教会三十年紀念報』にランバスの最初の朝鮮訪問を1898年だと記述しているが、これは明白な誤記である。当時、年会録と新聞など、その他いかなる資料でも1898年にランバスが朝鮮を訪れたという事実を確認できなかった。梁柱三 編、「랜벗트監督の畧歴」、前掲書、299頁参照。

787 *ARMECS*, 1908, p.59.

788 梁柱三 編、前掲書、33頁参照; J. S. Ryang ed., *Southern Methodism in Korea Thirtieth Anniversary*, pp.8, 20, 24, 33-36.ちなみに、洪伊杓はランバスが1908年以降、ほぼ毎年、朝鮮を訪れたと主張したが、これは誤った事実である。洪伊杓、「W・R・ランバス宣教師と朝半島-永遠なる東アジアの友」、前掲書、111頁参照。

789 梁柱三も南メソヂスト監督教会の朝鮮宣教をまとめながら、ランバスの朝鮮訪問の回数を「5回目」(fifth)だと言及した。梁柱三 編、前掲書、35頁参照; J. S. Ryang ed., *Southern Methodism in Korea Thirtieth Anniversary*, p.35.

交流を広げていき、宣教活動の足跡を残した。

(1)一般的理解(政治・経済・文化などの社会的な要素)

①静かな朝の国と隠者の王国

ランバスにとって「日本」と言えば、まずイメージとして「日出ずる国」(the Land of the Rising Sun)であった[790]。では、日本と対照される表現で、ランバスにとって朝鮮と関連して思い浮かぶイメージは何だったのか。まず、「静かな朝の国」(Morning Calm)というイメージをあげられる。ランバスが、1894年、南メソヂスト監督教会の宣教機関誌*the Methodist Reiviewに*朝鮮について初めて記述した文献によると、朝鮮を「静かな朝」(Morning Calm)と表現している[791]。この表現は、元々中国から亡命し、朝鮮半島に入ってきた箕子が詩的描写で表現した用語だと言われる。もちろん、ランバスの記述の通り、「静かな朝」と呼ばれるこの表現が、実際にそのような歴史的な語源の意味なのかは疑問の余地がある。また、ランバスが上記の文を作成した時、参考にした資料は日本で活動した宣教師あるいは駐在員たちが記述したものであった[792]。これは、日本の観点から見た朝鮮に関する資料を参考したという意味である。

そして事実、今までの一般的な研究結果によると、朝鮮を「静かな朝」と称したのは19世紀末から朝鮮を西洋に紹介するために、よく使用された典型的な西洋式観点の用語である。すなわち、この用語はローウェル(Percival Lowell)という人物によって、西洋に朝鮮を象徴する表現として広く知られた[793]。ちなみに、ローウェルは1883年8月からその年10月まで、朝鮮の遣米使節団に遂行し、米国ワシントンD・Cまで案内し、ソウルに帰ってきた外交官及び天文学者であった。朝鮮に帰ってきた彼は、約二ヶ月間ソウルに滞在し、朝鮮に関する多様な情報を収集し、これを基にし、*Chosön, The Land of Morning Calm: Asketch of Korea*[794]という訪問記を著述した。まさに、この著書が西洋に紹介され、朝鮮は“the Land of Morning Calm”、すなわち、「静かな朝の国」として広く呼ばれるようになった。

---

790 W. R. Lambuth, *Side Lights on the Orient*, p.60.
791 W. R. Lambuth, ‘Korea: Past and Present’, *MR*, November-December, 1894, p.206.
792 ランバスが*the Methodist Review*(1894年11-12月号)に寄稿した「Korea: Past and Present」を書くため、参考した主な資料はグリフィス(W. E. Griffis)、ライン(J. J. Rein)、スティーブンス(D. W. Stevens)など、大体に日本で活動した宣教師及び駐在員たちを通じ、著述された書籍であった。したがって、初期にランバスが朝鮮めぐって、持っていた知識と理解は西洋と日本の観点が投影された朝鮮理解が濃厚であった。さらに、朝鮮と関連する各々の表記も日本式発音の英文表現が表れる。W. R. Lambuth, ‘Korea: Past and Present’, *MR*, November-December, 1894, pp.205-206, 208-209.
793 玉聖得、前掲書、488-489頁参照。
794 P. Lowell, *Chosön, The Land of Morning Calm: Asketch of Korea*, Boston: Ticknor & Co., 1886.

ところが、この著者ローウェルが上記のように表現した意図はあまり肯定的な意味ではなかった。すなわち、朝鮮が「静かな朝」(the Morning Calm)の地であり、外の世界の動きに関係なく、迷夢の中で隠遁者として数百年間寝ており、それ故、全てが停滞しているという、いわゆるオリエンタリズムの意図で表現されたものであった[795]。しかし、ランバスはこの表現が箕子朝鮮[796]というそれなりの歴史的な人物に基づき、その上に詩的な意味が付与されたものと理解した。たとえ、ランバスがこの表現を西洋に大衆的に知らせたローウェルとは異なる意味で受け入れて解釈したが、大きな枠組みで見る時、当時西洋で大衆的に呼ばれたその表現そのまま借用したことが分かる。

一方、ランバスが「Morning Calm」と共に朝鮮を象徴するイメージで受け入れた他の表現は、まさに「隠者の王国」(the Hermit Kingdom)であった[797]。しかし、「隠者の王国」という表現は朝鮮の鎖国政策を批判する要素が強く込められている。そしてその用語の起源も、鎖国政策から始まると見なしていたのである。ランバスが理解していたように、実際にこの用語が使用され始めた目的がそうであった。

ちなみに、この表現は先立つ「the Morning Calm」よりも幅広く西洋に知られた表現でもあった。朝鮮を紹介する著書として最も有名であり、大きな影響力を及ぼしたグリフィス(W. E. Griffis)の*Corea, The Hermit Nation*[798]という著書に由来している[799]。とりわけ、この著書は1911年に第9版まで修正補完されながら、英語圏の読者と来朝していた宣教師のための入門書、いわゆる教科書のようなものであった。しかし、この著書は日本側から見た朝鮮観が反映されたもので、日本の植民史観の影響下で書かれたものである[800]。そしてこの書の著者グリフィスは、朝鮮を一度も訪問したことがなく、既存の西洋と日本内の朝鮮をめぐる資料を基にしてこの著書を記述したのである。また、グリフィスはキリスト教文明と社会進化論の立場に立っており、日本が朝鮮を開港することに対して肯定的に考えていた。すなわち、朝鮮が未開であり、原始的であり、不安な政治的状況で腐敗し、清潔ではない国家というイメージを強く示したのである[801]。

それ故、1894年、朝鮮に関して最初の文章を記した当時、本国に滞在していたランバスはグリフィスの観点に影響を受けていたと思われる。実際に、*the Methodist Review*の「Korea: Past and Present」において記述したランバスの朝鮮理解は、グリフィスが理解

---

795 玉聖得、前掲書、489頁参照。
796 箕子という人物が、紀元前 1100 年頃に朝鮮半島で建国した国を示す。1392 年、李成桂(太祖)が建国した朝鮮とは区別する。
797 W. R. Lambuth, 'Korea: Past and Present', *MR*, November-December, 1894, pp.208-209.
798 W. E. Griffis, *Corea, The Hermit Nation*, New York: Scribner's Sons, 1882.
799 玉聖得、前掲書、486-488頁参照。
800 同書、486頁参照。
801 同書、487頁参照。

した朝鮮理解の性格と類似ている。また、「隠者の王国の人たちは保守的であり、偏狭な性格で非常に迷信的であり、体を清潔するようにしない」[802]という朝鮮人たちを描写したこともある。したがって、鎖国政策のため、長い間西洋文化を受け入れなかった朝鮮の状況を表現するにあたって、「隠者の国」(the Hermit Nation)というほど適した用語がなかったのである。但し、ランバスは「隠者の国」よりも「隠者の王国」(the Hermit Kingdom)[803]と表現をやや若干変えている。しかし、朝鮮の鎖国政策を批判し、近代化の速度がかなり遅れた朝鮮の状況を批判的に象徴するその意味は変わりがなかった。それはグリフィスの著書を主要資料として参考したため、ランバスの論述も近代化を通じて成長するという社会進化論の立場が強く表れる。それ故、グリフィスが使用した用語を活用し、朝鮮を「隠者の王国」と表現したのである。このように朝鮮を「静かな朝の国」あるいは「隠者の王国」と称したランバスにおける最初の朝鮮理解は、日本あるいは西洋側から見た朝鮮観が濃く投影されていたということが分かる。

②独自的な気質と伝統文化

ランバスが朝鮮に関心を持ち始めた時、まず彼は朝鮮人をいわゆる文化人類学のカテゴリーの中で理解しようとした[804]。朝鮮人の先祖を中国から渡ってきた箕子と見なすこと、その意味で単一民族ではなく、混血民族だと見なすのは異論の余地がある。しかし、彼が朝鮮側の文書ではなく、西洋人によって記された文献を参考にし、すでに、中国と日本で宣教師を歴任した彼の経験から見る時、そのような理解は当たり前のことであると言える。このように、ランバスの朝鮮及び朝鮮人に関する理解は、東アジアという範囲の中で理解しようとしたことを確認することができる。

一方、ランバスは朝鮮人の気質を朝鮮半島の自然環境と繋げ、探ろうとした。1907年、彼が来朝した時、険しい山脈が多かった朝鮮半島の自然環境を眺めながら、朝鮮人の強い気質が自然環境の影響で形成されたと考えた[805]。ところが、彼が表現した強い気質とは、まさに独立精神であった[806]。すなわち、ランバスは昔から朝鮮人が険しい自然環境の中で生活し

---

802 『ランバス資料(2)』、27頁。
803 W. R. Lambuth, 'Korea: Past and Present', *MR*, November-December, 1894, pp.208-209.
804 例えば、「朝鮮人たちも日本人たちと同様に混血の血統である。頭蓋骨の輪郭、民族文化、宗教、そしてとりわけ、言語はこの結論の証拠になる。朝鮮半島を研究する歴史学者たちは私たちに多分東北アジアのツングース種(Tungusic race)に属しているが、その起源を知ることができない原始的な土着部族によって、支配されたと述べている。紀元前1122年頃、学者であり，政治家だった箕子(Ki Tsz)の導きの下で、中国から移住して開始された以上の土着民たちを継続的に多くの人たちを押し詰め、圧迫し、進入した。」*Ibid*, p.206.
805 W. R. Lambuth, *Side Lights on the Orient*, p.108.
806 W. R. Lambuth, 'Korea: Past and Present', *MR*, November-December, 1894, pp.205-206.

ながら、独立精神と言われる強い気質を形成できたと考えた。そしてこのような気質を本質的に持っているために、外勢のいかなる侵入と干渉にも常に抵抗しようとする強い意志を持つようになったと考えたのである。そのために、ランバスは外勢、その中でも19世紀末から20世紀初まで日本に積極的に抵抗した朝鮮人たちの態度と状況を心情的に理解し、共感することができた。このような独立精神をめぐっては後に詳しく考察したい。

他方、彼が朝鮮人に対して抱いた印象と理解は、共生と協力のイメージであった。1907年、来朝した当時、彼が見た一般民衆たちの姿の中に朝鮮人のそのような精神を発見した[807]。ランバスは朝鮮人たちを純粋な人たちだと考えた。彼は朝鮮を訪れた当時、田舎のある村で朝鮮人たちが水田を耕作する時、助け合う姿を描写しながら、朝鮮人たちの協力精神を高く評価した。彼が高く評価したのはそれだけではなかった。ランバスは朝鮮の首都であるソウルの中心街に通いながら、その風景を注意深く観察した。ところで、中心街に様々な商店が並んでいる姿は、まるで中国の首都である北京の町と似たようにも思われた。しかし、似ていながらも、何か朝鮮にはそれなりの独特の姿を発見した。それは品物を運ぶ作業者の忙しい姿であった[808]。また、韓紙を販売する商店が彼の目に留った。この商店に立ち寄ったランバスは、そこで販売された製品を見て印象的な記録を残している[809]。立派な製紙技術とこれを多様な用途で使用する生活文化を高く評価したのである。また、朝鮮の製紙技術がすでに日本に伝えられ、日本文化にも肯定的な影響を及ばしたと理解した。

その他にも朝鮮の多様な文化とその技術が、昔から日本に伝えられてきたことを知っていた[810]。さらに、ランバスはかつて朝鮮から日本に技術と文化が渡った事実を知っていた。また、朝鮮の物のみならず、中国の文化的な要素も朝鮮を経て日本にもたらされたという歴史的な事実を理解していた[811]。すなわち、朝鮮が大陸文化の架け橋と同じな役割を果たしてきたという事実である。

このように、ランバスは初期に朝鮮をめぐる書籍を耽読しながら、理論的な土台を得るようになり、宣教局の通信幹事及び総主事、そして監督として朝鮮を直接訪れた際には朝鮮をさらに深く理解するようになった。特に、彼は朝鮮の街に通いながら、朝鮮人の日常生活を注意深く観察し、これによって朝鮮人なりの独特の気質と性格を探ろうとした。その過程の中で、ランバスは朝鮮の優秀な伝統文化と技術があれば、彼はためらわずにこれを認め、高く評価したのである。

---

807 W. R. Lambuth, *Side Lights on the Orient*, pp.94-95.
808 *Ibid*, pp.96-97.
809 *Ibid*, pp.99-100.
810 W. R. Lambuth, 'Korea: Past and Present', *MR*, November-December, 1894, p.207.
811 『ランバス資料(2)』、17, 20頁参照。

③東方のポーランド

ランバスは朝鮮を訪れた時、朝鮮人の生活文化を注意深く観察した。さらに、朝鮮をめぐる書籍などを参考し、その理解の幅を広げていった。もちろん、初期には日本側の関係者と典型的な西洋側の観点で記述された資料を参考にするしかなかったので、一部朝鮮に関する誤った理解を示した場合もあった。それにもかかわらず、朝鮮を理解しようとした彼の関心と態度は相対的に高い方であった。とりわけ、朝鮮の昔の歴史に彼は関心を持ち、関連した書籍を耽読したり、周りから関連内容を聞いたりした。彼が朝鮮の女性たちのいわゆる、スゲスカート[812]と関連した文化的由来を聞いた時にも同様であった。彼は周りからスゲスカートの由来を聞き、朝鮮の歴史的な苦痛を共感した[813]。ランバスは誰かにスゲスカートの由来を聞き、朝鮮の歴史、すなわち、侵略によって生まれた当時の朝鮮文化の様態を理解するようになった。その意味で、ランバスはスゲスカートの由来をいわゆる「奇妙で、信じがたい物語」だと思った。

このように、ランバスが知るようになった朝鮮文化の中には、朝鮮が外勢から受けた侵略によって、形成された文化的な要素があった。したがって、彼が朝鮮を理解することにおいて、外勢から数回にわたって侵略を受けてきた朝鮮の歴史的な痛みと苦痛を無視できなかった。すなわち、彼が朝鮮人に接する時には、彼らの先祖たちが経験した被害の苦痛に可能な限り共感する必要性を感じたのである。それ故、彼が朝鮮めぐって記録した文章には、朝鮮人が経験した侵略の歴史にしばしば言及している。実際に、彼が朝鮮の歴史を知れば知るほど歴史的な痛みを持っている国として感じられたので、ランバスは、朝鮮をいわゆる「東方のポーランド」と例えた[814]。西洋、とりわけ米国人たちに朝鮮を説明するために、彼なりに考案した表現方法であった。ヨーロッパの列強の中で、長い間侵略を受け，苦痛を受けて来たポーランドがいかなる比喩より適切だと彼は考えたのである。

また、ランバスは朝鮮人の血統が、元々中国から移住してきた民族、すなわち、混血民族だったため、そのような意味で外部勢力の侵入は古代まで遡ると理解した。彼は朝鮮人の歴史を理解することにおいて、古朝鮮、厳密にいうと箕子朝鮮時代まで遡る[815]。箕子も中国から渡ってきた人物であった。したがって、厳密な意味で朝鮮が受けた侵略の歴史は、建国過程とも繋がっていると彼は考えた。朝鮮半島の三国時代の歴史も同様であった。三国時代、

---

[812] スゲスカートとは、朝鮮の女性たちが出かける度に、よく着用するスカートである。
[813] W. R. Lambuth, *Side Lights on the Orient*, p.98.
[814] W. R. Lambuth, 'Korea: Past and Present', *MR*, November-December, 1894, p.206.
[815] *Ibid*, p.206.

その中でも新羅が海を挟み、日本と向かい合っていたので、日本の頻繁な干渉と侵略を受けて来た事実について彼は知っていた[816]。何よりも朝鮮が日本と非常に近い距離だったので、過去の歴史の中で、継続的に侵略を受けてきたのだと考えた[817]。その他にも、高句麗と百済も中国と日本など、周辺列強から継続的な侵略を受け、国家的に大変な時期を過ごしてきたと彼は考えた[818]。高麗時代に次ぐ朝鮮時代にも外勢の侵略は継続された。先に、スゲスカートの由来も朝鮮時代に経験した侵略の痛みから始まったことをランバスは知った。このように周辺の列強、その中でも主に中国と日本から受けることになった侵略が朝鮮半島内で絶えていないことを彼は学んだ。

またランバスは、文禄・慶長の役を通じ、日本が朝鮮を侵略し、朝鮮民族が受けた苦痛についても理解していた[819]。特に、朝鮮人たちの耳を切り、戦利品で豊臣秀吉に奉納された日本人の残酷さも承知していた。それと共に朝鮮人たちが受けた苦痛に共感していたのである。このように、ランバスには朝鮮は歴史的に多くの侵略を受け、民族的な痛みを抱くしかない国家と映っていた。そしてこれはとりわけ、「中国と日本という上下の臼の間に置かれた一握りの穀物」というランバスなりの独創的な表現で、適切に解釈され、理解されたのである。ランバスは彼の晩年までも上述した表現を忘れず、覚えていた[820]。19世紀末、ランバスは中国と日本が朝鮮に対して干渉と侵略の機会を狙っていると考えたが、それほど朝鮮の存在は中国と日本という強大国の板挟みになっている存在であった[821]。

しかし、このように日本と中国を中心に行われた朝鮮半島侵略と干渉の歴史は、19世紀半ばから転換期に差し掛かったと、ランバスは考えた。その転換の主体は西洋列強であった[822]。当時、鎖国政策を取っていた朝鮮の立場から見る時、米国と英国、フランスなどの西洋列強の接近は、侵略であり、干渉として理解される。実際に、ランバスが見た朝鮮は、西洋列強において対決の場になることもあった。1885年から1887年まで、巨文島を侵略し征服した英国、これをめぐる英国とロシアの勢力争いなども、朝鮮半島が西洋列強の武力対決の場となっていることを表す象徴的な出来事である[823]。

しかし、一方では侵略の歴史として貫徹されている朝鮮半島の歴史の中で、朝鮮人が武力に屈服せず、積極的に対抗して戦ったという事実もランバスは知っていた。したがって、そ

---

816 W. R. Lambuth, 'Korea: Past and Present', *MR*, November-December, 1894, pp.206-207.
817 『ランバス資料(2)』、17頁参照。
818 W. R. Lambuth, 'Korea: Past and Present', *MR*, November-December, 1894, p.207.
819 *Ibid*, pp.207-208.
820 W. R. Lambuth, 'Korea Ripe for Evangelism', *KMF*, February, 1922, p.25.
821 W. R. Lambuth, 'Korea: Past and Present', *MR*, November-December, 1894, pp.209-210.
822 W. R. Lambuth, 'Korea: Past and Present', *MR*, November-December, 1894, p.209.
823 *Ibid*, p.204.

のような点において、朝鮮人たちの勇気を非常に高く評価している[824]。

以上のように、ランバスが朝鮮半島の歴史を眺めながら理解した朝鮮は、周辺の列強の争いの中で多くの苦痛を耐え抜かなければならなかったポーランドを彷彿とさせるものであった。もちろん、19世紀末、彼が朝鮮に関して間接的に接することができる資料は、日本側の観点から記述された資料がほとんどであったのは、朝鮮を理解することにおいて一つの限界として指摘することができる。それにもかかわらず、朝鮮半島の歴史に関して、与えられた資料の限界の中で「侵略」という核心を理解できたことは注目すべき事実である。

④日本の朝鮮支配

ランバスは侵略で貫徹された朝鮮の歴史について十分に認識していた。このような朝鮮の歴史理解に基づいて、彼は19世紀末から20世紀初頭に至る東北アジアの情勢を把握しようとした。もちろん彼が見るには、当時の朝鮮の情勢は外部勢力の侵略と切り離して考えられない状況であった。特に朝鮮は日本から多くの干渉を受け、徐々に植民地化されて行く時代的な状況を把握していた。

1907年、ランバスが朝鮮の首都であるソウルを訪問して古い王宮を散歩した時、朝鮮王室の衰えを感じた[825]。特に日本人刺客によって王妃が殺害されるほど、当時ランバスが見た朝鮮の姿は絶望的な状況であった。一国の王妃が他国の刺客に殺害されたにも関わらず、いかなる手も打てなかった朝鮮の王について、ランバスは痛ましい気持ちを持った。彼は、朝鮮が日本から干渉を受け、次第に植民地化されていく過程を直接経験したのである。

しかし、ランバスには、朝鮮に対して持っていた共感は別に、日本の朝鮮支配については肯定的に考えていた一面もあった。特にランバスの来韓当時に、朝鮮統監であった伊藤博文に対して期待もしていた[826]。それは、ランバスが見るに、あらゆる不正と腐敗が蔓延した朝鮮の支配階層を改革できるという期待感を抱いていたのである。それほど、彼は朝鮮社会がまだ近代化とはかけ離れた状況の中にあり、一日も早くこれを改革する必要があると考えた[827]。ランバスの表現によると、朝鮮は「アジアの患者」(the sick man of Asia) [828]であった。ランバスが見た過去と現在の姿は、王権周囲で権力をめぐって争ってきた無秩序そのままであった。中央の政権のみならず、地方の官僚社会にも不正腐敗が蔓延しており[829]、何よ

824 『ランバス資料(2)』、23頁参照。
825 同書、36頁参照。
826 同書、38頁参照。
827 同書、40頁参照。
828 W. R. Lambuth, 'Korea: Past and Present', *MR*, November-December, 1894, p.210.
829 *Ibid*, p.210.

りも支配階層の改革が急務であった。ここに日本が適切な役割を果たす事ができると見ていた。その意味で、朝鮮が日本の保護国になったことに対して、彼は否定的な考えを持ってはいなかった。朝鮮人たちも、日本の保護国として干渉を受けることが肯定的な影響をもたらすことができると見ていたのである[830]。

一方、日本が朝鮮を保護し、また植民地化していく過程の中で、朝鮮人の生活は一層困難になるという懸念も持っていた。しかし1907年の当時、彼が朝鮮を訪問して直接見た限りその恐れは杞憂に過ぎないと思った。日本が、米国と親密な関係であり、キリスト教国家である英国が植民地でとっている方法を朝鮮に適応しているのを見て、日本も朝鮮のために肯定的な影響を与えられると考えていたのである。これはつまり、当時の典型的な西洋人の見方であり、近代化の観点で投影させた朝鮮観と同じであった。このようにランバスは、日本の朝鮮支配が、支配階層を中心に蔓延していた当時朝鮮の不正腐敗を解消できるという点で肯定的であった。

また、ランバスは日本が朝鮮を支配することによって大陸と日本という島国を繋げられる点でも肯定的に考えていた。例えばランバスは、朝鮮の鉄道が日本の大陸侵略のため、軍事的な目的によって建設された事実を知っていたにもかかわらず[831]、一方でこの朝鮮に建設された鉄道が大陸と島国である日本を繋げる肯定的な効果も生むと思ったのである[832]。したがって、ランバスが見た九州の下関は、東洋のジブラルタルと同じであった[833]。つまり、下関は日本と大陸を繋げるいわゆる戦略的な拠点であり、朝鮮は日本が大陸と繋がることができる架け橋でもあった。

したがって、日本の支配を受ける朝鮮人に共感する一方、日本の朝鮮支配を全面的に否定してはいなかった。日本が当時衰えた王室と不正腐敗が蔓延した朝鮮を改革できる主体と見て、また、朝鮮という架橋を通じて日本が中国を超え、ヨーロッパまで繋がるという期待感を抱いていたからである。

⑤強い愛国心(民族主義)

ランバスが宣教局通信幹事及び総主事、そして監督として東アジアと直接的に関係を結んでいた19世紀末から20世紀初まで、朝鮮は日本の保護国を経て植民地にされた。彼は、そのような時代的な状況の中で朝鮮の歴史を見て、朝鮮の歴史が絶え間なく侵略の歴史で

830 『ランバス資料(2)』、32頁参照。
831 同書、34頁参照。
832 同書、15-16頁参照。
833 同書、15-16頁参照。

あることを理解した。したがって朝鮮を「東方のポーランド」(Poland of the East)と称した。しかし、そのような侵略は主に朝鮮の隣国である中国と日本を通じて行われた。すなわち一方では、このような歴史的な状況を「碾き臼の間に置かれた一握りの穀物」(the greist between the upper and lower millstones[834]) と描写したりした。これは、ランバスが生涯朝鮮に対して持っていた印象であった。このように朝鮮は力を失い、外部勢力に門戸を開放することになり、結局日本の保護国を経て植民地に転落することになった。このような朝鮮の状況を目撃した彼は、朝鮮に対して深い共感を持っていた。益々外部勢力の干渉と妨害に実権を失った朝鮮の王、そして日本人の刺客によって殺害された王妃、また不正腐敗した支配階層によって苦しい生活を送るしかなかった朝鮮の民衆に対して深い共感を表した。

しかし、一方では不正腐敗で染み付いた朝鮮を改革する必要を感じた。このような改革にとって日本が適任者になれるという期待感を持っていた。すでに自浄能力を失った朝鮮に日本という外部の干渉によって、朝鮮の近代化のため肯定的な影響を与えられると思ったのである。したがって、日本の朝鮮支配と関連してランバスが理解した構図は、朝鮮人に対する深い共感と共に朝鮮のためにやむを得ない措置という矛盾した論理が混合していた。そして日本の朝鮮支配を長期的な観点で見る時、東洋と西洋を結びつける拠点になれると信じた。しかし、日本が朝鮮を支配する過程があまり順調ではないことを彼は目撃した。国権を奪われた朝鮮人たちがここに強烈に抵抗する姿を見たからである。それくらいランバスが観察した朝鮮人は強い愛国心を持った民族であった。

例えば、南メソヂスト監督教会朝鮮宣教部が設立した好寿敦女学校の校長であるワグナー(Miss E. Wagner)から聴取した三·一運動が代表的であった[835]。当時のランバスが大きく印象を受けたのは、朝鮮人の女学生たちの自発的な参加と主導によって開城地域の独立運動が拡張された出来事であった。学生たちは、学校を辞めるほどに揺るぎない意志を持っており、在学生の満場一致で朝鮮の独立を勝ち取るために声明書に署名するほどであった。それほどまでに朝鮮人たち、特に女学生たちの独立意志は、ランバスにとって相当印象的であった。ランバスが、同僚の宣教師に聞いたところによると、好寿敦女学生たちが主導した開城地域の三·一運動は、宣教師と関係しない事件であった[836]。女学生たちは、この独立運動と関連して宣教師たちと相談したことはなかった。つまり、教師であった宣教師たちに許可を求めず、また求める必要もなかったと思ったのだ。それは、自発的な女学生たちの愛国心が表現された事件であった。宣教師たちの立場では、これが自分たちを巻き込まないように

---

834 W. R. Lambuth, 'Korea: Past and Present', *MR*, November-December, 1894, p.207.
835 『ランバス資料(2)』、10頁参照。
836 同書、10-11頁参照。

した学生たちの配慮だと理解した。

特に、この開城地域の三·一運動と関連して宣教師たちの影響力を強いて述べるとすれば、「聖書」と「賛美歌」であった。宣教師たちを通じて受け入れた福音を、非暴力運動の象徴として表現した。また、この好寿敦女学校の学生たちの自発的な独立運動は、地域の男子学生、つまりこの地域の代表的なキリスト教系の学校であり、南メソヂスト監督教会で運営する松都高等普通学校の男子学生を刺激した[837]。この女学生たちに触発されて、松都高等普通学校の男子学生たちも、翌日から独立運動に直接参加し始めた。男学生たちの参加を促進した女学生たちは、ワグナーに、祖国の苦難のために戦わなければならないと強調した。そして、その中で受ける苦難を、朝鮮人たちは栄光と名誉であると考えた。これは、宣教師たちが朝鮮人たちに教えたことではなく、朝鮮人たちの愛国心によって自発的に表現された姿であった。ランバスは、この事実を非常に印象深く受け止めた。このような内容を同僚宣教師を通じて聞いたランバスは、その感想を次のように記録している。

この話を聞くと、ジャンヌ・ダークの時代の感がする。私は、ワグナー女史がこれらを語るのを書き留めた。何故ならば、この話が朝鮮の人々の間の素晴らしい愛国的精神、彼等が抱いている宣教師への愛情、生徒達や人々を制し、政治当局に対する背信行為を思い止まらせた宣教師達の思慮深さ、そして最後には、この事態を処するに当たり、幾人かの日本人当局者が示した賢明な分別を列証しているからである。このように賢明な役人達がより多く存在しておれば、文明世界に衝撃を与えた残虐非道な行為は現象していたことであろう[838]。

学生たちの自発的な独立運動の参加が、宣教師たちをこの事件に巻き込まないための配慮だったこと、また、この事件の被害が大きくならないように当時の日本人当局者たちの賢明な対処だったことなどは、ランバスには印象的であった。しかし、ランバスが最も大きい印象を受けたのは、まさに朝鮮人たちの強烈な愛国心であった。彼がまるで「ジャンヌダルク(Jeanne d'Arc)時代」と表現するほどに朝鮮人たちは強い民族主義の意識をもっていたと理解される。

開城地域の三·一運動でなくても彼はその他の多様な経験を通じて朝鮮人たちの愛国心を感じることができた。例えば、抵抗のための自己犠牲も愛国心を表現する方法の一つであった[839]。もちろんこの抵抗のための自己犠牲という行為が東洋的特質の一つであり、ランバス個人にとってはあまり好ましい方法ではなかった。しかし、命を捨てるという極端な方

[837] 同書、14-15頁参照。
[838] 同書、15頁。
[839] 同書、26-27頁参照。

法を選ぶしかなかった朝鮮人の愛国心を一方では理解した。ランバスは、祖国の恥は命と交換するほどに朝鮮人には大きな誇りであり、自負心であることを知っていたからである。

また、ランバスが朝鮮人の愛国心を感じた別の事件は、「国債報償運動」であった。これは、ランバスが朝鮮を訪問した1907年、朝鮮の大邱を中心に日本から送られた次官を民衆の力で送り返し改めて主権を取り戻すために起した民族主義運動であった。支配階層ではなく一般の民衆たちが積極的に参加したこの運動は、ランバスが朝鮮人たちの愛国心を直接目撃し、経験できた事件であった。

このように、ランバスにとって朝鮮人の愛国心によって引き起こされた事件は、相当印象的であった。もちろん、日本の朝鮮支配を必須不可欠だと考える一方で、自分の命まで犠牲にして国を守ろうとする朝鮮人の愛国心に深い共感を持つに至ったのである。したがって、1907年に高宗が日本の干渉から切り抜けるために、国際社会に訴えようとオランダのハーグに特使を派遣したことについて、ランバスは十分共感して理解した[840]。

このようにランバスは、朝鮮と朝鮮人について、いわゆる二重の観点を持っていた。つまり、日本の朝鮮支配について積極的に否定はせずに肯定的な影響を認めながらも、その中で朝鮮人が直面する苦痛を理解していたのである。

(2)宣教理解

①慎重な接近と行政的支援

本来、ランバスにとって朝鮮というのは、地政学的に東アジアに位置した一国家に過ぎない。つまり、本人が生まれて育った中国と開拓宣教師で宣教的な熱情をかけた日本の間に位置した一つの国家であった。このような彼の朝鮮認識は、尹致昊が残した日記を通じて確認できる。前節で見た通り、ランバスが初めて接した朝鮮人は尹致昊であり、その二人の関係は1885年頃から始まった。その後にもランバスは、尹致昊とずっと親密な関係を持ちながら交際をした。それにも関わらず、しばらくの間ランバスにとって朝鮮は、関心の外の領域であった。つまり、朝鮮という国は知っているが、宣教師として赴任するとは思っていなかったのである。その中でランバスが直接朝鮮に対して関心を持って、公式にその宣教の必要に言及したのは、1894年の南メソヂスト監督教会の機関紙*The Methodist Review*の11-12月号以降であった。それまでランバスは、尹致昊に個人的な親密感を持っていたにも関わらず、その二人の間に朝鮮宣教に関して具体的な話題にのぼっていないようである。これは、

840 同書、28頁参照。

尹致昊の日記を通じても多少推定できる。1894年の夏までの尹致昊日記に登場するランバスの関連記録を見ると、当時ランバスが持っていた宣教的な関心領域を次のようにいくつかの項目に区分して整理できる[841]。

第一に、ランバスは尹致昊と食事等の簡単な友好的な集いを通じて会ったりした[842]。もちろん、このような出会いを通じて、朝鮮以外に中国と日本等の東北アジアの二国を話題にお互いに話し合ったこともあった[843]。しかし、尹致昊の日記を通じて見られるように、ランバスが朝鮮及び朝鮮宣教に関連して尹致昊と具体的に話し合った記録は見つけにくい。第二に、尹致昊は宣教と関連した集会に参席してランバスの講義を聞いたことがあった。しかし、厳密な意味で尹致昊が聞いたランバスの講義は、朝鮮宣教と関連したというよりは、「宣教師を派遣した教会の関心鼓吹」、または「効果的に宣教報告する方法」など、宣教の一般的な事項に関する内容に限定されたものであった[844]。最後にランバスは、1894年以前は米国人に朝鮮に関する宣教的関心を誘導するよりは、アフリカ宣教の当為性を強調したり[845]または自分が開拓宣教師で活動した日本について紹介するなどの姿勢をとっていた。朝鮮はランバス自身にとって関心外の領域であった。1891年10月23日、尹致昊が記した日記にも、上記のような姿勢を見出すことができる。

午前9時にヒューズ(H. P. Hughes)牧師が大学教会で学生たちに講演した。午後の集まりでは、いつもと同じくランバス博士が誠実で分明に日本とその宣教師役について話してくれた。ランバス博士の次にアンダーウッド(H. G. Underwood)牧師が朝鮮について話した。その次は、中国の宣教地から帰ってきた宣教師であり神学博士であるビーチ(H. P. Beach)牧師が短く話してくれた[846]。

---

841 尹致昊日記にランバスが登場する部分は、『尹致昊日記』、1888年10月3日、1888年10月4日、1890年2月17日、1891年4月10日、1891年4月14日、1891年10月23日、1891年10月24日、1893年9月14日、1893年9月15日、1894年6月25日などを参照。

842 これに関連して尹致昊日記の中、『尹致昊日記』、1888年10月3日、1891年10月24日、1893年9月15日参照。

843 尹致昊は、彼の日記で彼がランバス夫婦と一緒に食事をしながら当時その奥様が中国と日本に関する会話を出したと記録しいる。しかし、当時一緒に食事をした人員は、ランバス夫婦と尹致昊、この3人だったので、ランバスもこれに関連して自分の意見と考えをお互いに話したと推測できる。『尹致昊日記』、1893年9月15日参照。

844 これに関連して『尹致昊日記』、1891年4月10日、1891年4月14日参照。

845『尹致昊日記』、1891年4月10日参照。

846 洪伊杓は、彼の論文で当時のランバスが、アンダーウッドと一緒に朝鮮宣教と関連した講演をしたと主張する。しかし、上記の尹致昊日記で確認できるように、これは事実と違う。この時ランバスは、日本と日本宣教師を主題に限定して講演したのみであり、朝鮮に関して言及したことでなかった。洪伊杓、「韓国の南監理教の宣教の隠れた開拓者、ランバス(2)」、『基督教世界』、前掲書、48頁；洪伊杓、「W・R・ランバス宣教師と朝鮮半島-永遠なる東アジアの友」、『関西学院史紀要』、前掲書、103頁。ちなみに尹致昊日記に原文は次のようになる。'Rev. Hugh Price Hughes addressed the students in the chapel at 9 a.m. In the afternoon session Dr. Lambuth spoke on Japan and its missionary works with his usual earnestness and clearness. Rev. Underwood, Corea, followed Dr. Lambuth. Then a short talk by Rev. H. P. Beach, Doctor of Divinity, a returned missionary from China.'『尹致昊日記』、1891年10月23日。

もちろん、その前にもランバスと尹致昊の間に書簡を取り交わした事実を、尹致昊の日記を通じて確認できるが[847]、その中に朝鮮宣教に関する具体的な事項が含まれていたのか現在としては確認できない。もしランバスが尹致昊とお互いに取り交わした書簡の中で、朝鮮宣教に関連した事項記していたら、間違いなく尹致昊が日記にその内容を断片的に言及したはずだ。しかし、全然言及されてないことを見ると、ランバスが1894年以前までは朝鮮宣教に関して具体的な構想及び実行計画を持っていなかったと理解できる。したがって、ランバスが本格的に朝鮮及び朝鮮宣教に興味を持ち始めたのは、前に言及した通り、*The Methodist Review*の1894年11-12月号に「Korea: Past and Present」というタイトルの文章を寄稿した時からだと見る。

それでは、ランバスが朝鮮宣教に興味を持ったきっかけはどのようなものだったのか。これに関連して、ランバスがそれを明確にしている資料はない。しかし、当時の状況で見ると、次のように二つに整理できるだろう。

第一には、前述した通りに、尹致昊という朝鮮人との出会いと交際が、ランバス自身が朝鮮に対する関心を呼び起こしたきっかけになった可能性が大きい。時折尹致昊と食事をしたり個人的な出会いを通じて朝鮮と朝鮮人に対して理解を持ち、断片的な関連知識を得ていたのであろう。さらに、尹致昊が初代駐韓米国公使であったL・H・フット(L. H. Foote)の通訳官、そして統理交渉通商事務衙門の主事を経て参議交渉通商事務の職位を歴任し、いわゆる朝鮮の高位官僚出身の故に、朝鮮の詳しい状況に対しても容易に聞くことができたであろう。そのため、尹致昊を通じて聞いた朝鮮状況に対して次第に興味を持つようになり、朝鮮宣教の必要性を覚えることになったと推測できる。

第二には、ランバスが南メソヂスト監督教会の宣教局で活動していたので、朝鮮に関する興味を持つきっかけになったと推測できる。彼は、1890年初めに南メソヂスト監督教会の宣教局発行の機関紙*Methodist Review of Missions*の編集長を務めたことがあり、以後には宣教局の協力幹事(associate Secretary)を経て通信幹事(Corresponding Secretary)など、宣教局の実質的な業務をする立場にいた。したがって、朝鮮に対する宣教的関心を持たざるを得なかった立場であった。さらに1894年には、当時の朝鮮がメソヂスト監督教会をはじめ長老派各教派もすでに宣教師を派遣した宣教地であった[848]。したがって、米国の諸教派の

[847] 尹致昊日記で確認できること、1894年以前までランバスと尹致昊が相互書簡を取り交わしたことは、1888年10月3日と1890年2月17日、ただ二回である。もちろん個人的な親交を持っていた二人の関係を考慮すると、意外にも何回書簡を取り交わしたと推測できる。『尹致昊日記』、1888年10月3日、1890年2月17日参照。

[848] 1894年、当時米国の重要教派の中でメソヂスト監督教会と北長老派教会，南長老会がすでに朝鮮に宣教師を派遣していた。

中でも朝鮮宣教に対して興味を持ち始め、宣教師に志願して派遣されるケースが増えてきた。当時の状況から南メソヂスト監督教会の立場として、東アジアに位置した朝鮮は宣教的関心の対象となるのは必然的であった。そして当時の宣教局の実務行政家として奉職したランバスにも、朝鮮宣教の可能性を検討しようとする意識が生じることになった。ランバスは、朝鮮を知るために当時の西欧に紹介された朝鮮に関連した書籍を参考にし、朝鮮を把握していく過程で具体的に宣教的可能性を検討し始めたと言える[849]。

しかも、この時期に南メソヂスト監督教会で朝鮮宣教を開始しようとする動きが本格的に起き始めた。すでに上海と蘇州など、中国の南部地域を中心に活動していた中国宣教師たちが、気候にうまく適応できなかったため、新しい宣教地を模索し始めたのである[850]。同時に当時の学部協辨(the Vice Minister of Education)で、今日の教育部次官の位置にいた尹致昊が、南メソヂスト監督教会に学校設立のため朝鮮宣教を要請した[851]。このような状況の中で朝鮮宣教を開始しようとする雰囲気が盛り上がると、本国の宣教局で本格的な動きが開始された。当時の宣教局の通信幹事であったランバスは、南メソヂスト監督教会の朝鮮宣教を開始することにおいて裏方の役割を引き受けた。特別に通信幹事として、本国の宣教部で決定された重要事項などを宣教現地に伝達する等、行政的に積極的に支援する役割を引き受けた。一例を挙げると、ヘンドリックス(E. R. Hendrix)監督と当時中国の宣教師であったリード(C. F. Reid)が事前調査を行い、その報告書を宣教局に提出すると、宣教局ではこれを根拠として朝鮮宣教に関して決議した[852]。ランバスは、この決議事項が出ると、直ちに重要事項などをリードに伝達して、朝鮮宣教を行政的に支援した[853]。宣教開始以後にも彼は、朝鮮に対して持続的に関心を持って支援と助言を惜しまなかった。例えば、南メソヂスト監督教会の朝鮮宣教の開拓宣教師であるリードが学校または病院を中心にしたいわゆる間接的な宣教方法に対して、自立を強調するネビウス(Nevius)の宣教政策を取ろうとするとランバスは、自分の宣教的経験を根拠としてこれを柔軟に調整しようとした。つまりランバスは、朝鮮宣教を開始するにあたり、リードとは別に、先ず学校や病院を通じて迂回的宣教に着手しなければならないと思ったのである[854]。また、尹致昊が南メソヂスト監督教会に

---

[849] もちろん、当時に彼が参考した主な書籍と資料は、W・E・グリフィス(W. E. Griffis)やJ・J・レイン(J. J.Rein)など、日本で活動した宣教師または駐在員たちの著書がほとんどであった。したがって1890年代、ランバスが朝鮮について知っていた知識と理解は日本側の観点が濃厚が理解が表れる。W. R. Lambuth, 'Korea: Past and Present', *MR*, November-December, 1894, pp.208-209.
[850] James Cannon Ⅲ, *History of Southern Methodist Missions*, p.156.
[851] *Ibid*, p.156.
[852] 'Korea Mission', *MRM*, July, 1896, p.38.
[853] *W. R. Lambuth's letter to C. F. Reid*, May, 13th, 1896; 李德周、『宗橋教會史1900-2004年』、63頁再引用。
[854] *W. R. Lambuth's letter to C. F. Reid*, May, 13th, 1896; 同書、67頁再引用。

学校設立を要請して開城に敷地を提供しようとした時に、リードはここを視察して急いで技術学校を設立しようとした。リードからこの報告を受けたランバスは、1897年3月に書簡を通じて自分が以前に父親と共に日本の神戸で宣教した経験を紹介しながら、「我々は、いつも門が開く時に入らなければならない。いつも門が十分開いたと思われるまでには待たなければならない」[855]と急がないように指示した。このようにランバスは、相対的に遅れた南メソヂスト監督教会の朝鮮宣教を急いで進行させないように注視して、本国と宣教現場の間の架け橋の役割を引き受けた。このようにランバスは、朝鮮宣教を慎重に進めた。

このように中華宣教年会の上海地方会で出発した朝鮮宣教は、次第に発展して中国で独立することになり、独自の朝鮮宣教を展開することができた。ここには、表に出なかったランバスの行政的手腕と努力があった。しかし、ランバスは南メソヂスト監督教会が朝鮮宣教を開始していくすべての過程について、「聖霊の啓導」に基づいて行われたことを信仰的に告白している[856]。

②慰労と期待

前節において、1894年の冬に*The Methodist Reiview*に寄稿した「Korea: Past and Present」を見ると、日本側の観点が濃厚にその朝鮮理解に反映しているのを見た。日本の宣教師及び駐在員たちが著述した資料を参考するしかないという時代的な制約における結果であった。それにも関わらず、その中でランバスが理解した朝鮮は、侵略の痛みを持つ国、つまり彼の表現では「東方のポーランド」(Poland of the East)であった。周辺国、その中でも中国と日本という強大国の間に挟まれ、数えきれない侵略を受けてきた朝鮮の歴史を彼は知っていた。そして19世紀末から20世紀初頭に渡るランバスの生涯の中で、朝鮮は日本に主権を徐々に奪われて植民地化されていく過程の中に置かれていたことを彼はよく知っていた。その中で1919年三·一運動が起き、万歳運動に参加した大勢の朝鮮人たちが逮捕され、収監され事件を経験することになる。

しかしその時、その年から南メソヂスト監督教会の東洋担当監督に任命され活動したランバスは、宣教地視察及び年会駐在のためにローリングズ(E. H. Rawlings)博士夫婦などと一緒に朝鮮を訪問することになった[857]。朝鮮を訪問した彼は、三·一運動をはじめ朝鮮の困難な現実を直接に目撃することができた。もちろん、彼はその年、東アジアを訪問する前に

[855] *W. R. Lambuth's letter to C. F. Reid*, March, 4th, 1897; 同書、69頁再引用。
[856] W. R. Lambuth, *Winning the World for Christ*, p.94 ;『キリストに従う道』、70頁。
[857] E. W. Anderson, 'Koreans Facing the Future with Hope', *MV*, Feburary, 1920, p.48

すでに朝鮮の教会が三·一運動によって困難な時期を送っていた事実を知っていた[858]。したがって、年会が開催された当時の雰囲気はかなり重かった[859]が、ランバスの登場でその雰囲気はかなり平穏で柔らかくなった[860]。ランバスは、年会員たちに温柔な印象をあげて、これは参席した全ての人たちに十分な安定感を与えることになった。会員たちの顔に笑いが表れ始めて、その中でランバスは会議を主宰して、静かで力あるメッセージを語った。

元々、ランバスは年会における各地方の長老司(Presiding Elder)からの報告を通じて、当時の朝鮮と朝鮮の教会の困難な状況をよく知っていた[861]。年会で彼が受けた主な報告は、各地方で重要な牧師が逮捕されたことであった。多くのキリスト者たちが、この独立運動に積極的に参加したからである。これは、朝鮮の教会の危機的状況を意味した。特に牧師と伝道師をはじめ教会指導者たちがこの運動に積極的に加担した事実が発覚し、結局、朝鮮総督府の捜査機関に逮捕され裁判を受けることになった。その結果、相当数の教会指導者たちが収監され、各教会が大きな困難に陥ることになった。ランバスは、このような状況を直接目撃して、本国に朝鮮の教会の状況を詳しく報告した。

当時彼の報告は、南メソヂスト監督教会で発行した宣教雑誌*the Missionary Voice*に掲載された[862]。当時、10名を超える牧師が収監されて、その中で5名は朝鮮南メソヂスト監督教会において指導者の立場にあったので、朝鮮年会を開催すること自体が難しい状況であった。ランバスは、年会が順調に進行されることを内心懸念していたが、極度に難しい状況にも関わらず、年会は思いのほか順調に進んだ。収監されなかったり、収監されたとしても早いうちに釈放された人たちが、これまで以上に積極的に年会に参席したからである。ランバスはこのような苦難の中でも、朝鮮人たちが示した熱情と努力に感動した[863]。当時、重要指導者と多くのキリスト者が逮捕され、円滑な牧会が行われにくい状況であったし、何カ所かの教会は日本人によって全焼されるくらいに朝鮮の教会は苦難の中で傷ついていた。それにも関わらず、統計を通じて見た朝鮮の教会は、ただ挫折の中に留まらなかった。年会を主宰して直接朝鮮の教会の状況を目撃したランバスは、「広範囲の困難を考慮すると満足する」[864]と言及して、朝鮮の教会の可能性とその力を確認したのである。

まず、祈りの霊性、信仰の確信とこれに満ちた証拠、敬虔な霊性、聖書を学ぼうとする熱情等は、朝鮮の教会が外部の圧力と迫害にも関わらず、再び立ち上がれる重要な要素になる

---

858 『ランバス資料』、146頁参照。
859 J. O. J. Taylor, 'Bishop Lambuth at the Korea Conference', *MV*, Feburary, 1920, p.42.
860 *Ibid*, p.42.
861 『ランバス資料(2)』、41頁参照。
862 W. R. Lambuth, 'Christianity in Korea to Stay – Interesting Glimpses of Our Work in That Land', *MV*, December, 1919, p.365.
863 *Ibid*, p.365.
864 *Ibid*, p.365.

と思った[865]。彼は、年会で宣教師たちと現地の牧師たちの報告を聞きながら、朝鮮の教会の潜在力を高く評価したのである。そして、それはすでに朝鮮の教会の中に深く根を下ろされている特徴だと見た。したがってランバスは、自分が三·一運動以後の朝鮮の教会のためにできること、しなければならないことが何なのか確認しなければならなかった。彼は、年会の期間中に現地の牧師たちと懇談会を持ったが、この時彼らから建議事項を聞く時間を持った。その時にランバスは、何が必要なのか、自分が何をすれば良いのか現地の牧師に聞いてみた[866]。彼らの要求を聞いて自分ができることをするという、いわゆる朝鮮の教会に対する配慮であった。やはり朝鮮の教会の指導者たちは、三·一運動によって受けた朝鮮の教会の被害とその苦痛について話した。続いてこの困難な状況、特に今まで釈放されてない同僚牧師と信徒たちのために祈ろうという提案を受け、この懇談会はいわゆる祈り会に変わった。そこで朝鮮人たちは不満や悲しみを吐露しながら心から祈ったが、このような姿はランバスにとって動かされると同時に衝撃的な姿であった。この時、ランバスは朝鮮の教会のために今すぐ必要なことが何なのか深く理解し、朝鮮と朝鮮の教会のための「慰労」について考えるに至った。そのような理由でランバスは、日本による苦痛で苦しんでいる朝鮮の教会を尚更目をそらせなかった。さらに彼は外部勢力の侵略が絶え間なかった朝鮮の歴史をよく知っていたので、朝鮮の教会と朝鮮人たちが受けている苦痛を理解し、彼らの痛みを慰めることが朝鮮の教会のために一番必要なことの一つであると彼は思った。彼が本国に朝鮮の教会の状況を報告し、その事情を詳しく知らせた理由もその一環であった。

特に、1919年三·一運動以後にランバスは、可能な限り植民支配をうけていた当時朝鮮人の痛みを慰めることに重点を置いて、場所を問わず、朝鮮人の集会に参席した。ランバスは、1920年第3回の南メソヂスト監督教会の朝鮮年会を主宰するために朝鮮へ出発するに先立って、サンフランシスコで設立された朝鮮人教会を訪問した。三·一運動が発生してから1年ほどの時間が経ったが、ランバスはまだ独立運動によって服役中である朝鮮人を覚えて、彼らのため激励と慰労の説教を行った[867]。そして、朝鮮を訪問した彼は、1年前と同じく日本の支配の下で苦痛をうけている朝鮮の教会を慰労することに重点をおいた。朝鮮の教会で準備してくれた歓迎会で所感を伝えたランバスは、朝鮮の将来性を期待感と共に「患乱苦楚」あるいは「獄中の経験が多い朝鮮人」などのような表現を使用しながら、心から慰めることを忘れなかった[868]。単純に朝鮮の教会の要求を聞くのみではなく、公に教会の期間を通した慰労に中心をおこうとしたのである。上記の記事内容によると、ランバスの講演

---

865 *Ibid*, p.365.
866 『尹致昊日記』、1919年9月8日参照。
867 『新韓民報』、1920年7月29日参照。
868 『東亞日報』、1920年9月16日参照。

を聞いて参席した多くの朝鮮人たちが感動を受けたという。

このような朝鮮の教会を慰めようとした彼の行動は、在米朝鮮人教会にも伝わった。1921年、監理師(superintendent)としてサンフランシスコの地域を管理していたエクトン(W. Acton)は、朝鮮人の教会で昨年(1920年)朝鮮を訪問したランバスの経験談を伝えている[869]。それは、ランバスが獄中に囚われ苦労をしていた南メソヂスト監督教会の信徒4名を面会して慰めたという内容である。第3者の口を通じて伝えられた経験談だったが、ランバスが直接日本の支配の中で苦痛を受けていた朝鮮人を慰めた事実を明確に確認できる報告であった。

このように日本の支配の中で、朝鮮の教会が経験した苦難をランバスは毎年朝鮮を訪問するたびに聴取した。1920年に東洋担当監督の資格で2年連続で朝鮮を訪問した時、彼は元山海岸で開かれた南メソヂスト監督教会の朝鮮宣教部に参席して会議を主宰した[870]。ランバスが主宰した朝鮮宣教部の会議で出された事項などを彼は聞くことができた。実は、南メソヂスト監督教会では、社会・政治的な状況が本格的に悪化したのは、1910年の「韓日併合」と翌年(1911年)に発生した「105人の事件」によると考えられていた。[871]。ランバスは、このような雰囲気の中で、朝鮮を訪問して宣教師と信徒たちから直接に困難な状況を聞き、認識したのである。彼の慰労は、このような状況を理解した上で遂行されたのである。

このように朝鮮の教会に対する彼の慰労は、朝鮮人たちに感動をもたらした。その理由は彼の言葉と行動が形式に留まらず、心から出てくる行動と表現であったからである。特に三·一運動が発生したその年(1919年)、彼が朝鮮年会を主宰した三日目、朝鮮人たちはランバスの心をより本気で理解して受け入れる時間を持つことになった[872]。妻の健康問題によって宣教地を訪問するのが難しくなった状況にも関わらず、東アジアを訪れて共に時間を共有した彼の心を、年会員たちが知るようになり、硬直していた朝鮮人たちの心が開かれたのである[873]。そのように彼のメッセージは、朝鮮人たちの心に平穏をもたらすものであった。そのようにランバスの慰労は、朝鮮の教会との交わりを兼ねる力となった。そして、それは形式的な慰労ではなく、心と心が繋がる真実な慰労と激励になったのである。

一方、ランバスが発見した朝鮮の教会の姿は、迫害を受ける困難な状況にも関わらず、信頼がより堅固になり、成長できるかもしれないという期待感をもたらせた。これは、1919

---

869 『新韓民報』、1921年6月30日参照。
870 'Korea's Desperate Need', *MV*, January, 1921, p.18.
871 *Ibid*, p.18.
872 J. O. J. Taylor, 'Bishop Lambuth at the Korea Conference', *MV*, Feburary, 1920, p.42.
873 当時、南メソヂスト監督教会の派遣宣教師としてソウルで活動していたE. W. アンダーソンはランバスの年会賛成と共に各地の宣教報告書の中で出てきた希望と決断 (hope and determination)が、硬直されていた朝鮮年会の雰囲気を柔らかく作ってくれたと見た。E. W. Anderson, 'Koreans Facing the Future with Hope', *MV*, February, 1920, p.48.

年に彼が朝鮮を訪問した時、すでに感じていたのである。以下はこれに関連したランバスの言及である。

幾千という朝鮮人が、北の国境越えて移住していったのである。しかしながら、我々の心を打ったのは、彼等の祈りであった。彼等は、偉大なる神の約束が果たされることを熱心に祈願した。彼等は神を知っていた。彼らの祈りが比類のないものであるのは、その深い体験のせいだと私は思う。私は、最近届いた報告書を喜んで受け取ることができた。それは、「現在行われている最も印象的な伝道の業のいくつかは、多くの拘置所においてみられる。そこでは、幾千という未信者の朝鮮人が、同様に投獄されているあらゆる宗派の数十名のキリスト教説教者や信者を通じて、キリストへ導かれている」というものであった。何と素晴らしい使徒的教会誕生の繰り返しであることか[874]。

朝鮮の多くのキリスト者たちは拘置所に収監される苦難を経験したが、むしろ収監されたキリスト者たちが、他の模範となり、一緒に収監された同僚たちに福音を伝える機会となったことについて、ランバスは報告を受けていた。宣教師、監督の立場で、監獄で行われる活発な伝道活動が、ランバスには非常に印象的であった。ランバスにとって、その光景はあたかも初代教会の使徒たちの活動をみるようだった。したがって、彼はいわゆる苦難の中にある朝鮮の教会を、「使徒的教会」と高く評価したのである。

このように日本によって圧迫を受けていた朝鮮の教会と信徒たちを慰めたランバスの行動は、逆に日本の立場で見ると、あまりよくは映らなかった。したがって当時の日本当局は、ランバスの行動を注視して監視していた[875]。それほどランバスは、日本による苦難を経験していた朝鮮人たちの痛みを理解し、励まそうとしたのである。

しかし、ランバスの朝鮮の教会に対する慰労と激励にも限界があった。彼は可能な限り政教分離の立場に立っていたからである。1919年の開城地域で南メソヂスト監督教会の系統であるミッションスクールの女学生たちが主導して地域の独立運動が展開した話を、彼が同僚の宣教師より聞いて示した反応は、朝鮮人の愛国心を褒めると同時に、日本の方針に逆らわなかった宣教師の消極的な態度を高く評価した[876]。朝鮮人の独立運動に、宣教師の立場で関与してはいけないとの考えであった。そのような意味で、ランバスが朝鮮の教会と信徒に対して行った慰労と激励は、日本支配の下で受けていた朝鮮の教会の苦難を慰めて激励するという次元に限るものであった。彼は、南メソヂスト監督教会の朝鮮宣教師たちが朝鮮の独立運動と関連して明確に線をひいて警戒しようとする認識を持っていたと言えるで

---

874 『ランバス資料(2)』、41-42頁。
875 『渡邊理惠(ウラジオストク総領事代理領事)が内田康(外務大臣)へ送付した文献』、1921年8月11日発送、3頁参照。
876 『ランバス資料(2)』、15頁参照。

あろう[877]。

③教育宣教

日本と比べ、その程度は少なかったがランバスは朝鮮でも教育宣教の重要性を強調していた。そして南メソヂスト監督教会は、朝鮮宣教の初期から培花女学校、松都高等普通学校、好寿敦女学校、美理欽女学校などのミッションスクールを運営しつつ、教育宣教に相当な関心と力を注いでいた。ランバスは、朝鮮で行われた教育宣教の効果と長所を熟知していた。これは朝鮮宣教が開始されていた初期過程、すなわち、彼が宣教局で勤めた時から切実に感じていたものであった。例えば、ランバスはキャンドラー監督が朝鮮宣教に関する事業を計画したことを顧みながら、1909年頃に記事を寄稿した[878]内容によると、キャンドラー監督が朝鮮の復興のために、とりわけ教育機関の設立と活性化を促進したということである。この動きにバージニア州にある教会が積極的に応えて協力した。このような朝鮮に教育機関を設立する宣教方法は、非キリスト者への伝道にとって相当の効果を得られると考えていた。それほどキリスト教系の学校は非キリスト者にも人気があった。ランバスは朝鮮宣教において、このようなキャンドラー監督の宣教方法とその理解について、肯定的に評価した。したがって彼は朝鮮での教育宣教が宣教活動の中心の軸になるべきだと考えた。

このような観点から彼は、「朝鮮に於ける教育事業」という文章を記し、朝鮮で行われていた教育宣教の状況と方向を本国教会に報告している。彼は松都の松都高等普通学校の校長として務めていたワッソン(A. W. Wasson)の言葉を借り、朝鮮の教育宣教に関連した状況と自分の考えを以下のように言及した[879]。ある日、ワッソンがしばらく本国に帰国したことがあるが、当時、彼は家族以外にも勤めていた松都高等普通学校出身の4人の朝鮮人を連れて行った。彼が連れていった朝鮮人は、エモリー大学と南メソジスト大学へ留学する学生たちであった。サンフランシスコに到着した彼らのため、米国人キリスト者たちが用意した歓迎会で、ワッソンは朝鮮の教育宣教について報告した。当時、ランバスもこの歓迎会に参加していたが、ワッソンの報告を受けた彼は朝鮮での教育事業がかなり効果的に進行していると感じた。何より欧米式近代教育という観点から知と徳を養成することに当り、教育宣教は最も重要な役割を適切に果たしていたのである。

また、このような教育宣教において、キリスト教の福音に接する機会をもうけるべきだと考えた。これを通じて個人と国という両方が正しい関係を結び、成長していけると考えた。

---

877 同書、10頁。
878 同書、43-44頁参照。
879 同書、46頁参照。

そしてまさにこのような観点から朝鮮での教育宣教がかなり効果が得られつつあるので、これからも教育が朝鮮宣教において、重要な役割を担うと確信した。それ故、ランバスは当時、ワッソンが連れてきた4人の朝鮮人が米国で欧米式近代教育を無事に受けられるように、時折彼らと同行しながら、必要に応じて積極的に協力した[880]。

以上のように、ランバスは朝鮮宣教がより効果的で発展するためには教育宣教に一番重点をおくべきだと考えた。以下はランバスが1920年以降、これと関連して記した文章である。

[満州及びシベリアの朝鮮人宣教に関して]この地域に幾つかの学校を設立する必要性も、これまた緊急を要することである。教育事業無しでは、宣教師活動は結局成功しないということを、我々は皆よく承知している。私は、本国における寛大な我々の教派が、我々の満州・シベリア伝道の総監督であるクラム[W. G. Cram]博士を、すべて必要なものをもっと必ず支援して下さるということを確信するものである[881]。

上記の引用文は1919年からランバスの企画のもとで、開始された満州・シベリア宣教をめぐる内容の一部である。ところが、ここでランバスが朝鮮(人)宣教における教育宣教の重要性を強調していたことが分かる。何よりも「教育事業無しでは、宣教師活動は結局成功しない」という彼の言葉は、朝鮮宣教において教育宣教の必要性とその宣教の効果性を彼が確実に認識していたことを示している

④ゴム教会(the Rubber Church)

1921年、ランバスが東洋担当の監督として東アジアへ向かうに先立ち、南メソヂスト監督教会宣教雑誌である*the Missionary Voice*は次のような記事を掲載した。

前例のない復興の数々の状況

ランバス監督が東洋に向けて出発する直前に記した文である。「私たちは今の朝鮮のような霊的復興(revival spirit)を決して経験したことがない。前の年会で3千人の新しい信徒が登録したと報告されたにもかかわらず、私たちは次回の年会を3ヶ月残し、迎えている今、もう8千人の新しい信徒が入信した。これは教会と学校の建物の建設や教会指導者たちの訓練、医療事業のための装備などに関連する臨時支出が必要であることを示す。宣教師たちのための朝鮮の要請は私たちが本国にいる者の帰還を準備し、名簿(list)へ新しい指導者たちを追加することと同じである」[882]。

---

880 同書、47頁参照。
881 同書、58頁。
882 'Unprecedented Revival Conditions', *MV*, August, 1921, p.234.

上記の引用文通り、1920年代初頭にランバスが見た朝鮮の教会は霊的復興を経験し、急速に成長する教会であった。ところで、朝鮮における霊的復興は元々は南メソヂスト監督教会から始まったものである。かつて南メソヂスト監督教会宣教局で務めていたランバスのことだから、朝鮮での復興がいかに始まったのか、そしていかなる形で行われてきたのかよく分かっていた。時折、本国の大学で宣教に関する講義を頼まれると、朝鮮の例をあげ、復興の性格を説明したりした[883]。当時、ランバスにとって、朝鮮の教会といえば、霊的に復興する教会だというイメージが彼に深く刻まれていたのである。

ちなみに、朝鮮の霊的復興はハーディ(R. A. Hardie)という南メソヂスト監督教会の派遣宣教師から始まった。ハーディという一人の宣教師を通して、神の強力な聖霊が朝鮮人の礼拝時間に臨み、その聖霊の活動によって当時礼拝に参加した信徒たちが聖霊の臨在を体験し、これが皮切りに朝鮮半島の全域に向けた霊的復興が広がったのである。これは今日、韓国キリスト教史学界で、いわゆる元山復興と知られている1903年の事件を示す[884]。ここで、ランバスが言及しているハーディは、本来南メソヂスト監督教会の所属宣教師ではなく、独立した身分で医療宣教師として1890年に来朝し、活動をしていた宣教師であった。最初はソウルと釜山、元山などで活動を続け、1898年から南メソヂスト監督教会に所属を移し、開城とソウルを経、1900年に牧師按手を受けた。その以降、彼は元山地域を中心に江原道北部地域で宣教活動を展開していた。したがってハーディが、独立宣教師から南メソヂスト監督教会に所属を変更することに際して、人事行政と行政的な手続きを当時宣教局で務めていたランバスが知らないわけがなかった。それ故ランバスは、ハーディについて詳しく知っており、それと共にハーディから始まった元山復興が、朝鮮半島の各地域にいかに広がっていったのか朝鮮からの宣教報告を通じて把握していた[885]。

南メソヂスト監督教会の宣教師であるハーディから始まった元山復興は、朝鮮半島全体に拡散していった。その中でも平壌は、元山復興の流れとその力がどの地域よりも爆発的に発散した場所であった。ランバスが知った平壌での霊的復興も、元山と同じく宣教師たちの動きから始まったと見なした。宣教師たちが中心となる聖書勉強会と祈祷会によって霊的体験が生まれ、そこから朝鮮人が刺激を受け、規則的な祈祷生活と聖霊を追い求める信仰生活をもたらすことができたのである。平壌でのこの流れは、1907年1月第一週目に絶頂を迎えていた。それはランバスの表現通り、聖霊降臨による霊的復興であった。これは韓国キリ

---

[883] W. R. Lambuth, *Winning the World for Christ*, p.134 ;『キリストに従う道』、99頁参照。
[884] 李徳周・徐暎錫・金興洙、前掲書、106-110頁参照。
[885] W. R. Lambuth, *Winning the World for Christ*, pp.134-135 ;『キリストに従う道』、99頁参照。

スト教歴史において、重要な霊的事件として評価されている1907年の「平壌大復興」である[886]。

ランバスは宣教局総主事として勤務した中で、朝鮮の霊的復興のハイライトとも言える1907年の平壌大復興に注目していた。そしてその霊的復興が、南メソヂスト監督教会の一人の宣教師から始まったということにも大きな誇りを持っていた。また、これが朝鮮宣教において、大きな特徴を持っていたことを分かっていた。ところが、ランバスは1903年から始まり、1907年に絶頂に至ったこの霊的復興の流れが、1909年には新しい転換点、つまり「大規模の宣教運動」を迎えるようになったと考えた[887]。それは百万人救霊運動[888]を示している。

事実、1907年に絶頂に至った平壌大復興はその年の後半期を迎え、熱気が急激に冷めた[889]。これは高宗皇帝の強制退位や日本による軍事権の強奪などに伴い、大韓帝国軍隊の強制解散という日本による国権略奪が深刻化し、政治社会的な環境が非常に不安定になっていたためである。このような状況の中で、南メソヂスト監督教会の宣教師を中心に再び霊的復興運動を推進していたのがまさに百万人救霊運動であった。ちょうど米国の有名な長老派の復興運動家であるチャップマン(J. W. Chapman)とアレクサンダー(C. M. Alexander)など大規模の巡回伝道団が朝鮮を訪問し、この運動に炎をつけていった[890]。

このように世界の教会の中でも事例がない、朝鮮の教会の復興をランバスは注視していた。そしてその流れは、1904年に英国のウェールズ地方でロバーツ(E. J. Roberts)が指導者として導いていったウェールズ復興と同じ性格として理解した。とりわけランバスは、1903年から朝鮮で持続的に起きていた当時の霊的復興の原動力を、「祈り」と「聖霊」という二つを要素として把握していた。ところが、その二つの要素はキリスト者の信仰生活において、ランバスが平素でも大事に思い、他の宣教地でも強調したものであった[891]。彼は聖霊の固有な力によって、人々が霊的に鼓舞され、神の啓示を受け、これを現実に適用し、神の国を

---

886 李德周、『韓国土着教会形成史研究』、前掲書、109-116頁参照。

887 W. R. Lambuth, *Winning the World for Christ*, p.135 ;『キリストに従う道』、99頁参照。

888 百万人救霊運動についての詳細はG. T. B. Davis, *Korea for Christ*, London: Christian Workers Depot, 1910参照。

889 李德周・徐暎錫・金興洙、前掲書、132頁参照。

890 同書、134-136頁参照。

891 例えばJ. W. Beeson, 'Bishop Lambuth and Dr. Reid at Meridian College', *MV*, April, 1913, p.207; 'Anniversary Sermon', *MV*, July, 1913, pp.398-400; Mrs. C. C. Bush, 'Methodist Missionaries in the Congo', *MV*, May, 1914, p.292; W. R. Lambuth, *Winning the World for Christ*, p.68, 132; 'Seventy-First Annual Meeting of the Mission Board', *MV*, June, 1917, p.165; W. R. Lambuth, 'Prayer and Power', *MV*, July, 1918, p.221; J. C. C. Newton, 'Japan Mission Has Notable Meeting', *MV*, November, 1919, p.332; W. R. Lambuth, 'A Prayer for Africa', *MV*, September, 1920, p.281; 『ランバス資料(2)』、40-42頁など参照。

実現する力をもらえると信じた[892]。そして祈りは、むしろ説教よりももっと大事で、霊的な動力を受け、世の中で最も偉大なことができる力そのものだと考えた[893]。

このような朝鮮での霊的覚醒と復興は1920年代に入っても、南メソヂスト監督教会宣教局内で注目をあびるほどであった[894]。したがって1920年代初頭、東洋担当監督として毎年、東アジアを視察したランバスは、朝鮮は霊的復興と共に急激に成長する教会であるというイメージを持っていた。彼はこれと関連付け、「韓国の場合は、ハーミット王国(the Hermit Kingdom)時代にキリスト教伝道に門戸を開放以来、信仰の大覚醒期を通して国全体の規模で聖霊の働きを経験した稀有な例証と言えよう」[895]と言及するほどであった。

一方、上述した朝鮮の教会の霊的復興は、信徒の急激な増加と共に礼拝堂の拡張を伴った。1907年、彼が宣教局総主事として務めていた時、日本メソヂスト教会の合同と関わった全権委員として東アジアを訪ねたことがあった。当時ランバスは日本での予定を済まして朝鮮に入り、朝鮮半島内のあらゆるところをたずねて宣教の現状を見ていた。その中で平壌をたずねたことがあった[896]。元々朝鮮を訪問したランバスは平壌にぜひ寄って行くべきだと考えた。平壌は南メソヂスト監督教会の宣教拠点ではなかったが、メソヂスト監督教会や北長老派教会がこの地域内で学校や病院及びその他、あらゆる宣教事業において、エキュメニカル精神を実現している場所であったためである。しかも平壌は1907年、平壌大復興の中心地としてランバスが良く聞いていた場所でもあった。そして自分が平壌を訪問せず、朝鮮を離れられないと文章で記したほど彼はここを見たくてわざわざ来たのである。

平壌に着き、メソヂスト監督教会側の駐在宣教師であるノーブル(W. A. Noble)の案内で、平壌を巡っていた彼の視界に一つの長老派教会が入ってきた。ランバスはその長老派教会に関して次のように語っている。

左堤の川の向こうに平和な場所が福音の力によって驚く事例で出来ている。これは私が「ゴム教会」(Rubber Church)と呼んでいるところである。そこは長老派(the Presbyterians)であり、長老派宣教区域内で建てられている。最初、彼らはこの区域内の真ん中の正四角形からはじめた。この空間では約250人が入れた。しかしこの空間が満席になり、彼らは片方に新たな礼拝堂を建て、他の区域も追加した。この空間が全部満たされてから教会は反対側に新しい部分を追加して改築した。恐らくその次は南の方に拡張するであろう[897]。

---

892 W. R. Lambuth, *Winning the World for Christ*, p.68.
893 'Anniversary Sermon', *MV*, July, 1913, p.398
894 'The Awakenings of Korea', *MV*, July, 1921, p.216
895 原文はTheKoreans are an outstanding illustration of a nation wrought upon by the Holy Spirit from the opening of the Hermit Kingdom to missions to the day of the great revival. W. R. Lambuth, *Winning the World for Christ*, p.65 ;『キリストに従う道』、49頁。
896 W. R. Lambuth, *Side Lights on the Orient*, p.114.
897 *Ibid*, p.116.

たとえ、南メソヂスト監督教会側の教会ではなかったが、ランバスが訪問した長老派教会は当時彼が理解していた朝鮮の教会のイメージ通りの教会だと言える。それは霊的覚醒や復興により急激な成長を果たしていた朝鮮の教会の姿であった。ところが、押し寄せる信徒たちを教会が収容するため、持続的に拡張する姿がランバスにとっては、非常に興味深かった。それはまるで自由自在のゴムのようであった。それでランバスは当時、彼の目に入ったその平壌の教会をいわば「ゴム教会」(the Rubber Church)と表現した。しかしこれは教会数だけではなく、朝鮮の教会の特徴を表す表現とも言える。このように当時、全世界の南メソヂスト監督教会の宣教地の中で朝鮮の教会ほど急激な成長を果たした教会は珍しかったので、ランバスは朝鮮という宣教地に注目せざるを得なかった。そしてこの朝鮮の教会の成長は、1903年に南メソヂスト監督教会宣教師からはじまった霊的復興運動だという誇りを持っていた。

一方、ランバスは朝鮮の教会の霊的復興が当時、民族の苦難を抑制し、克服するための肯定的な役割を果たすと考えていた。以下はそれに関する彼の言及である。

朝鮮における大きな宗教的覚醒は、元山で開催された我々の年会における、執成しの祈りの主題の中にあった。この執成しの祈りと共に、聖霊のほとばしりを熱烈に願う祈りがなされた。それは、この時代がリバイバルが熟することを必要としていたためでもあり、また、伝道百周年の年でもあったが、何よりも朝鮮における教会が直面している苦難にみちた情況が、種の来臨を涙して叫び求めることを要求していたからである。私は、このような熱烈な祈りと嘆願を、今だかつて聞いたことがない。ローリング(E. H. Rawlings)博士と、ハウエル女史(Miss Howell)は、現在の状況に深い感銘を受け、私と共に主の恵みの訪れが近いことを心から信じた。感謝すべきかな、その日が来たのである。。伝道の第一線からのすえての報告は、福音で満たされている。迫害が依然として続いているのは事実であるが、主の恵みはそれに勝り、、重荷を負いつつも人々の心は喜びに満たされている[898]。

ランバスは、昔から朝鮮が中国や日本など周辺列強から受けてきた侵略の歴史を良く知っていた。したがって20世紀になり、激しくなった日本の支配による朝鮮人の苦しみを十分に理解していた。上記で検討したように、とりわけ彼が1919年以降、朝鮮を訪問し、年会や各教会を訪問する中、朝鮮人を慰めたということは、まさにこのような理解から出た宣教的行動であった。それ故、朝鮮の霊的復興が朝鮮の民族的苦難を十分に抑制し、克服することにおいて、肯定的な効果をもたらすと考えた。そしていかなる宣教地よりも朝鮮での復興が朝鮮の教会や信徒たちに与える有益なところが非常に大きいだろうと考えた。

---

898 『ランバス資料(2)』、40-41頁。

しかし、このような観点は朝鮮人の根本的な民族問題を解決することをせず、信仰によって一時的に抑制しようとする考えであるという批判を受けるかも知れない。すなわち、日本の朝鮮支配や国権略奪を黙認し、霊的復興を通じて苦難を抑制したり、無感覚にした方法だと見ることができる。但し、政教分離の立場からみると、朝鮮が置かれていた民族的危機をキリスト教の信仰的レベルでなるべく克服しようとした方法とも見れる。

⑤情熱的な信仰や高い自立心

ランバスが、晩年まで朝鮮に深い関心を持っていたのは、ただ東洋を担当する監督という役目のためではなかった。彼は朝鮮の教会の潜在的な力に注目し、とりわけ朝鮮の教会における情熱的な信仰を高く評価した。これは朝鮮の自然環境[899]と共に絶え間ない外部勢力の侵略から受けた苦痛を克服するための独立精神から出ていると考えた[900]。それと同時に、教育と進歩に対する欲求と情熱が日々成長していると考えた。

しかしながら、その情熱はこの世のものでなく、いわゆる天に向かう情熱と渇望を抱いて突き進むものであった。ランバスはここで、このような動向がキリスト教と繋がる時、表れる潜在力を期待した。例えば、単純にキリスト者になることで終わるのではなく、聖書を探求する情熱に繋がり、そこから聖書研究会を組織し、ひいては聖書普及の担い手になり、伝道を推進していく朝鮮人の情熱をランバスは高く評価した[901]。時折、朝鮮を訪問した時、自分に会うため、遠い距離をいとわず、歩いて来た信徒がいたこと自体、ランバスにとっては朝鮮のキリスト者たちの驚くべき情熱を感じさせられた一例でもあった[902]。このように、朝鮮のキリスト者たちの情熱と積極的に奉仕する姿は印象的であった。

とりわけ、朝鮮においてメソヂスト監督教会と南メソヂスト監督教会共同で行われた宣教百年記念運動[903]は、キリスト者たちの積極的な奉仕活動や情熱的な献身を示すことがで

---

899 W. R. Lambuth, 'Korea: Past and Present', *MR*, November-December, 1894, p.204; W. R. Lambuth, *Side Lights on the Orient*, p.108参照。
900 W. R. Lambuth, 'Korea Ripe for Evangelism', *KMF*, Feburary, 1922, p.25.
901 *Ibid*, p.25.
902 W. R. Lambuth, *Side Lights on the Orient*, p.103-104.
903 宣教百年記念運動(Methodist Centenary)はメソヂスト監督教会と南メソヂスト監督教会が分裂する前の1819年に米国メソヂスト教会で最初の宣教師を輩出して100年を記念し、行われた宣教関連行事であった。南メソヂスト監督教会側では1916年宣教局年次会議(the Board of Missions at its annual session in 1916)から百周年記念行事を推進すると決議案を採択した。この時、構成された準備及び宣伝委員会(a Committee of Preparation and Publicity)の委員としてランバスが参加していた。一方、メソヂスト監督教会でも別の記念行事を推進したが、メソヂスト監督教会と南メソヂスト監督教会宣教局の連合事業に行われ、海外の宣教地でもこれを記念する事業が行われた。'Seventy-First Annual Meeting of the Mission Board', *MV*, June, 1917, pp.162-163;W. W. Pinson, 'A Hundred Years of Methodist Missions – Plans Maturing For Great Joint Celebration', *MV*, January, 1918, pp.2-3参照。

きる代表的な例となった。当時、ランバスが見ていた朝鮮のキリスト者たちの情熱は、進んで志願するところに見ることができ、ひいては朝鮮のキリスト者たちが宣教師をはじめ他者が支えを求めるよりは、自ら問題を自覚し、解決しようと努力していたことである[904]。自分たちの信仰共同体、そして教会を設立するために1ドルあるいは2ドルなどの小さい金額から、ある時は全財産を捧げるその姿が、ランバスにとって極めて新鮮に感じた。そのように朝鮮のキリスト者たちの情熱は、自立意識に繋がり、その基となった。

その中でも、ランバスが見た朝鮮の教会の女性たちは、自立意識が高い存在であった。一度はランバスが朝鮮での予定を済まし、本国に帰る時、朝鮮の教会の女性たちから次のように依頼されたことがある。

私が朝鮮のあるところで礼拝堂を新設するための援助金を要請すると、朝鮮の教会の婦人たちが銀指環7つを渡し、それを持って米国に戻り、その事情を話すと、1つは1000ウォンで売れて、もう一つは500ウォンで売れたので朝鮮に送った。残りの5つはまだ持っているという[905]。

朝鮮のキリスト者たちが、ランバスに自分たちの教会建築の援助を要請したのではなく、むしろランバスが朝鮮のキリスト者たちに礼拝堂建築のために助けを求めたことがある。元々、宣教初期の未自立の段階で、現地の信徒たちは宣教師や本国の教会の豊富な財力に頼るのが一般的だが、ランバスは朝鮮ではその逆の状況を演出していたのである。ランバスが朝鮮の教会の自立意識を十分に理解していたからこそ可能であったことであった。

そしてランバスは、朝鮮の教会の女性が教会建築寄金のために捧げた銀指環を本国に持ちかえって販売し、その代金を朝鮮に送った。このような朝鮮の教会の自立意識を、ランバスは本国で発行されていた南メソヂスト監督教会の宣教師機関誌*the Methodist Review Quarterly*を通じて、米国の教会に積極的に紹介した。

朝鮮の教会のすべての[宣教]事業は、すでに自力運営(self-supporting)状態となった。まだ朝鮮人の多くが肉の小片すら食べず、相当厳しく生きているにもかかわらず、教会の全体献金は毎年総額125,000ドルを超えている。朝鮮の男性はからすきで田畑を耕し、草取りする牛を売ってその金額で礼拝堂が建てられることを知っている。また、朝鮮の女性たちは、自分たちの結婚指輪を捧げたり、髪の毛を切って販売し、それは福音をのべ伝える時に使われる。そして朝鮮の教会の全信徒のうち1/6が、すべて聖書勉強会(Bible training classes)に入っており、彼らはキリストの勝利を得るために、日常生活で使命を果たしていく[906]。

---

904 W. R. Lambuth, 'Korea Ripe for Evangelism', *KMF*, Feburary, 1922, p.25.
905 『公立新報』、1908年8月26日。
906 W. R. Lambuth, 'Book Reviews – Men and Missions', *The Methodist Review Quarterly*, April, 1910, p.382-383.

教会を建築するため、当時、財産の大きな部分を占めていた牛を売ったり、福音伝達のために有用に使う経済的資金を集めるため、大事な結婚指輪を教会に捧げたり、長い間、伸ばした髪の毛を切って売る朝鮮の教会の特色は、朝鮮人たちの独立意識に由来し、それが教会の信仰の情熱と自立意識に繋がると考えた。それ故、ランバスが「朝鮮人のキリスト教信仰は世界で最上であり、朝鮮で盛況なキリスト教の事情を直接見ても、朝鮮人は神が選び、将来の東洋人を救わせるためだ」[907]と高く評価しているのもある意味で過言ではなかった。

まとめ

米国の著名な宣教師家系を背景とし、両親の宣教地である海外(中国上海)で生まれ、幼年生活を過ごした彼の生涯は、極めて独特なものであった。初期の段階で、彼の生活は母国である米国または西洋文化よりも、むしろ中国などの東洋文化に慣れていたと言える。しかし、健康が優れなかったランバスは、休養のため米国と中国を往来する長時間の旅程を持つことになるが、その時間がランバスの信仰において重要な影響を及ぼした。特に、太平洋を挟んで東洋と西洋を往来する一ヶ月に近い長距離旅行の中で、彼は自分の姿を深く内省することになる。この時間は、彼が両親と同様に宣教師として献身するという決心に大きな影響を与えたのである。

基本的に彼は宣教地(東洋)で生まれ育ったため、西洋とは異なる文化である東洋での生活と文化に拒否感なく順調に適応して過ごすことができた。したがって南メソヂスト監督教会の日本開拓宣教師として派遣された当時も、彼は日本文化を東洋の大きな枠の中で尊重しつつ、理解することができた。それと共に、日本人を綿密に観察した彼は外的な部分のみならず、内的または精神的なところも共に観察し、日本人の独特の特徴を見出そうとしていた。神道と仏教という二つの宗教を中心に日本の伝統文化を観察できたのも、彼がすでに東洋文化になじんでおり、他宗教に対する極端な拒否感を持たない包容的な感覚を持っていたため、可能なことであった。

その一方で、ランバスが、西洋人のDNAを受け継ぎ、西洋的視点を持っていたことも事実だと言える。彼が日本を「日出ずる国」(the Land of the Rising Sun)と例えたその表現も、厳密に考えれば、西洋から東洋を見た西洋人としてのまなざしの代表的な例と言える。そのため、西欧文物を積極的に受け入れようとした日本の明治政府と天皇を否定的に見ることもなかった。むしろ、西洋的な観点からは、日本の天皇は西欧文化を受容するに当っ

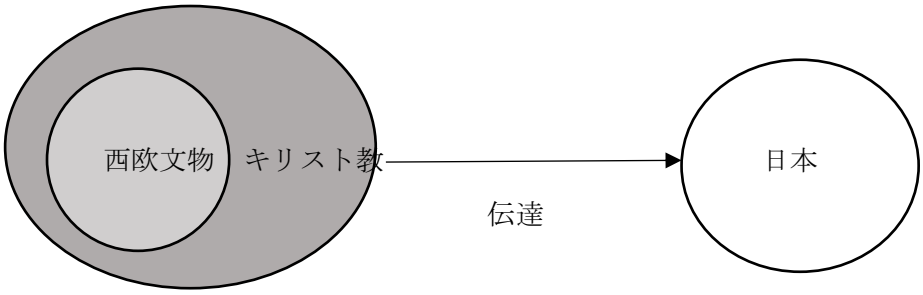
907 『新韓民報』、1921年6月30日。

て、肯定的な効果をもたらす日本の独特な政治制度だと認めたのである。もちろん、これは西欧文物を受容することにおいて、限定された観点であった。

このようなランバスの西洋的な観点は日本がキリスト教を受け入れることに対しても肯定的に作用すると考えた。当時の西洋人が皆そうだったように、ランバスもキリスト教の宣教は近代化を伴うと考えていた。すなわち、キリスト教の福音を伝達する過程の中で、自然に西欧文物が伝わり、それが日本人たちを精神的・身体的に豊かにすることができる要素になると考えた。いわゆる、宣教を通じて、終局には西欧式近代化も完成に至ることができるという論理であった。そのような論理を持っていたため、日本で彼が重点を置いた宣教方法は教育宣教であった。とりわけ、関西学院をはじめとする日本内のミッションスクールの運営と関連して、直接・間接に関与していったのは、このような西欧式近代化を伴った宣教方法の一環だったのである。したがってミッションスクールという教育宣教を強調しながらも、その中の聖書教育を中心にしようとしたのはキリスト教の宣教という大きな枠の中で、自然に西欧文物と繋がるという理解があったためである。

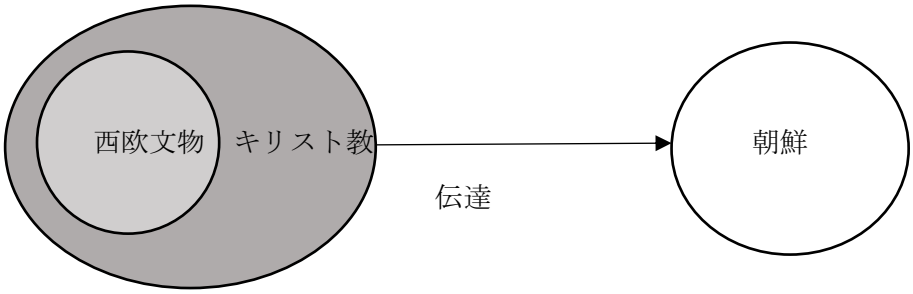
もちろん、ランバス自身が南メソヂスト監督教会の日本開拓宣教師という誇りを持っており、それによる責任感を徹底に負っていこうとした。1907年、日本内のメソヂスト教会が合同し、日本メソヂスト教会が成立した時、全権委員として積極参加したのは当時の宣教局総主事という職責からのものであるが、そこには彼が日本の開拓宣教師及び初代総理だったという誇りと責任感のためであったことは無視できない。さらに、幼年時代から宣教地で直接生活しながら、身に付いていたエキュメニカル精神も日本メソヂスト教会が設立されることにおいて、肯定的な影響を与えたと評価できる。また、ランバスの生涯において、日本の教会は爆発的な成長と復興を成し遂げてはいないものの、彼が理解した日本教会の姿は、さながら初代教会の使徒たちが各地に展開し情熱的に宣教していた姿に似ていた。この事実を総合してまとめると、ランバスの日本に対する理解は以下のような図式に表現できる。

<表 - ランバスの日本宣教理解>



以上のような観点は、ランバスの朝鮮理解に関しても大きく変えてはいない。キリスト教と西欧文物、すなわち、近代化という二つの要素が伴うと理解されたのである。キリスト教という枠の中で西欧文物という要素が含まれており、福音を伝える過程は自然に近代化を同伴すると考えられた。換言すれば、彼の朝鮮理解も西欧的東洋理解をもとにできていたというのである。これを図式に表現すると下記のようになる。

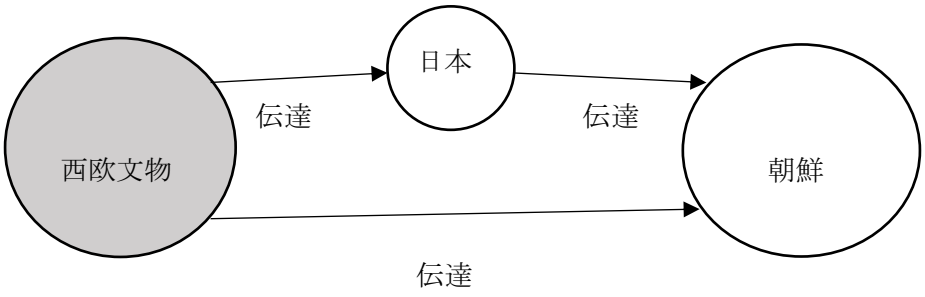
<表 - ランバスの朝鮮宣教理解>



もちろん、ランバスは当時の西洋人と比べ、可能な限り朝鮮の独自の気質や伝統文化などを把握しようと努力した。このような彼の努力は、特に朝鮮の歴史を理解とする姿勢に繋がっている。これは当時、朝鮮が日本により侵略を受け、支配される時代的苦痛を共感しようとする姿勢と呼応している。すなわち、歴史と文化など朝鮮の内面的・精神的な領域に関しては、日本との関係を脇におき、朝鮮と朝鮮人に集中して理解しようとしていたのである。したがって彼が1919年以降、東洋担当の監督として来朝した時、三・一運動をはじめとする独立運動で投獄された南メソヂスト監督教会の指導者たちを尋ね、慰めることができたのは、まさに上記のような次元で理解しようとした態度だと考えられる。

一方、彼が見た朝鮮の文化にはほぼ前近代的な要素が多いと考えた。そして朝鮮は日本とは違い、政府がこのことを改革するにあたって、消極的で力を発揮できないと考えた。それ故、彼はキリスト教と近代的な文物を結合する宣教方法が必要だと考えた。日本のように教育宣教を強調した理由もここにあった。また西欧文物と関わる近代化に関して、ランバスは日本が朝鮮の助けとなると考えた。すでに明治維新という近代改革を通じ、西欧文物を成功的に受容していた日本が朝鮮の先導者のような役割となり、物質や経済的分野において肯定的な影響を与えると期待したのである。これをまとめると、以下の表のようである。

<表 - 西欧文物と関連したランバスの朝鮮理解>



ランバスはキリスト教をはじめとする宗教文化的、精神的な部分とは別に西洋文物に関しては、日本を経て伝達されるのも朝鮮にとって有益であるという認識を持っていた。そのような理由で、彼は日本の朝鮮支配に関して積極的に反対をする立場ではなかった。日本の朝鮮支配に対してその苦しみを理解しながらも、むしろ朝鮮を近代化させるためには朝鮮が忍耐すべき時代的課題だと考えていたのである。したがって彼は日本の朝鮮支配に積極的な反対の立場を出しはしないが、同時に独立運動による在監されている牧会者を尋ね、慰めるという両面的態度を示した。

このように朝鮮の宣教は、日本の朝鮮支配という当時の時代的状況に関わらず行うことができた。そのように彼の日本と朝鮮、両国の宣教はその間、エキュメニカル会議に参加しながら彼の宣教思想の中で落ち着いた土着教会を育成する議定により各々別の構図の中で理解されていたのである。ちなみに、ランバスは晩年に朝鮮の宣教現場について、以下のように宣教的目標を示した。

この[宣教]現場が実を結ぶことは確実であるが、この時間の中で我々がやるべき義務は何なのか。まず、罪から救われる福音をより広く説教することである。第二、男女の若者に彼らの人生を献身するようにキリストの御言葉を強調する。第三、効率的な宣教事業が行われるように説教と教えで切実に訴えることである。第四、聖霊の臨在と能力のために、祈祷するように全ての教会に要請する。第五、イエスは皆を救うことができて、救うという事実を聞いて分かるように十分な機会を持ち、宣教区域(territory)にいる老若男女皆にわたるまで、この福音伝道の運動を止めないと計画し、強調すべきである[908]。

[908] W. R. Lambuth, 'Korea Ripe for Evangelism', *KMF*, Feburary, 1922, pp.25-26.

このように彼は、当時支配や被支配という日韓関係の緊迫した状況の中でも朝鮮では日本の支配とは大きく関わらない一般的宣教の原則を提示し、朝鮮の宣教的動力を拡張させようとした。それ故、彼が朝鮮の宣教の発展と成長のため、可能な限り行政的支援を惜しまず、前例のない朝鮮の教会の成長を言わば「ゴム教会」(the Rubber Church)と称し、肯定的に展望した。さらに朝鮮の教会の情熱的な信仰と自立意識は、むしろ米国の教会が見習うべき要素の一つとして高く評価したのである。

第5章：南・北メソヂスト監督教会における東アジア宣教の展開とその特色
- ハリス及びランバスと各宣教部間の関わりを中心として

本章は、ハリスとランバスという両者を中心として、戦前におけるメソヂスト監督教会(Methodist Episcopal Church)と南メソヂスト監督教会(Methodist Episcopal Church, South)の宣教の展開とその特色を相互に検討することを目的とする。ハリスはメソヂスト監督教会において、日本開拓宣教師として宣教活動を開始、日本及び朝鮮の宣教監督として日韓両国と緊密な関わりを結んできた初期の代表的な教会指導者の一人である。同時代に、ハリスと比較できる人物としてランバスをあげられる。ランバスは南メソヂスト監督教会の中国宣教師を経て、日本の開拓宣教師、そして宣教局主事及び東洋担当の監督を歴任した。ハリスに劣らず、東アジアの中で活発な活動で位置付けていた教会の指導者だと言えるだろう。両者とも、最初に海外宣教師として、後日には監督として選出され、しかもその監督職も海外の宣教現場と直接関わりがあり、相当な影響力を及ぼすことができる位置にあった。したがって両者を比較しながら検証することは、当時の南・北メソヂスト監督教会の東アジア宣教において、その動向と特色を理解する点で大きな意味があると考える。逆に当時、東アジア宣教の動向の中で、ハリスとランバスが、各教派の宣教政策によっていかなる影響を受けたのか検証することも、教派と指導者レベルの人物の間で行われる宣教的な政策を把握することにおいて意味ある検討作業だと言えるだろう。

さらに、米国のメソヂスト教会は、19世紀に至って始まったいわゆる第2次大リバイバルの影響で、19世紀半ばには米国のプロテスタント教会の中で最大の規模となり、相当な影響を及ぼしていた教派であった。そして海外宣教、とりわけ日本と朝鮮という東アジアの宣教地で非常に大きな影響力を持っていたと言える。それ故、本章ではハリスとランバスを中心として、彼らが生きてきた時期を時間的な軸として設定し、これを基にして、当時メソヂスト監督教会と南メソヂスト監督教会における東アジア、とりわけ日本と朝鮮で行われた宣教活動を両教派の相互関係の枠で検討してみたい。

第1節：1844年以前における米国メソヂスト教会の東アジア宣教

(1)19世紀以前の米国キリスト教界における宣教神学的背景と動向

1492年1月、イタリアの探検家であるコロンブス(C. Columbus)は、カスティーリャ王国(Kingdom of Castile)の女王、イザベル1世(Isabel I de Castilla)を尋ねて大西洋を航海し、

インド(India)へ向かうことを提案した。提案を受けたイザベル1世は、何よりも東洋人にキリスト教を伝達し、当時に東洋を攻め、キリスト教の聖地であるエルサレムをイスラム勢力から取り戻すことができるという期待を抱いて、コロンブスを積極的に支えた。カスティーリャ王国の絶対的な支持と援助を背に負ったコロンブスは、大西洋を渡り、ついに1492年10月12日、長い航海の末に米大陸を発見した。

以降、ますます本格化されたヨーロッパ人たちの海外進出は16世紀に入り、スペインとポルトガル両国が相互に競走しながら行われた。その中、米大陸の進出に優先権を持ち、最も積極的にこの事業を推進した国はスペインであった。スペインは、16世紀初頭から本格的に中南米へ進出し、カリブ海及びメキシコへ入り、アステカやマヤ文明を背景に持つ先住民を攻め、支配した。スペインは、以上のような武力による植民地建設によって、自分たちの国教であるカトリック教会を拡張していった[909]。しかし16世紀後半に入り、スペインは新しく海洋覇権へ挑戦する英国に打ち破られ、米大陸での影響力は徐々に衰退の一途をたどるようになった。これはまさに、カトリック教会からプロテスタント教会への宗教的な転換を意味する事件であった。そのように英国をはじめとしてヨーロッパ各国のプロテスタント教会が米国に進出するようになった。プロテスタント教会の各派は米東北部を中心に定着し、発展していった。記録によると、1740年と1770年の間、米国でキリスト教が一番急激に成長した時期だと言われている。この期間、聖公会(Anglican Church)の海外宣教団である福音伝播協会(Society for the Propagation of the Gospel in foreign parts、略称SPG)が約150か所の教会を設立し、長老派教会(Presbyterian Church)とバプテスト派(Baptist Church)も少なくとも400ヶ所の教会を新たに開拓するなど、前例がないほどの成長が成し遂げられた[910]。

一方、草創期の米大陸で展開し、成長したプロテスタント教会は聖公会と会衆派教会(Congregation Church)であった。したがって1812年、米国で最初に組織された宣教団であるAmerican Board of Commissioners for Foreign Missions(略称ABCFM)が、会衆派教会の背景を強く帯びたことと聖公会の海外宣教団であるSPG及び教会伝道教会(Church Missionary Society、略称CMS)が、いかなる宣教団よりも積極的に活動した。特に、英国植民地のもとで聖公会の宣教は英国政府によって保護され、支えられたのである。しかし、植民地時代の後半に入り、米大陸はより多様な教派的色彩を帯びることにながら、そのことはまさに聖公会と会衆派教会の割合が相対的に減少していることを示した[911]。そのように

[909] 柳大永、『美國宗教史』(米国宗教史)、前掲書、43頁参照。
[910] 同書、145頁参照。
[911] 同書、146頁参照。

米大陸に進出したプロテスタント教会は、ヨーロッパ各地域の特色が込められた多様な教派的教会として展開したのである。ヨーロッパの多民族、多様な文化、多様な言語という背景の中で、形成され発展していったからである。

その中、1730年代に第1次大リバイバル(あるいは大覚醒運動、Religious Awakening Movement)が起きた。エドワーズ(J. Edwards)などの主導的なによるこのリバイバルは当時、米大陸に居住していた人々に大きな宗教的刺激を与えたのみならず、人生の転換をもたらす、言わば、信仰的な変革事件でもあった。特に、第1次大リバイバルは再生(rebirth)的変化だと言える回心を強調し、米大陸におけるプロテスタント諸教会に大きな影響を与えたのである。教会とは、ある面で回心を経験したキリスト者たちの集まりだということが強調された[912]。

一方、第1次大リバイバルによって、ニューイングランド地域を中心に形成されていた米大陸のキリスト教の分布に変化が起きるようになった。当時、会衆派教会の勢力が強かったこの地域に、人間の理性を強調するアルミウス主義が次第に受容されるようになったのである。それ故、これまで教理を強調していた伝統的なカルヴィニズム神学から離れ、いわゆる超自然的合理主義とユニテリアリズムなど急激な自由主義神学が台頭してきた。このような自由主義神学は、会衆派教会に基づいて設立されたハーバード大学を中心に多くの支持者を得るようになった[913]。

一方で、ニューイングランドの神学的な流れの中では、エドワーズジュニア(J. Edwards Jr.)、ベラニー(J. Bellany)、ドワイト(T. Dwight)、テイラー(N. Taylor)、フィニー(C. Finney)などのイェール大学を中心として形成された他の流れもあった[914]。彼らはハーバード大学を中心に形成された神学より進歩主義の色彩が濃くはないが、伝統的なカルヴィニズムから逃れようとした試みは同様であった。特に、彼らは第2次大リバイバルの主役であった。悔い改めと更新を促した彼らは、神の裁きよりも恵みと恩寵を強調した。ここで、人間が神の恩寵を受け入れ、悔い改めることができる可能性を持っていると見なしたのである。すなわち、人間の理性を通し、神の恩寵を受け入れるように決心できるという神学的な論理であった。従ってこれは非キリスト者たちを対象に悔い改めを促し、強調する復興運動の神学的な根拠として作用していったのである。以上のように、米大陸の神学と信仰は、伝統的なカルヴィニズムの原理原則から離れ、人間理性の介入をある程度認める形として形成されていった。このような動向は、再びムーディ(D. T. Moody)やトーリー(R. A. Torrey)などに代

---

912 W. Walker, *A History of the Christian Church*, New York: Charles Scribner's Sons, 1952, pp.572-579.
913 李德周、『韓國土着敎會形成史研究』、前掲書、51頁参照。
914 同書、51頁参照。

表される19世紀末から20世紀初頭にかけて台頭してくる大学生中心の学生ボランティア運動(Students Volunteer Movement)や日曜学校運動、YMCA運動などに続いていった。これはまさに宣教の動向を強調する米国社会の雰囲気を導く原動力となったのである。

(2)分裂(1844年)以前の米国メソヂスト監督教会の神学と宣教的動向

1784年12月24日、米国ボルチモアのラブリーレーンチャペル(Lovely Lane Chapel)にて米国のメソヂスト監督教会における最初の年会が組織され、開催された。いわゆるクリスマス年会(Christmas Conference)と称する第1回年会であった。このクリスマス年会は12月24日に開催され、翌年(1785年)1月2日まで10日間続いた[915]。このように米国のメソヂスト監督教会は、「the Methodist Episcopal Church in America」という名称で組織され、教会としての第一歩を踏み出した。

初期、米国のメソヂスト監督教会は復興運動の強力な雰囲気によって、急激な成長を成し遂げる。そしてこのような流れの中でメソヂスト監督教会は、19世紀半ばに至っては米国のプロテスタント教会の中でも最も規模が大きく、相当な影響力を及ぼす教派として成長した。上述したように、大リバイバルの主な現状はいわゆる罪人の回心であった。とりわけ第2次大リバイバルの影響でメソヂスト監督教会は言わば幕屋集会(camp meeting)を中心とする伝道活動を活発に行っていた。メソヂスト監督教会の急激な成長と復興には、以下のようないくつの理由をあげることができる[916]。

まず、説教者と信徒指導者(layman leader)の積極的な召命意識と献身である。彼らは安価な給料にもかかわらず、情熱的な召命意識を持ち、広域地域を訪問し、野外集会を通して福音をのべ伝えようとした。第二に、クラスミーティング(class meeting)をはじめメソヂスト教会の組織が、伝道活動に効率的に活用された。とりわけ、メソヂスト教会の特徴である小グループ運動は、農村や西部地域を開拓する過程において、効果的な宣教結果をもたらした。第三に、聖書や説教や祈祷や賛美などの礼拝を構成する基本的な要素に忠実であろうとした。メソヂスト監督教会の説教者と信徒指導者は行く先々で、集会を開き、礼拝を捧げた。第四に、教育に相当な関心と物質の力を注いだ。各教会において、日曜学校の組織に相対的に力を注いだし、ミッションスクールを数多く設立し、一般人にも自然にキリスト教に接することができる機会を提供した。第五に、国内をはじめ海外宣教へ興味を持ちはじめた。これは西部開拓に伴い宣教ルートで、インディアン(Indian)や黒人などに対する宣教活動がメ

915 金洪基、『監理教會史』、ソウル：圖書出kmc、2003、444-445頁参照。
916 これと関連する詳細な内容は 同書、471-475頁参照。

ソヂスト監督教会の中で活発に行われた。西部開拓が仕上げられる頃には、太平洋渡り、新しい地域まで進出しようとしたフロンティア精神を強く帯びていた。そして第六に、キリスト教書物を普及することに尽くした出版事業の活性化であった。すでに1789年、最初のメソジスト出版社(the Methodist Book Concern)が設立され、様々な神学及びキリスト教書物が出版された。また、1826年には週刊新聞である*the Christian Advocate*が創刊され、キリスト教文化の普及と伝達に大きな効果をもたらした。

以上の項目の中で注目すべきことはまさに国内外に向けた宣教と教育である。すなわち、西部開拓に伴いメソヂスト監督教会の説教者と信徒指導者の活動範囲がどんどんと広がり、これはメソヂスト監督教会の中で宣教に関する興味を呼び起こした。これに加え、当時メソヂスト監督教会の神学的な雰囲気はいわゆる大リバイバルに大きな影響力を及ぼしたウェスレーの体験中心的な復興運動(revivalism)と伝道活動(evangelism)中心の宣教神学であった[917]。すなわち、人間の堕落と二重予定説を強調するカルヴィニストの神学思想とは全く違う実践中心の神学だったのである。これはヨーロッパの敬虔主義とアルミウス主義とも繋がる神学であった。

以上のように、実践中心の宣教神学は伝道者を養成するための教育に関心を引き起こすまで具体的に展開した。福音伝達のための教会指導者並びにキリスト教教養人の養成に大きな関心を持っていたメソヂスト監督教会は、米全域の各地毎に神学校をはじめとするミッションスクールを設立していった。それで設立されたメソヂスト教会系の神学校と大学は、南北戦争頃には200か所に達するほどであった[918]。この時期に設立され、草創期にあたって米国のメソヂスト教会の神学形成に重要な役割を担った代表的な学校が、ペンシルベニア州のアレゲニーカレッジ(Allegheny College)、インディアナ州のデ・ポーカレッジ(De Pauw College)、バージニア州のエモリー＆ヘンリーカレッジなどであった。以上のような背景のもとで、米国のメソヂスト監督教会は19世紀初頭から急激に成長したが、19世紀半ばに至っては米国のプロテスタント教会の中でも最も規模が大きくて、相当な影響力を及ぼす教派として発展していくことができた。

一方、上述したように、独立以降、勢力拡張のため、支部開拓が活発に進行する19世紀に至り、米国のメソヂスト監督教会も西部へ向かった。そして全国各地に教会を設立し、宣教的な情熱を鼓舞する雰囲気が拡散していった。そのような状況で、メソヂスト監督教会の宣教を主導的に担う専門的な機関の設立が要請されたが、1819年にニューヨークでメソヂスト宣教会(Mission Society of the Methodist Episcopal Church)が組織されたことも、上述

917 李德周、『韓國土着敎會形成史研究』、前掲書、53頁参照。
918 同書、53頁参照。

した宣教的な雰囲気がその要因であった。当時、米国のメソヂスト監督教会は、1819年4月5日、ニューヨークでバングス(N. Bangs)とスール(J. Soule)牧師の指導の下で、国内外の宣教を目指して数人が集い、組織されたメソヂスト宣教協会(Mssion Society of the Methodist Episcopal Church)を組織した。これがまさに南・北メソヂスト監督教会の宣教における最初の起点となったのである[919]。

第2節：米国の南・北メソヂスト監督教会における東アジア宣教開始と特色

(1)メソヂスト監督教会の東アジア宣教と開始

南北教会が分裂した後、メソヂスト監督教会で最初に着手した海外の宣教地は、東アジア、その中でも中国であった。当時の中国は、世界のいかなる地域よりも宣教師たちにとって魅力的なところであった。その理由は、中国がアヘン戦争による敗戦のため、西洋の列強たちに門戸を開放しなければならなかったからである。すなわち、1840年から1842年に中国と英国の間に勃発したアヘン戦争の結果として、両国は1842年南京条約を締結するようになり、引き続き米国も2年後の1844年に望厦條約という不平等条約を締結したため、中国に進出することができる名分を得たわけである。そのゆえ、西洋の諸宣教団体は、新たに開放された中国を魅力的な宣教地として考えるようになり、本格的な宣教準備に入った。結局、メソヂスト監督教会も以上のような時代的な宣教の潮流に参加し、1847年に中国にコリンズ(Judson Dwight Collins)とホワイト(Moses C. White)を派遣し、中国宣教の門戸を開いた[920]。それから、同年10月14日にヒッコク(Henry Hickok)とマクレー(Robert Samuel Maclay)が中国宣教のメンバーとして追加され、メソヂスト監督教会は、中国宣教に本格的な拍車をかけることになった[921]。

しばらくの間、中国はメソヂスト監督教会のアジア地域の宣教において、唯一独占的な地位にあった。中国宣教を開始した最初の年から、中国宣教以前に宣教師を派遣した南米に比べて中国宣教に10倍以上もの投資がなされ、さらに1860年代からは、メソヂスト監督教会の最初の海外宣教地であるアフリカに支出される財政を越えるほどであった[922]。それほど、メソヂスト監督教会が中国宣教に集中する傾向を見せた[923]。1856年にインド宣教を開始す

---

919 W. H. Daniels, *The Illustrated History of Methodist in Great Britain, America, and Australia, form the Day of the Wesleys to the Present Time*, New York: Phillips & Hunt, 1883, p.726; J. Cannon Ⅲ, *History of Southern Methodist Missions*, Nashville: Cokesbury Press, pp.38-39.
920 J. M. Reid, *Missions and Missionary Society of the Methodist Episcopal Church Vol.1*, pp.325-326.
921 *Ibid*, p.333.
922 *Ibid*, pp.470-471.
923 W. H. Daniels, *The Illustrated History of Methodist in Great Britain, America, and Australia, form*

ることになり、アジアに向かうメソヂスト監督教会の宣教的な関心が東北アジアと西南アジアとに区分されるようになったが、それにもかかわらず、アジア、特に東アジアの中で、中国が持っていた位置は、他の地域より圧倒的であった。

したがって、メソヂスト監督教会における東アジアの宣教とは、中国を中心に考えられるようになり、周辺地域への拡張は中国を拠点としながら行われるようになった。当時、それは当然な過程として受け入れられていた。以上のような宣教の潮流は、メソヂスト監督教会による日本宣教を生み出していった[924]。メソヂスト監督教会は、1873年に禁教令が撤廃されたその年を起点として始まった[925]。しかし、実際に日本宣教を推進しようとした動きは、それより20年ほど前の1850年代の初頭から始まったが、当時はまだ日本が外国に門戸を開放していない時であった。まさにその中心にマクレーがいた。彼は先述したように1848年に中国福州に着き、活動しはじめた中国の開拓宣教師の中の一人であった。初期の日本メソヂスト教会の牧師山鹿旗之進が、1923年に記録した次の一文を読むと、メソヂスト監督教会における日本宣教がどのような流れと動きで行われるようになったのかがよく理解できる。

嘉永六年(1853年)8月、水師提督ペルリ[M. C. Perry]が軍艦を卒ねて、香港に寄港したとき、マクレー氏は日本開港の談判、首尾よく整ふたといふ事を傳聞した。そして傳道の好機逸すべからずとて、乃ち福州宣教部より、本國の殿傳道局に對し、速に日本傳道を開始すべき事を進言した。明治4年(1871年)マクレー氏は、休養のため歸國した。翌年には、大に教會の機關新聞を透して、この事業の必要を論じ、且つそれに對する資金の義捐を訴えた。然るにそれに應じて、諸方より傳道局に、寄附金の申込みがあつた。そこで傳道局でもいよく日本傳道の議を決し、貳萬五千弗の豫算を作りて、ヂェ、テ、ペック監督[Bishop J. T. Peck]は、マクレー博士を擧げて、日本傳道の總理とした。それは實に明治5年(1872年)12月、ニューヨーク市に開催されたるメソヂスト監督教會の宣教委員の年會におての事であつた。又ニューヨーク年會[Newark Annual Conference]のヂェ、ジ、デビソン[J. C. Davison]、ボルヂモア年會のヂェ、ソーパル[J. Soper]及び、ピツツバルク年會のエム、ジ、ハリス(後ちのハリス監督)の三氏を擧げて、日本傳道の宣教師とした[926]。

以上の引用文で見られるように、初期の日本宣教は、総理、つまり責任者であったマクレーの指導と管理の下で行われた。ベテラン宣教師のマクレーに、米国から渡ってきたばかりの3人の新人宣教師は積極的に従っていった。本来中国宣教師として任命され、福州に入る前、しばらく横浜に立ち寄ったコレル(I. H. Corell)は、同行した妻の健康悪化とそれに伴う

---

the Day of the Wesleys to the Present Time, pp.726-727.

924 山鹿旗之進、前掲書、1-2頁参照。

925 土肥昭夫、『日本プロテスタントキリスト教史』、前掲書、11頁参照。

926 山鹿旗之進、前掲書、2-3頁。

マクレーのアドバイスを受け入れ、日本へと派遣地を変更した[927]。このような状況の故に、メソヂスト監督教会における東アジア宣教の潮流は、中国から日本に展開されていったことがわかる。

以上のように、メソヂスト監督教会の東アジア宣教において、中国は拠点として中心的な役割を担い、本国の期待感も大きかった。しかし、メソヂスト監督教会の東アジア宣教の関心が中国から移りはじめた。日本という新しい宣教の開拓地が生じたので、自然に本国教会の東アジアの宣教に向かう関心が分散されたというのがより適切な表現だと言えるだろう。もちろん、中国と比べ、26年も遅く宣教活動を開始した日本が財政や人力においても低く[928]、日本宣教の初期には中国語で翻訳された教理書や伝道文書が活用されたの[929]。時間が経過するほど、一方的に中国に偏重していたメソヂスト監督教会の東アジア地域における宣教的な関心や支援が次第に日本に分散されるようになった。しかも、マクレーやコレルのように予め中国を経験し、本来中国に対する宣教的な関心を持っていた宣教師よりも、はじめから日本を宣教地として直接米国から派遣されてきた宣教師たちの数がますます増えていき、日本宣教師会の中で多数を占めるようになった。一方、日本にはすでにマクレーというベテラン宣教師がいたので、中国内のベテラン宣教師に頼る必要が全くなかったので、日本宣教部は宣教活動のために独立的な環境と条件を備えることができた。このような状況の中で、メソヂスト監督教会は、東アジア宣教においてその中心軸を日本側にシフトするようになった幾つの決定的な事件があったが、その一つがまさにメソヂスト監督教会の朝鮮宣教に関することであった。

1883年に米国西部で首都ワシントンD.C.に行く列車の中で、偶然に朝鮮政府が派遣した使節団と出会ったボルチモア第一メソヂスト監督教会の牧師ガウチャー(J. F. Goucher)は、朝鮮に興味を持つようになり、自分の大学の先輩で当時日本宣教師として活動していたマクレーに次のような書簡を送り、朝鮮宣教の可能性を模索するように依頼した。

1883年11月6日に私はメソヂスト監督教会の海外宣教委員会で、もし彼らが隠遁の国[朝鮮]まで宣教事業を延長することができると思うし、またメソヂスト監督教会の日本宣教部の管理の下で、朝鮮で宣教を開拓して行けば……私はその事業のために喜んで二千ドルを送るという手紙を送りました。貴方[マクレー]に朝鮮に寄り、その地を調査し、宣教部を設置できる可能性を頼んでもよろしいでしょか。もしできれば私たちは、異教徒の地で最初のプロテスタント教会を建てる者になるでしょう。日本がその名誉のことを

---

927 J. M. Reid, *Missions and Missionary Society of the Methodist Episcopal Church Vol.1*, p.412.
928 *Ibid*, pp.470-471.
929 マクレーはすでに福州にいた時、『覺世文』、『受洗禮之約』、『祈禱文』、『依徑問答』、『榕腔神詩』、『信德統論』、『美以美教會禮書』、『美以美教會禮文』などのメソヂスト教会の漢文教理書を多数刊行したことがある。*Memorials of Protestant Missionaries to the Chinese: Giving a List of their Publications and Obituary Notices of the Deceases*, Shanhae: American Presbyterian Mission Press, 1867, pp.177-178.

負わなければならないというのはかなり適切であり、貴方がその仕事を始めることができれば、それはすでに貴方が教会でこれまでしてきた奉仕に似合う仕事として有益をもたらすでしょう[930]。

以上の書簡によると、ガウチャーは、朝鮮宣教がメソヂスト監督教会の日本宣教部の管理下で進行されなければならならず、そのように行われることが何より適当だという意見を持っていた。ガウチャーの要請で、マクレーは1884年7月にソウルを訪問し、高宗から教育と医療事業に関する許可を受け、日本に戻った[931]。そして8月28日から、東京築地教会で開かれた第一回メソヂスト監督教会日本年会で、朝鮮訪問の結果を報告した。マクレーの報告は、年会員の朝鮮宣教の開拓に対する大きな関心をもたらしたが、結局、その関心が公式に表明されるようになった。当時、日本年会の中で、特別委員会として組織された「朝鮮国伝道委員会」(Special Committee on Corea)がまさにそれであった。年会三日目に組織された朝鮮国伝道委員会は、マクレーを委員長として、ロング(C. S. Long)、ハリス、栗村佐衛八、飛鳥賢次郎などを委員として構成され、朝鮮宣教が具体的に推進していった[932]。

以上のように日本年会で組織された朝鮮国伝道委員会は、朝鮮宣教の開拓のため、積極的な活動を展開していった。何より年会という公式窓口を通して、米国教会に朝鮮宣教の当為性を主張し、予算と人員(2名)、そして活動内役(教育と医療)というより具体的な項目を決議し、本国(米国)教会が可能な限り早く朝鮮宣教を開始することができるように促した[933]。このような日本年会の積極性は、メソヂスト監督教会宣教局に反映され、年末にアペンゼラー(H. G. Appenzeller)(教育)とスクラントン(W. B. Scranton)(医療)などの二人の宣教師がメソヂスト監督教会において、朝鮮の開拓宣教師として任命・派遣され、朝鮮半島に入り実を結ぶようになった。アペンゼラーとスクラントンが朝鮮半島に入る前にも、彼らは、日本にしばらく立ち寄り、マクレーの指導下で第一回メソヂスト監督教会朝鮮宣教会(Korea Mission)を開き、在日宣教師たちの積極的な協力を得ながら、朝鮮宣教の準備を備えていった[934]。

このようにメソヂスト監督教会の朝鮮宣教は、中国宣教部を通して行われたのではなく、日本宣教部を通して行われた。第一回メソヂスト監督教会日本年会で朝鮮宣教をめぐって十分に論議され、具体的な決議にまで至ったので、東アジアにおいて日中韓の間で行われる宣教的なバランスは、日本に傾く状況であった。

---

930 R. S. Maclay, Korea's Permit to Christianity, *The Missionary Riview of the World*(以下 *MRW*), April, 1896, p.287.
931 『尹致昊日記』、前掲書、81頁参照；R. S. Maclay, *Ibid*, pp.287-289.
932 『日本美以美教會第一年會議記録』、1884、9頁参照。
933 同書、38-39頁参照；*MJCMEC*, 1884, pp.33-34.
934 R. S. Maclay, Commencement of the Korea Methodist Episcopal Church, *GAL*, November, 1896, p.502.

メソヂスト監督教会における東アジアの宣教の中で行われる中心軸とその移動をめぐって、もう一つ言及することができることは、ハリスが日本及び朝鮮の宣教監督として選出されたことである。1904年5月4日から29日まで、米国カリフォルニア州ロスアンジェルスにあるハザード(Hazard)特設公演場でメソヂスト監督教会の総会が開かれた。この時、7名の監督と４名の宣教監督が総会で選出されたが、カリフォルニア地域で日本人宣教のために活動していたハリスが日本及び朝鮮を担当する宣教監督として選出された[935]。

朝鮮宣教を開拓することにおいて、先述したように日本年会の協力が大きかった。以上のような事実をメソヂスト監督教会宣教局も十分に認知していた。一方、当時の朝鮮半島の情勢は、日露戦争の激戦地になり、大きな混乱が生じていた。ロシアの南下を一旦停止させる様子になった日露戦争は、米国にとっては肯定的な状況として転じた。ルーズベルト米大統領が1905年から、朝鮮のために日本に対抗するいかなる形の介入もしないと述べ、「自ら立っていることができない徹底的な無能力」を見せた朝鮮は、戦争が終わると日本の保護領にならなければならないと表明したのは、米国が東アジアの情勢において日本を支持する政策によってもたらされたと言えるだろう[936]。

このような時代的な流れの中で、ほぼ30年間一貫して日本人たちと関係を結んできたハリスを日本と朝鮮両国を担当する宣教監督として選出されたのは、当然の結果であると言える。また、およそ20年前に、朝鮮宣教の過程で日本年会が積極的に介入・関与した事実を知っているメソヂスト監督教会総会と宣教局にとっても、ハリスを両国の宣教監督として任命することは自然な流れであった。このようにメソヂスト監督教会の日中韓における力の中心は、日本側に傾くことになり、ハリスはその中心的な人物になった。

以上のように、メソヂスト監督教会の東アジア宣教はまず中国を通して行われたが、1859年にインド宣教を開始したため、東と西にその力量が分散するようになった。ここに東アジア地域では中国が続いて主導権を持ちその動向を導いていったが、日本宣教部と日本教会が次第に力を持ち始め、結局、1884年の日本年会で朝鮮宣教に関する主導権を日本教会が持つようになり、日本を支持する米国政界の時代的な雰囲気の中で1904年に親日的な宣教師のハリスが宣教監督として選出されたのである。したがって、日本と朝鮮の宣教監督として赴任し東アジアに居住したハリスが、日本と朝鮮両者の間で積極的な親日活動を展開したことは必然的なことであった[937]。そのゆえ、メソヂスト監督教会における東アジアの宣教的な状況の中で、日中韓の3ヶ国のバランスは急速に日本側に傾くようになってしまった

---

935 General Conference, *Encyclopedea of World Methodist Vol.1*, p.926.
936 柳大永、『開花期 朝鮮과 米国 宣教師：帝国主義 侵略, 開花自強, 그리고 米国 宣教師』(開花期の朝鮮と米国の宣教師：帝国主義の侵略、開花自強、そして米国の宣教師)、前掲書、71-79頁参照。
937 ハリスの親日活動については、『ハリス』、133-170頁参照。

[938]。

(2)南メソヂスト監督教会の東アジア宣教と開始

南北教会が分裂した直後、南メソヂスト監督教会は、メソヂスト監督教会と比べ、相対的に人力と財政において劣勢だったと言えるが、宣教的な熱情は勝るとも劣らなものであった。南メソヂスト監督教会が分裂した後、1846年に開催された初めての総会(the General Conference)において宣教事業をめぐる論議がはじまった。主要事業の中の一つは、海外宣教事業とその組織を整え、推進することであった。そして、その中で着手された海外宣教地は、メソヂスト監督教会と同じ中国であった[939]。南メソヂスト監督教会の立場でも、中国という広く新しい宣教市場は無視することができなかったのである[940]。実は分裂以前は、中国はアフリカと南米に続く三番目の海外宣教地であったが、そのほとんどの地域と人力、財政をメソヂスト監督教会が継承したことを考えると、中国は南メソヂスト監督教会の初めての宣教地だと言っても過言ではない。

南メソヂスト監督教会は、メソヂスト監督教会より1年遅れて、1848年テイラー(C. Taylor)とジェンキンス(B. Jenkins)を中国宣教師として派遣した。彼らは上海に定着し、南メソヂスト監督教会の中国宣教の拠点を形成していった。以降、1852年にカニンガム(W. G. E. Cunningham)が合流し、引き続き1854年にJ・W・ランバス(J. W. Lambuth)とケリー(D. C. Kelly)とベルトン(J. L. Belton)が、1860年にアレン(Y. J. Allen)などが派遣され、強固な宣教部を構成するようになった[941]。

以上のように中国は、南北教会の分裂以降に南メソヂスト監督教会が関心を持ち、初めて着手した海外宣教地であった。しかも、東洋という地理的な位置と中国が持っていた歴史・文化、そして伝統と思想などは、全ての南メソヂスト監督教会のメンバーの耳目を集めることができる最適な素材になったのである[942]。宣教の初期には多大な投資がなされたが、あ

---

938 メソヂスト監督教会が派遣した朝鮮の開拓宣教師であるスクラントンがハリスと不和になり、宣教師職を辞任してから、晩年を過ごした所も本国（米国）ではなく、日本であった。このような事実をみてみると、当時に来朝宣教師たちに及ぼした日本の影響力は少なかったと推定することができる。李德周、『스크랜턴-어머니와 아들의 조선 선교 이야기』(スクラントン-母親と息子の朝鮮宣教の物語)、前掲書、820-830頁参照。

939 Gross Alexander, *A History of the Methodist Church, South in the United States*, p.119.

940 James Cannon Ⅲ, *History of Southern Methodist Missions*, pp.94-95.

941 *Ibid*, pp.94-111.

942 ランバスが1907年に東洋訪問を終え、帰国して翌年に本国で出版した*Side Lights on the Orient*という著作も当時の東洋に慣れていない西洋人、特に南メソヂスト監督教会の子どもたちに自分の東洋訪問記を紹介し、関心を呼び起こす目的として著述された。Walter R. Lambuth, *Side Lights on the Orient*, pp.5, 7.

まり満足する結果をもたらすことができなかったが[943]、南メソヂスト監督教会の最初の海外宣教地である中国を簡単に放棄することができなかったとも言える。

結局、中国は南メソヂスト監督教会の海外宣教において中心にならざるを得ず、特に東アジアの宣教において拠点のような役割を果たすことになった。メソヂスト監督教会における日本宣教の過程について前述したように、南メソヂスト監督教会の日本宣教も中国を除外して言及することは難しい。これを巡って、南メソヂスト監督教会における日本宣教の歴史を整理した中村金次は、次のように記述している。

これより先き支那には宣教部が設けられ、傳道は開始された、宣教師は時々日本に来つて、その明媚なる風光と温和なる気候とに大なる魅力を感じ、その休暇を日本で過す事も度々であつた。ゼー、ダブリユ、ランバス、及同夫人其他ロチ、ランキンやドラ、ランキン(Mrs Locie and Dora Rankin)の如きは其人々であつた。老ランバス夫人は息若ランバス(W・R・Lambuth)と其家族の為めに支那の気候は永住に適せず、日本こそ格好なるべしとの考を抱いて居つた。一八八五年老ランバスは傳道局に『蘇州の気候は如何にしても小生と家族との健康に適せざる事が明白になりつある事を報ぜざるを得ざるは誠に悲しむべき事に候』と報告して居る[944]。

中村の記述のように南メソヂスト監督教会の東アジア宣教は中国から始まり、上海を中心に宣教師たちが入って来て、活動を展開した。ところが、J・W・ランバスをはじめ中国宣教師たちにとって中国南部の熱帯海洋性気候は、適応することがなかなか難しい自然条件であった。特に米国から派遣されてきたばかりの宣教師たちにとっては、中国南部の季候環境のため、健康状態が悪くなり、本国に送還される場合も度々生じた。時間的な余裕がなく、頻繁に米国と中国との間を往来することができなかったので、南メソヂスト監督教会の中国宣教師たちにとっては、温暖な気候の日本は適切な休養地になったのである。ベテラン宣教師であるJ・W・ランバスも、しばしば日本に立ち寄り、中国南部の合わない気候で疲れた健康と宣教のため受けたストレスを癒すために、休暇を過ごした。

そんな中、南メソヂスト監督教会の宣教局は、日本宣教の着手を決定し、これをめぐってJ・W・ランバスに事前調査を指示した。30年以上の期間、東洋文化を経験し、時折休養の

---

943 南メソヂスト監督教会の中国宣教は宣教開始の38年が過ぎた1886年になって、ウィルソン(A. W. Wilson)監督の指導の下で、年会(Annual Conference)を組織することができた。これは同じ東アジア圏の国家として、宣教開始の6年ぶりに宣教年会(Annual Mission Conference)を組織した日本と１年ぶりに朝鮮宣教会を経てから、21年の後(1918年)に年会(Annual Conference)を組織することができた朝鮮と比べ、外形上・相対的に劣る宣教的な結果を持っていたと見える。*Minutes of the Japan Mission Annual Conference of the Methodist Episcopal Church, South*(以下 *MJMACMECS*), 1892; *Annual Report of the Board of Missions of the Methodist Episcopal Church, South*,(以下*ARMECS*) 1893, p.35; J. S. Ryang ed., *Southern Methodism in Korea Thirtieth Anniversary*, pp.6-7; 梁柱三　編、前掲書、7-8頁参照。

944 中村金次、前掲書、3頁。

ために日本に寄ったりしたJ・W・ランバスが誰よりも適任者であった。

30年の支那傳道を中途にして棄つるは彼等の本意では無かつた。されど「来りてわれを助けよ」とのアケドニア人の叫は何處にも聞れる。聖靈に導かる靈魂は、何處如何なる時にも神の聲を聞き得る。傳道局は將に開かんとする日本宣教の調査をランバスに命じた。かくて明治18年9月日本を視察し10月報告を傳道局に提出し、かくして翌19年4月20日マクテヤ監督(Bishop Mctyre)はゼ・ダブルユ・ランバス夫妻、息ダブリユ・アル・ランバス夫妻、オ・エ・デユークスを日本に任命し7月1日を期して日本宣教部員たるべき旨を通知した。同年7月25日、老ランバス夫妻とデユークスは神戸に到着し、居留地47番（現大丸東筋向）に其居を定めた。同年9月ウキルソン監督(Bishop A. W. Wilson)及びコリンス・デネー(Collins Denny)は支那に赴く途中、日本に立寄り、同月17日ウキルソン監督の司會にて日本宣教部の開始式を擧げ、若きタフルユ・アル・ランバスを總理に任じ、ここに宣教部の署全く整ふに至つた[945]。

およそ30年の時間を中国で過ごしたJ・W・ランバスにとって、宣教地の変更とはたとえ同じ東アジア圏の近似した文化圏と言っても簡単なことではなかった。しかし長い時間、中国南部の熱帯海洋性の気候のため苦しんでいた彼らにとって、日本という国は魅力的な宣教地として見えたのである[946]。南メソヂスト監督教会は、1885年9月20日にランバス(W. R. Lambuth)夫婦をはじめJ・W・ランバス夫婦、そしてデュークス(O. A. Dukes)を日本宣教師として任命した。彼らは、翌年に日本神戸に着き、そこを拠点として南メソヂスト監督教会の宣教活動を展開し、1887年には第一回南メソヂスト監督教会日本宣教会(the First Annual Meeting of the Japan Mission of the Methodist Episcopal Church, South)がランバスの自宅で開催され、本格的な日本宣教が開始されたのである[947]。これは南メソヂスト監督教会としては、中国、ブラジル、メキシコに次いで四番目の海外宣教地であり、東アジアにおいては中国に続き二番目であった[948]。

以上のように、南メソヂスト監督教会における日本宣教の着手とその過程は、中国宣教部と緊密に結ばれたが、ここにはランバス父子の役割が多かったことを確認することができる。

一方、日本以外にも中国宣教部の影響下で展開した宣教地が朝鮮であった。南メソヂスト監督教会の朝鮮宣教は、通常次のような二つ項目に整理することができる。すなわち、1)中国宣教の延長として、2)尹致昊の宣教要請による応答の結果として行われたことである。以下、中国宣教の延長として着手された朝鮮宣教の展開過程について検討する。

---

945 同書、5-6頁。
946 同書、3頁参照。
947 *MAMJMMECS*, 1887, p.1.
948 Gross Alexander, *A History of the Methodist Church, South in the United States*, pp.120-126.

正確な時期はわからないが、おおよそメソヂスト監督教会の朝鮮宣教が始まった直後から、南メソヂスト監督教会も朝鮮に関する関心を持ち始めたようである。しかしながら、南メソヂスト監督教会の東アジア宣教は、中国並びに日本に集中していた状況だったので、朝鮮まで宣教師を派遣する余力が十分に残っていなかった。万一そうであっても、中国宣教が可視的に急速な成長を見せ、1890年代に入ってから安定的な基盤を構築するようになり、さらに既存の上海と蘇州を中心としていた宣教拠点も拡張すべき必要性を感じるようになった。そのゆえ、南メソヂスト監督教会の中国宣教師たちは、中国北部に宣教地を拡張しようとした。次はこれに関する記録である。

数年前から中国宣教師たちは中国北部、たとえ、山東地域のようなところに新たな事業を開拓する問題を慎重に検討してきた。様々な理由があったが、その中の一つは上海の気候が新たに派遣されて入ってくる宣教師たちに健康上あまりよくなかったということである。健康が不調な宣教師たちを米国に戻らせることより、北部に配置して活動させ、連続して宣教事業に奉仕ができるようにしようとする考えであった[949]。

先述したように、中国に赴任する宣教師たちに中国南部の熱帯海洋性の気候は適応困難な自然環境であった。したがって、中国南部とは全く異なる中国北部の地域に宣教拠点を設置し、環境に適応しながら、長期的な宣教事業を展開しようとする計画であった。南メソヂスト監督教会宣教局は、以上のような中国宣教師たちの提案を受け入れ、リード(C. F. Reid)に中国北部に新しい宣教地開拓のための事前調査を命じた。しかし、1894年2月に現地調査のため、北部を調査してきたリードは否定的な結果を携え、宣教局に報告した。リードは当時の状況を次のように説明している。

1894年2月、私はキー(Joseph S. Key)監督と宣教局主事の指示によって、新しい開拓宣教ができる地域があるか探索するため、中国北部のところに行きました。山東と遙東を回りながら、そこで活動している様々な宣教部の宣教師たちと話しながら地域状況を観察した結果、すでに幾つかのところに他教派の宣教部の宣教師たちが活動しているところ赴いてまで、事業に着手する必要があるかということに気がが付いたので、この計画に疑問を提議したのです[950]。

以上のように、中国北部を開拓しようとした計画が延期されていた時、尹致昊による朝鮮宣教の要請が南メソヂスト監督教会に伝えられ、これによって南メソヂスト監督教会にお

---

[949] James Cannon Ⅲ, *History of Southern Methodist Missions*, p.156.
[950] C. F. Reid, Superintendent's Report, *Minutes of the Annual Meeting of the Korea Mission of the Methodist Episcopal Church, South*,(以下*MAMKMMECS*), 1897, p.3.

ける朝鮮宣教の準備ができるようになったのである[951]。そのようなわけで、朝鮮宣教は二つの流れが絶妙に合流したことによって展開されたのである。そして1895年10月に、南メソヂスト監督教会のヘンドリックス(E. R. Hendrix)がリードと共に来朝し、宣教の可能性を探索すると同時に宣教敷地を確保し[952]、翌年に開催された南メソヂスト監督教会宣教局の年会で承認された。次はその議論の内容である。

1896年、宣教局の年会で中国宣教年会の上海地方会(the Shanghai District of the China Mission Conference)が朝鮮宣教を主管するようにヘンドリックス監督の計画と同時に、彼がソウルで宣教財産を購入しようと活動していることを受け入れるということを決議した。1年間、リード博士がソウルで妨げられず、居住しながら事業を推進ができるように措置する必要がある。したがって、リードは上海地方会の仕事から手を引いて、朝鮮地方会の任務を付与され、8月には彼の家族を呼んでソウルに移住する予定である[953]。

南メソヂスト監督教会の朝鮮宣教は、初期から中国宣教年会上海地方会の下ではじめられ、中国宣教から派生したものである。リードをはじめ近代の朝鮮の女性教育において主要な足跡を残したキャンベル(J. P. Campbell)も、元々上海と蘇州で活動した中国宣教師として、中国人の養女も連れ、朝鮮宣教に賛同させるほどであった。そのようなわけで、南メソヂスト監督教会は、中国宣教部の影響下で行われるしかなかったのである。当時、中国が特に西洋人たちに注目された宣教拠点だったので、それは自然な流れだったと言える。また、他方では当時の南メソヂスト監督教会宣教局の総主事であったランバスの影響も否定できない。ランバスは中国で生まれ、中国宣教師として活動した経験があったので、いわゆる新中国派であり、南メソヂスト監督教会の中国宣教の動向が日本に繋がった当時、直接日本宣教の総理として重要な責任を負い、東アジアの宣教情勢に精通した人物であった[954]。そのようなわけで、東洋文化に慣れ親しみ、十分な経験を持っていたランバスは当時のリードや尹致昊などと書簡を取り交わしながら、朝鮮宣教も中国から着手していった[955]。それほど、ランバスは南メソヂスト監督教会の朝鮮宣教が開始されることにおいて、大きな役割を果たした。

以上のようにランバスという存在のため、南メソヂスト監督教会の東アジア宣教は、中国

---

951 C. F. Reid, *MAMKMMECS*, 1897, p.3; James Cannon Ⅲ, *History of Southern Methodist Missions*, pp.157-158.
952 C. F. Reid, *MAMKMMECS*, 1897, pp.3-4.
953 *ARMECS*, 1897, p.25.ランバスは会議の後、リードに手紙を書き、決議された内容を知らせた。*W. R. Lambuth's letter to C. F. Reid*, May, 13th, 1896.
954 *MAMJMMECS*, 1887, p.1.
955 *W. R. Lambuth's letter to C. F. Reid*, May, 13th, 1896; C. F. Reid, Superintendent's Report, *MAMKMMECS*, 1897, p.3; *T. H. Yun's letter to W. R. Lambuth*, February, 4th, 1897.

から派生的に展開した。日本の場合は、中国宣教師のランバス父子が日本の開拓宣教師として任ぜられたが、その中でも息子ランバスは日本宣教の総理として責任を負ったという事実がこれを証明する。そして朝鮮宣教の過程においても、背後で宣教局の主事のランバスが本国教会の行政指示と支援を担当したため、中国宣教部からはじめられたと言えるだろう。

(3)米国の南・北メソヂスト監督教会における東アジア宣教の比較とその特色

メソヂスト監督教会と南メソヂスト監督教会は、各々1847年、1848年に中国に宣教師を派遣することによって東アジア宣教を開始した。続いて1873年と1886年には日本宣教を展開した。中国と日本が西欧列強の干渉と侵略によって不平等条約を結び、門戸を開放させられた流れで、宣教が始められた。そして日本に対して宣教を開始した両教会において、次の目標地は朝鮮であった。朝鮮も、中国と日本のように門戸開放の結果として、メソヂスト監督教会と南メソヂスト監督教会は1885年と1897年に朝鮮半島で宣教が開始されることになった。ところが、朝鮮宣教の過程は中国から日本に派生された両教会の宣教の動向とは違い、メソヂスト監督教会は日本から、南メソヂスト監督教会は中国から展開したのである。そしてその派生的な展開は、時間の経過の中で、徐々に固着化される傾向が強かった。特にメソヂスト監督教会の朝鮮宣教は、日本とより緊密な関係を結び、相対的に親日的な性格を強く帯びてくる。日露戦争以降に、日本に友好的であった米国の影響下の中で、朝鮮に対する日本の干渉に沈黙・擁護した姿勢が教会にも及んでいた。1904年のメソヂスト監督教会総会で、日本と朝鮮の両国担当の宣教監督の責任をハリスに負わせた結果は自然なことだと言えるだろう。

ハリスは大学を卒業し、西洋文化の背景で日本の開拓宣教師として派遣され、30年以上をずっと日本人たちとの親密な交際を分かち合い、日本について精通した宣教師であった。したがって、ハリスの赴任によって、メソヂスト監督教会の朝鮮宣教はより親日的な性格を見せるようになってしまった。実際にハリスは朝鮮に行っても必ず日本人教会に立ち寄り、日本に対する関心と友好を示したり[956]、朝鮮(宣教)年会を主宰しながら、日本教会の人々を招いたり、時折招く日本人牧師と共に年会を主宰したりすることもあった[957]。また、朝鮮の初代総督であった伊藤博文など朝鮮内の日本人官僚たちとも親密に交際しながら、日本政府の朝鮮政策とその立場に積極的に協力する姿を見せた[958]。結局、メソヂスト監督教会の

---

956 *KM*, April, 1905, p.76; 「Prince Ito's Gift」, *MRW*, January, 1909, p.73.
957 『ハリス』、158-159頁参照。
958 「News Calendar」, *The Korea Review*, June, 1906, p.237; *Mutel's Diary*, 1907年10月18日; 『朝鮮の統治と基督教』、京城：朝鮮總督府、1923、6頁; Sainosuke Kiriyama, ed., *Annual Report on*

朝鮮宣教は中国と日本の間で、日本側に傾くしかない方向性を見せたのである。そして、その中心にはハリスという存在と役割が決定的だったと言えるだろう。

逆に南メソヂスト監督教会は、日韓両国の宣教を中国宣教部の影響下で推進してきた。ここには、ランバスという人物が大きな影響力を発揮した軌跡が窺える。宣教師の息子として宣教地の中国上海で生まれたランバスは、幼年時代から中国人たちと接しながら成長し、自然に東洋文化と環境に親しんで生活してきた[959]。それ故に、彼は中国という背景を負って、両親と共に日本の開拓宣教師として任じられ、来日し、さらに本国に戻ってからは宣教局の総主事として任命され、全世界の宣教地の状況を統括する役割を担うようになった[960]。

先のハリスの場合は日本と出会い、長い時間を日本人たちと接することを通して親日的な傾向を持つようになった。しかし、中国という東洋で生まれ、宣教局の総主事として幅広い視野と理解を持つランバスとは異なっていたと言える。その故、親日的な認識と活動を見せたハリスと比べ、ランバスは相対的に親中国的であり、あるいは中立的な立場と態度を持つようになったのである。それで、ランバスは宣教局の総主事あるいは東洋担当の監督として朝鮮を訪問した時、朝鮮が中国ともっと密接的な関係を持つように促したり、日本に依存しない朝鮮なりの独立的な行政処理をすることができたと言えるだろう。

それに関する代表的な例が、まさに1905年の総会である。ランバスは、日本と朝鮮両国を担当する宣教監督という特別な職務をおいて、日韓を中国とは分けて考えたメソヂスト監督教会の宣教政策とは違い、日中韓３ヶ国を統括する監督を任じた南メソヂスト監督教会の立場であると言える。以上のように、両教会が東アジアにおいて行った宣教の展開と性格は、ハリスとランバスを対比して見た場合、異なった様相を呈しているのである。

まとめ

東アジアの日中韓三カ国が、門戸を開放し宣教師を受け入れるようになったのは、結局武力を伴った典型的な近代主義の宣教方法(mission by force)によるものであった。すなわち、中国、日本、朝鮮の順序で東アジア三カ国の門戸が他者によって開かれ、西欧の宣教師が入って来た。これは日中韓三カ国が当時の典型的な近代的宣教方式で結ばれていたことを意味する。その中で、メソヂスト監督教会のハリスと南メソヂスト監督教会のランバスは、その時代と有機的に関係しながら、互いに影響を与えあっていた。つまり、米国政府の親日的な態度と政策のため、メソヂスト監督教会の東アジア宣教は中国から次第に日本側に傾く

Administration of Chosen 1924-1926, Keijo: Government-General of Chosen, 1927, pp.108-109.

[959] *WRL*, pp.23-34.

[960] *Ibid*, pp.99-100.

ようになっていった。そして、その代表的な結果としてメソヂスト監督教会の日本教会が朝鮮半島の宣教を主導するようになり、それと同時に長い間日本・日本人宣教に関わってきたハリスが、朝鮮と日本を同時に司る宣教監督として選出され、メソヂスト監督教会の東アジア宣教の動向は急激に日本を中心に再編されるようになった。しかも、監督というメソヂスト監督教会の最高指導者のレベルで、伊藤博文をはじめ日本の指導者たちと密接な関わりを見せた彼の親日活動は、米国教会と社会に日本に対する関心を持たせることに一定の影響を及ぼしたと推測できる。以上のようなハリスの親日的な態度と宣教活動は、特に日本の植民地として総督府に支配されていた当時の朝鮮人たちに大きな反発を呼び起こす原因にもなった[961]。

一方、南メソヂスト監督教会の場合は、宣教初期のように中国を中心にする東アジア宣教を維持することができた[962]。このことに関して、次のような推測ができるだろう。まず、奴隷制度による南北戦争の余波のため、メソヂスト監督教会に比べ、相対的に政府の政策に積極的ではなかった南メソヂスト監督教会が、当時の親日的な傾向を見せた政府の東アジア政策に追従する理由がなかった。同時に、メソヂスト監督教会に比べ、豊かではなかった財政状況も、南メソヂスト監督教会の海外宣教が中国以外の地域にその宣教の中心軸を移動させることができなかった理由でもあった。それ故、メソヂスト監督教会のように親日的な傾向の宣教師を活用することもなく、中国を中心とする東アジア宣教の流れを意図的に変更させる必要もなかったわけである。代表的な例がまさにランバス父子の日本宣教の開拓であった。草創期、中国宣教師として南メソヂスト監督教会の日本宣教を開拓したランバス父子は日本でも学校と教会を設立しながら、いわば効果的な宣教業績を残した。また、ランバスは本国に戻っても東洋文化に精通しているという理由で、宣教局の責任者としての役割を担うことができた。反対に、中国で生まれ育ったランバスが宣教局総主事として活動しながら、南メソヂスト監督教会の東アジア宣教において、その力の中心を意図的に日本に変える理由もなかったのである。したがって、南メソヂスト監督教会の東アジア宣教は、中国から日本に中心が移動したメソヂスト監督教会とは異なり、中国中心に推進せざるを得ない状況であったと言える。親日派宣教師として認識され、朝鮮と朝鮮人たちに批判されたハリスとは異なり、ランバスはいわゆる中立的な人物として朝鮮人から肯定的な評価を受けることができたのである[963]。これは支配者(日本)と被支配者(朝鮮、中国などの)という時代的な状況の中で宣教地の人々に対する認識と対応方法の相違点があったからである。この

961 これに関する具体的な事例は『ハリス』、154-170頁参照。
962 これに関する具体的な事例提示と論証はこれからの課題として残しておく。
963 『新韓民報』、1921年10月27日、3頁参照。

ように、メソヂスト監督教会とハリス、そして南メソヂスト監督教会とランバスは、同じ東アジアの宣教の中で相互有機的な関わりの中で互いに影響を与えあいながらも、それぞれが独自の宣教施策を持ち、また違った結果を生み出すことになったのである。

以上のような歴史的な事実と今日の宣教の現状とを関連させると、次のような問いが生まれ、かつそれに答えることが可能であろう。まず、支配と被支配という現実的な構造の中でどのような姿勢と態度が第三者(宣教師)にとって理想的なのか、ということである。今日の世界は、歴史的な葛藤や痛みを克服できない国々が残っている。日本と韓国、そして中国が属している東アジアという舞台がその中の代表的な地域である。また、強大国と弱小国という力の論理の中で、抑圧され自らの主権を主張できないまま生きている民族も多い。これには中国とチベットをはじめ、少数民族との関係を例としてあげられる。

この問いに対して、本稿ではメソヂスト監督教会のハリス及び南メソヂスト監督教会のランバスを中心に検討してみた。この研究の結果として、次のような可能性を想定できる。それは、可能な限り第三者の派遣教会が国あるいは民族の間の葛藤関係に置かれている宣教現場に宣教師を派遣する時、一つの国または一つの民族にのみ集中することができるように事前に措置を取るべきことである。しかし、やむにやまれぬ事情があって葛藤関係に置かれている両方を統括しなければならない状況に宣教師を派遣する場合は、派遣される宣教師はメソヂスト監督教会とハリスのように支配者の論理に傾く偏向的な宣教姿勢と態度を克服する必要性がある。同時に、派遣教会と宣教師に要求される姿勢は、南メソヂスト監督教会とランバスが示したように徹底的に中立であるべきである。これに加えて、可能であればランバスのように宣教地で生まれ育って自然に宣教現場に適応する宣教師の子どもたちが、宣教地とその状況を相対的によく理解し、効果的に対処しやすいと言えるであろう。以上のように、本章は歴史的な事例を通して、今日の宣教現場で出会う可能性がある課題に対する一つの解決策を提示することにおいて十分な意義があると言える。

＜　結論　＞

【要約】

19世紀後半から20世紀初頭にかけて、西洋列強諸国による東アジア進出が激化し、それによる東アジアの門戸が開放された。19世紀半ばに至り、東アジアの最も代表的な国家と言われる中国は、英国とフランス、ドイツなどヨーロッパ列強の武力に伴う圧力に屈服し、不平等条約を結び、門戸を開放することになった。以上のような中国の門戸開放は、英国とのアヘン戦争を起因とする南京条約から本格的に始まったと言える。東アジアを代表する中国の門戸が開放されたという知らせは直ちに西欧世界に伝えられた。西洋と全く違った東洋の文化は、西洋人たちに大きな興味を呼び起こした。さらに、まだ開発されていなかったいわゆる東洋の豊かな資源と数多い人的資源は、東洋進出の必要性をアピールするのに十分であった。以上のように各国の政府は門戸が開放された中国に軍隊を派遣し、相互競争するように進出し、占領した地域は占領国の租借地になってしまった。ここには軍隊が駐屯し、この地域を円滑に支配するための統治機関が設立され、経済的な略奪と利益を追い求めるための政策が行われた。中国の資源を獲得するための貿易が活発になり、そのために多くの商人たちが東アジアの拠点である中国へ入るようになった。

以上のように、武力による西洋各国の東アジア進出は自然に宣教師たちの本格的な海外活動を促進させた。中国も同様であった。もちろん、中国が門戸を開放する前にモリソン(R. Morrison)のようなプロテスタント教会の宣教師たちが入り、宣教活動を行なう場合もあった。しかし、中国宣教は1842年、英国との南京条約を起点として、西洋にその門戸が開放された以降、本格的に行われたことは否認できない事実である。

一方米国も、英国やフランスやドイツなどのヨーロッパ列強のように、東アジアへ積極的に進出した。中国が英国と南京条約を結んで2年後、米国は望厦条約を締結し、本格的に東アジアへ進出することになった。英国が中国へ進出したという知らせは、米全域に伝えられ、数多い商人と貿易業者たちが太平洋を渡って東アジアへ入るようになった。以上のように米国の東洋進出は、独立戦争と南北戦争という内外的な葛藤と混乱を収拾するための効果的な方法にもなったのである。さらに西部開拓を培ったフロンティア精神は太平洋を渡り、東洋へと人々の関心をむかわせた。米国内の各プロテスタント教会も同様であった。特に、当時米国の各プロテスタント教会は奴隷問題による南北戦争によって、教会は二つに分裂した。この葛藤と分裂の痛みを克服するためには外部へ目を向ける必要があった。しかも当時、米国の教会は西部開拓精神に押されて宣教的な拡張が行われていた状況であった。さ

らに、各教派がこの傾向に応じ、東アジアへ宣教的関心を広げることとなった。

米国の代表的なメソヂスト教会であるメソヂスト監督教会と南メソヂスト監督教会も、上述した動向の中にあった。1844年、奴隷問題によって南と北に分裂された米国のメソヂスト教会は、各々総会を開催して内部の混乱を収拾し、教会の行政と秩序を安定させようとしていた。そして教会内部の葛藤と痛みを克服するために、教会の関心を海外へ向けるようになったが、その頃、東アジアの中国が開放したという知らせを聞くのである。それ故、メソヂスト監督教会と南メソヂスト監督教会は中国へ宣教師を遣わし、東アジア宣教を開始した。

日本も同じであった。日本は16世紀以降、強力な鎖国政策によって、西欧世界との接触が容易に行われていなかった国であった。しかし、中国のように西欧列強という強力な外部勢力に門戸を開放するようになったのである。近代化された武器で武装した米国の強力な艦隊の前で、日本は数百年間閉まっていた門戸を開放した。門戸が開放され、数多い貿易業者と商人が日本へ渡ってきた。一方、日本の門戸開放の知らせが米国社会に伝えられ、プロテスタント教会も動き始めた。メソヂスト監督教会と南メソヂスト監督教会も宣教に着手するために、準備していった。そのような過程で1874年と1886年に各々宣教師を派遣し、日本宣教を開拓していった。この時、ハリスとランバスは、メソヂスト監督教会と南メソヂスト監督教会の日本開拓のための宣教師として派遣され、来日した。

大学を卒業したばかりで、結婚した後、メソヂスト監督教会の宣教師として派遣され、来日したハリスは日本が最初に接した東アジアの国であった。宣教師としての日本での経験は後日、彼が東アジアを理解する源となった。北海道を経、東京、そして太平洋沿岸での日本人宣教まで、約30年間の宣教活動は、ひたすら日本と日本人に焦点をあてたものであった。そのような状況の中で、日本と朝鮮を同時に統括する宣教監督として選出された。したがって、いかに日本と朝鮮両国を同時に管轄する指導者としての立場に立っていたとしても、全ての宣教行政と管理が日本を優先するように行われるしかなかった。以上のような彼の観点と態度は、日本の植民支配のもとにあった朝鮮の立場からみると、いわゆる「親日的な宣教政策」に偏るものであった。しかも1916年、引退以降に本国に戻らず、日本で晩年を過ごしたこと自体も、彼が「親日派宣教師」だったということを証左している。

他方ランバスの場合、彼の出生と幼年時代の周辺環境が東アジアという宣教地であった。これだけ考慮してみると、ランバスも先のメソヂスト監督教会のハリスのように、一国(中国)に彼の観点が制約されてしまう限界の中で置かれる恐れがあった。しかし、本国へ帰った後、南メソヂスト監督教会宣教局で務めた彼の経験は、その観点が東アジアの一国に制約される限界を克服する大きなきっかけになったのである。以降、1910年の総会で監督とし

て選出された後、中南米、アフリカ、ヨーロッパ、そして日中韓三ヶ国を合わせる東洋担当の監督としての役割を経験するのができたことはより中立的で、幅広い視野を備えるきっかけを提供してくれたのである。

上述したように、同時代を生きていた両者は各々メソヂスト監督教会と南メソヂスト監督教会に属し、一宣教師から宣教監督に至るという非常に似通った人生を過ごしてきた。しかし、とりわけそれぞれの日本と朝鮮との関係から見るならば、彼らの宣教の足跡は対照的な特色を帯びるものであった。

【意義】

本研究は、以下のような問題設定から始まった。まず、米国の教会における東アジア宣教の性格を確認しようとする問題設定である。その中でもメソヂスト教会に焦点を絞り、日韓両国に共通して宣教師を派遣したメソヂスト監督教会と南メソヂスト監督教会の宣教的な特色を把握しようとする問題設定である。これは当時、米国の教会の宣教において、日本と朝鮮が持っている位置を確認することである。

第二に、日韓両国において、メソヂスト教会同士の関わりに関する問題設定である。つまり、開放以降、これまでほとんど取り扱われなかった両国メソヂスト教会の関わりを復元し、幅広い交流を果たすための問題設定である。これも、これからの日韓の両国の教会の交流とエキュメニカルな宣教協力において重要な土台になるだろうという見解に由来する。

第三に、宣教において、派遣教会と宣教師、そして宣教地という三つの重要な要素の関係に関する問いである。これは今日も世界各地で活発に行われている宣教と関連し、本来の宣教的な姿勢とはなにかを宣教学的に検討し、これに基づき、建設的な宣教あり方を考察しようとする問題設定である。特に、本研究の問題設定において第三の項目は、宣教において最も本質的で重要な問題だと言える。なぜならば、今日の全世界の宣教現場で推進され、またこれから展開される宣教活動と関連してより適切な宣教とは何なのかを解明できる宣教学の考察を提供するものであるからである。

以上のような問いに関して、本研究は以下のような結論を得ることができた。第一に、米国の教会、その中でもメソヂスト監督教会と南メソヂスト監督教会の東アジア宣教は、19世紀末から20世紀初頭の時代的な潮流において形成された宣教だという事実を確認することができた。すなわち、米国の南・北メソヂスト監督教会は、東アジアの宣教を開始するにあたって、各国の門戸が開放された以降に宣教の可能性を探索し、宣教事業を推進していった。中国の場合、英国とのアヘン戦争によって、南京条約という不平等条約を締結すること

で、門戸を開放するようになった。それから2年後である1844年に、米国も英国のように武力を伴って不平等条約を締結した。以上のように、宣教師が安全に進出することができる状況が整えられた後に、メソヂスト監督教会と南メソヂスト監督教会は本格的に中国宣教を準備し始めたのである。日本の場合は中国とは違い、いかなる西洋列強よりも積極的に、米国が先に門戸を開放させた代表的な国だと言える。米国は東インド艦隊の司令官であるペリーを遣わし、日本が数百年間鎖国していた門戸を開放するように武力を伴って圧迫した。その結果、1853年に神奈川条約、つまり日米和親条約という不平等条約を締結し、日本へ進出するための足場を固めた。そのような状況を視野にすえながら、メソヂスト監督教会は1874年、南メソヂスト監督教会は1886年に各々開拓宣教師を派遣し、日本宣教を本格的に開始したのである。朝鮮は、先の中国と日本が西洋列強(英国と米国)によって門戸を開放したこととは若干性格が異なっている。朝鮮は、1876年に日本の圧迫に屈服し、いわゆる江華島条約、つまり日朝修好条規という不平等条約を締結することで門戸を開放した。引き続き、米国が1882年に国交と通商を目指す米朝修好条約を締結した。このように朝鮮も米国に門戸を開放した以降に、米国の南・北メソヂスト監督教会は朝鮮宣教のための事前調査と視察を通して、宣教師派遣を準備したのである。そのような過程で、メソヂスト監督教会は1885年、南メソヂスト監督教会は1896年に各々宣教師を朝鮮へ派遣し、本格的に宣教を開始した。これは米国の南・北メソヂスト監督教会が、当時の時代的な状況とその動向を十分に考慮した上で宣教を開始したということである。すなわち、可能な限りリスクを犯さず、安定した土台の上で宣教事業を果たそうとしたのである。

第二に、19世紀から20世紀にかけて、東アジアの日韓両国のメソヂスト教会は相互緊密な関わりを結び、宣教活動を推進していったという事実である。メソヂスト監督教会の場合、ハリスが日韓両国を統括する宣教監督として選ばれたのは、日本のメソヂスト監督教会側の要求があったので、可能なことであった。すなわち、1904年、メソヂスト監督教会総会にあたって開かれた日本のメソヂスト監督教会中央議会で、日韓両国を同時に統括する宣教監督を要請したのが重要なきっかけとなったのである。それ故、ハリスは一貫して主に日本人を対象として活動した宣教師だったにもかかわらず、日本の教会の切実な要請を総会が受け入れ、日本と朝鮮両国を同時に統括する宣教監督として選出されることになった。そのような背景のもとで、メソヂスト監督教会は自然に日本と日本人に友好的な立場を持つようになり、特に日本の朝鮮総督府の朝鮮支配に関連する政策になるべく順応する立場を取った。一方、南メソヂスト監督教会の場合、元々日本と朝鮮の宣教が中国から派生してきた性格があり、しかも中国と日本、そして朝鮮という三ヶ国を一つにし、一人の監督が統括する宣教政策を推進していった。そのような宣教の枠組みが継続的に維持される中、1910

年にランバスが東洋担当の監督として任命された。ランバスは、日本と朝鮮両国を往来しながらも、可能な限り極端に偏らない宣教を推進した。このように、米国の南・北メソヂスト監督教会は、すでに宣教初期から同一の管轄監督のもとで、宣教事業が行われていた。もちろん、日本政府と朝鮮統監府(総督府)の政策に対する対応や態度は相違するものであった。それにもかかわらず、かつて日本と朝鮮のメソヂスト教会は、相互協力と牽制の関係の中で発展していったことが理解できる。したがって、これから日韓両国の教会の関わりにおいて、今日各々その歴史を継承している日本基督教団と基督教大韓監理会がより交流を深め合い、協力する基盤がここにあると言える。

第三に、宣教において、宣教師を派遣する派遣教会と派遣される宣教師、そして派遣される宣教師が活動する宣教地は、各要素すべてが必要不可欠な関係だという事実を確認することができた。そしてこれはまさに各々の要素のバランスが傾くならば、宣教の全体的な性格も変わるということを意味している。同じウェスレー神学を追求するメソヂスト教会にもかかわらず、奴隷問題による現実認識と対処の違いのためにメソヂスト監督教会と南メソヂスト監督教会に分裂した。そして日本を通して東アジアに接し、日韓両国の宣教監督として選出されたメソヂスト監督教会のハリスと中国と日本を経て、アフリカ、中南米、日中韓を含める東洋担当の監督として選出されたランバス、両者は東アジア、そして日本と朝鮮という同じ宣教地で活躍したのであるが、その認識と態度は相異なっている事実を確認することができた。また、ウェスレ―神学という共通の神学的な土台に置かれている宣教師だとしても、実質的に活動するところ(宣教地)がどこなのか、その現場によって多様な宣教様態が表れるという事実である。

その中、宣教師を中心に派遣教会と宣教地の教会との関わりをより具体的に言及する必要がある。東アジアの日本と朝鮮という同一の宣教地、そしてメソヂスト教会の監督として同一の身分にもかかわらず、ハリスとランバスが理解して実践した宣教現場は、相異なる様相を呈した。これは宣教師が長期間、宣教現場で他教派との関わり、そして宣教地の教会と宣教地の人々との出会いを通して得た経験、そこで出会った文化や民族気質、社会的な状況をいかに理解したかということに関係があると見られる。本研究は、これまで踏まえてきた過程を通して、ハリスとランバス両者が日韓両国の宣教地でエキュメニカルな宣教協力を推進したことを確認した。また、西洋が東洋より近代化したという西洋人の観点に立ち、教育宣教と西欧文物による啓蒙的な宣教事業に尽力したという共通点を確認することができた。しかし、宣教地と宣教地の人々の状況を十分に理解し、それに適合する宣教活動を展開していったかという問いには、その評価が大きく異なる。すなわち、ランバスの場合は、ハリスに比べると、宣教地の教会と状況に適合した宣教が何なのか事前に十分理解し、それに

関する応答を宣教的に考察しながら準備したのである。すでにランバスは、1890年代の初頭から南メソヂスト監督教会の宣教を全体的に統括する宣教局で務めながら、宣教的な理論を構築し、それを実践に移すことができた。1893年には北米海外宣教協議会(the Foreign Missions Conference of North America)に初期のメンバーとして活動し、当時の宣教的な主題と動向を総合的に把握することができた。そして何よりも1901年4月24日に、ニューオーリンズ宣教師協議会にて開催された南メソヂスト監督教会の宣教師協議会で彼は、「南メソヂスト監督教会の海外宣教事業の歴史、政策、そして見通し」をテーマとして講演するほど、自分の経験に基づく宣教的な理論を総合的に整えていたのである。特に、この際にランバスは、宣教の土着的な性格を非常に強調したが、そのような彼の強調点は以降、南メソヂスト監督教会の海外宣教において、重要な原則として承認されるほどであった。しかし、ハリスはランバスほど幅広い宣教現場を経験できる機会がなかったし、また自分の宣教を宣教学的にしっかり整理できる機会を持っていなかった。それ故、宣教現場で宣教地と宣教地の人々が求めているものを十分に理解することができなかったと言える。それゆえ、当時、緊張関係の中にあった日韓両国の間で、一方に偏る宣教理解と行動を生み出す結果になったのである。まさに、この差は、ハリスとランバス両者を比較する時、明確に見ることができる。

以上のような状況を考慮する時、宣教の性格を一般化し、まとめるのが非常に難しい作業だということが分かる。言い換えれば、正しい宣教的な姿勢を備え、建設的な宣教の方向を計画し、設定するためには、派遣教会の神学的な立場と宣教神学を確立していなければならない。そして、宣教師を派遣する宣教地がいかなるところなのかを綿密に調査する必要がある。そうすることで、リスクに晒されない安定的な状況の中で、より肯定的な宣教の成果を得ることができるからである。また、宣教師は派遣教会の宣教政策と神学的な立場を十分に理解し、受容できる者でなければならない。同時に、宣教師がいかに宣教地の言語と文化を積極的に受容することができるかも重要なポイントだと言えるだろう。上記のような宣教において、三つの要素(宣教師、宣教地、派遣教会)が総合的に考慮される時、より適切で、建設的な宣教の働きを担うことができるのではないであろうか。

【課題】

本研究ではメソヂスト監督教会と南メソヂスト監督教会という米国の二つのメソヂスト教会、そしてハリスとランバスという二人、そして日本と朝鮮(韓国)という二つの拠点を中心に19世紀末から20世紀初頭にわたる宣教事業がいかに行われてきたのか検討してみた。

その結果、これまで組合教会と長老教会を中心に叙述されてきた既存、日韓両国の教会の関わりに、メソヂスト教会を追加し、さらに多様な観点で検討するという成果を得ることができた。しかし、この研究でもいくつも限界に出会った。その限界を補完する時、この研究が追求することがよりはっきり成就されるだろう。その限界は以下のようである。

第一に、より様々な人物を比較し、分析する必要がある。本研究はハリスとランバスという二人にのみ焦点を絞り、19世紀末から20世紀初頭の宣教を検討してきた。これはハリスとランバスが当時、東アジアで宣教師からメソヂスト監督教会と南メソヂスト監督教会において、日韓両国の宣教を担う指導者、つまり監督だったので、その代表性を表そうと設定したためであった。しかし、両者がそれぞれの教会の代表者だからといって、その時代の宣教活動を理解する絶対的な基準だとは言えない。より綿密であり、正確な当代、米国の南・北メソヂスト監督教会の宣教事業とその活動を把握するためには、監督以外にも実際に現場で民衆たちと共に生活した一般宣教師たちの活動を包括的に分析する必要がある。そのことによってより深い研究の結果を得ることができるだろう。

第二に、教会(教派)という大きな枠を中心とする研究が補完されるべきである。本研究は、先に言及したように、人物を中心として米国の南・北メソヂスト監督教会における東アジア宣教を把握しようとした。言い換えれば、人物が教会の宣教政策と方向を決め、展開させるという印象を与える恐れがある。しかし、逆に教会の宣教神学と政策が人物(宣教師)の活動方向(宣教事業)を決定し、制約する場合もあることを考慮する必要がある。そのようになると、教会あるいは宣教局と宣教師が相互にいかなる関わりを結び、作用したのかを探ることによって、より総合的な研究の結果を導出することができるだろう。したがって、人物を中心として考察する研究と共に、教会あるいは宣教局レベルの宣教政策に焦点をあてて考察する研究に行われる時、本研究はもっと豊かになるはずである。

第三に、より幅広い時代的な背景が補完されるべきである。本研究は、時代的な範囲をハリスとランバスが宣教師として活動しはじめた19世紀半ば以降から監督となり、死去する20世紀初頭、つまり1920年代初頭まで研究範囲に制限した。したがって、1920年代半ばから1945年までの時代的な状況と宣教活動を具体的に解釈することができなかった。特に、1930年代以降には、日韓両国のメソヂスト教会は共通して自治教会となり、発展していった。もちろん、日本の場合、本研究の時代的な範囲である1907年にすでに「日本メソヂスト教会」という独自の総会を組織したが、朝鮮の場合、1930年にメソヂスト監督教会と南メソヂスト監督教会が合同し、「基督教朝鮮監理会」という自治教会が成立した。さらに、1930年代後半から1945年の間には、日本による宗教への干渉と統治が両国で非常に強かった時代であった。このような時代的な状況の中で、米国の南・北メソヂスト監督教会が東アジア

の宣教にいかなる宣教政策と状況判断を持っていたのかを検討すれば、より総合的な理解ができると考える。

第四に、他教派との相互関係が補完されるべきである。本研究では、メソヂスト監督教会と南メソヂスト監督教会というメソヂスト教会に限り、焦点を絞っているので、他教派との関わりが排除されている。例えば、メソヂスト監督教会と南メソヂスト監督教会が各々東アジアで他教派といかなる関わりを設定していたのか、あるいは直面する宣教的な課題とその対応方法において、いかに協力し、いかに対立したのかなどを検討することは、米国の南・北メソヂスト監督教会の宣教的なアイデンティティをより明確に表す過程になるはずである。さらに、これは一般的に宣教地で活発に行われるエキュメニカルな宣教理解を深化させる作業にもなるだろう。したがって、他教派との関わりを検討することが、本研究の課題となると思われる。

第五に、今日私たちに残されている宣教的な遺産が何なのかを把握する研究が補完されるべきである。これは本研究がより実践的な性格を表すための作業だと言える。換言すれば、昔の宣教師たちが残した宣教活動の影響が、今日の日韓両国の教会において、いかに継承されているのかを確認する必要がある。宣教というのがキリスト教の2000年の歴史の中で、命を持ち、今も活動している福音の証拠だからである。

上述したいくつかの限界を補完する時、本研究が追い求めている課題と目標はより明確に達成されることができるだろう。

＜　参考文献　＞

一次文献

M. C Harris

・Harris. M. C, Christian Newspaper in Japan, *GAL*, July, 1881, p.36.

・Harris. M. C, T. Yamada, 'On Missions', *MJCMEC*, 1884, pp.27-28.

・Harris. M. C., 'The Japanese in California', *GAL*, August, 1886, p.379.

・Harris. M. C., 'Japanese Methodist Missions on the Pacific Coast', *GAL*, June, 1897, pp.257-261.

・Harris. M. C., *Christianity in Japan*, Cincinnati: Jennings and Graham, 1907.

・*M. C. Harris's letter to A. B. Leonard*, December, 20th, 1907.

・*M. C. Harris' letter to John F. Goucher*, Octerber, 14th, 1907.

・Harris. M. C., 'Observations in Korea', *KMF*, May, 1908, p.69.

・Harris. M. C., 'Save Korea', George H. Scidmore, ed., *Competent Witnesses on Korea as a Mission Field*, New York: Board of Foreign Missions of the Methodist Episcopal Church, 1908, pp.11-12.

・Harris. M. C., 'Introduction', W. A. Noble · G. H. Jones, *The Religious Awakening of Korea*, New York: Board of Foreign Missions of the Methodist Episcopal Church, 1908, p.3.

・Harris. M. C., *Four Years in Japan and Korea – The Quadrennial Report of the Missionary Bishop for Japan and Korea to the General Conference of 1908*, n.p.,1908.

・Harris. M. C., 'Christianity in Japan and Korea', *MRW*, March, 1911, pp.188-189.

・Harris. M. C., 'Farewell Words of Bishop Harris', *OKAC*, 1916, p.2.

・Harris. M. C., *Quadrennial Report of Bishop M. C. Harris of the Methodist Episcopal Church for Korea and Japan 1912-1916*, n.p., 1916.

・エム、シー、ハリス、「年會所感」、『護教』、1898年8月27日。

・エム、シー、ハリス、「布哇だより」、『護教』、1899年5月27日。

・エム、シー、ハリス、「ハリス博士の書簡」、『護教』、1900年2月3日。

・エム、シー、ハリス、「總會所感の記」、『護教』、1900年7月28日。

・エム、シー、ハリス、「ハリス博士の献策」『護教』、1900年8月11日。

・エム、シー、ハリス、「告別の辭」、『護教』、1901年6月15日。
・エム、シー、ハリス、「ハリス博士の書簡」、『護教』、1902年1月4日。
・エム、シー、ハリス、「開書」、『護教』、1902年11月15日。
・エム、シー、ハリス、「我が教會の諸兄姉に申上候」、『護教』、1905年1月14日。
・エム、シー、ハリス、「日本基督教界に於ける目下の急務」、『護教』、1906年2月24日。
・「ハリス監督談片」、『護教』、1906年6月30日。
・エム、シー、ハリス、「聖職四十年(紀念說教)」、『護教』、1908年4月25日。
・「ハリス監督談片」、『護教』、1908年6月30日。
・エム、シー、ハリス、「日韓両国に関する誤解を弁ず」、『護教』、1908年10月24日。
・エム、シ、ハリス、「基督教と社會改良」、鵜飼猛 編、『開教五十年記念講演集附祝典記錄』、教文館、1910。
・「ハリス監督の対韓意見」、『護教』、1910年1月15。
・エム、シー、ハリス、「英米所見」、『護教』、1911年4月1日。
・「ハリス監督朝鮮談」、『護教』、1911年8月26日。
・クリストリープ(Theodor Christlieb)、ハリス(Merriman C. Harris) 訳、『耶蘇教奇跡論』、十字屋、1882。
・해리쓰(ハリス)、「教会通信」、『그리스도会報』(キリスト会報)、1911年5月15日。
・河理斯、『河理斯監督の日本教会と朝鮮教会に対する報単』、n.p.、1916。

W. R. Lambuth

・Lambuth. W. R., 'Reports of Missionaries in Hiroshima District', *MAMJMMECS*, 1889, p.13.
・Lambuth. W. R., 'Reports of Missionaries, Hiroshma District', *MAMJMMECS*, 1890, pp.12-14.
・Lambuth. W. R., 'Hiroshima District', *ARMECS*, 1891, pp.48-50.
・Lambuth. W. R., 'It is the sound of a trumpet', *ARMECS*, 1892, pp.66-67.
・Lambuth. W. R., *ARMECS*, 1893, p.67.
・Lambuth. W. R., 'Korea: Past and Present', *MR*, November-December, 1894, pp.204-210.
・*W. R. Lambuth's letter to C. F. Reid*, May, 13th, 1896, March, 4th, 1897, May, 10th, 1897.

· Lambuth. W. R. ed., *the Doctrines and Discipline of the Methodist Church of Japan 1907 with Appendix*, Tokyo: Methodist Publishing House, 1907.
· Lambuth. W. R., *Side Lights on the Orient*, Nashville: Publishing House of the M. E. Church, South, 1908.
· Lambuth. W. R., 'Book Reviews – Men and Missions', *The Methodist Review Quarterly*, April, 1910, pp.382-383.
· Lambuth. W. R., 'News Notes and Personals', *MV*, November, 1911, p.14.
· Lambuth. W. R., 'Uruguayana Union College', *MV*, December, 1911, p.41.
· Lambuth. W. R., 'Introduction', J. R. Moose, *Village Life in Korea*, Nashville: Publishing House of the M. E. Church, South, 1911.
· Lambuth. W. R., 'Brazil – Field Notes', *MV*, January, 1912, pp.34-35.
· Lambuth. W. R., 'A Living Stone in a Growing Wall', *MV*, Feburary, 1912, pp.97-99.
· Lambuth. W. R., 'Prospecting in Africa', *MV*, May, 1912, pp.269-270.
· Lambuth. W. R., 'Second Meeting of the Continuation Committee', *MV*, December, 1912, pp.716-718.
· Lambuth. W. R., 'The Call of Africa', *MV*, January, 1913, pp.13-22.
· Lambuth. W. R., 'Banner Society', *MV*, September, 1913, p.528.
· Lambuth. W. R., 'Letter from Dr. Lambuth', *MV*, January, 1914, pp.12-13.
· Lambuth. W. R., 'Latest Letters from Africa', *MV*, April, 1914, p.226.
· Lambuth. W. R., 'Stranded on an Island', *MV*, April, 1914, pp.226-227.
· Lambuth. W. R., 'Mexican Christian Faithful', *MV*, April, 1915, p.150.
· Lambuth. W. R., *Winning the World for Christ*, New York: Fleming H. Revell Company, 1915.
· Lambuth. W. R., 'the Story of Malandola', *MV*, March, 1917, pp.83-84.
· Lambuth. W. R., 'Prayer and Power', *MV*, July, 1917, pp.221-222.
· Lambuth. W. R., 'Reminiscences of Early Missionary Work in Japan', *MV*, January, 1918, pp.19-20.
· Lambuth. W. R., 'Prayer and Power', *MV*, July, 1918, pp.221-222.
· *W. R. Lambuth's letter to Mrs. J. V. John*, July, 31th, 1919.
· Lambuth. W. R., 'Christianity in Korea to Stay - Interesting Glimpses of Our Work in That Land', *MV*, December, 1919, pp.365-366.
· Lambuth. W. R., 'First Books from Africa', *MV*, September, 1919, p.266.
· Lambuth. W. R., 'The Story of Mrs. Quay', *MV*, September, 1919, pp.273-275.

・Lambuth. W. R., 'Pioneering the Gospel', *MV*, September, 1920, pp.277-278.
・Lambuth. W. R., 'A Prayer for Africa', *MV*, September, 1920, p.281.
・Lambuth. W. R., 'Mayor of Oita at Dedication of the Loving Neighbor Institute', *MV*, December, 1920, p.377.
・Lambuth. W. R., *Medical Missions: the Twofold Task*, New York: Student Volunteer ・Movement for Foreign Missions, 1920.
・Lambuth. W. R., 'A Many-Sided Ministry', *MV*, February, 1921, p.47.
・Lambuth. W. R., 'What I Saw in the Famine Area', *MV*, March, 1921, p.71.
・*W. R. Lambuth's letter to W. W. Pinson*, September, 11th, 1921.
・Lambuth. W. R., 'Social Service at Laura Haygood', *MV*, July, 1921, p.218.
・Lambuth. W. R., 'Unprecedented Revival Conditions', *MV*, August, 1921, p.234.
・Lambuth. W. R., 'Fruitful First Year of Siberia Mission', *MV*, Octorber, 1921, p.301.
・Lambuth. W. R., 'One of Bishop Lambuth's Last Message', *MV*, November, 1921, p.326.
・Lambuth. W. R., *China Famine Conditions which I Have Just Seen*, New York: The American Committee for China Famine Fund, 1921.
・Lambuth. W. R., 'Korea Ripe for Evangelism', *KMF*, February, 1922, pp.25-26.
・ランバス 述、西村静一郎 訳、汝新に生れざる可らず(*Ye must be born again*)、n.p.、1892。
・ウォルター・R・ランバス、関西学院キリスト教主義教育研究室 編、「ウォルター・ラッセル・ランバス資料」、『関西学院キリスト教主義教育史資料Ⅲ』、関西学院キリスト教主義教育研究室、1980。
・ウォルター・R・ランバス, 関西学院キリスト教主義教育研究室 編、「ウォルター・ラッセル・ランバス資料(2)」、『関西学院キリスト教主義教育史資料Ⅴ』、関西学院キリスト教主義教育研究室、1984。
・ウォルター・R・ランバス, 関西学院キリスト教主義教育研究室 編、「ウォルター・ラッセル・ランバス資料(3)」、『関西学院キリスト教主義教育史資料Ⅵ』、関西学院キリスト教主義教育研究室、1985。
・ウォルター・R・ランバス、関西学院キリスト教主義教育研究室 編、「ウォルター・ラッセル・ランバス資料(4)」、『関西学院キリスト教主義教育史資料Ⅷ』、関西学院キリスト教主義教育研究室、1989。
・ウォルター・R・ランバス、中西良夫 訳、「アフリカ伝道への祈りと足跡」(ウォルター・ラッセル・ランバス資料(5))、『関西学院キリスト教主義教育史資料Ⅸ』、関西

学院キリスト教主義教育研究室、1990。
・ウォルター・R・ランバス、山内一郎 訳、『ヴァンダビルト大学コール・レクチャーキリストに従う道-ミッションの動態』、学校法人関西学院、2004。
・ウォルター・R・ランバス、堀中 訳、神田健次　監修、『医療宣教：二重の任務)、学校法人関西学院、2016。

報告書

・*Annual Report on Administration of Chosen.*
・*Annual Report of the Board of Foreign Missions of the Methodist Episcopal Church..*
・*Annual Report of the Board of Foreign Missions of the Methodist Episcopal Church, South.*
・*Four Years in Japan and Korea – The Quadrennial Report of the Missionary Bishop for Japan and Korea to the General Conference of 1908.*
・*Report to the Quadrennial General Conference, the Journal of the 25th Delegated General Conference, Methodist Conference in 1908.*
・*Quadrennial Report of Bishop M. C. Harris of the Methodist Episcopal Church for Korea and Japan 1912-1916.*

会議録

・*Annual Journal of the California Conference of the Methodist Episcopal Church.*
・*Annual Meeting of the Federal Council of Protestant Evangelical Missions in Korea.*
・*The Annual Report of the Board of Foreign Missions of the Presbyterian Church in the United States of America.*
・*Journal of the General Conference of the Methodist Episcopal Church.*
・*Minutes of the Korea Woman's Conference of the Methodist Episcopal Church.*
・*Minutes of the Annual Meeting of the Japan Mission of the Methodist Episcopal Church, South.*
・*Minutes of the Annual Meetings of the Korea Mission, Methodist Episcopal Church, South, 1899, 1900 and 1901.*
・*Minutes of the Annual Meetings of the Korea Mission, Methodist Episcopal Church,*

South.
・*Minutes of the Japan Conference of the Methodist Episcopal Church.*
・*Minutes of the Japan Mission Annual Conference of the Methodist Episcopal Church, South.*
・*Minutes of the Annual Meeting of the Siberia-Manchuria Mission of the Methodist Episcopal Church.*
・*Year Book of the Japan Mission and Minutes of the Annual Meeting of Missionaries of the Methodist Episcopal Church, South.*
・『日本美以美教會第一年會議記録』。
・『美以教會第廿二回日本年會記録』。
・『日本美以教會中央議會第一回記録』。
・『日本メソヂスト教會第壹總會議事録』。
・『日本メソヂスト教會第貳回總會議事録』。
・『日本メソヂスト教會第參回總會議事要録』。
・『日本メソヂスト教會第四回總會議事録』。
・『日本メソチスト教會第壹回東部年會記録』。
・『日本メソヂスト教會第一回西部年會記録』。

新聞・雑誌

・*Gospel In All Lands.*
・*Methodist History.*
・*Missionary Review of the World.*
・*the Christian Advocate.*
・*the Chinese Recorder.*
・*the Korea Methodist.*
・*the Korea Mission Field.*
・*the Korea Review.*
・*the Methodist Review.*
・*the Methodist Review of Missions.*
・*the Missionary Survey.*
・*the Missionary Voice.*

・『関西学院史紀要』。
・『学院史編纂室便り』。
・『キリスト教史学』。
・『神戸又新日報』。
・『護教』。
・『神学研究』。
・『基督教世界』(*韓国側の資料)。
・『基督申報』。
・『그리스도회보』(キリスト会報)。
・『東亞日報』。
・『新韓民報』。
・『神學世界』。

書簡・日記

・*Cranston. E. and A. B. Leonard's letter to M. C. Harris*, May, 19th, 1907.
・*T. H. Yun's letter to W. R. Lambuth*, February, 4th, 1897.
・『渡邊理惠(ウラジオストク総領事代理領事)が内田康(外務大臣)へ送付した文献』。
・『尹致昊日記』。

辞典

・*Dictionary of Christianity in America*, Illinois: InterVarsity Press, 1990.
・*Encyclopedia of World Methodism Vol.1-2*, Nashville: The United Methodist Publishing House,1974.
・『関西学院事典』(増補改訂版)、学校法人関西学院、2014。
・日本キリスト教歴史大事典編集委員会 編、『日本キリスト教歴史大事典』、教文館、1988
・『基督教大百科事典』、ソウル：基督教文社、1985。
・金承泰・朴惠珍 編、『來韓宣教師総覧』修訂増補版、ソウル：韓國基督教歴史研究所、1996。
・尹春炳、『韓國監理教会外國人宣教師』、ソウル：韓國監理教會史學會、2001。

・歴史委員会 編、『韓國監理教人物事典』、ソウル：基督教大韓監理會、2002。

二次資料

英語文献

・Acton. William, 'Korean Life in America', *MV*, June, 1916.
・Albertson. Millie M., 'The Louise C. Rothweiler Bible Training School', *KWC*, 1917.
・Albertson. Millie M., 'Woman's Bible Training School', *KWC*, 1918.
・Alexander. Gross, *A History of the Methodist Church*, South in the United States, New York: The Christian Literature CO., 1894.
・Anderson. E. W., 'Koreans Facing the Future with Hope', *MV*, Feburary, 1920.
・Anthony. Charles Volney, *Fifty years of Methodism – A History of the Methodist Episcopal Church within the bounds of the California Annual Conference from 1847 to 1897*, San Francisco: Methodist Book Concern, 1901.
・Bardeleben. Mary De ed., *Lambuth – Bennett Book of Remembrance*, Nashville: Publishing House M. E. Church, South, 1922.
・Beeson. J. W., 'Bishop Lambuth and Dr. Reid at Meridian Colleges', *MV*, April, 1913
・Belcher. S. A., 'At Work Again', *MV*, December, 1913.
・Billings. B. W., 'Bishop Merriman Colbert Harris - An Appreciation', *KMF*, June, 1921.
・'Bishop Walter Russell Lambuth, M.A., M.D., D.D.', *KMF*, January, 1922.
・Burt. William, 'A Tour of Duty in the Orient', *CA*, June, 27, 1918.
・Bush. Mrs. C. C., 'Africa – Methodist Missionaries in the Congo', *MV*, May, 1914.
・Buyers. Paul E., 'Capivary', *MV*, December, 1913.
・Cannon Ⅲ. James, *History of Southern Methodist Missions*, Nashville: Cokesbury Press, 1926.
・Cobb. Mrs. J. B., 'Brazil – A Land of Paganized Christianity', *MV*, March, 1913.
・Cram. W. G., 'Report of W. G. Cram, Superintendent. Siberia-Manchuria Mission', *MSMMECS*, 1921.
・Daniels. W. H., *The Illustrated History of Methodist in Great Britain, America, and Australia, form the Day of the Wesleys to the Present Time*, New York: Phillips & Hunt, 1883.

- Davis. G. T. B., *Korea for Christ,* London: Christian Workers Depot, 1910.
- Davison. Charles S., 'Sendai District', *MJCMEC*, 1905.
- Eleazer. R. B., 'A Handful of Facts about Japan', *MV*, January, 1918.
- Fisher. Wallace E., *From Tradition to Mission*, Nashville: Abingdon Press, 1965.
- Fort. Mrs. T., 'Annual Meeting of the New Mexico Conference', *MV*, December, 1916.
- Gilbert. John Wesley, 'Pioneering in Africa', *MV*, January, 1913.
- Griffis. W. E., *Corea, The Hermit Nation*, New York: Scribner's Sons, 1882.
- Hammond. Mrs. J. D., 'Paine College and Annex', *MV*, January, 1913.
- *History of Monroe County*, Ohio, Chicago and Toledo: H. H. Hardesty & Co., 1882.
- Howell. Virginia, 'Brazil – Visiting Collegio Piraciicabano', *MV*, January, 1914.
- Huett. C. W., 'Hokkaido District', *MJCMEC*, 1905.
- Hughes. H. L., 'Nation-wide Welcome to Sunday School Convention', *MV*, January, 1921.
- Junkin. Mrs. W. F., 'What the Methodists Did for the Presbyterians', *MS*, February, 1915.
- Junkin. W. F., 'What the Methodists Did for the Presbyterians', *MV*, October, 1915
- Ilehart. Edwin T., 'The Passing of Bishop Harris', *CA*, June, 30th, 1921.
- Ishizaka. K., 'Tokyo and Shinano Districts', *MJCMEC*, 1905.
- Lambuth. J. W., 'Evangelization in Japan', *GAL*, May, 1886.
- Landis. Mrs. J. A., 'Annual Session of the Memphis Conference', *MV*, August, 1913.
- Leete. Frederick DeLand, *Methodist Bishops*, Nashville, The Methodist Publishing House, 1948.
- Long. C. A., 'Brazil – Letter from Brazil', *MV*, December, 1912.
- Long. C. A., 'Brazil – Central Institute', *MV*, December, 1913.
- Lowe. John, *Medical Missions – Their Place and Power*, Edinburgh: Oliphant, 1895.
- Lowell. P., Chosön, *The Land of Morning Calm: Asketch of Korea*, Boston: Ticknor & Co., 1886.
- Maclay. R. S., Korea' s Permit to Christianity, *MRW*, April, 1896.
- Maclay. R. S., Commencement of the Korea Methodist Episcopal Church, *GA*L, November, 1896.
- Martin. Mrs. J. Victor, 'A Japanese Estimate of Bishop Harris', *Northwestern Christian Advocate*, June, 14th, 1916.

- Meyers. J. T., 'Hiroshima District, September-March, 1907-1908', *ARMECS*, 1909.
- Myers. H. W., 'Why Send Missionaries to Japan', *MV*, January, 1918.
- *Missionary Centenary 1819-1919 World Survey*, Nashville: Missionary Centenary Commission Methodist Episcopal Church, South, 1919.
- Moore. S. F., 'An Epoch-Making Conference in Korea', *MRW*, September, 1905.
- Mumpower. D. L., 'What the Presbyterians Have Done for the Methodists', *MS*, July, 1914.
- Mumpower. D. L., 'A Great Mission in the Making: Varied Activities at Wembo-Niama', *MV*, March, 1915.
- Myers. Miss Mamie D., 'Seoul Evangelistic Center for Women', *KMF*, February, 1922.
- Neill. Stephen, *A History of Christian Missions*, London: Penguin Books, 1990.
- Newton. J. C. C., 'Bishop Lambuth and Kwansei Gakuin', *MV*, November, 1914.
- Newton. J. C. C., 'Kwansei Gakuin: Where and What', *MV*, February, 1915.
- Newton. J. C. C., 'Japan Mission Has Notable Meeting', *MV*, November, 1919.
- Noble. Mattie Wilcox, 'Bishop Merriman C. Harris', *AMFCPEMK*, 1921.
- Noble. W. A. · G. H. Jones, *The Religious Awakening of Korea*, New York: Board of Foreign Missions of the Methodist Episcopal Church, 1908.
- Norwood. Frederick A., *The Story of American Methodism*, Nashville, Abingdon Press
- Ogata. S., 'Nagoya District', *MJCMEC*, 1905.
- Pinson. W. W., 'Quadrennial Report of the Board of Missions', *MV*, May, 1914.
- Pinson. W. W., 'A Hundred Years of Methodist Missions – Plans Maturing For Great · Joint Celebration', *MV*, January, 1918.
- Pinson. W. W., 'Bishop W. R. Lambuth-An Appreciation', *the Methodist Review*, January, 1922.
- Pinson. W. W., 'In Memory of W. R. Lambuth', *KMF*, Feburary, p.26.
- Pinson. W. W., *Walter Russell Lambuth - Prophet and Pioneer*, Nashville: Cokesbury Press, 1925.
- Price. Carl. F. ed., *Who's Who in American Methodism*, NewYork, E.B. Treat & Co., 1916.
- Quillian. W. F., 'the Methodist Training School', *MV*, March, 1913.
- Rawlings. E. H., *Walter Russell Lambuth*, Nashville: Board of Missions of the Methodist Episcopal Church, South, 1921.
- Reid. C. F., Superintendent's Report, *MAMKMMECS*, 1897.

· Reid. C. F., *the Opening of Korea*, Nashville, Board of Missions of the Methodist Episcopal Church, South, 1899.
· Reid. J. M., *Missions and Missionary Society of the Methodist Episcopal Church, Vol.1-2*, New York: Phillips & Hunt, 1882.
· Ryang. J. S. ed., *Southern Methodism in Korea Thirtieth Anniversary*, Seoul: Board of Missions of the Korea Annual Conference of the Methodist Episcopal Church, South, 1930.
· Said. E. W., *Orientalism*, New York: Vintage Books, 1979.
· *Scranton. W. B.'s letter to A. B. Leonard*, May, 15th, 1905.
· Scidmore. George H., ed., *Competent Witnesses on Korea as a Mission Field*, New York: Board of Foreign Missions of the Methodist Episcopal Church, 1908.
· Smith. F. Herron, 'Bishop Harris', *KMF*, June, 1921.
· Soper. Julius, 'Tokyo-Yokohama District', *MJCMEC*, 1905.
· Stockwell. John A., 'Africa - Newsy Letter from Congo', *MV*, September, 1914.
· Stewart. Mary S., Elizabeth S. Roberts, 'Medical Work at East Gate Hospital, Seoul', *KWC*, 1917.
· Suzuki. L. E., *Life of Bishop Merriman Colbert Harris: Japan's Most Beloved Caucasian American*, n.p., n.d.
· Smith. Ernest Ashton, *Allegheny-A Century of Education*, Meadville, The Allegheny College History Company, 1916.
· Taylor. J. O. J., 'Bishop Lambuth at the Korea Conference', *MV*, Feburary, 1920.
· the Board of Foreign Missions of the Methodist Episcopal Church ed., *Quarter-Centennial Jubilee of Korean Missions*, New York: Board of Foreign Missions of the Methodist Episcopal Church, Korea Quarter-Centennial Commission, 1910.
· *T. H. Yun, of Korea and the School at Songdo*, Nashville, Board of Missions of the Methodist Episcopal Church, South, 1907.
· Towson. W. E., 'Mrs. Mary Isabella Lambuth', *MJMACMECS*, 1904.
· Towson. W. E., 'The Missionary History of the Lambuth Family', *MV*, April, 1917.
· Tucker. H. C., 'Brazil – Notes Current', *MV*, December, 1911.
· Tucker. H. C., 'Notes on a Trip to Northern Brazil', *MV*, February, 1912.
· Tucker. H. C., 'Brazil - People's Central Institute, Rio de Janeiro', *MV*, April, 1912.
· Versteeg. John M., *Methodism: Ohio Area (1812-1962)*, Ohio: Ohio Area

Sesquicentennial Committee, 1962.
・Walker. W., *A History of the Christian Church*, New York: Charles Scribner's Sons, 1952.
・Welch. Herbert, *As I Recall My Past Century*, Nashville, Abingdon Press, 1962.
・Williams, Jr. Melville O., 'From Mission to Annual Conference: The Work of the Methodist Episcopal Church, South, in China, 1848-1886', *Methodist History*, Vol.31, April, 1993.
・Worth. I. M., 'The Completion and Dedication of the Oita Plant', *MV*, December, 1920.
・Yamaka　M., 'Aomori District', *MJCMEC*, 1905.
・韓国基督教歴史研究所　編、*The Journal of Mattie Wilcox Noble 1892-1934*、ソウル：韓国基督教歴史研究所、1993。

日本語文献

・青山学院 編、『青山学院九十年史』、青山学院、1966。
・朝尾直弘・上田正昭・上横手雅敬・大山喬平・山本四朗　編、『要説日本歴史』、東京創元社、2000。
・飯沼二郎・韓晳曦 共著、『日本帝国主義下の朝鮮伝道：乗松雅休・渡瀬常吉・織田楢次・西田昌一』、日本基督教団出版局、1985。
・飯沼二郎・韓晳曦 共著、『伝道に生きて：在日大韓基督教会と織田楢次』、麦秋社、1986。
・池田裕子、「南メソヂスト監督教会日本伝道の初穂、鈴木愿太の生涯-宣教師ランバス-家との関わりを中心に」、『関西学院史紀要』、(関西学院学院史編纂室)、第12号、2006。
・石坂龜治、「東京信濃連回報告」、『美以教會第廿二回日本年會記録』、1905。
・李元重、『植民地朝鮮における日本基督教会に関する研究』、博士論文、同志社大学、2015。
・李主先、「日本宣教と翻訳-1880年代におけるM・C・ハリス監督の翻訳活動を中心に」、・『金城学院大学キリスト教文化研究所紀要』、20号、金城学院大学キリスト教文化研究所、2017。
・李貞善、「日本メソヂスト教会における在朝鮮日本人伝道：1904年伝道開始から1910年日韓併合まで」、『神学研究』、第50号、関西学院大学神学研究科、2011。
・李省展、『アメリカ人宣教師と朝鮮の近代』、株式会社社会評論、2006。
・李清一、『在日大韓基督教会100年史 1908-2008』、かんよう出版、2016。

・今田寛、「広島、広島女学院とランバス宣教師父子」、『関西学院史紀要』、(関西学院学院史編纂室)、第14号、2008。
・ウィリアム・W・ピンソン、半田一吉 訳、『ウォルター・ラッセル・ランバス –Prophet and Pioneer』、学校法人関西学院、2004。
・鵜飼猛 編、『開教五十年記念講演集附祝典記録』、教文館、1910。
・内村鑑三、『余は如何にして基督信徒となりし乎』(*How I Became a Christian*)、岩波書店、1993。
・小方仙之助、「名古屋連回報告」、『美以教會第廿二回日本年會記録』、1905。
・小田切快三、『ゲーンズ先生物語』、学校法人広島女学院、1966。
・呉允台、『日韓キリスト教交流史』、新教出版社、1968。
・神田健次、「ウォルター・R・ランバスの瀬戸内伝道圏構想」、『関西学院史紀要』、(関西学院学院史編纂室)、第11号、2005。
・神田健次、「中国におけるW・R・ランバス宣教師の足跡を求めて」、『関西学院史紀要』、(関西学院学院史編纂室)、第13号、2007。
・神田健次、「草創期のエキュメニカル運動とW・R・ランバス」、『関西学院史紀要』、(関西学院学院史編纂室)、第18号、2012。
・神田健次、「戦前における関西学院神学部の神学教育と神学思想の傾向」、『初期 韓国 監理教会 神学形成에 끼친 日本神学의 影響 – 関西学院大学과 同志社大学 神学部 留学生을 中心으로』(初期における韓国のメソヂスト教会の神学形成に与えた日本神学の影響-関西学院大学と同志社大学の神学部留学生を中心として)、「監理教神学大学校 開校 126周年 記念 韓日 神学交流 심포지엄」(監理教神学大学校の開校126周年記念、日韓神学交流シンポジウム)資料集、2013年9月5日。
・神田健次、『W・R・ランバスの使命と関西学院の鉱脈』、関西学院大学出版会、2015。
・神田健次、「宇和島におけるランバス先生の足跡」、『学院史編纂室便り』、No.44、関西学院大学 学院史編纂室、2016年12月10日。
・神田健次・堀忠、「W・R・ランバス著『医療宣教 (Medical Missions)』の意義をめぐって」、『関西学院史紀要』、(関西学院学院史編纂室)、第21号、2016。
・木下隆男、「ウォルター・R・ランバスと韓国-1907年を中心に」、『関西学院史紀要』、(関西学院学院史編纂室)、第14号、2008。
・キリスト教学校教育同盟百年史編纂委員会 編、『キリスト教学校教育同盟百年史』、キリスト教学校教育同盟、2012。

・蔵田雅彦、『天皇制と韓国キリスト教』、新教出版社、1991。
・倉部義郎、『日本基督教団函館教会100年史』、日本基督教団ハリス監督記念函館教会、1976。
・神戸栄光教会百年史編集委員会編集、『日本基督教団神戸栄光教会百年史 1886-1985年』、神戸: 日本基督教団神戸栄光教会、2005。
・小川圭治・池明観 編、『日韓キリスト教関係史資料 1876-1922』、新教出版社、1984。
・小林信雄、「解説-ランバス父子の中国伝道辞任の理由について」、『関西学院史紀要』、(関西学院学院史編纂室)、第1号、1991。
・澤田泰紳、『日本メソヂスト教会史研究』、日本キリスト教団出版局、2006。
・鈴木範久、『日本キリスト教史』、教文館、2017。
・島典英、「M. C. ハリス監督をめぐって」、『キリスト教史学』、第54集、キリスト教史学会、2000。
・シ、ダブルユ、ヒユーツト、「北海道連回報告」、『美以教會第卄二回日本年會記録』、1905。
・白石清、『北米宣教八十五周年記念誌 - *The Eighty-Fifth Anniversary of Protestant Work Among Japanese in North America*』、Los Angeles : 南加基督教会連盟出版部、1964。
・ジユリアス、ソーバル、「東京横浜連回報告」、『美以教會第卄二回日本年會記録』、1905。
・徐正敏、『日韓キリスト教関係史研究』、日本キリスト教団出版局、2009。
・徐正敏、『日韓キリスト教関係史論選』、合同会社かんよう出版、2013。
・多田義治、「ランバス博士のブラジルでの足跡」、『関西学院史紀要』、(関西学院学院史編纂室)、第12号、2006。
・富阪キリスト教センター、『日韓キリスト教関係史資料Ⅱ 1923-1945』、新教出版社、1995。
・土肥昭夫、『日本プロテスタントキリスト教史』、新教出版社、1980。
・土肥昭夫、『日本プロテスタント・キリスト教史論』、教文館、1987。
・土肥昭夫、『キリスト教会と天皇制: 歴史家の視点から考える』、新教出版社、2012。
・中村金次, 『南美宣教五十年史』、南美宣教五十年記念運動事務所、1936。
・中村敏、『日本キリスト教宣教師』、いのちのことば社、2009。
・西垣二一、「日本におけるランバス・ファミリーの使命-その歴史と今日的意味を考える」、『関西学院史紀要』、(関西学院学院史編纂室)、第18号、2012。
・信長正義、『キリスト同信会の朝鮮伝道』、むくげの会、1996。
・原誠、「同志社大学文学部神学科と韓国人留学生」、『初期 韓国 監理教会 神学形成에 끼친 日本神学의 影響 – 関西学院大学과 同志社大学 神学部 留学生을 中心으로』

(初期における韓国のメソヂスト教会の神学形成に与えた日本神学の影響-関西学院大学と同志社大学の神学部留学生を中心として)、「監理教神学大学校 開校126周年 記念 韓日 神学交流 심포지엄」(監理教神学大学校の開校126周年記念、日韓神学交流シンポジウム)資料集、2013年9月5日。
・半田一吉訳, ピンソン著、「ランバス伝」から見たウォルター・R・ランバス像」、『関西学院史紀要』、(関西学院学院史編纂室)、第11号、2005。
・韓晳曦、『日本の朝鮮支配と宗教政策』、未来社、1988。
・韓晳曦、『日本キリスト教海外伝道史の研究』、同志社大学博士論文、1997。
・平岩愃保、「ハリス博士を歓迎す」、『護教』、1905年1月21日。
・平岩愃保、「日本対在韓宣教師」、『護教』、1908年6月13日。
・平岩愃保、「朝鮮巡廻紀行」、『護教』、1913年8月29日。
・藤田太寅、「ランバスの頃のキリスト教伝道」、『関西学院史紀要』、(関西学院学院史編纂室)、第6号、2000。
・フローラ ベスト ハリス、新谷武四郎 訳、『ハリス夫人詩集』(*POEMS by Flora Best Harris*)、三塚印刷、1971。
・洪伊杓、「W・R・ランバス宣教師と朝鮮半島-永遠なる東アジアの友」、『関西学院史紀要』、(関西学院学院史編纂室)、第17号、2011。
・洪珉基、「W・R・ランバスにおける宣教思想の一考察-特に、朝鮮認識を中心に」、『関西学院史紀要』、(関西学院学院史編纂室)、第20号、2014。
・洪珉基、「米国南北メソヂスト監督教会における東アジア宣教に関する研究-M・C・ハリスとW・R・ランバスとの関わりを中心に」、『宣教学ジャーナル』、(日本宣教学会)、第9巻、第9号、2015。
・山内一郎、「Walter Russell Lambuth関係資料探索ノート(1)」、『関西学院史紀要』、(関西学院学院史編纂室)、第1号、1991。
・山内一郎、「ウォルター・R・ランバスの人と思想」、『関西学院史紀要』、(関西学院学院史編纂室)、第11号、2005。
・山内一郎、「日本におけるランバス・ファミリーの使命-その歴史と今日的意味を考える」、『関西学院史紀要』、(関西学院学院史編纂室)、第18号、2012。
・山鹿旗之進 編、『はりす夫人』、教文館、1911。
・山鹿旗之進 編著、『合同メソヂスト教会小誌』、n. p.、1923。
・山鹿元次郎、「青森連回報告」、『美以教會第廿二回日本年會記録』、1905。
・ルース・M・グルーベル・多田義治・池田裕子・神田健次、「W・R・ランバス宣教師の足

跡を訪ねて：ブラジル・アメリカ・中国への旅から」、『関西学院史紀要』、(関西学院学院史編纂室)、第21号、2015。
・『朝鮮の統治と基督教』、京城：朝鮮総督府、1923。
・『日本基督教団史資料集－第1篇日本基督教団の成立過程(1930-1941)』、日本基督教団宣教研究所、1997。
・『南メソヂスト監督教會教理及條例』、南メソヂスト出版舍、1896。

韓国語文献

・Alan Brinkley、黄惠聖訳、『있는 그대로의 미국사2』(The Unfinished Nation)、ソウル：휴머니스트(ヒューマニスト)、2005。
・Mutel. Gustave Charles Marie、韓国教会史研究所　訳、『뮈텔 주교 일기 4』(ミューテル主教の日記4)、ソウル：韓国教会史研究所、1998。
・金承泰、『韓末日帝強占期宣教師研究』、ソウル：韓国基督教歴史研究所、2006。
・金良善、『韓国基督教史研究』、ソウル：基督教文社、1971。
・金洪基、『監理教會史』、ソウル：圖書出kmc、2003。
・基督教大韓監理会教育局 編、『韓国監理教会史』、ソウル：基督教大韓監理会教育局、1975。
・都伊明、「ハリス監督に対して」、『神學世界』、6巻、5号、1921。
・柳大永、『初期米国宣教師研究 1884-1910』(初期の米国宣教師に関する研究1884-1910)、ソウル：韓国基督教歴史研究所、2001。
・柳大永、『開化期 朝鮮과 美国 宣教師：帝国主義 侵略、開化自强、그리고 美国 宣教師』(開化期の朝鮮と米国宣教師：帝国主義の侵略、開花自強、そして米国宣教師)、ソウル：韓国基督教歴史研究所、2004。
・柳大永、『美國宗教史』(米国宗教史)、ソウル：青年社、2007。
・閔庚培、『韓国基督教史-韓国民族教会形成過程史』、ソウル：延世大学校出版部、2007。
・朴明洙、『初期韓国聖潔教会史』、ソウル：大韓基督教書会、2001。
・朴容奎、『平壤大復興運動』、ソウル：생명의 말씀사(いのちのことば社)、2000。
・朴容奎、『韓国基督教会史2』、ソウル：생명의 말씀사(いのちのことば社)、2004。
・白樂濬、『韓国改新教史』、ソウル：延世大学校出版部、1973。
・徐正敏、『日本基督教의 韓国認識』(日本基督教会の韓国認識)、ソウル：한울아카데미(ハンウルアカデミー)、2000。

・徐正敏、『韓日基督教関係史研究』、ソウル：大韓基督教書会、2002。
・宋吉燮、『韓国神学思想史』、ソウル：大韓基督教出版社、1987。
・シンスイル、『韓国教会에큐메니칼運動史(1884-1945)』(韓国教会エキュメニカル運動史1884-1945)、ソウル：쿰란출판사(クムラン出版社)、2008。
・梁柱三、「램버드監督의一生」(ランバス監督の一生)、『基督申報』、1921年10月12日。
・梁柱三、「램버드監督의一生」(ランバス監督の一生)、『基督申報』、1921年10月19日。
・梁柱三、「램버드監督의一生」(ランバス監督の一生)、『基督申報』, 1921年10月26日。
・梁柱三、『朝鮮南監理教会三十年紀念報』、京城：朝鮮南監理教会伝道局、1930。
・梁賢惠、『近代韓・日関係史속의 基督教』(近代に於ける韓・日関係史の中の基督教)、ソウル：梨花女子大学校出版部、2009。
・呉允台、『韓日基督教交流史』、ソウル：恵宣文化社、1980。
・玉聖得、『다시 쓰는 初代 韓國教會史』(書き直す初期の韓国教会史)、ソウル：새물결플러스(セムルキョルプラス)、2016。
・柳東植、『韓国監理教会의 歴史Ⅰ』(韓国監理教会の歴史Ⅰ)、ソウル：基督教大韓監理会、1994。
・尹慶老、『韓国近代史의 基督教史的理解』(韓国近代史の基督教的な理解)、ソウル：力民社、1992。
・尹春炳、『韓国監理教教会成長史』、果川：監理教出版社、1997。
・李德周、『泰和基督教社會福祉館』、ソウル：泰和基督教社會福祉館、1993。
・李德周、『韓国土着教会形成史研究』、ソウル：韓国基督教歴史研究所、2001。
・李德周、『宗橋教会史 1900-2004年』(宗橋教会史1900-2004年)、ソウル：図書出版宗橋教会、2005。
・李德周、『春川中央教会史』、春川：基督教大韓監理会春川中央教会、2007。
・李德周、『서울年会史Ⅰ(1884-1945)』(ソウル年会史Ⅰ(1884-1945))、ソウル：基督教大韓監理会ソウル年会、2007。
・李德周、「初期 日本神学校 韓国人 留学生에 관한 研究 – 日本 関西学院大学 神学部와 同志社大学 神学部를 中心으로」(初期日本の神学校の韓国人留学生に関する研究-関西学院大学神学部と同志社大学神学部を中心として)、『初期 韓国 監理教会 神学形成에 끼친 日本神学의 影響 – 関西学院大学과 同志社大学 神学部留学生을 中心으로』(初期における韓国のメソヂスト教会の神学形成に与えた日本神学の影響-関西学院大学と同志社大学の神学部留学生を中心として)、「監理教神学大学校 開校 126周年 記念 韓日 神学交流 심포지엄」(監理教神学大

学校の開校126周年記念、日韓神学交流シンポジウム)資料集、2013年9月5日。
・李德周、『스크랜턴 – 어머니와 아들의 朝鮮宣教 이야기』(スクラントン-母と息子における朝鮮宣教の物語)、ソウル：공옥出版社(ゴンオック出版社)、2014。
・李德周・徐暎錫・金興洙、『韓国監理教会歴史』、ソウル：図書出版kmc、2017。
・李萬烈 、『韓國近代歴史學의 理解』(韓国近代歴史学の理解)、ソウル：文学과知性社(文学と知性社)、1981。
・李萬烈、『韓国基督教의 歴史意識』(韓国基督教の歴史認識)、ソウル：知識産業社、1981。
・李萬烈、『韓国基督教文化運動史』、ソウル：大韓基督教出版社、1987。
・李永献、『韓国基督教史』、ソウル：컨콜디아사(コンコルディア社)、1978。
・韓国基督教史研究会、『韓国基督教의歴史Ⅰ』(韓国基督教の歴史Ⅰ)、ソウル：基督教文社、1989。
・韓国基督教長老会歴史編纂委員会、『韓国基督教100年史』、ソウル：韓国基督教長老会出版社、1992。
・洪珉基、『해리스監督의 生涯와 宣教에 関한 研究』(ハリス監督の生涯と宣教に関する研究)、ソウル：監理教神学外学校大学院修士論文、2008。
・洪性賢 編、『監督들의 이야기』(監督たちの物語)、ソウル：基督教大韓監理会監督協議会、2007。
・洪伊杓、「동아시아의 영원한 벗, 램버스(1)」(永遠なる東アジアの友-ランバス(1))、『基督教世界』、第951号、2010年2月号。
・洪伊杓、「한국 남감리교 선교의 숨은 개척자, 램버스(2)」(韓国の南メソヂスト監督教会に於ける隠れ開拓者、ランバス(2))、『基督教世界』、第952号、2010年3月号。
・洪伊杓、「저는 계속 지켜볼 것입니다!, 램버스(3)」(私はずっと見つめる！、ランバス(3))、『基督教世界』、第953号、2010年4月号。
・洪伊杓、「저는 계속 지켜볼 것입니다!, 램버스(4)」(私はずっと見つめる！、ランバス(4))、『基督教世界』、第954号、2010年5月号。
・洪伊杓、『日帝下 韓國基督教의 日本認識研究 - 「内地」概念을 中心으로』(日帝下に於ける韓国基督教の日本認識研究-「内地」概念を中心に)、ソウル：博士論文、延世大学校、2014。
・韓国基督教歴史学会編、『韓国基督教と歴史』第43号、ソウル：韓国基督教歴史研究所、2015。
・「朝鮮在留欧米人名簿」(Directory of Foreign Residents in Chosun)、『朝鮮在留欧米人調

査録1907-1942』、ソウル : 永信아카데미韓国学研究所(永信アカデミー韓国学研究所)、1981。

中国語文献

・马光霞、「监理会在华事业研究(1848-1939)」、济南：博士學位論文、山东大学、2012。

＜　論文要旨　＞

米国の南・北メソヂスト監督教会における東アジア宣教に関する研究
-M・C・ハリスとW・R・ランバスの日韓活動を中心として -

洪　珉基

本研究は、以下のような三つの問題設定から始まる。まず、米国の教会における東アジア宣教の特色の解明である。特に、米国の教会における東アジア宣教が具体的にいかなる宣教論的特色を帯びて展開されてきたのかを検討する。第二に、19 世紀末から 20 世紀初頭の間、日韓両国のメソヂスト監督教会(Methodist Episcopal Church)と南メソヂスト監督教会(Methodist Episcopal Church, South)の相互関係を明確にすることである。その過程の中で両国の教会がどのような関係を構築してきたのかを検証する。第三には、派遣教会、宣教師、そして宣教現場の関係性の探求である。すなわち、派遣教会(米国の南・北メソヂスト教会)と宣教師(米国人)、そして宣教現場(東アジアの日本と朝鮮)の三者が、相互にどのように宣教論的な影響を及ぼしたのかを検討する。以上の問題設定を検討するために、日韓両国の主流教派であったメソヂスト監督教会と南メソヂスト監督教会とその宣教師 M・C・ハリス(M. C. Harris)と W・R・ランバス(W. R. Lambuth)に焦点を絞って検討する。本研究では、まずハリスとランバスという二人の宣教師の比較を通して、上記のような問題設定と研究テーマを解明する研究方法をとる。

第 1 章では、ハリスの全般的な生涯に踏まえながら、宣教師になったきっかけ、影響などを基に、実際に宣教現場で行われた宣教活動を考察している。ハリスの宣教を、地域や民族と関連において見ると、それは日本と日本人、そして朝鮮と朝鮮人という二つのカテゴリーの中で理解することができる。この二つのカテゴリーを見てみると、ハリスの宣教活動は異なる様相を見せる。まず、日本と日本人について考察してみると、彼が一般庶民たちと直接的、人間的に接する姿がうかがえる。これに反して、朝鮮内での活動は上からの出会いであったと言える。例えば、伊藤博文のような朝鮮総督府の政・官界の関係者たち、他教派の主な指導者たちと宣教師たち、そして朝鮮の信徒たちの中でも英語での疎通ができる限られた人たちであった。したがって、ハリスの朝鮮での巡回及び宣教活動は一方通行的であり、交友関係は貴族及びエリートに偏る場合が多かった。

第 2 章では、ハリスの日韓両国についての理解とその特色を考察している。ハリスは、大半の西洋宣教師と同様にオリエンタリズム的類型に立つ宣教師であった。何よりも彼の考えと宣教理解において、その根底にあったことはまさに西洋的要素であった。すなわち、西洋の代表的宗教「キリスト教」と「西欧式の近代化」という二つの要素が日本宣教を理解す

る根本的な基礎となったのである。もちろん、彼は日本国内の他宗教に対して極端に偏る排他性を持っていなかったが、近代化の観点からみると、西洋が東洋に比べ、相対的に優れているとの理解故に、このような範疇の中で、西欧文物を伴うキリスト教宣教を行うことを可能ならしめたのであった。一方、朝鮮宣教と関連する彼の理解は三つの範疇の中で行われてきた。日本と同様に朝鮮の近代化を成し遂げるため、西洋文物を伴うキリスト教の宣教が行われるべき必要性を切に感じていた。しかし、その具体的な施策として、一歩先んじて欧米化された日本が朝鮮を近代化することによって、日本は朝鮮に良い影響をもたらすと考えた。それはまさに親日的理解に偏る宣教に帰結されざるを得なかったわけである。

第 3 章では、ランバスの生涯と宣教活動を検討している。宣教師の子どもとして宣教地で幼年期を送った彼は、本来宣教師になろうという具体的な目的意識を持っていなかった。しかし、彼は人間の孤独や寂しさの極端を経験したが、いわゆるウェスレー神学の観点から見ると、再生(rebirth)の経験であった。以降、ランバスは医療宣教師として中国に派遣され、日本宣教師を経て南メソヂスト監督教会宣教局の総主事になった。宣教局の総主事という職は、個別の宣教現場で取り組んできた彼の視野に幅広いスコープが与えられるようになったのである。続いて、彼は海外宣教を主に担当する監督の職務に就任することになった。そして 1919 年からは日中韓を中心とする東洋担当監督として毎年東アジアを訪問し、宣教地を巡回した。ところが、ランバスにとって東アジア、すなわち中国と日本、そして朝鮮が持つ意味は相当大きかった。特にその中でも、当時の支配と被支配という政治・社会・経済的パラダイムの枠組みの中で、日韓関係を調和的に果たしていかなければならない責任を担わなければならない難しい宣教地であった。彼はこのような東アジアの宣教地の中で、キリスト教宣教師として第 3 者の立場を十分に活用した。

第 4 章では、ランバスの日韓両国についての理解とその特色を考察している。基本的に彼は宣教地(東洋)で生まれ育ったため、西洋とは異なる文化である東洋生活と文化に拒否感なく順調に適応して過ごすことができた。したがって南メソヂスト監督教会の日本開拓宣教師として派遣された当時も、彼は日本文化を東洋の大きな枠の中で尊重しつつ、理解することができた。しかしながら、西洋人の DNA を持っていた彼が欧米中心主義の影響を受けていたことも事実だと言える。すなわち、キリスト教の福音を伝達する過程の中で、自然に西欧文物が伝わり、それが日本人たちを精神的・身体的に豊かにすることができる要素になると考えた。そのような論理を持っていたため、日本で彼が重点を置いた宣教方法は教育宣教であった。以上のような観点は、ランバスの朝鮮理解に関しても大きく変わってはいない。しかし、ランバスは当時の西洋人と比べ、可能な限り朝鮮の独自の気質や伝統文化などを把握しようと努力した。すなわち、歴史と文化など朝鮮の内面的・精神的な領域に関して

は、日本との関係を脇におき、朝鮮と朝鮮人に集中して理解しようとしていたのである。このように朝鮮の宣教は、日本の朝鮮支配という当時の時代的状況に関わらず行うことができた。

第 5 章では、南・北メソヂスト監督教会における東アジア宣教の展開とその特色をハリス及びランバスと各宣教部間の関わりを中心として検討している。まず、メソヂスト監督教会の東アジア宣教は、中国から次第に日本側に傾くようになっていった。そして、その代表的な結果としてメソヂスト監督教会の日本教会が朝鮮半島の宣教を主導するようになり、それと同時に長い間日本人を中心に接触しながら宣教活動を展開していたハリスが、朝鮮と日本を同時に管理する宣教監督として選出され、メソヂスト監督教会の東アジア宣教の動向は急激に日本を中心に再編されるようになった。一方、南メソヂスト監督教会の場合は、宣教初期のように中国を中心にする東アジア宣教の動向を維持することができた。代表的な例としてランバスの宣教をあげられる。中国で生まれ育ったランバスが宣教局総主事として活動しながら、南メソヂスト監督教会の東アジア宣教において、その力の中心を意図的に日本に変える理由もなかったのである。したがって、南メソヂスト監督教会の東アジア宣教は、中国から日本に中心が移動したメソヂスト監督教会とは異なり、中国中心に推進せざるを得ない状況であったと言える。

結局、総合してみると、はじめのところで提起した三つの問題設定について以下のように答えることができるだろう。第一に、米国の教会、その中でもメソヂスト監督教会と南メソヂスト監督教会の東アジア宣教は、19 世紀末から 20 世紀初頭の時代的な潮流において形成された宣教だという事実を確認することができた。これは米国の南・北メソヂスト監督教会が、当時の時代的な状況とその動向に順応しようとしたということである。すなわち、可能な限りリスクを犯さず、安定した土台の上で宣教事業を果たそうとした宣教政策を推進したという事実である。第二に、19 世紀から 20 世紀にかけて、東アジアの日韓両国のメソヂスト教会は相互緊密な関わりを結び、宣教活動を果たしていったという事実である。代表的な例が日韓の宣教監督として職を担っていたメソヂスト監督教会のハリスと東洋担当の監督として日中韓を統括していた南メソヂスト監督教会のランバスであった。そのように、かつて日本と朝鮮のメソジスト教会は、相互協力と牽制の関係の中で発展していったことが理解できる。したがって、これから日韓両国の教会の関わりにおいて、今日各々その歴史を継承している日本基督教団と基督教大韓監理会がより交流を深め合い、協力する理由を確認することができる。第三に、宣教において、宣教師を派遣する派遣教会と派遣される宣教師、そして派遣される宣教師が活動する宣教地は、各要素すべてが必要不可欠の関係だという事実を確認することができた。それ故、三つの要素(宣教師、宣教地、派遣教会)が総合

的に考慮される時、その宣教の実状や宣教理念をより良く理解し、また批判的に検証することができる。その評価と反省は、より適切で、建設的な宣教の働きの構築に向けて意味のある役割を担うことができるであろう。